
インフィニット・ストラトスふもっふ！！

ユーリ・ローウェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトスふもっふ！！

【Nコード】

N9777Q

【作者名】

ユーリ・ローウエル

【あらすじ】

私千鳥かなめはいきなり生徒会長の林水先輩に「IS学園に交流転入してきてくれたまえ」と言われ。ソースケと二人でIS学園に転入させられてしまう。これは私達とIS学園の生徒によるのんびりとしたりどたばたと騒いだりするお話である。

登場人物紹介（前書き）

増えたら追加していきます

登場人物紹介

〈人物紹介〉

相良宗介

この物語の主人公、原作はフルメタルパニック！。有明での戦いの後異世界に飛んだ経歴がある。これはゲームACERを参照。年齢は17歳。相変わらずのずれた考えをしているが少しは成長をしているようだ。この物語はよく視点が変わるが、宗介だけは視点で描かれた事はない。

原作との相違点は年齢が一年違うこと、なので原作の話しは当時の年齢は16歳だった。

この物語ではボケ役
趣味は釣りと読書。

搭乗機体・M9、アーバレスト、レーバティン、ボン太君
所持AI・アル

ラウラ・ボーデヴィツヒ

この物語のもう一人の主人公、原作はIS。原作では一夏ラバーズの一人で巷ではブラックラビッツ党がある。

年齢は15歳。この物語では宗介と出会ってから少しずつ変な方向に変わって行き、今ではもうすっかり変わり果ててる。ASとガン

ダムが好き。特にASではサベージが好き。ガンダムではデステイニーガンダムが好きのようだ。他にはゲームのティルズシリーズをよくやる。特に気にいってるのはティルズオブグレイセスf。

原作との相違点は全てが壊れてしまってる所。よく宗介と一緒にいる事が多い。あとは家族がいる事、両親二人に兄弟三人の五人家族の内の二女。

この物語ではボケ役
趣味は色々

搭乗機体・シユヴァルツアレーゲン・アルビオン、ボン太君
所持AI・チアキ（参照・みなみけの南ちあき）

千鳥かなめ

この物語の貴重な突っ込み役。原作はフルメタルパニック！！原作ではヒロインであったがこの物語では微妙な所にいる。

年齢は17歳。相変わらずの突っ込みで頑張ってる苦労人。何だかんだで陣高では副生徒会長で後の生徒会長。

原作との相違点は宗介と同じく年齢が一年違うこと。これ以外はあまり変わらない。

この物語では貴重な突っ込み役。

シャルロット・デュノア

原作のヒロインの内の一人。原作では一番人気があるのではないかと言う位人気がある、一夏ラバーズの一人で、シャルロット党がある年齢は十五歳。この物語ではアルトに王子と言われてから周りから王子と呼ばれるようになる。基本は原作と変わらないが、暴走気味

のラウラを戻そうと必死になっているために一夏と余り一緒にいない。

原作との相違点はあまりないが

、宗介やラウラの影響を少なからず受けてきているので少しずつできてくる・・・かも。

この物語では中立。

搭乗機体・ラファールリヴァル・カスタム、ボン太君

所持AI・アスベル（参照・テイルズオブグレイセスのアスベル・ラント）

セシリア・オルコット

原作のヒロインの内の一人。原作では色々と苦労している人。一夏ラバーズの一人で、オルコット党がある。

年齢は十五歳。この物語ではそう変わった所はないキャラ。ちなみにISでの強さでは専用機持ちの中では一番強い。他にはゲームも多少すようで、ラウラの影響でテイルズシリーズをやるようになる、特にテイルズオブ・ジァビスを気にしているようだ。

原作との相違点はあまりないが、ISの強さが変わっている。

この物語では中立。

搭乗機体・ストライクブルーティアース

所持AI・ハロ（参照・機動戦士Vガンダムのハロ）

篠ノ之箒

原作のヒロインの内の一人。原作では一番初めに登場する、一夏のファースト幼馴染。一番最初に登場したのにも関わらず、専用機が登場したのは一番最後と言うサクラ大戦Vのジエミニを連想させる少女。千鳥かなめと仲がよく、休みの日などはよく一緒に遊んでいる。

年齢は十五歳。この物語では至って普通の常識人であり、原作とは余り変わらない・・・キャラに？ゲームをよくする一夏の影響で少しやるようになってきている。今はテイルズオブエターニアを気にしているようだ。

原作との違いはあまりない。

この物語では中立だが、この後の展開によって変わる恐れ大。

搭乘機体・紅椿

凰鈴音

原作のヒロインの一人。原作では一夏のセカンド幼馴染として途中から転入してきた、中国代表候補生。作者から見ればツンデレキャラ。

年齢は十五歳。この物語ではクラスが違う事から最初は出番が余りなかったが、二組にレナードや刹那、アルトがやってきた事から登場の機会が増える。どうやら一夏と中学時代に色々と苦労があったようだ。その話はいつか描いてみよう。

原作との違いは原作とに比べると一夏ラブ度が減っている。そのかわりにレナードにちょっかいを出されては絞めてる事の方が多い、作者はもうくつつけちまおうかと考えている。

この物語ではつつこみ役

搭乘 I S ・ 甲龍

A I ・ アーチャ (英霊参照)

テレサ・テストロツサ

原作のヒロイン。原作ではミズリルの西太平洋戦隊総司令官である。階級は大佐。作戦中は凜々しくしているが、通常時は何も無い所でよくこけたりと天然な所がある。

年齢は十七歳。この物語でもこれから天然を發揮するだろう。

原作との違いは宗介やかなめと同じように歳が一つ下がってる事。この物語では天然。

レナード・テストロツサ

原作ではラスボス的存在？アマルガムの幹部の一人でかなめやテツサと同じくウイスパード。

年齢は不明だがテツサと余り変わらない？この物語でもアマルガムの幹部で宗介の前に何度も立ち塞がるっていたが。宗介は異世界での出来ごとのお蔭で A S の操縦の腕が上がっており、宗介曰く「キーンケドゥや枢木より下だ。ただ、機体の性能に助けられてるに過ぎない」らしい。

ひよんな事から I S 学園に通うことになるが、かなめとテツサからは過去の事で殴ってもまだ足りないこと。クラスは二組、そのために隣の席の鈴にちょっかいを出しては仕返しをされてる。黙っていればイケメン。今はもうアホ。寮は一夏と同じ部屋、その事で一夏とは仲がいい。

織斑一夏

原作の主人公。原作では主人公なので色々と優遇され、ハーレムを作っているが本人は気づいていない。

年齢は十五歳。この物語では宗介とラウラが主役のため、登場が少し少ないが。IS学園に男子が増えてきてる事に素直に喜んでいる。原作とは違い、ゲームをよくする。同室にレナードがいる、そのためレナードと仲がいい。

原作との違いは主役ではないこと。

この物語ではややボケ役

搭乗機体・白式

織斑千冬

原作、この作品に登場している織斑一夏の姉。世界的にも有名な人で今は学園の先生をしている。過去に色々あったがそこは原作を読もう・・・

年齢は不明。この物語では原作と同じく一年一組の担任をしている。ISの操作技術が高いため、宗介に尊敬されている。弟には相変わらず厳しいようだ。マオとは大学で一緒のため昔からの知り合い。原作との違いはあまりないが、やや性格が丸い所。上記のことでマオと同じ大学を通っていた。

この物語ではつつこみ役。

クルツ・ウェーバー

原作では宗介やマオと同じ組織に所属。コールサインはウルズ6。原作ではイケメンのスナイパー。その反面、マオに「歩くわいせつ物」と言われている。自身が外国人なのだが、中学まで日本に住んでいたため自身は日本人と思ってる。そのため、日本語はかなり上手い。

年齢は不明だが、作者は二十と予想。この物語ではIS学園にISの調査のために先生として来ているが、後にそれが意味をなしていない事を知りショックを受ける。科目は世界史。あと、ガンダムOに自分によく似てるキャラから自分の事を「ロックオン・ストラトス」と名乗ることがある。

原作との違いは・・・原作とそのまんまの性格。

この物語ではどちらにもなる人物。

搭乗機体

・M9

所持AI・ユーカリ

メリッサ・マオ

原作では宗介やクルツと同じ組織に所属。コールサインはウルズ2。原作では頼りになるお姉さんポジション、腕は中々の物。

年齢は二十六歳。この物語ではマオは日本の大学を出てる事になっている。大学で千冬や篠ノ之束等と出会ってる。今現在は一年二組の担任をしている。教えてる科目は保健体育。

原作との違いは日本に滞在していたことがあることと、千冬等との知り合いであること。

この物語ではつつこみ役

搭乗機体・M9

所持AI・フライデー

剎那・F・セイエイ

原作は機動戦士ガンダムOO＼FastSeason＼。ガンダムマイスターの一人、決め台詞は「俺が・・・ガンダムだ!!」

年齢は十六歳。この物語はグラハムとの決戦直後なのでイノベイタでもメタル化もELSの存在も映画を見るまで知らない。クラスは鈴、レナード、アルトと同じく二組。寮の部屋はアルトと同室。原作との違いはさして余りない。しいていえば他のガンダムの存在を知ったこと。

この物語ではボケ役

搭乗機体・ガンダムエクシア

所持AI・ユーリ（参照・ティルズオブヴェスペリアのユーリ）

ロックオン・ストラトス（ニール・ディランディ）

原作は機動戦士ガンダムOO＼FastSeason＼。ガンダムマイスターの一人、決め台詞は「目標を狙い撃つぜ」

年齢はマイスターの中では一番年上で22歳この小説ではサーシエスとの闘いの後、理由は分らないが学園都市で倒れている所を束に保護され、現在では名門常盤台中学で教師をしている。科目は英語。負傷している右目も学園都市の技術で義眼を入れて復活している。

搭乗機体・ガンダムデュナメス

グラハム・エーカー

原作はせつちゃんと同じなので以下省略。フラッグの部隊”オーバーフラッグス”の隊長をしていた乙女座な人。

年齢は二十七歳。この物語では刹那との決戦直後なのでブシド化はしていない。よってフラッグファイターのままである。IS学園での役割は二組の副担任、教えてる科目は英語。本人はGTGを強く豪語している。あとはよく千冬を色々と誘ってる。

原作との違いはない。このままのグラハムである。しいていえばブシド にはならないこと位。

この物語ではボケ役

搭乗機体・オーバーフラッグ、GNフラッグ

所持A Iキリノ（参照・俺妹の高坂桐乃）

早乙女アルト

原作はマクロスF。マクロスお決まりの三角関係をちゃんとやっていてTV版は答えを出していないが劇場版では・・・

年齢は十七歳。この物語はTV版のアルトなので劇場版を知らない、ゆえに見てお驚いているようだ。過去に宗介やかなめとは異世界で出会っているために自身の異世界移動に余り驚いていない。

原作との違いはあまりない。

この物語ではつつこみ役

所持機体・YF-25

所持AI・エステル（参照・テイルズオブヴェスペリアのエステル
ーゼ）

更識楯無

原作では学園最強の称号の生徒会長を持っている。その正体は自由
国籍持ちでロシア代表。搭乗ISはミステリアス・レディ

この小説では宗介やセシリアには実力で劣っているので最強ではな
いが生徒会長。しかし、原作よりいい加減でよく職務放棄をしては
池袋にいる平和島静雄に勝負を挑んでは負けている。

本人いわく、「勝って静雄君に告白する」との事

所持IS・アストレイレッドフレーム（予定）

上条当麻

原作はとある魔術の禁書目録。右手にある幻想殺しをめぐりロシア
で大激闘を繰り広げた青年。

この小説では至って普通の高校生をやっている。

インデックス

原作ではヒロインの一人だが空気が激しくなってきた。腹ペコ
キャラ、シスターetc…

この小説でも相変わらずであるがISを手にかざすこと…

岡部倫太郎（鳳凰院凶真）

東京電機大学一年生。秋葉原の一角のビルに未来ガジェット研究所
と言うサークルを立ち上げている。偶然生まれ出たタイムマシン（
正確にはメール）をめぐるいろんな出来事を経験し…

世界観

この世界は当然のように地球が舞台。ミスリルとアマルガムが戦っていたり、そのおかげでASがあつたり。女性しか動かないISがあり。はたまたは科学の最先端の学園都市があり、その対極の存在のオカルトがあつたりと、本来ではありえないような事が凝縮されている地球である。よつて、いろんな事が違つ。

まずは、ISの原作にある女尊男卑はこの世界では無い。理由はISがあるようにこの世界にはASがあるからだ。これによりこの地球は男女平等の世界である。

地理的には中国が南北に分かれていないなどある。その他には東京に科学の最先端をつかさどる学園都市なるものがあり、その外にはISを学ぶための学園、IS学園が存在してある。

他にも、本来出会わない人物がたくさんこの地球にはたくさんいる。

この物語の主人公、相良宗佑は一旦は手に入れた平和。しかし、彼はこれからIS学園を中心としているんな人物と出会い、楽しむ事であろう。

これはそんな戦い続けていた青年とその周りのにぎやかな物語。そ

して世界なのである・・・

世界観（後書き）

いろいろ後付けしてるようなプロローグ&世界観ですね。今更ながらめちゃくちゃですな・・・

初めて読んだ方はあまり気にしないで読んでいただけると嬉しいです。

第1話・IS学園に交流転入？（前書き）

シャルロットとラウラを見ていたら何故かソースケを思い浮かぶ自分、そんな勢いでやってしまいました。

設定はフルメタの方は原作完了後なのに何故か二年生、しかもソースケのアホぶりは健在といろいろごっちゃになっています。

ISはとりあえずヒロインは全員出ている所から始まります。

第1話・IS学園に交流転入？

ここは都立陣代高校。至って普通の？高校である。そして私こと千鳥かなめは戦争バカのソースケこと相良宗介と生徒会室で生徒会長の林水先輩と話していた。

「ではこれから相良君、千鳥君にはあの有名なIS学園の生徒として行ってもらおう」

「了解です、会長閣下」

「……えっと。一つ質問してもいいでしょうか林水先輩？」

「なんだね千鳥君」

私は色々と突っ込みたかったから突っ込む事にした。

「いやいや。あそこって何だかんだであの学園都市並に凄い所でおかつエリートが行くような所ですよ。そんな所に私とソースケ何か……」

「その事は安心してくれませ。既に君たちの転入手続きは終えてい。ちなみに君たちは一年生として入ってもらおう」

この人、イマナントイッタ？

「あの〜もう一度言ってもらえますか？」

「君達は一年生として転入してもらおう」

あれ。今私は二年生よね、どうしてまた一年なのよ・・・

「千鳥君が言いたい事は大体理解出来る。君達が一年生になって転入してもらおう理由はこれだ」

林水先輩は新聞の一面を見せてくれた。そこに書いてあったのは「ISを動かせるただ一人の男、織斑一夏君！！」と書いてあった。この事は私も知っていた、この戦争バカが転入してくる前辺りに話題になっていた事だった。

まあ、周りの子はその事で騒いでいたけど私はこのバカのせいで色々、本当に色々あってそれどころではなかったから余り詳しくは知らなかった。でもISはウイスパードの知識のおかげである程度知っている。

「でも。これが何の理由になるのですか？」

「まあ、単純に私の興味だよ。今は学園都市の能力者とか色々と摩訶不思議な物が沢山あるからね。私も一つくらいはと思い、IS学

園の事を思いついたのだ」

私はたまにこの学校の生徒会長がわからなくなってくる。もう慣れたけどね。

「会長閣下、いつからその任務は？」

「明日からだ」

「了解しました」

「了解するな！！」

私はハリセンでソースケの頭を叩く。だがもう決まっていた事だ、これは諦めるしかないようだ。

何だかんだで次の日。私とソースケはIS学園の門の所にいた。それにしても陣高とはえらく違うわよね。特に全部が。

「いくわよソースケ」

「千鳥、何か不満でもあるのか？」

「色々ありすぎて血管が切れそうよ」

「それは体に悪い。カルシウムを取ることをすすめ・・・痛いぞ」

アホな事を言いだすアホにハリセンをかます私。それにしてもISが女子にしか動かせないだけあって女子高見たいよね。この中に男子一人とか色々大変そう。

そんな事を思いながら私達は職員室に向った。職員室で陣高の名前を言ったらスーツをきた女性が現れた。その女性の第一印象は強い、その一言だった。

「お前らが陣代高校から交流転入生の千鳥かなめと相良宗介だな。私は一年一組の担任の織斑千冬だ」

「あなたがあの第一回モンド・グロツソの優勝者の織斑殿ですか。会えて光栄です」

ソースケがなんと礼儀よく挨拶をした。これはビックリだって・・・

「ソースケ。あんた織斑先生の事知ってるの？」

「なんだ千鳥。織斑殿の事を知らないのか？織斑殿の技術は素晴らしいぞ、俺も織斑殿の技術模範としてだな・・・」

「私の事を知って入れくれたのは嬉しいがそれは後にしてくれないか。それよりこれからホームルームが始まる、なのでお前達二人を

これからクラスに紹介しに行くぞ」

「あっ、わかりました」

「了解です」

私が返事すると横でソースケが敬礼をした、何やってるのこのアホンだらは。その後、私達は織斑先生の後を歩いている、それにしても中まで陣高と違うわよね〜全部が。

「少しそこで待っている」

そう言っつて織斑先生は一組の教室に入っつて行つた。

「え〜今日は急なんだが。このクラスに二人の交流転入生がやっつてくる」

「え、なになに。また転入生？」

「シャルロットさんとラウラさんに続いてまたもや転入生。どんな人？」

クラスが騒ぎ始めていた。その様子は外に私達でもわかる位うるさ

い声だった。

「静かにしろ。千鳥、相良、入ってこい」

織斑先生に言われて私とソースケはクラスに入る。入ると私達は教団の前に立たされる、私はまた騒がれるのではと思ったが織斑先生が凄い眼差しで生徒を見ていたので誰一人言葉を発しなかった。

「では、二人に自己紹介をしてもらおう」

「え」と。都立陣代高校から交流転入生？として来ました千鳥かなめです。よろしくお願いします」

私は至って普通に自己紹介をした。そして次はと思った時、私は忘れていたこの戦争バカの事を。不安だ、このバカが何を言い出すのが凄い不安だった。

「自分は相良宗介であります。自分の趣味は読書と釣り、愛読書はASおよびIS大全であります」

よかつた、至って普通の自己紹介だった・・・でも、クラスの子達は目が点になっていた。まあしょうがないよね。

「では、相良は織斑の隣の席、千鳥は篠ノ之の隣の席に着いてくれ」

私とソースケの新たな？学校生活がこうして始まったのである。おかしいな？おとといまで普通だったのにな？

第1話・IS学園に交流転入？（後書き）

次回はかなめとソースケが一夏達との顔合わせします

第2話・始まった学園生活？（前書き）

連続投稿です。今回、初登場なのにラウラのキャラがちょっと変わってしまっています。

第2話・始まった学園生活？

その後、何だかんだで授業が始まった。ここの学校もIS以外の授業は普通だったのだが、最初の授業が古典だったのでソースケは死にそうな顔をしていたのが面白かった。そんなことで初めての授業が終わり、今は休み時間になった。

「え〜と。千鳥かなめです」

「私は篠ノ之箒だ」

「じゃあ篠ノ之つて呼びにくいから箒つて呼んでもいいかな？」

「ええ。じゃあ私はかなめでいいか？」

「全然オツケ〜」

よかった〜隣の篠ノ之さん。なんか話しかけにくかったどうしようかと思っただけど、こつやつて話すと割と普通に話せた。仲よくなれそう、それはそうとソースケはと言つと。

「俺は織斑一夏だ。いや〜よかつたよ、この学校に男子が俺しかいなくて。だから少ない男同士仲よくやるつぜ」

「俺は別に構わないが・・・」

おっ、ソースケのやつ。あの織斑君と話してるんじゃない、にしても相変わらず仏頂面ではなすわよね」
その数秒後、ソースケはクラスの子達に囲まれてあれこれ聞かれた。内容は「相良君ってどんなタイプの子が好き？」とか如何にも女子高つてな感じの質問を言うが、残念ながら180度視点がずれているあのアホには意味が理解できていなく頭の上には??を出している。

「にしても凄いわよね」

「はあ。まあいつもの事だ。それよりかなめ、お前はあの相良と言う男とどう言う関係なのだ？」

「そうね、簡単に言うとも見張り役かな？」

「見張り役？」

筈が疑問形で私に聞いてきたが、丁度チャイムが鳴ったので私は答えられなかった。それから何個か授業を終え、昼休みに入った。

「相良。お前昼飯はどうするんだ？」

「自前がある」

「なら、一緒に食べないか？」

「別に構わないが・・・」

そんな会話を聞いていると、私も箒にお昼一緒に食べないかと誘われてオツケーと言う。すると箒は一人の所に行き、どうやら一緒に食べる事になった。

さて、ご飯を食べる場所はなんと学園の屋上。いまここに私、箒、ソースケ、織斑君と同じクラスの・・・

「私はセシリア・オルコットですよ」

「「テッサ（大佐殿）！！」」

「?????」

しまった、声が滅茶苦茶似てたから間違えちゃった。それにしてもソースケと同じタイミングで間違えるとか・・・

「あゝごめん。セシリアって私達の知り合いに凄く声が似ていたから」

「そんなにですか？」

「とてもよ。それにソースケも間違える程だから」

私はそう言つとソースケも首を振る。どうやら本来に間違えたようだった。

「じゃあ今度は僕だね」

これまたセシリアと同じ金髪のかわいい子が手をあげて来た。

「僕はシャルロット・デュノアです。よろしくね」

「ええ。こちらこそよろしくね」

なんていい子なんだろう。見た感じ王子様とか似合いあそつたな〜と思つた。

「私はラウラ・ボーデヴィツヒだ」

今度は銀髪で片目眼帯の少女が自己紹介してきた。なんだかお人形さんみたいな子なんだけど。何処となくソースケと同じ匂いがするんだけどな・・・

「相良と言つたか。お前が愛読していると言つAS大全はあるか？」

「家にある。貸してほしいなら明日持つてこよう」

「おお、それはたすかる」

ああ、どうやらこの子はソースケと”同じ”の人なんだな」と思った。現に二人はASについて語り始めてしまう。ラウラ、あんたはISでしょうが。

「なんなのあの二人は、まあいいわ。私は二組の凰鈴音よ」

こんどは元気そうな子が自己紹介してきた。この子も普通異常に可愛い。てかこの女の子のレベルヤバいわね。女の私が言うのですもの。

「ありがとう。自己紹介してくれて」

「いえ。新しいクラスメートに自己紹介するのは当然ですもの。それよりそろそろお昼にしましょ」

セシリアが言うとそれぞれ鞆からお弁当を取りだした。一人を除いて・・・

「相良。お前それって・・・」

「コッペパンに鳥の干し肉だが何か問題でも？」

「おおありじゃあー!!」

私はハリセンでソースケの頭を叩く。全くこいつはいつになつたら常識が身に着くんだ？コツペパンは別にいい。ただ肉を切るのにサバイバルナイフを取り出すな、銃刀法違反で・・・確実に掴まるなコイツは。

「か、かなめ？」

「いいの。いつもの事だから」

「そ、そうなんだ」

「かなめって凄いの？」

「おゝい、大丈夫か？」

「痛い問題ない」

箒、シャルロット、鈴はかなめの行動に驚き、箒は啞然としていた。そして心配するラウラに宗介は答えて何事もなかったかのようにコツペパンを食べ始める。

「それよりも千鳥さんと相良の服って？」

「これはね、本来ならここの制服を着るのが普通なんだけど。私達

も転入が決まったのは昨日だったから制服が用意出来なかったのよ」

「昨日？それは急だな」

「本当よ。全く内の生徒会長は・・・」

生徒会長という単語を聞いた織斑君は何故か微妙な表情になった。
どうしてかしら？

「それよりもあんた達って代表候補生なんだってね」

「はい、私はイギリスの代表候補生ですの」

「僕はフランスの代表候補生なんだ」

「私は中国の代表候補生よ」

「なるほど、M9の性能はそうになっているのか・・・すまん。私はドイツの代表候補生だ」

おい待てそこの二人、ASについて語るのはいいけど食べながらするものではないでしょう。それにソースケ、M9はまだ高性能でそう簡単に話すもんじゃないでしょうが。

「問題ない、M9はすでにその全ての性能が一般公開されている」

コイツ、私の心読んだのか？

「では、お前はどれが好きなのか？」

「そうだな・・・俺はザベージなどが好きだな。あとはアーバレストとかレーヴァティンとかだな」

「さて、私もザベージは好きだが、他の二機の名前は知らんぞ？」

このバカ、なにミスリルのトップシークレットを言ってるのよ？それにラウラ、あんたもあのカエル見たいのが好きなのかよ！！

「それはだな。アーバレストは・・・」

「もうそれ以上はアウトオオオ」

私はハリセンをフルスイングでソースケとラウラを叩く。

「いたいぞかなめ」

「どうしたと言っただ千鳥？」

「あんたが危ない事を言いかけてたからよ」

ほら見なさい。他の子がボー然としちゃってるんじゃないの。

「そうか、すまん」

「わかればよろしい」

そう言いながら二人は本当に何事もなかったように再びご飯を食べ始める。

「今日のラウラ、何かおかしいな？」

「そうだな。あんなあいつを今まで見たことがないな」

「そうですわよね、それも今日初めて会った人とあんなに仲よくなつて」

セシリアが言い終わると、皆は黙々とご飯を食べているソースケとラウラを見る。なんか全然似てないのに何処か兄妹見たいに見えた、悪い意味で。

「ちなみにアーバレストは・・・」

食べ終わったソースは再びラウラに説明しようたしていたが、もう疲れたからほっとく事にした。

「かなめって大変だね」

「ありがと〜シャルロット。君はいい子だよ〜」

ああ。何てかわいくていい子なんだろう。ついつい頭を撫でてしまった。

「ちょっとかなめ？」

「ごめんごめん」

「なんだがもつと賑やかになりそうだな」

織斑君はそんな事を呟いていた。私はこの学校であいつが暴走しないか心配なのに・・・
午後の授業はどうやらISの訓練の時間のようで、この学園に二人しかいない男子は着替え時間が短いためそそくさと更衣室に向って行った。

「相良の運動着って変わってるな〜てかそれ運動着か？」

一夏は宗介の格好に疑問を抱いていた。それもその筈だ、宗介の今の格好はASのパイロットスーツなのだから。

「体操服は昨日学校に置きっぱなしでな、これしか無かったからこれを持って来たんだ」

勿論。一般人の一夏がパイロットスーツなどと知るはずもないのでそれ以上宗介の格好に突っ込まなかった。

「おっ、やべ。もうこんな時間だ、急がねえと」

「そのようだな」

二人は急いで更衣室を後にした。二人は急いだおかげで何とか授業に間に合ったようだ。

「さて、今日も一組と二組との合同訓練だ。そこで今日は転入生の相良の実力を見る」

「自分の、ですか？」

指名された宗介は服装もあつてかなり浮いていた。

「そつだ、聞いた話だとお前はASを持っているようだな」

「自分はそのような物は・・・」

宗介は右ポケットを何気なく腕を入れてみる。すると赤色の何かのカードが現れた。

『お久しぶりですね軍曹』

「その声、アルか？」

アルとはアーバレストおよびレーヴァテインに搭載していたAIの名前である。それが何故ここにあるんだ？

「変わったものだな」

『千冬殿。自分はマスターのAIのアルと申します』

「中々礼儀正しい奴だな。それでお前は一体何なんだ？」

『簡単に説明いたしますとAS版のISのAIと申すのでしたら』

結構かと』

そこで宗介は疑問に思った。いつASはISの技術を取り入れたのか？宗介はそう考えているとアルが話しかけて来た。

『軍曹。今のあなたの機体セレクトは、M9、アーバレスト、レーヴァティンがありますか』

レーヴァティンもあるのかよ。あんな危険なものが。それよりも大破した筈のアーバレストもあるのか、なら・・・

「そうだな。ここはM9と言いたいところだが、久しぶりにアーバレストに乗りたいたいからアーバレストだ」

『了解』

すると宗介の体の周りを見事ミニアーバレストが包んだのだ。まあ、小型ASは”ボン太君”の例もあるし、あまり私は驚かないけど他の皆はメチャクチャ驚いていた。特にラウラは興奮しまくりだった。

「なるほど。私もASはある程度知識があるがこれは驚きだな。まるでISだな」

「自分も少し驚いています。ではこれからどうすればよろしいでし

よつか？」

「そうだな。まあ簡単な物をやらせよう」

織斑先生は何かを操作をする。するとターゲットが何個かアリーナの全域に現れる。

「あれを全て破壊しろ」

「了解」

ここで織斑千冬はターゲットのレベルをMaxにしていた。それは純粹に相楽宗介の実力を知りたかったからなのであった。宗介はまず自分の武装を確認する。あるのは散弾銃の”ボクサー”と近接武器の単分子カッター。それにワイヤーのみだった。

「なるほど。問題ない」

「す、凄いねあいつ・・・」

「本当だ。俺より全然動けている」

一夏は隣にいる鈴と一緒に宗介の動きを見ていた。その動きは一つ一つ無駄が無く、空にあるターゲットアーバレストのワイヤーを利用したりとして対処をしていた。それよりも凄いのが……

「ターゲットの命中率が100%。しかも全て真ん中に命中させていますわ」

「それに、その武器が散弾銃なんて。僕にはちよつと真似が出来ないかな」

セシリアとシャルロットも宗介の動きを観察していたが、あまりにも凄いので見とれてしまっていた。

「ふむ。あいつの近接攻撃は一夏以上だな」

「そうだな。そいしてあれがM9の発展型のアーバレストか、それにしても”アレ”は使わないつもりだな。いや、この程度で使う訳はないか」

「……何を言っているのだお前は？」

会話が成立しない筈とラウラ。ちなみにラウラは先の昼休みでアーバレストの性能を聞いていた。ラムダ・ドライバーを含めて。

そうこうしている内に宗介は全てのターゲットを破壊し終わってい

た。

「これでよろしいのですか？」

「うむ。私の想像以上だった」

どうやら織斑殿は納得されたようだ。よかった。

その後は各自、専用機持ちをリーダーにISの訓練をして時間が流れた。ソースはどうしたって？あいつはラウラの所に行き、最終的にはISの事を語って織斑先生に怒られていた。私はシャルロットの所で教わっていた。

ISの授業が終わると制服に着替え直してホームルームをして、一日の学業を修了させた。

「さてと。アリーナに行きますかな」

「ん？どうして織斑君、これからアリーナに行くの？」

「それはだな。これから俺は篝達にISの訓練を見て貰うんだ」

「へえ〜面白そう。私も見て行っていいかな？」

「俺は構わないぞ、篝はどうだ？」

「私も別にいいぞ」

「シャルロット達もいいよな？」

「僕もいいよ」

「私も構いませんわ」

ここまで全員の了解が取れた。あとは・・・

「済まんが一夏。今日の訓練、私は行けなくなってしまった」

ラウラの一言が何か予想外だったのか。私と織斑君以外は啞然としていた。あっ、そうか。このメンバーと鈴は織斑君の事が好きなのよね。何で知っているか？そりゃああんなに織斑君の事をちらちら見てればわかるわよ。それに気づかない織斑君もある意味凄いなと思うけど。

「何かよつでもあるのですか？」

「ああ。これから宗介の家についてAS大全を借りに行くのだ」

あゝなんかさっきそんな事言ってたっけ。

「そう言う訳で千鳥。俺も先に帰る」

「わかったわ」

「それでは早速・・・」

「お、おいましてラウラ・・・」

待ちきれない子供のようにラウラはソースケの袖を引っ張りながら教室を出て行ったのだ。

「やはり。今日のラウラさん変ですわよね」

「そうだね。あんなラウラを見るのは初めてだよ」

「俺もそうだな」

「私もだな」

この後は鈴と合流してISの訓練が行われた。何て言うか・・・頑張れ織斑君。私は色んな意味を含めた言葉を心の中で言った。アリナナの真ん中で大の字をして息を切らしている織斑君をみながら。

第2話・始まった学園生活？（後書き）

あれ〜どうしてこうなったんだろう。まあ自分はラウラとシャルが好きなのでこの二人をいじればいいかな〜と。次はラウラがソースケの家に訪問する話です。

第3話・相良君の家に行ってみた（前書き）

今回はゲーム「ACER」の設定がちらっと出てきますが、話にはあまり関係してきません。

第3話・相良君の家に行ってみた

「ここが宗介の家か」

宗介とかなめは学生寮では無く、元の自宅から通っているのだ。まだ初日なんだけどね。その距離はなんと電車三駅と割と近い位置なのだ。

「ああ、入れ」

「お邪魔する」

二人は家に入っていく。最初にラウラが思ったのは「何もない」だった。それはそのはず、相良宗介と言う男は少しはましになったが、まだまだ世間とずれて生活をしているのだ。それでもテレビゲームが増えた事は進歩している証拠でもあった。

「まあ、大体予想出来ていたが・・・ん？宗介、この写真は？」

ラウラは一枚の写真が気になり、本を探している宗介を呼んだ。その写真に写っているのは男子数人であった。

「ああ。その写真は俺が異世界に行った時に出会った奴らと一緒に撮らされたものだ」

「はあ？」

ラウラは間抜けな声を出していた。まあ、無理もないか。

「いやいや、異世界ってなんだよ」

宗介は惑星エリアでの出来事をや。オータム・フォー、そしてそこで出会った人たちの事を話した。ちなみに写真に写っているのは早乙女アルト、シン・アスカ、ゲイナ・サンガ、枢木スザク、キンケドウ・ナウにアムロ・レイだった。わからない人はぜひ一度ACERをやってみよう。

「ぶっ飛んでるな」

「そうだな。しかしこれは実際に起こったものだ」

ラウラは棚の上に置かれているCDを何気なく手に取った。そのCDのアイドルは「ランカ・リー」のアルバムで。その横に置かれていたのは「シエリル・ノム」のアルバムだった。

「宗介は意外にミィハーなのか？」

「いや。異世界に行った時にその二人に記念にと貰ったんだ。それよりあったぞ」

「おっ。見せてみせて」

二人は床に腰をおろしてAS大全を見ながらASについて討論し始めた。

「ん？宗介。なんだあの段ボールは？」

ラウラはふと部屋の片隅に置いてあるデカイ段ボールが気になりました。

「見てもいいか？」

「構わない」

ラウラは段ボールを開けて中の物を取り出す。すると中に入っていたもの見てラウラは目を子供のように輝かせる。

「このかわいいものは一体なんなのだ？」

「ボン太君だが」

「ボン太君？」

ラウラが取り出したのは見た目マスコットだが、中身は立派なASなボン太君なのである。しっかりとコンパクトに収納されているようだった。

「それも一応ASなのだが」

「何！こんなに可愛いものもASなのか！私も一つ欲しいぞ！！」

「そうか、それならまだ沢山余っていた所なんだ。今度お前に渡そう」

「本当か？それはかなり嬉しいぞ」

宗介は過去にこのボン太君を大量に生産をしたのはいいが、誰も買い取ってはくれないので大量に余ってしまった。宗介は大分困っていたのだ。

「ならついでにお前専用カラーリングしておくか？」

「そうだな。ならシルバーにしておいてくれ」

「了解」

宗介は紙に何かを書き、ボン太君の入っていた段ボールに張り付けた。

「会ってから思ったんだが。ラウラは何故眼帯をしているのだ？」

「これはそうだな。外してみるか」

ラウラは左目を隠している眼帯を外す。するとラウラの右目はレッドカラ なのに、左目はゴールドカラーになっていた。

「お、おかしいか？」

「？、別に何処もおかしくはないだろう。俺が気になっていたのはそれをつけていては動きにくいのだと思っていただけだ」

流石相良宗介、他の人とずれている所は相変わらずなのだ。きっと彼は戦場の事を頭に思い浮かべていたのだろう。

「そ、そうか。気にならないのならそれでいいのだが」

ラウラは眼帯をポケットにしまい、再びボン太君を持ち上げて見る。

その表情はもう緩みっぱなしだった。

さてと、長かったような一日が終わった。私はそう思いながら我が家への玄関まで来ていた。

「そう言えばソースケはどうしてんだらう?」

私はふとソースケの事を思い、一旦家に入ると鞆だけ置き再び家を出てソースケの家に向った。ソースケの家は近くにあり、すぐにたどり着いた。

「ソースケいる?」

少し経つと足音が聞こえてきて、扉が開いた。

「千鳥か。どうしたんだ?」

「いや、あれからどうなったかな〜て」

すると、後ろからテトテトとラウラも現れた。

「おっす、かなめ」

「あんた何普通に眼帯取ってるのよ、しかももう自然体にしちゃってるのよ。けど、原作とは違ってる事は突っ込まないわよ」

そう言いながらも突っ込んだじゃった！！と思う私でした。

「むっ、それは残念だな」

「それよりあんた達、晩御飯どうする？」

「お〜もうそんな時間か」

ラウラは全く気付いていなかったようだった。おおよソースケとASについて語ってたんだしうね。

「それなら、私が作るから食べく？」

「俺は構わないぞ」

「私もそれでいいぞ」

「じゃあ決まりね」

ソースケはそのまま、ラウラは鞆と借りたA S大全を手に持つとソースケの家をでて、私の家に入る。私は家に帰るなりそのままエプロンをして晩御飯の支度をする、その間にもリビングでA Sの話して盛り上がっている。せめてI Sの話しようよ、これI Sの話なんだからさ……

私が作った晩御飯、正直ドイツ人のラウラに合うか不安だったが、ラウラはおいしそうに食べてくれた私は心の中で少し嬉しいと思っただが、隣で無表情で食べている男を見ると相変わらずだな〜と思った。

「ねえラウラ。あなたの好きな食べ物って何かあるの？」

「そうだな……しいて言えばミソ……かな？」

「へえ〜ラウラってミソが好きなんだ。意外ね〜」

本当に意外だった。この子ドイツ人よね？何でミソが好きなんだろ
う。

「ラウラ、これからどうするって……」

私は食器を片づけ終わり、リビングに戻るとラウラがテーブルに突っ伏して寝ていた。そしてソースケはそれをじくと眺めていた。はたから見るとソースケ、あんた危ない人間に見えるわよ。あつ、もう危ない奴だった、違う意味で。

「千鳥、どうすればいい？」

「うん、困ったわね。無理に起こすのも何だか可哀想だし・・・しょうがない。ラウラは家で泊めるわ」

「そうか、では俺は帰るおとしよう。晩御飯を作ってくれた事に礼を言う」

「はいはい。また明日ね」

ソースケは自分の家に帰って行った。ソースケを見送ると私は携帯を取り出してシャルロットに掛けた。

「あつ、シャルロット？」

『かなめ、どうしたの？』

「いや、今家にラウラがいるんだけどさ、ラウラが寝ちゃって起こそうと思ったんだけど可哀想かなって思っちゃって、今日家に泊めようと思ったの。そこで誰かに教えておいた方がいいかなって思って電話を掛けたの」

『かなめの家にいたんだ、道理で帰ってこないわけだ。わかった、教えてくれてありがとう。じゃあまた明日』

「うん。また明日」

私は携帯のを切ると、すやすやと眠ってるラウラのために布団を敷いて、制服を私の寝巻と取り替えて寝かせたのだ。

「ふう、やっと一日が終わった。何だかんだで疲れた一日だったわよね」

これが明日から続くのか。私はそう思うと少し気が重くなった、主にソースケとこの気持ちよさそうに眠っているラウラのせいだ。

「他の人はいい人達なのにな」

第3話・相良君の家に行ってみた（後書き）

今回はかなめのハリセンは炸裂しませんでしたね（笑）

ボン太君は少し経ったら登場ですね、ラウラ専用機として。あと、

ラウラのミソ好きの設定は中の人ネタです、テイルズの。

次回はまたどたばたとする予定です、主に宗介とラウラが。

第4話・宗介、生徒会に入る。(前書き)

今回は生徒会の会長の登場ですね、しかし私、会長の言動が今もあまり分らないためこれでいいのか不安です。

それと、今回はあまりギャグ的ところは少ないと思います。

第4話・宗介、生徒会に入る。

「ふあ〜」

昨日のあれから一日が明けて朝になった。私は比較的早い方に起きる、その隣ではかわいい寝音をたてながら寝ているラウラがいた。寝顔を見ると可愛いのに、どうしてあんなにちゃたんだろっ……

「ほらラウラ。朝だよ」

「む〜あとさんじゅっぶん〜」

「だ〜め。起きなさい」

私は無理やりラウラを布団からひっぺ返した。ラウラは「みゅん」と妙な言葉を言いながら布団から転がって行った。

「ひどいぞかなめ」

「あんたが起きないのがいけないんでしょう。それよりも学校に行く用意をしなさい、制服はそこに置いてあるから」

私とさつさと、ラウラはのんびりと支度をして簡単に朝ごはんを食べると家を出た、少し歩くと前にソースケが歩いていたので一緒に学園に登校して行った。

「・・・これは」

学園には余裕でついたのだが、ソースケが下駄箱の前で何故か動きを止めて鞆の中をあさる。とても嫌な予感しかしないんだけど。

「・・・よし、二人とも離れている」

ソースケは自分の下駄箱に何かを取り付けると私とラウラに離れると言ってきたってこの流れは・・・

「ちよ、ソースケ・・・」

私は止めようとしたが既に遅く、ソースケは何かのスイッチを押す。次の瞬間、物凄い音と共に下駄箱が木端微塵になってしまった。幸い、周りにいたのは私達しかいなかったので被害はないのだけれども下駄箱が悲劇になってしまった。

「任務了解」

「何が任務了解じゃあああ!!」

私はソースケを思いつきり蹴り飛ばした。全くこいつはいつになっても成長しないんだから・・・

「どうしよう。私の上履きが・・・」

そしてラウラ。あんたもこの悲劇で言うことがそれだけかい!!

「もう、一体何があったのよソースケ？」

「いや。俺の下駄箱に何か入っている形跡があったから、安全のため爆破した」

「だからって爆破するな!!」

私はハリセンでソースケをはたき落とす。すると、焼け残った紙が舞い降りて来た。私はそれを手にすると、そこに書いてあったのは・

「部活案内・・・」

だった。成程、部活の案内をしようとしてくれたのね。なのにこのバカが爆破して全く読めなくなっちゃったじゃないの。そして、今の爆発音で生徒達が次々と現れ、次第には先生達が「何だ！敵集か？」的な感じで現れてしまったので私はソースケを連れて職員室に向った。その間にラウラには教室に言ってるように伝えた。

「それにしてもさっきの凄い音は何だったんだ？」

「そうだな。一体何だったんだろう・・・」

「確かに。物凄い音でしたわよね」

「うん。何かが爆発したって感じだったけど・・・」

教室では一夏、篝、セシリア、シャルロットが先の大きな音に対しての会話をしていた。

「ああ。あれなら宗介が下駄箱を爆破した音だぞ」

ラウラが四人の会話に割り込んだ。四人は反射的にラウラの顔を見て、硬直した。

「どうしたんだ。私の顔に何かついてているのか・・・は！！まさか朝のケチャップが付いているのか！！」

「いや・・・そうじゃなくて。ラウラ、お前眼帯はどうしたんだ？」

一夏があたふたしているラウラにそう言った。そしてラウラは・・・

「眼帯か？ああ、あれならポケットに・・・しまった、かなめの家に置いて来てしまった。まあ、どうでもいいっか」

四人はラウラの過去を知っているため、ラウラが眼帯をしていない事に物凄く違和感を感じていた。

「それよりもラウラ、さっき下駄箱を爆破って言ったよね？」

「ああ。宗介が下駄箱を爆破したぞ。その後先生達に職員室に連れて行かれたがな」

シャルロットの質問にラウラはさらっと答えた。その答えに四人は「何故爆破？」と思った。

宗介とかなめは織斑先生と共に教室にやってきた。ソースケの頭に

は大きなげんこつの跡が出来ていた。おそらく織斑先生にされたんだろう。

「かなめ、一体なにがあったんだ？」

席に着くなりどんよりした私に隣の席の幕が声を掛けてきてくれた。

「それがさ、あのバカソースケが下駄箱を木端微塵にしちゃって、私が職員室で色々と説明してたのよ。もうそれだけでエネルギーがなくなっちゃったよ」

「そ、それは大変だったな」

「まったくよ・・・」

「シャルロット、昨日はすまなかったな」

「ううん。別に大丈夫だったよ。それより昨日はどうだったの？」

「うむ、中々に楽しいかったぞ。それにこれも借りられたしな」

ラウラはそう言いながらシャルロットにいい笑顔でAS大全を見せた。その表情はとてもキラキラしていてシャルロットは何て言ったらいいかわからなくて困っていた。

さてと、授業は至って普通におこなわれ。あっという間に一日が過ぎて放課後、私は昨日と同じように織斑君達の訓練を見ようとしたが、いきなり教室に女性が現れた。

「あなたが今朝の爆発事件の人ね。ちょっと彼、借りて行くわね。とと、それと一夏君も生徒会室にくるようにな〜」

そう言いながらソースケは女性に連れて行かれてしまった。

「織斑君、今のは？」

「……この学園の生徒会長です」

何だか嫌な予感が……

「すまん箒、楯無さんに呼ばれちゃったから今日の訓練は無しな」

「むづ。それならしょうがない。私からセシリア達に行つていてお

「う」

「そうか、たすかる。じゃあ頼んだぞ」

織斑君も先の生徒会長の後を追うように教室を出て行った。

「とっても嫌な予感がするな・・・ラウラ、生徒会室の場所わかる？」

「わかるともさ。なら私も付いて行こう」

「ラウラ、抜け駆けは無しだぞ」

「抜け駆けでは無い、何だが・・・面白そうだからな」

ラウラはそう言いながら私と共に教室を出て行った。

「あいつ、本当にラウラなのか？」

「で、君が陣高の林水君が言っていた相良宗介君？」

「はっ、自分は相良宗介であります。更識会長閣下」

「あはは、本当に面白い子だね。」

「恐縮であります」

「失礼しますって相良、何やっているんだ？」

一夏が生徒会室に入ると、敬礼をしている宗介を目撃をしてそう言った。

「ここがそうだぞかなめ」

「失礼します」

「うんうん、あなたの事も林水君から聞いていたよ千鳥かなめさん」

「あの〜どうしてここの学園の生徒会長の更識さんが林水先輩の事を知っているのですか？」

私はあれから生徒会長の名前を教えてもらって、今の質問をしていた。

「それはね、陣高って何気にIS学園のお隣さんで、その関係でよく生徒会長として会っていたんだ」

「そうなんですか。私達は初耳でしたけど」

「まあね。私達は極秘で会っていたから」

ここは余り突っ込まないでおこう。林水先輩が絡んでいるとソースケ位に嫌な予感しかしないからだ。

「それでね相良君、千鳥さん。あなた達二人に生徒会に入ってもらいたいんだけど」

「私は別にいいですけど」

「自分もであります」

まあ、私達は陣高でも生徒会に入ってたからね。ちなみに私が副会長だったな・・・

「おっ、それじゃあ俺と同じになるんだな」

「織斑君も生徒会に入ってるの？」

「え・・・まあ。そうだな・・・」

あれ、急に織斑君の表情が悲しくなってきたよ。どうしたんだろう。

・

「なら、私も入れて貰えぬか？」

「ラウラちゃん？まあいいけど、でも大丈夫なの他の娘とか・・・」

「いや、私は宗介と同じ仕事でいい」

「ラウラ、あんた。ソースケがしていること知ってるの？」

「ああ。昨日聞いた」

ソースケがしている仕事は・・・あまり語りたくないな。だって、主に武力で鎮圧・・・っておかしいわよね、今考えると。

「うん。それならいいわよ」

ラウラ、生徒会メンバー入りを果たした。

「あの～所で、今朝の下駄箱の件は・・・」

「それなら大丈夫よ。林水君が何とかしてくれるみたいだから」

またあの生徒会長か。それよりこの生徒会長も何だか同じ感じ
して来たわね。

「それで、自分呼んだのは」

「あつ、それは相良君と千鳥さんをここに入れてもらうために呼ん
ただけよ。さてと一夏君。これから私とISの訓練に行きましょう」

「はい。わかりました・・・」

織斑君はどうやら更識さんともISの訓練をしている。織斑君って
モデルわよね、いつか篤達に刺されなければいいけど。

「ラウラちゃんはどうする？」

「私はこの後やることがあるので」

「そつ。なら行きましょう一夏君」

そうやって更識さんと織斑君は生徒会室を出て行ってしまった。な
んだか織斑君、元気が無かったわよね。

「まあ。一夏はあれで色々苦労しているんだ」

「なるほどね〜」

「さてと、私は借りたAS大全を読むとしよう。宗介、お前も私の部屋に来るか？私の部屋にはISの本などもあるぞ」

「ISか・・・俺はISの事については余り詳しくはないからな。その誘い、いいだろう」

ソースケが女の子の部屋に！！でも話す内容がとても普通じゃいのがこの二人らしいかな。

「じゃあ、私は適当に校舎を回ってるから、帰る時になったら電話ちょうだい」

「了解した」

そういつて私はソースケとラウラと別れた。

「ここが私の部屋だぞ」

「失礼する」

ラウラは宗介を連れて自分の部屋にやってきた。ラウラの部屋は二人部屋のようでベッドが二つある。

「さてと、これがISに関する本だ」

「感謝する」

その後、ラウラは借りて来たAS大全を。宗介はISの本を黙々と読み始めた。

少し達、部屋の扉が開いて誰かが入ってきた。

「ラウラ、帰ってたんだねって相良君？」

入ってきたのはシャルロットだった、どうやらシャルロットはラウラのルームメイトのようだ。

「邪魔している」

「えっと・・・それはいいけど、どうして相良君がここに？」

「それは、私がISの本を貸すと言って連れて来たのだ。まあ、ASについての話しの方が多かったがな」

シャルロットは改めてラウラが変わった事を実感していた、その大

きな理由はラウラもシャルロットや箒、鈴、セシリア同様一夏に好意を持っていたのだが、今のラウラは何処かそれを感じなくなっている。シャルロットは思っていた。

「相良君、何か飲み物いる？」

「そうだな。なら茶でもいただこう」

「うん。じゃあ今持ってくるからね」

シャルロットは宗介にお茶を出すと、宗介の隣に座った。普通の男子ならかわいいシャルロットが隣に座ればドキリとするものなのだが、宗介は何事もないかのように本を呼んでいる。

「相良君って、ASの事詳しいんだね。昨日の訓練の時、凄かったし」

「俺はASに関してはプロフェッショナルだからな。あれ位は当然だ。むしろ、お前達のISの技術の方が凄いと思うのだが」

「そつ、そつかな・・・」

「ああ、謙遜する事はない」

シャルロットは宗介の言葉に照れてしまって、手をもじもじとさせている。これもやはり通常の男性がもじもじしているシャルロット

を見たのならもう悶絶物になるが、宗介はそれさえ気づかずに本を読み続けている。

「む……もうこんな時間か」

あれから三人は話しをしていた（基本はISかASについて）。そこで宗介は時計を見るともう六時になっていた。

「そろそろ俺は帰るとするか」

「そうか。ではまた明日な」

「うん。また明日」

宗介はラウラ達の部屋を出てすぐになめなめに電話をして、二人で一緒に帰った。

「あんだ、また変なことしてないわよね？」

「問題ない。今日で大体のISの事は理解できたからな」

「さいですか」

ふう。今日は何事も起きなくてよかった、下駄箱爆破以外は。

第4話・宗介、生徒会に入る。（後書き）

巷ではシャルルが無双していますね、確かにあのシャルルの破壊力はすさまじいと思います。だが、自分はその後のラウラ無双に期待を・・・

もう、ここですでに別の意味で無双してますけどね（笑）
そんなラウラさんも生徒会に入っちゃいました。宗介と同じ事をやるって・・・考えただけで恐ろしいですね。

今回は遂にボン太君の登場です。いったいボン太君登場でIS学園はどう反応するのか？

第5話・ボン太君登場（前書き）

ボン太君の登場です。そして、今回も中の人ネタが入っています。
ではございませう。

第5話・ボン太君登場

さて、今回は私、ラウラ・ボーデヴィツヒがお送りしよう。今私は楽しみにしていたあれが届いたと連絡を受け、それを受け取った後で今部屋に戻る最中である。

それにしてもやはりデカイな”これ”。ああ、早く部屋で開けたい気持ちを我慢しながら私は部屋に向った。

「帰ったぞ」

「おかえり・・・それにしても大っきいね、その荷物・・・」

「ああ、そして早速開けるぞ」

「何が入ってるの？」

「ふふ、それはだな・・・」

私は段ボールを開けて、中身を両手で持ち上げて、地面に置かせてそれを立たせる。

「ボン太君だ」

「ボン太君？」

どうやらシャルロットは知らないようだな。それにしてもこのボン太君、両目を私と同じく赤と金、それにカラーリングが私の注文通りシルバーになっている。明日宗介に礼を言おう。

「よし、早速初期設定をするかな」

私はボン太君の中に入った、そこで驚いたのは中は着ぐるみとは程遠く、機械的な物だった。

「ら、ラウラ？それって一体何なの？」

「これは小型ASだ、こないだ宗介に頼んで貰ったんだ」

「こ、これがAS？」

私はそう言っていると初期設定を済ませる。すると、これには自己AIが搭載されているとの事で私は機動させてみた。

『なんだよ、バカヤロウ』

いきなりAIにバカヤロウと言われて私はぶちっとキレそうだった。

『まあいいや。私はAIのチアキだ。覚えるよバカヤロウ』

私はすぐさまAIをカットした。そして、このボン太君を持ち運びできるように元々私が持っているISの所にボン太君を収納できるのかと試したところ、どうやら出来るとの事で私はボン太君をシュヴァルツァ・レーゲンと同じ所に収納した。

「今のつて、本当にASなの？」

「そうだ、しかもあのサイズがフルサイズらしいからな。それよりボン太君は可愛かっただろう？」

「まあ、ボン太君は可愛かったけど、なんでボン太君のASがあるんだろう？」

「宗介が昔に作ったらしい。そう言っていた」

シャルロットはあははと笑っていた。シャルロットも宗介の事が少しづつだがわかるようになってきた、こんな作るのには彼しかないなど真っ先に思ったのはシャルロットの中だけの秘密にしておくようだ。私には表情でわかっていたがな。

次の日、早速ISの授業があった。授業は二組と合同で行われている、私は今日は何をするのかと織斑教官の言葉を待ちながら列に並んでいる。ちなみに宗介は初日と変わらない格好をしている。

「今日の授業だが、こないだの相良の実力を見たと思うが今度は専用機持ちの誰かと模擬戦をしてみらう。そうだな・・・ボーデヴィツヒ、お前と相良とで模擬戦をやれ」

「了解」

私と宗介は前に出て同時に言った。さてと、早速ボン太君を試す機会が出来た・・・

「では、他の物は邪魔にならないように離れている」

他の生徒が離れるのを見ると私と宗介はお互いに向き合うように立っていた。ふっふっふ。さあ行くぞ我がロードを・・・

「よし、来い、ボン太君!!」

私は叫ぶと、銀色のボン太君が現れ、私はボン太君に乗り込んだ。

「どつやら届いたようだ。アル、俺もボン太君を」

『了解』

すると、宗介も通常カラーで左頬に十字傷があるボン太君を出すと、それに乗り込んだ。

「なあ。あれって・・・ボン太君だよな」

「まあ、そうなんだけどね。ここでまさかボン太君が出てくるなんて思わなかったわよ・・・」

ちなみに他の生徒はボン太君を見てポカン状態になっていた。

「よし、通常に起動で来たな」

『私をなめるなよ』

「おま、AIは起動させていないはずだぞ」

『いやいや、戦闘するのにAIは必要だろ、そんなこともわからないのか?』

「・・・まあいい。それより」

私は目の前のボン太君（宗介カラー）を見る。どう見ても百戦錬磨のボン太君にしか見えない。

「ふも（行くぞ）！！」

あれ、なんだ今の声は？

『言い忘れていたが。ボン太君はスピーカーカーで喋ろうとすると「ふも」になるからな』

「なんでき、戻せないのか？」

『戻せるが、戻すと他の機能が停止してもいいんだな？』

「なんだよそれ」

『それがこの機体の宿命だ』

「まあ、かわいいからそれでいいか」

私は理解して宗介に話す。スピーカーで・・・

「ふもふも、ふもふつもふ（すまない、待たせたま）」

「ふも、ふもふもふもつふ（いや、ではいくぞ）」

「「ふも、ふもつふ（レッツ・パーティ）！！」」

ふもふもと言いだした二人に観客はようやく事態に追いついて来たのだが、今度は何言っているのかわからなくて頭に？を浮かべていた。

「何なんだあの奇妙なものは」

「あれも一応AS何ですよ。ソースが開発した」

「成程、それにしてもあの二人、なにを言っているのかわからんな」

織斑先生はふもふも言っている二人に眉をひそめながら見ていた。

「じゃあ。これから私が訳していきしょうか？」

「お前はあの言語が理解できるのか？」

「嬉しくはないですけど何故か出来るんですよ」

ここから先の二人の会話はかなめが他の生徒のために翻訳する羽目になった。

「ふもも（そこだ）！！」

宗介はボクサーを散弾銃にして撃つが、ラウラは横に飛びそれを回避する。

「ふも、ふももふも（甘い、今度はこちらの番だ）」

私はシュヴァルツァ・レーゲンのマシンガンを取り出して宗介目がけて撃つ。

（くっ、流石にやるな）

宗介はボクサーを地面に撃ち、砂埃を巻き上げラウラの視回か姿を消す。

（しまった。何処に入る？）

私は辺りを確認する。するとA Iのチアキの声が聞こえた。

『前だ、バカヤロウ！！』

（くっ！！）

チアキの声に私は現れた宗介のボン太君に反応したが、宗介はボン太君の手に警棒を握られていたため、私は宗介の警棒のが横腹に直撃をした。

(くっ。思ったより揺れる)

私は後ろに下がり、体勢を立て直す。そして何か武器はないかとコンソールを動かす。

(なるほど、こっちにも警棒はあるな。なら)

私も警棒を握り、相手の動きを見ながら構える。

こうして、戦闘だけみると真面目なシーンなのだが、絵がぬいぐるみで、「ふもふも」って言っているから全然締まらないのだ。それに、今もこうして二体のボン太君から「ふもふも！」と言いながら警棒で殴り合っていた。しかし、その戦闘技術がかなりハイレベルなのでそれがまたギャップとなっていた。

「ふも、ふもも(そろそろ時間がないな)」

「ふもふもふもも）どうやらそのようだな）」

二人は時間が無い事に気づき、次の一撃で勝負を決めるつもりみただい。

（さてとチアキよ、何か無いのか？）

『あるぞ〜右下のコンソールに触れる。そこを触れば”秘奥義”が使えるぞ』

（よし・・・）

私はチアキに言われた所を触れる。

（アル、どうすればいい）

『軍曹、ボン太君に新たな機能が搭載されています』

（何だそれは？）

『”秘奥義”システムです』

（まあ、試してみるか）

宗介も私と同じタイミングでコンソールに触れた。すると、私と宗

介は警棒を捨ててお互いに走りだす。

「ふもももふも（これが俺の）」

「ふもももふも（これが私の）」

お互いに同じタイミングでボン太君の拳を繰り出し。

「ふもももふも（殺劇舞荒剣）！！！」

「ふもももふも（殺劇舞荒拳）！！！」

二人は拳のラッシュ、そして時折蹴りの応酬、二体のボン太君はもう「ふももももも」とまるで世紀末に出る人のように叫んでいた。

「ってかソースケ、あんた剣とか言ってるくせに拳と蹴りなのね！
！それよりもその技、わからない人にはわからないからね！！！」

かなめ、同じ発音なのによくわかったな。他の者は何を言っているのかさえわからないのにな。

「ふもももも（おおおお）」

「ふもももも（はああああ）」

二体のボン太君の拳がぶつかり、両者一旦バックステップで下がり。最後に一撃だと言わんばかりにパンチを繰り出した。

「ふもも、ふもっふ（俺が、ボン太君だ）！！」

「ふもも、ふもっふ（私が、ボン太君だ）！！」

そして、二体のボン太君の拳は丁度同じタイミングで顔を捉えていた。

「そこまでだ。相良、ボーデヴィツヒ」

「ふもももふももも、ふも（中々言いパンチだったぞ、ラウラ）」

「ふもも、ふもっふ（お前もな、宗介）」

ここで、織斑先生が終わりの合図を出し、二人はトコトコと離れて行った。

「最後の台詞何だったのよあれ、なに、俺が何たら的な感じで言ったわけ!!」

「どうしたんだかなめ？」

かなめが頭を抱えていると、隣の篤が心配そうに言ってきた。

「ふう、中々の戦いだったな」

「そうだな。ボン太君気にいったぞ」

「それは何よりだ」

「全く、二人で楽しむのはいいんだが、それくらいにしておけよ」

教官が私達の会話に割り込んで話しを止める。すると教官の合図で観戦してた生徒達が降りて来た。

「え〜今の模擬戦は各自、忘れるように。いいな!!」

教官の凄い顔で皆は無理やりはいと言った。教官が怒ると怖いから
な・・・

「よし、ではこれから専用機持ちをリーダーにいつも通りの訓練だ」

ふう、私の視点ね。あのバカ二人の戦いが終わり、今度はいつも通りの訓練になった。私は箒の列に並んでいる。

「次の人って。かなめか」

「よろしくね箒先生」

「先生はよさんか」

でも、まんざらじゃない箒。そんな箒もかわいいつすよ。私は前の子が箒の専用機”紅椿”から降りて来たのだが。

「立ったままになってしまった。すまんかなめ、ちょっと先生を・
」

ISから降りるとき、座らないで立ったまま降りてしまうと次の人が乗るのに一苦労してしまう事があるのだが。私は何事もなかったかのように紅椿をよじ登り、自分自身に装着させた。

「凄いなかなめ」

「そんなことないって。それより早速教えてよ篤」

「そうだな。それでは早速歩所から始めよう」

私は篤の指示で紅椿を歩かせてみた、ISって結構難しいのよねこれ。今にも倒れそうだけど、そんな私は一瞬視回を離れた所に映る。すると、そこにはさっき猛威を振るっていたボン太君が二体立っていた。

ラウラは専用機持ちなので、皆に教える側にいるのだがソースケはISを動かせない。よって、ソースケはラウラの補佐としてついているのだが・・・

「ふも、ふもも（そうだ、その調子だ）」

「ふもふもふも（次は後ろ向きで歩いてみる）」

「え〜二人とも何言ってるのかわからない〜かわいいけど〜」

ラウラはちゃんと自分のIS”シュヴァルツァ・レーゲン”も出しているが、ラウラ自身はボン太君に乗っているため、説明が当然「ふも」になる。その光景を見た私は何かが切れた。

「こおらああ。あんだ等いつまでそれに乗ってるんじゃないやああああ」

私は紅椿に乗ったまま二人の所まで走り、二体のボン太君にドロップキックをかました。あつ、ちゃんと着地は成功したわよ。

「いたいぞかなめ」

「どうしたんだ千鳥？君は篠ノ之の所にいたのでは？」

「じゃかしい。あんた等のアホな行動が目映ったのよ。たく、教える側なのに何でソレ着てるのかな？誰も分かんないでしょ。もう、あんた等ちよつと周り走ってなさい、ほら早く行く。レッツゴー！」

私はこれ以上、他の子が困らないように二人を走らせる事にした。

「ふう……あつ」

私はここで気づいた、ラウラを走らせてしまったらラウラのグルーブはどうすればいいのだろう。

『それなら私が教えよう』

「えっ、なに？」

『ここだぞ』

なんと、今は無人のシュヴァルツァ・レーゲンから声がした。私は無人から声を聞こえた事ですぐにAIと理解した。

「あんたは？」

『私はあのバカラウラのAI、チアキだ。ここからあのバカヤロウに代わって私が教えよう。お前、私の補佐をしる』

「まあ、それくらいなら」

私は一旦幕の所に戻ると紅椿を次の子に代った。あっ、私勝手にあのバカ二人を走らせちゃったけど、織斑先生の了解を取ってなかった。私は織斑先生を見ると・・・

(私も同じ考えだった。よくやってくれた)

あっ。どうやら私が動かなくてもあの人が動いてたか。私は見ただけで織斑先生の言いたいことがわかった。それがわかると私はシュヴァルツァ・レーゲンの所に行き、チアキの補佐に努めた。

「かなめ、一体何者なんだ？」

箒はさっきのかなめが紅椿をに乗りながらドロップキックをしたことを思い浮かべていた。自分にはあんなことが出来るのか？そんな疑問を思いながら他の子に動かし方を教えていた。大丈夫、あんなことが出来るのは多分、かなめだけだと思っ。

「ふっもふもふもっふも」

「ふっもふもふもっふも」

そして、このアホ二人はふもふも言いながらアリーナの外を走っている、ボン太君のまま。

ふう、ボン太君の性能を試せて満足の私。あれから授業が終わるまで走らされていたが、まあ性能は殆ど確認できたからよしとしよう。今、私達はいつものメンバーで屋上でお昼を食べている。今日は私はマイ味噌を持ってきた、これは何でも合うんだぞ。

「宗介、ミソはいるか？」

「貰おう」

宗介は私からミソを貰うと、コッペパンにつけて食べた。

「ふむ、中々だな」

「そうだろ。ほれ、もっとやるぞ」

さてと、他のメンツは。相変わらず一夏にアタックしているな。今も箒や鈴から作ってもらった弁当を食べた、セシリアはその二人を見て何処か嫉妬をしている表情だった。そう言えば、最近はシャルロットも一夏争奪戦に参加していないな？どうしたんだろう。私？そんな暇があるのならAS大全を暗記していたいぞ。

「それにしても相良君。あのボン太君、相良君が作ったって聞いたけど」

「本当だ、デユノア。俺が前に作ったんだが、あまり売れなくてな。何処が行けなかったんだろう・・・」

（いや、まずはボン太君って言う時点でダメなような気がするんだけどな）

「どうしたんだシャルロット・・・成程、お前も欲しいのか、そうかそうか。宗介、至急シャルロットにもボン太君を提供するんだ」

「ちよっ、僕は別に・・・」

「了解した。家に帰り次第すぐにカスタマイズして届けよう」

「ふむ、それなら放課後はシャルロット専用のボン太君をどうしょ

うか会議を開くぞ」

「了解だ」

ああ、僕の意見を聞かずに話しが進んで行ってるよ〜

「どんまいシャル、ああなったあの二人はもう止められないわ・・・

」

「そう見たいだね」

かなめとシャルロットは青空を遠い目で見ながら言った。その表情はもう諦めが付いたものに見えた。そして、相変わらず一夏争奪戦をしているメンバーは相変わらずである。

「ここが今噂のIS学園か。へっ、楽しみだぜ。この俺にかかればどんな女の子も一発で狙い撃ちだぜ」

今、一人の金髪の男がIS学園の校門に立っていた。この男は一体何者なのか？そして、この男の目的は一体・・・

第5話・ボン太君登場（後書き）

ふもっふ風になってるかちよつと不安になってきたこの回。次回はあのロックオンお兄さんがやってきます。

第6話・スナイパー学園に現る？（前書き）

ロツクオ・・・クルツお兄さんの登場です。

第6話・スナイパー学園に現る？

さて、私とソースケがIS学園に来てか一週間がたった。IS学園の生活は意外にもすぐに慣れる事が出来た（ソースケとラウラのアホ二人の事以外は）

「では山田先生、早速ホームルームを始めてくれ」

今、教壇に立つてる女性はこのクラスの副担任の山田真耶先生。私達が来た時には出張で、おととい戻ってきたばかりだった。

「えー今日は皆さんにお知らせがあります。今日から日本史の先生が新しく外部から来ますので皆さん、覚えておいてください」

その後、山田先生は朝のホームルームを終えて織斑先生と共に教室を出て行った。

「一体どんな先生なんだろう？」

「授業になればわかるだろう」

「まあ、そうなんだけどね」

隣の筈とそんな会話をする。筈とは何かと一緒に行動することが多い、今度の休みも一緒に遊びに行く約束もしているのだ。

「相良、今度の休みどっかに行かないか？」

「そうだな・・・俺は特に用はないから構わないが」

「それなら、私も連れて行け！！」

「ちよつ、ラウラさん。抜け駆けは無しですよ」

「あつ、一夏。僕も一緒に行つていいかな？」

「ああ、大人数の方が楽しいからな」

あつちも賑やかですね。本当に。そんなこんなで日本史の授業になる。クラスの皆もどんな先生が来るのか楽しみにしていた。

そして、教室のドアが開かれて、一人の男の人が入ってきた。その男の人は金髪の少し長めの髪、顔はカッコよく、クラスの子達が「キヤーイケメン来たー」と騒ぎ始めた。

確かにかっこいいけど・・・あれ、あの人多つかで見たことがつて・

「えー今日から日本史を教える事になったロックオン・ストラトス

だ、よろしく。ちなみに俺、今彼女募集中だから気が向いたら告白
をしてもいいんだぜ」

「ㅋㅋㅋㅋキャー」「」「」

クラスの女子がもうずっと騒いでいる。てかあの人やっぱり・・・
すると、ソースケがいきなり立ち上がり。

「何をしに来たんだクルツ？」

「俺はロツクオ・・・どうしてオメエーがここにいるんだよソース
ケ？」

やっぱりではなくてもクルツ君だった。てかあんた、彼女募集中と
か言ってたけどマオさんいるんでしようが。マオさんが今の言葉聞
いたら間違いない殺されるわよ。

「それはこっちの台詞だ」

「なあ相良、新しい先生と知り合いか？」

「知り合いも何も戦友だ」

「ちよっ。ソースケ、ちよっここっちに来い」

すると、ソースケはクルツ君に引つ張られて教室を出て行った。

「な、なあかなめ。あの先生と相良は知り合いなのか？」

「そうね、そんな所。ちなみに私も知ってる人なのよ・・・」

「おいソースケ。なんでIS学園にいるんだよ」

「俺はただ、林水先輩にここに転入しろとの事でここにいる。そう言うお前は どうしてここにいる？」

「俺はテッサに言われて来たんだよ。ISの事をあまり知らない俺達ミスリルはISの事を調べる必要があるって言い、俺がここに派遣されたって事だ」

「なるほど・・・それで本音は？」

「ISって女の子しか操縦できないんだろう。そこに俺が来たらまさしくハーレムじゃねえか、そんなウハウハ状態俺がほってくわけねえだろう!!」

クルツがそう力説している間に宗介はやはりなと思いつながら教室に戻って行く。教室に戻ると流石に授業中なのであまり騒いではいな

かったが、一夏の反対の席に何故かラウラが座っていた。そう、ラウラは宗介が転入しきてから一夏の反対の席に移していたのだ、ちなみにシャルロットはラウラの後ろにいる。これは元々のいた席であった。

「一体どうしたんだ？」

「いや、問題はない」

宗介はラウラに何事もなかった事を言っつて自分の席に座ると、クルツが戻ってきた。

「ようし。今からこの俺、ロックオン先生による日本史の授業を始めるぜ」

クルツ君の授業は至って普通にわかりやすかった。結構意外に教師としてもやって行けるんじゃないかな？でも、あのスマイルはどうなのかね？

「んじや。今日の授業はこれで終わりだな。じゃあな、子猫ちゃん達」

授業は特に何も起きずに終わった。それにしてもクルツ君までここに来るなんてねえ・・・

「さてと宗介、学校終わってからどうする？」

「お前に任せる」

「そうか、ではシャルロットを連れて何処かに行くか？」

「俺は構わないが、デュノアはどうなんだ？」

「僕もそれでいいよ」

今、宗介、ラウラ、シャルロットの三人は放課後どうするか話していた。この組み合わせ、かなり珍しいかのように思うがここ最近、この組み合わせが一緒にいるのは意外に多いのだ。

「ソースケっておい、お前いつの間に女の子と仲良くなってるんだよ・・・」

「なんだクルツ？」

クルツがいきなり教室に入ってきた、ちなみに今は昼休みだ。

「なんだじゃねえよお前。かなめって言う娘がいるのにも関わらずこんなに可愛い子とイチャイチャしゃがって」

「別に俺はイチャイチャなどってかイチャイチャとは何だ？わかるかラウラ？」

「いや。私もそのような物には少し疎くてな、シャルロット、知ってるか？」

「えっ！！そ、それは勿論知ってるけど。僕達はそんな・・・」

「ふう。全くお前が羨ましいぜえ。それにしてもソースケ・・・」

クルツが宗介を見て少し口を籠らせて、それでも言う。

「なんで、お前の膝の上にその子が座ってるんだ？」

そう、今の状態は宗介は自分の席に座っているのだが、ラウラが宗介の膝の上に座っているのだ。シャルロットは空いているラウラの席に座っている。

「わからん」

宗介はそう言い切った。そして、宗介の膝の上に乗ってるラウラは。

「まあ、何となくだ」

さらっと言った。それはもう本当にこれが自然なのではないかって言う顔をしながら。

「はあ。それにしてもお前は相変わらず無表情だな。俺だったらもうちょっとリアクションとるんだけどな」

ラウラは最近、おかしくなっているが見た目は超美少女、そんな娘に膝の上に座られたらそれはもう心臓が張り裂けそうになるだろう。しかし、今の宗介の表情はいつもと変わらない仏頂面だった。

「そつなのか織斑？」

そこで、宗介は箒やかなめの所にいる一夏にいきなり話しを振った。

「そ、それは当然だろ！！なんでお前はいつもそんなに冷静な顔を

しているのか常に不思議に思ってたんだよ」

織斑一夏、彼も多数の女の子に好意を持たれている。主に篤、鈴、セシリアにシャルロットに。彼女たちは他の子に負けないように色々と仕掛けてくるので一夏はその度に理性を抑えようと必死になっているのだ。

「はあ、そう言えば織斑、お前もハーレムだったな」

「なっ。俺は違いますよ先生」

「けっ、羨ましい事言っぜ・・・おっと、俺はこれから職員室に用があったんだった。じゃあまたな織斑、ラウラ、シャルロット」

クルツは軽く挨拶をすると教室を出て行った。

「ふう。まさかあいつがあんな事になっているとはな」

クルツはさっきの宗介を思い出しながら廊下の角を曲がる。すると、曲がり角で誰かにぶつかってしまう。

「あ、危ないですね」

「つとと。済まねえなテッサ・・・？」

クルツはそのぶつかった声に自分の上司の名前を呼んでしまうが、彼は瞬時に上司がここにいるわけがない思い、ぶつかった子を見る。やはり違つ子で、その子は宗介のクラスにいた。

「間違えたちまった。確か、セシリアだったな」

「そうですねよロックオン先生」

クルツとぶつかったのはセシリア・オルコットだった。彼女は最近、昼休みにアリーナで自主練をしていて今はそれに向う途中だった。

「それより、どっか怪我してねえか？レディを怪我させちまったら俺、物凄く後悔しちまうからな」

「大げさですよ。何処も痛くはありません。それより先生も私の事を”テッサ”て言いますのね？」

「他に、誰が言ってたんだ？」

「相良さんとかなめさんですわ」

クルツはやっぱりなと思った。それに、セシリアが二人の名前を言う時の声質とか本当にテッサそっくりだなと改めて思った。

「そんなに似てらっしゃるのですか？その”テッサ”という方に」

「ああ、声だけで判断しろと言われると難しいな。まあ、両者も美人な点も似ているがな」

「び、美人なんて・・・」

クルツはいい笑顔で親指を立てながらセシリアに言い、セシリアはクルツに「美人」と言われて顔を真っ赤にしてしまう。

「俺はこれから職員室に行くからまたな」

「は、はい」

クルツはセシリアと別れて職員室に向った。セシリアはクルツの姿を見てもう少しカッコよくなってほしいと一夏に思った。主にあの自信のあるような空気とかを。

そして放課後・・・

「さてと、俺は今日も訓練かあ。最近、ISの訓練ばかりやってる気がする」

「それなら一夏よ、お前も放課後共に行動しないか？」

「そっだよ一夏。たまには遊ぼうよ」

「うん。まあ、たまにはいいのかな。よし、俺も今日は遊ぶぞ」

一夏、ラウラ、シャルロットは放課後の方針を決めたようだ。

「相良、お前はどっするの？」

「俺はこの後、急にある人物と急に会う約束が入ってしまった・・・
そっだ。お前達も来るか？」

「えっ、いいのか俺達が行っても」

「問題ない、少し待っている」

宗介は帰りの準備をしているかなめの所に向って行く。

「千鳥、すまないが俺は先に帰る事になった」

「わかったわ。私も今から幕と遊びに行くから」

「そっか、ではまた明日」

宗介はかなめと別れると一夏達の所に戻り、各自鞆を取ると教室を後にする。

「・・・おっそ〜い。一夏の奴、どうして来ないのよ〜」

アリーナで叫んでいるのは隣のクラスの鈴、彼女も一夏の事が好きな子の一人である。彼女が怒っているのは放課後の訓練に一夏が来ないからだ。しかも、それ以外の人も来ていないのが彼女の怒りを更に高めていたのだ。

「あら、どうかなさいましたの鈴さん？」

「セシリア。あんた、一夏はどうしたの？」

「一夏さんなら今日はここには来ませんわ。どうやら相良さんと何処かに行ったと聞きましたわ」

「そ、そんな〜」

「では。私はこれから自主練をいたしますわ。鈴さんもどうです？」

「・・・いいわ。私もやるわ」

二人はアリーナでISの自主練を始めた。

「相良、これから何処に行くんだ？」

「もう少しで着く」

一夏が宗介に聞くが、宗介は短く答えた。今、宗介達がいる場所はIS学園から少し離れた所、言えば宗介が通っている陣代高校の近くの道を歩いていた。

「着いたぞ・・・待たせたな風間」

「あつ、相良君。それにえ」と

通りの公園に入ると、ベンチに座っていたメガネを掛けた男子学生がやってきた。この男子の正体は風間信二。陣代高校での宗介やかなめと同じクラスメイトの一人で、AS等がかなり好きな少年でもあった。

「ああ。俺が今いるIS学園のクラスメイトだ」

宗介がそう言うと、一夏、ラウラ、シャルロットは風間に自己紹介した。

「僕は風間信二って言います。それより相良君、例の物なんだけど・・・」

「首尾はどうだ？」

「わからない、でも、この情報がガセとも言えないからね」

「だが、今の現状ではその情報しか無いのだろうか？」

「うん。だから僕は相良君に教えたんだ」

宗介と風間はなにやら真剣に話している。話しについていけない三人は恐る恐る宗介に聞く。

「宗介、一体どうしたのだ？」

「・・・そうだな。今日の五時間目が終わった後、風間にある情報が届いた」

「その情報とは・・・？」

ラウラの問いに宗介は一旦間を置き、話す。

「ASコンプリートエディションの情報だ」

宗介が真剣な顔で言うが、一夏とシャルロットは頭に？を浮かべていた。だが、ラウラは何故かワナワナと体を震わせていた。

「そ、それはまことか？」

「いや、その情報はまだ確証はないんだけどね。えっと、ラウラさんはもしかして……？」

「おおお、それが本当ならば私は今日、死んでも構わんぞ……！」

「ちょっ……！ラウラ。どうしたの？」

「シャルロット。これが落ちていていられるか……！ASコンプリートエディションだぞ。これはドイツではほぼ入手困難、手に入れたいのならオークションか日本で探しまくるしかないと言われてるものだぞ。何が凄いかって、コンプリートシリーズはお手頃な値段の癖に出来は完ぺき、デイトールまで施されているのだぞ。その完成度ゆえに入手が困難になってしまっているのだぞ。さらに、コンプリートエディションにはシークレットまでがあるのだぞ。これが興奮せずにはどうすればいいのだ……！」

もはや、ラウラがなにを言っているのかわからない一夏とシャルロットであった。

「こうしてはいられん。宗介、風間。早速その場所に向うぞ!」

「了解」

「うん」

ラウラを先頭に宗介、風間は走って行ってしまつた。

「お、おい!」

「ちょっとまってよ」

三人の後を追いかけるように走る一夏とシャルロットであった。

「ここがそつなのか風間？」

「うん。情報通りならもうあるはずなんだけど」

風間が行っていた店とは……ふつうのコンビニであった。

「あつた、あつたよ相良君、ラウラさん」

「その情報はどうやら本当のようだったな」

「だが、もう数が無いぞ」

コンビニのお菓子売り場に目当ての物があつたのだが、残りが六個しか余ってはいなかった。

「で。どうするんだラウラ?」

「そうだなー夏・・・折角人数分あるんだ。皆で一つ買ってみるのはどうだ?」

「そうだなー俺も少し興味が出て来たから買ってみっかな」

「じゃあ。僕も一つ買ってみるよ」

ー夏とシャルロットは棚の上にあるASコンプリーションを手に取る。

「俺も買つか」

宗介もASコンプリーションを手に取るうとした時、箱の上で他の人の手とぶつかり、宗介は手の人物をみる。すると、そこにいたのは・・・

「クルツ・・・どうしてお前がここに」

「ふう。情報はどうやら合ってたみたいだな、それにしてもまさかお前たちとここで会うとわは思わなかったぜ」

クルツ・ウェーバーだった。それにしてもなぜ、ここにいるんだろうと思う一夏とシャルロットだった。

「それは、俺もこの入荷するっていう情報を手に入れたからな。それと、この情報手に入れたのはお前じゃなええなソースケ。となると、やはり風間か」

「うん、クルツさん。僕が相良君に教えたんだ」

「やはりなって呑気に会話してる場合じゃねえな。一個しか買えないが、買えないよりはましだな」

クルツは一つ手に取り、宗介と風間も箱を手にしてレジに向う。そして、全員店から出た所で集まっていた。

「さてと、ここにいる全員がASコンプリートエディションを一つ買ったわけだ。んじゃ、ここで一つ誰が一番いい物を当てるかって言っつのはどうだ？」

「あっ、それ面白そうですね」

「そつだな。ま、この私のASに対する愛があれば左程問題は・・・」

「そつか、なら早速」

空気を読まずに宗介が一箱を開けた。

「ふむ、どうやらサベージのようだな」

カエルみたいな特徴をもつサベージだった。

「へっ、ソース残念だったな。さてと、なにが当たるっかな」

クルツも箱を開ける。すると、クルツが当てたのは・・・

「おいおい、マジかよ・・・」

M9ガーンズバックだった。しかも、狙撃ポーズを撮っていた。それはまるで・・・

「明らかにこれ、俺のM9じゃねえか。どうなってるんだ？」

クルツは空き箱の周りを見る。するとそこには「協力・ミスリル、アマルガム」と書いてあった。それを見つけたクルツは自分が所属している所と、かつて敵対していた組織に疑問を抱く。

「先生。かつこいいの当ててるな。よし、俺だつて」

一夏も箱を開ける。すると、現れたのはなんとヴェノム・・・コダ
ルだった、しかもガウロン機だった。

「はあ。本当にあそこも提供してるのかよ」

「あれ、この機体の事知ってるのか？」

当たった本人の一夏は宗介とクルツに聞き、宗介が簡単に説明して一夏は「なんで俺、敵役当ててんのかな？」とぼやいていた。

「今度は僕が開けてみるね」

割とノリノリなシャルロットが箱を開ける。すると、シャルロット
が当てたのは・・・

「これ、相良君のアーバレストだ」

「お、おお。凄いよシャルロットさん。そ、それ、シークレットだよ……」

「凄いなシャル。ついてるな」

「そ、そうかな。でも、嬉しいな」

シャルロットは本当に嬉しそうにしていた。

「さてと、今度は私だな。何だかドキドキしてきたぞ」

ラウラが緊張しながら箱を開ける。すると、ラウラが当てたのは・

「これは……前に宗介が言っていた、レーヴァテインじゃないか！……」

「ラウラさんもシークレット当てちゃってるよ〜」

「おおおお。やったぞ私はああああ。これでもう私は死んでもいい」

ラウラ、発狂しまくりだった。

「にしても凄いな、シャルとラウラがシークレット当てるなんて。何か羨ましいな」

ちなみに、風間は普通にミストラル2だった。

「はあ。シークレットはお前達が独占かよ」

「俺はこれを狙っていたからな。俺は満足だぞ」

宗介は二つのシークレットのパイロットなのだ当然の発言である。

「んじゃ。俺は先に学園に戻るわ、早く戻らねえと千冬に何て言われるが分かんねえからな」

クルツ、どうやら職員会議を抜けだしてきたみたいだった。転任初日で会議をサボるのはどうかと思う他の皆は思った。クルツは「じゃあな」と言いながら学園に戻って行った。

「じゃあ。僕も帰るね。今日は本当にすごい物を見れたよ。ありがとうシャルロットさん、ラウラさん。それに織斑君」

クルツに続いて風間もその場から立ち去る。

「さてと、俺達はどうする？」

「そうだな・・・」

その後の四人は街をぶらついていると。買い物をしているかなめと
篤とバッテリー会い、六人で色々として遊んだ。内容は各自で想像し
てください、宗介がいつものような行動をとるのは言つまでもない
が・・・

くおまけ

「ふう〜どうやらバレてなかったようだ・・・」

「ばれてはいなかった・・・本当にそうか？」

クルツはこっそりと職員室に戻り、こっそりと退勤簿にカードを入
れようとしたが。背後から織斑千冬に声を掛けられた。千冬表情
はとても怖い物になっていた。

「ウェーバー先生。先の職員会議にいなかったのはどう言うことか

説明してもらおう」

「あの……えっと……それはですね……」

「なんだ」

千冬は更に怖さを増してクルツを見る。クルツはここで下手に嘘を言わない方がいいと感じて素直にさっきの事を言う。

「ほお、ではウェーバー先生はその理由で職員会議をサボったと」

「……はい」

「そうか。素直に言ったウェーバー先生には……」

「おっ。許してくれるんですか？」

「……な訳あるかああ。今からアリーナ三十周だああああ」

怒鳴りながら千冬はクルツの頭をグーで殴り。その後アリーナを走らせたのだ。

「とほほ。初日からついてねえぜ……」

第6話・スナイパー学園に現る？（後書き）

クルツの登場の回でした、それと風間。クルツはまあ、最初はまあまあ普通？ですが、後々にいろいろやらかす予定です。いや、もう決まりですね。

ASコンプリートエディションはオリジナルです。もし、リアルで出たら是非買いますね。ISのが出てても買います。

今回は、ラウラとシャルロットが歌の練習？コンサートを開く？どうしてそんな流れになった！！

第7話・歌を歌うことになりました(前書き)

今回はいろいろと・・・凄いです。そして、書くのが今まで一番大変だった。

第7話・歌を歌うことになりました

クルツがやって来た週の休み。ラウラとシャルロットは買い物のため駅前を歩いてた。あれ、宗介とか一夏は？と思う方がいるのだから。宗介は定期報告のためメリダ島へ、一夏は実家でのんびりしているのだ。

「あつ。ここ来週ライブやるんだ。ラウラ、よかつたら見に行かない？」

「ふむ。私はこう言うのは余りわからんからな、いいだろう」

ラウラとシャルロットはライブのチケットを買いに行くため、チケット売り場に行くが、どうやらそのライブは人気グループが来る奴の様で既に完売していたのだ。

「完売じゃしょうがないよね」

「そつだな・・・」

すると、ラウラは一人の困っている女性を見かける。

「どづしたのだ？」

「それが、今度のライブに来るはずだったグループがこれなくなっちゃってどうしたものかと」

どうやら、この女性はライブの関係者のようだ。それにしても本当に困ってるようだ。

「今からキャンセルのお知らせをすれば・・・いいえ。もう、間に合わないか・・・どうしたら・・・」

ライブ関係者の女性はラウラとシャルロットをじっと見る。

(この子たち、凄くかわいいわよね。それもとびつきり・・・もしかしたら)「ねえ、あなた達。よかったら・・・出てみない?」

「・・・は?」

「だから、あなた達二人、歌ってみないかって言ってるのよ。どうかな?」

「い、いやいや。僕達歌った事なんて無いですし」

「そ、そうだぞ。私もそのような事はしたことが無いぞ」

「そこをお願い。この通り!」

ラウラとシャルロットは断ろうとしたが、女性が本当に困っていたので断るに断れない二人だった。

「わ、わかりました。その・・・僕達でよかつたら・・・」

「本当！！ありがとう」

「ま、まあ。困った者を見捨てるなど出来ぬからな」

「そつだ。まだ名前を言って無かったわね。私は相沢里奈・・・」

ライブに出る事を承諾した二人は来週の日曜日に行うことを聞き、その他色々な説明を受けて会場を後にした。

「・・・勢いで言っちゃったけど、どうしよ・・・」

シャルロットは少し後悔していたようだ。その隣でラウラも同じく後悔していた。

次の日。私とソースケが教室に入ると、頭を抱えているラウラとシャルがいた。ラウラにしては「どどどどどうすれば」と頭を抱えながら呟いていた。あんたがどうしたのよって言いたいわ。

「どうしたのよ二人とも？」

「いや、それがな……」

ラウラが昨日あった事を私達に話してくれた。

「……で。あんた達、それを了承しちゃったって事ね」

「うん……」

はあ。何て事を約束してんだがこの二人。

「それでな。私達は考えたんだが、そこで致命的な事に気づいた」

「何を気づいたの？」

「それはだな……私達は日本のアイドルなど全く知らないと言う事だ」

ああ。まあ、何となくだけど予想できてたわ。シャルまだ日本に来て日が浅いからしょうがないとして、ソースケ二号のラウラは知るはずも無いか。

「うん。ライブか・・・あっ」

私はふつとあの時の光景を思い浮かべる。それは、異世界に飛ばされた一連の事件の間で出会ったランカ、シェリルが物凄いお客さんの前で歌ってる光景を思い出した。

「そうだ、ソースケ。この二人にランカ達の歌を歌わせるのはどう？」

「ふむ・・・悪くないな」

「よし決定。CDは私の家にあるから今日から練習よ練習」

私の剣幕にオロオロするシャルとラウラ。でも、何で私こんなにノリノリ何だろう。

「お、おいかなめ。大丈夫なのか？」

「まあ、何とかなるんじゃないの？」

篤が心配そうに私に言ってきた。心配するのは無理も無いか。そんなこんなで放課後、私、ソースケ、ラウラ、シャルは私の家に来ている。目的はこれ、二人のCDだ。ちなみに、織斑君達は事情を知っている篤とセシリアに訳を言って、ラウラとシャルとソース

ケが訓練に出れない事を伝えた。

「これがそのCDよ」

「これは。宗介の家にあつた奴ではないか」

「そうよ。私とソースケ、同じ物を貰つたからね」

「ちよつと聞いても良い？」

「いいわよ」

ラウラとシャルはCDを聞き始める。

「いや、この歌声聴くとあの時の事を思い出すわよね」

「そうだな。特にバジユラ本星に突撃する時の事は本当に思い出しただけでよく生きてたなと思うがな」

なんて、色々と曲を聞く私達。そして、一旦聞き終わった二人に早速歌う曲を決める事にする。

「僕はね、うーんと。“星間飛行”と“ダイヤモンドクレーバス”かな？」

「私は”ノーザンクロス”と”射手座午後九時 Don't be late”だな。あとは二人で”ライオン”だな」

二人は歌いたい曲を決め。その後は私の家でまずは歌詞を覚える事から始めた。ソースケは何をしてるかって？その隣で古典の課題でもやってるわよ。

次の日から私達は練習を始めた。と言っても授業があるから出来るのは昼休みと放課後位なだけで。昼休みは屋上で、歌の練習をしていたら織斑君や箒達が驚いていた。

そして、放課後になった私達は折角広いアリーナが解放されているからそこで練習をすることにした・・・織斑君達が訓練している横で。

「私の歌を聞け!!!・・・なんかシエリルと違うな・・・」

「おっ、何だ何だ。何か楽しそうな事してんじゃねえか」

たまたまアリーナを通りすぎたクルツ君がこっちにやってきた。

「で。あの二人は何やってんだ？」

「歌の練習よ。色々あってね」

私はクルツ君に二人が歌の練習をしている理由を話した。

「成程ね。それで二人はランカとシェリルの歌の練習をしてるって訳だな・・・ところでかなめ。あの二人の衣装はどうするんだ？」

「そこはまだ考えてないわ」

すると、クルツ君が真剣な表情で二人を見つめ。急に目をカツ!!と開かせた。

「これは会議が必要だな。かなめ、衣装は俺が何とかしてやるぜ。そうと決まれば早速行動あるのみ、まずはメリダ島に戻らねば」

クルツ君は急いでアリーナを出て行った。最後の言葉が本当なら彼は当分戻ってこないだろう。授業どうするんじや。

「だ、抱きしめて。銀河の果てまで・・・恥ずかしいなこのセリフ」

シャルはランカの台詞を恥ずかしそうに言っていた。そして、その隣では・・・

「どうした織斑。その程度で根をあげるのか？」

「くっ、まだまだあぁ!!」

「そつだ、その意気だ。突撃ラブハート!!」

織斑君がソースケ、箒、セシリア、鈴と訓練していた。それにしてもソースケ、あんたがファイヤーボンバーが好きだからってその叫びはどうなのかねえ。オズマさんもそう叫んでたけどさあ・・・

ここからクルツ君がメリダ島に戻った所を見てみよう。

「ウェーバーさん。どうしたんですか急に戻って来て」

「テツサ。俺は今、重要な任務を任されたんだ。急いで野郎達を会議室に集めてくれ。それと、この事を少佐や中佐には内緒で頼む」

「わ、わかりました」

クルツ君が話しかけているセシリアに声が似ている少女はテレサ・テストアロツサ。決して運命な魔法少女の子とは全く関係ない、これはどうでもいっつか。テツサはソースケやクルツ君達が所属している傭兵部隊”ミスリル”の大佐なのだ。どう見ても視えないけどね。

「ウェーバー軍曹。我々を会議室に集めた理由は何なのだ？」

ミスリルの会議室。今、ここにいるのはメリダ島にいる男性部員が数十名といた。そして、今話していた人はベルファンガ・クルーゾーさん。ソースケ達が所属しているSRTの指揮官をしている。クルーゾーさんの発言で会議室はがやがやとなるが。クルツ君が机を両手で思いつきり叩き、静かにさせる。その表情はとても真剣だった。

「静かにしてくれて助かる。まずは皆に見て貰いたいものがある、これだ」

クルツ君はそう言うと、クルツ君が立つてる後ろに何か映し出された。映し出されていたのはラウラとシャルの姿だった。

「うおおお。何だこの二人。滅茶苦茶かわいいんだけど」

「やべ、あの金髪の子に惚れちゃった！！」

「俺はあのオッドアイの子だ。ってかマジでかわええ！！」

会議室が一気に騒がしくなった。二人の映像を見て男どもが興奮しまくっていた。

「・・・軍曹。この二人の少女が一体俺達に何が関係あるのだ？」

クルーゾ さんは今にもキレそうな表情をしていた。この人は真面目な人だからな

「この二人が来週、ライブをすることになった。そこでお前達にこの二人の衣装を考えて欲しい、何か言い案はあるか？」

「俺は巫女さんを推薦するぜ！！」

「いや、この二人のレベルならメイドだろう」

「バカ言つな。ここはセーラー服だろ！！」

「スク水！！これ以外無いだろ！！」

「ネコミミ！！」

「可愛いは正義！！」

「シャルロットちゃん、マジ天使！！」

「ラウラちゃんは俺の嫁だ！！」

・・・なんだこの部隊。何でこんなに真剣に大声で言い合ってるんだこの男共。しかも、何か変な事を言ってる奴もいるし。何かもうこの部隊色々な意味でダメだな・・・男共が。ただ、その中でクル

ーゾ　さんだけが頭を抱えている。ドンマイ……

そんなこんな日は過ぎ去って行く。その中で織斑先生が二人がライブに出る事を知った時、私にこう言っていた。

「本来なら。国際的に色々とまずいのだが……デユノアはともかく、あのボーデヴィツヒが歌をな……よし。私は何も言わん」

そう言うだけだったが、何処か楽しそうな織斑先生だった。

そして、ライブ当日。本来、来る筈だったグループが来れないと聞いたファンのキャンセルはかなりあったが、二人に頼んだ女性の相沢さんが二人の写真を乗せた所、別の所でチケットが売れたようだった。その中には織斑君達も入っていたようだ。ちなみに、私も陣高の恭子や瑞樹、お蓮さんや風間君達も誘っている。

「ふう、何とか間に合ったぜ。これが二人の衣装だぜ」

クルツ君が楽屋にやってきた。その手には二人の衣装らしきものがあった。衣装を渡された二人は早速更衣室で着替えて戻ってくる。

「こ、これを着て歌うの・・・」

「は、恥ずかしいぞこれは・・・」

二人の格好は何故かセーラー服とメイド服が融合したようなものだった。それプラス、ラウラにはウサミミ、シャルにはイヌミミが装着されていた。正直、滅茶苦茶可愛い。

「どうだソースケ。俺達が結束して出来た衣装は？」

「わからんが。似合ってると思うぞ」

「ソースケがそう言うなんて珍しいじゃない。でも、確かに似合ってるわね」

似合ってると言われた二人はあたふたとする。

「さてと、そろそろ始まるわね。頑張んなさい」

「俺達は観客で応援してるからな」

「ああ。頑張れ」

そう言いながら私達は相沢さんに任せて観客席に行った。その観客

席と言うと、見事に満員だった。確か、このライブ会場千人は入って言ってたような・・・

私達三人は自分の席に座る。周りには篤、セシリア、鈴、それに恭子や瑞樹、お蓮さんがいた。一応、ここに来る前に紹介しておいたから今はそれなりに会話をしていた。

ソースケ達は織斑君の所に座り、近くには風間君や小野Dもいる。始まるまでの間、それぞれ話しながら待ち。開演の時間になった。

すると、会場内に音楽が流れ始め、最初に現れたのはラウラだった。ラウラが現れた瞬間、会場内のボルテージが一気に上がった。

「私の歌を聞け!!」

「うおおおお!!」

ラウラが歌い始めるといよいよとライブって感じになってきた。ラウラはステージ上を踊りながら歌っているって、練習のときはそんな事してなかったわよね。てことはあれはアドリブですか？

「皆来てくれてありがとう」

ラウラが最初に歌ったのは” 射手座午後九時 D o n t b e l

a t e”、歌い終わるとラウラが会場の皆に感謝の言葉を書いて次の歌に入る。

「宿命にはりつけられた北極星が燃えている、君をかきむしって濁らせた、なのに、可憐に笑うところ好きだったよ」

ラウラが”ノーザンクロス”を歌い終わると一旦引き、その代わりにシャルが現れた。

「きゃああああ」

うわあ。シャルがあのでセリフを言うとランカと違ったベクトルで破壊力あるわね。このライブ、私最初は殆ど男の人が来るものだと思っただけ、見た感じ五対五。いや、女性の方が多いかもしれない。

シャルがランカのお決まりポーズをとった時の会場はヤバかった。確かシャルはランカにあったことが無い筈なのに、私が教えただけであれだけの事を・・・私には無理ね、絶対に。

シャルは”星間飛行”を歌い終える続けて”ダイヤモンドクレバス”を歌う。もう会場のボルテージは天元突破してるわよね。隣の恭子やあの筈も興奮しているのだから・・・
それから二人は交互に現れながら色んな歌を歌って行く。そして二

人が一緒にステージに現れて”ライオン”を歌いだした。

本当に凄いわよねあの二人。もう、歌手になっちゃえばいいんじゃないって思った私だった。

「皆、今日はありがとう」

「私達の歌を最後まで聞いてくれて本当に感謝するぞ」

「でも、もう時間になってきたからこれで最後です」

シャルが最後と言うと会場が残念そうにしていたが、最後の歌を聞きたくてすぐにテンションが戻る。

「それでは行くぞ」

「最後の歌、トライアングラー」

すると、ステージを照らすライトが暗くなり。

二人の最後の歌が始まる。そして、歌が歌い終わると二人は会場の皆に挨拶をしてステージから去って行く。少しして会場アナウンスが流れ、終わりを示していく。私達はそのまま二人がいる楽屋に訪

れたが、そこにいたのは・・・」

「くうくう・・・」

「すやすや・・・」

お互い、頭で支えながら眠っているラウラとシャルがいた。よほど疲れたのだろう、気持ちよく眠っている。その姿をクルツ君が写真を撮っていた。まあ、撮りたい気持ちは分からなくもないわ。だって、とつてもかわいいんだもの」

「おつかれさん。二人とも」

私達は箒達を先に返すとソースケとクルツ君、それにいつの間にか来ていた織斑先生と二人が起きるまで楽屋で待っていた。

第7話・歌を歌うことになりました（後書き）

マクロスFの劇場公開とのもので勢いでやってしまいました。いまではやっちゃったって思っています。後悔はしていません。

歌詞の件で一部の部分を消去しました8/4

次回、タッグチームトーナメント戦？ソースケが、ラウラが、クルツが、セシリアが！！の予定です。

第8話・激戦！！学年別タッグトーナメントその1（前書き）

ISとクロスをしているのならバトルを入れたいなと思いやっちゃん
いました。そして、今回はいろいろと無茶をしています。

第8話・激戦！！学年別タッグトーナメントその1

さて、ラウラとシャルのライブから少し経ったある日のホームルームでの織斑先生の発言から始まる。

「お前達、この前の学年別トーナメントを覚えているか？と言って
も前回は事件で中止になってしまったがな。それが来週、再びお
こなわれることになった、使用はタッグ戦だ」

そう、この発言で私達の戦いが始まってしまふのだった。

「今回もタッグ戦だ。なので、これからの時間はチーム決めの時間
にする。では以上だ」

織斑先生の発言が終わる瞬間に筈、セシリアが織斑君の所に行き、「
一緒に戦うぞ（ますわ）」と言い、織斑君は困った表情になった。
だけど、これじゃあ埒が明かないのでじゃんけんで決める事になっ
た。

そして、じゃんけんでかったのは・・・シャルだった。なぜシャル
？それは二人がジャンケンをする瞬間、素早く乱入、一人勝ちして
しまったのである。シャルが勝った事に納得行かない二人だったが、
織斑君に説得されて渋々納得していく。

あのアホ二人は？と言つと・・・

「宗介、私と組もう。そして目指すのは優勝だ」

「肯定だ」

二人はがっちりと握手をしていた。あそこはほっというおこづ。その後、筭は私と組むことになってのだがセシリアは未だに決まらずホームルームが終わってしまった。

「はあ。タッグトーナメント、どうしたものでしょうか・・・」

私は溜息をつきながら廊下を歩いていきます。前は怪我のせいで出られなかったので今回は一夏さんと一緒に出場をしたかったのですが・・・

「あれ、どうしたんだセシリア。暗い顔をして」

私の目の前に現れたのは日本史の先生をしているロックオン事クルツ先生であった。

「いえ、ちよつと来週のタッグトーナメントの事を考えていたのですわ」

「あゝあれか。確か、一年だけじゃなくて全学年を交えたって奴だな。それがどうした？」

私は一夏さんと組みたかったけど、組めなくて・・・との事をクルツ先生に言われたら笑われた・・・今、この人を刺してもいいですか？

「あはは・・・わりいわりい。それで、ソースケはどうしたんだ？」

「相良さんですか？相良さんはラウラさんと組みましたわ」

私はすぐさま冷静になって言葉を返した。

「何だつて・・・チツ。ソースケの奴とにラウラが・・・」

クルツ先生が急に真剣な表情になった。

「どうかなさいましたの？」

「いや、あの二人が組んだらもう優勝が決まったも当然じゃねえか」

「ど、どうしてですか？」

「俺はソースケの腕を知ってるからな。あいつはASに関しては凄腕だ。それに、ラウラの奴もドイツの軍で訓練受けてたんだろ？ その二人が組んだら想像できるだろ？」

私はあの破天荒な二人が組んで戦う様子を想像して納得してしまう。

「確かにそうですね」

「・・・うし決めた。セシリア、俺と組んでトーナメントに出るぞ」

「えっ。でも先生はISに・・・」

「それは大丈夫だ。俺もこう見えてソースケと同じAS乗りだからな」

私は驚いた。ただの日本史の先生だと思ってたのにまさかAS乗りだなんて。

「でも大丈夫なんですか？先生がでて」

「そこは千冬に相談してみる。その事を踏まえて放課後、アリーナで待ち合わせしよう」

「え、ええ。わかりました」

そう言っつて私はクルツ先生と別れた。そして放課後、クラスの皆は来週のトーナメントに向けて訓練するため殆どの人がアリーナへ向っつて行つた。

それは一夏さんや篤さん、かなめさんやシャルロットさんも例外では無くてもアリーナに向い、そしてそこには・・・

「クルツ先生。どうでしたの？」

「ああ、千冬に『あの二人が組んだらつまんねえだろう。だから俺も参戦するぜ』つて言つたら『確かにそうかもしれない、いいだろう』と簡単にOKももらえたぜ」

「そうですね。では、早速練習を」

「ちよつとまった」

私は早速練習をしようとしたのですが、クルツ先生に止められてしまいましたの。

「今、このまま練習してもソースケ達には勝てねえ」

「なら、どうすると言つのですか？」

「まずはお前のIS”ブルーティアーズ”の改良だ。俺は一度、お前のISの性能を見たんだが一つ問題がある」

「なんですかのそれは？」

「”ブルーティアーズ”のビットを操る時、お前はその操作に集中するだろう。その時、お前自身が動けなる事だ」

私はそれを言われて初めて一夏さんと戦った時を思い出した。

「だから、まずはその点を改良しなくちゃあ・・・あいつらには勝てねえ」

「でも。ISは国家機密の塊ですわ。そうやすやすと改良は出来な
いと思うのですが・・・」

「その事は大丈夫だ。前に言っていたお前に声が凄く似てる奴がい
るって言ったろう？そいつに言っ
て何とかしてもらったぜ」

「そ、そうなんですか」

「それじゃあ。早速整備室に行きますか」

私とクルツさんはアリーナから出て行き、ISを整備する整備室に
向って行きます。

「あれ、セシリアとクルツ先生だ」

「本当だ、どうしたんだろう」

一夏とシャルが二人を目撃し、その横でどうやって戦うか悩んでいるかなめと”紅椿”に乗っている筈がそれに反応する。

「本当だ、何だろうな」

「私は激しく嫌な予感しかしないんですけどね・・・」

「おっ。空いてる空いてる」

私とクルツ先生は整備室に入る。整備室は個人や国家の機密を守るために個別の部屋が幾つもある形になっている。とクルツ先生はその内の一つに入る。

「それじゃあさっきの続きだが。まずはその打開策についてだ」

「それは何なのですか」

「簡単だ。ビットの操作をAIに任せるんだ」

「AI・・・ですか？」

ISは基本、そういうものは搭載したものは存在はしないのだが。だから私は最初は頭に？を浮かべたが、すぐにラウラさんの『チアキ』を思い出した。

「そつだ、ラウラのAIの様にお前もAIを使つんだ」

「でも、AI何て私持ってませんわよ」

「そこは俺が用意しておくさ。これで二つ目の課題は終わりだ。そして、二つ目だ」

「二つ目？」

「それは。俺のASの強化だ、幾らお前のISを強化しても俺のがそのままじゃあ意味が無い」

「そう言えば、クルツ先生のASって何なんですか」

「今から見せてやるぜ。ユーカリ」

そう言うとクルツ先生は黒いロボットに包まれていった。

「これが俺のAS”M9ガンズバック”だ。もういいぞユーカリ」

『りょうかい』

クルツ先生はAIに命令すると。いつものクルツ先生に戻って行く。

「で、今喋ったのは俺のAIのユーカリだ。それでな、俺は前々からM9の改良プランを考えていたんだが、お前のISを見て今やるべきだなと思った」

「それはどうしてですか？」

「これだ」

クルツ先生は私に一枚の紙を見せた。そこに書かれてあったのは『ビットによる自身を守備をする武装、その名を”シールドビット”』と書かれていた。

「これは・・・」

「容量はお前のビットと同じ何だが、ASにはビットの技術がねえからいままで実装が出来なかつたんだ。だから、お前のISを改良するついでにシールドビットを作成して来週のトーナメントに使うって事だ」

「それで、私の”ブルーティーズ”のデータを？」

「いや、それは大丈夫だ。必要なのは検証だけだ」

「何故です？」

「それはこれだ」

クルツ先生がモニターを操作する。モニターに映し出されたのは白と青を基調としたロボットだった。

「これはな・・・ソースケの奴に聞いてるかも知れないが俺達昔に異世界に飛ばされちまったんだ。その時、出会った内の一機だ。名前は”ストライクフリーダム”」

異世界の事は前に相良さんに聞いていました。最初は信じられませんでした。さすがのライブの歌が異世界の方の歌だと聞き。本当だと思ったこの頃でしたがまさかここまでとは・・・

「これも、ビットを・・・正確にはドラグーンって言ったな。俺にはコイツや他の機体のデータもあるからそれを参考にする。セシリア、お前にこいつを見せたのは、お前のISをこの”ストライクフリーダム”をベースに改良しようと言う訳だ」

私はこの”ストライクフリーダム”の武装を見た。私と”ブルーティアーズ”と同じ遠隔操作武装ドラグーン、近接にビームサーベル等々まるでSFのような武装だらけです。でも、正直少しワクワクしている自分がここにいますの。

「その表情じゃあOKって事だな」

「ええ。これをベースに改良をお願いいたしますわ」

「了解つと。それじゃあ早速改良でも始めるか、”ストライクブル
ーティアーズ”のな」

「ええ。そうですね」

これから私のISが生まれ変わると思うと私はもうドキドキが収まらないでいる。

そこから私達はM9とストライクブルーティアーズの改良に取り掛かる。最初私は機械になれなくて苦戦をするが、案外コツを掴めると出来てしまう事に気づく。

まずはブルーティアーズのOSの書き換え、OSの書き換えで追加したのは近接格闘のデータ。”ブルーティアーズ”には近接戦闘をする必要が無かったために取り入れる事にしたのだ。次に武装を作るのだが、これに関してはクルツ先生が何とかしてくれると言うので私達はシールドビットの製作に取り掛かる。シールドビットを動かせる段階で何度か”ブルーティアーズ”のビットと動きを検証し、十分な防御力があるかどうかを確認する作業に入った。

シールドビットの製作は二日で完了し。あとは私の改良パーツが届くまで基礎体力を作ることにした。

「よし、まずは体力だ。ISやASも基本、体力が必要だからな」

今、私達がいるのはアリーナ。周りの皆はISに乗って訓練してい

るが、私とクルツ先生は生身でランニングをしている。私達だけか
と思い先を見ると、相良さんとラウラさんも走っていたのだ。

「訓練は走ることが何よりだ」

「これ以外の何をするのだ？」

そう言われて結局四人で延々と走る事になったって……相良さん
とラウラさんの体力異常ですわ、私とクルツ先生はもうへるへるな
のに……

「何あいつら走ってるの？」

私達を見て言う鈴さんがいますけど息が上がってそれどころではな
い私は答えられないのでそのまま走る事にします。と言うか、最近
鈴さん空気になって来てますわよね。

「それを言うな！！何で私だけ出番がないんじゃないじゃああああ」

どんまい、いつか君にも活躍は……あると思うかな？

そうこう言っている内に私の改良パーツが届き、生身の訓練をしながら私達は”ストライクブルーティアーズ”と”M9”の調整をしていた。そして、トーナメント一日前。遂に私とクルツさんの機体が完成したのです。

「何とか間にあつたな」

「そうですね」

私の生まれ変わった愛機”ストライクブルーティアーズ”。元々あつた背中のビッドが四機から六機で合計八機に追加、その他近接武装のビームサーベルを一本ずつ腰にマウントして。更に主武装の”スターライトmk?”も改良してレーザーからビームに変更し、形も大きな物から二丁拳銃の様な形になった”スターライトmk?”になった。簡単に言えば”ストライクフリーダム”の高エネルギービームライフルですわ。

「だが、いきなりぶつつけ本番になっちまうが」

「問題ありませんよ私たちなら」

「そうだな。んじゃあ明日からまたよろしくなセシリア」

「ええ。こちらこそよろしくお願ひしますクルツさん」

私とクルツさんは笑顔で握手をする。こうして明日から始まる戦いの準備が出来ました。

くおまけ

「宗介。お前のレーヴァテイン、中々面白いな。それに私のシュヴァルツエア・レーゲンの改良プランも中々に面白いぞ」

「そうか。そう言ってもらえると考えた甲斐があったな」

「これで、私達の優勝は間違いないな」

「油断はするな。どうやら噂ではクルツもセシリアと組んでトーナメントに出るみたいだからな」

「なるほど。まあそれぐらいではないと齒ごたえが無いからな。では、早速訓練に行こうではないか」

「肯定だ」

この二人もトーナメントに為に色々と準備をしているようだ。一体この二人はトーナメントでどう大暴れをするのか誰も予想は出来ないだろう……

第8話・激戦！！学年別タッグトーナメントその1（後書き）

ブルーティアーズがおかしくなっちゃった。次回ではシュヴァルツツエア・レーゲンの改良も登場しますし。レーヴァテインも原作と違う武装で登場したりと・・・

クルツのデータはあくまで外見から見たり、戦闘データを見ただけの物なのでその機体のトップシークレットの事は書いていませんので。

次回、遂に始まるタッグトーナメント。各々はどうか戦うか！！

第9話・激戦！！学年別タッグトーナメントその2（前書き）

先週のIを見て、ラウラが逆転満塁ホームランをしていた。最後のあれは反則だと思った自分がいた。シャルロットもただけだな。

そして、今回もいろいろと無茶がありますがご了承を・・・

第9話・激戦！！学年別タッグトーナメントその2

そして、トーナメント当日。

「ソースケ、今日は敵同士だからね」

「肯定だ。だが、俺は負けるつもりはない」

「私もだぞかなめ」

「それは、私も同じよ」

この三人は・・・いや、クラス全員戦いが始まる前からやる気MAXのようだった。それは普段そう言った表情を出さない筈でさえ明らかさまに顔に出していた。

しかし、そのクラスの空気の中一人冷静にいる人物がいる、それはセシリアだった。セシリアが冷静な理由は自分のIS”ストライクブルーティアーズ”のイメージトレーニングをしていたからである。セシリアは改良してから一度もISに乗っていないのだ、だから時間がある限り自分の頭の中で動きをイメージしているのだ。だから、それ以外の事には余裕が無いのでそう見えるだけだったりする。

(でも、いくらイメージトレーニングしても実践にならないと分からない物ですわね)

そこでセシリアは一息入れると教室に担任の織斑先生、副担任の山田先生が入ってきたことによりクラスは静かになる。

ホームルームを終えると先生は対戦票を提示した。その数はかなりの物でAグループとBグループに分け、三日間使うと言う大胆な物になった。

クラスの全員はその対戦票を見に黒板の方に行く。ちなみに主要メンバーはこうなった。

Aグループ。宗介・ラウラチーム、かなめ・箒チーム、Bグループ。一夏・シャルロットチーム、セシリア・クルツチーム、鈴・布仏チームと書いてあった。

(まあ。一夏さんと同じグループだなんて。でも、これであの時のリベンジが出来ますわ)

セシリアは自分と同じグループに一夏の名前を見つけると嬉しくなった。恋する少女は自分と同じ所に好きな人の名前があるだけで嬉しくなったりするのだが、セシリアの中には他の事もあった。それは、クラス代表を決める戦いで自分は試合には勝ったが戦いには負けた。これはセシリアの中で深く引っ掛かっていたものだった。

「ふむ、私達の所で問題なのはかなめと箒達のチームだな」

「そうだな。だが、油断せずに行こう」

「了解だ」

宗介とラウラは対戦票を見るとすぐに教室を出て行った。二人が向ったのはお互いの最終チェックをするために整備室だった。

「げえ。セシリアとクルツ先生が同じグループかよ」

「でも、あっちのグループは宗介君とラウラがいるからどっちも変わらないようなきもするんだけど」

「そうだよな。まっ、とりあえず行ける所まで頑張ろうぜ」

「うん」

一夏とシャルロットは対戦票を見ると自分の席に戻り、作戦の最終確認を取る。

「あちゃゝあのアホ二人と同じグループかあ」

「ぼやいても仕方が無いぞかなめ」

「そうねゝとりあえず頑張ろうぞ」

「そうだな」

かなめと篤も対戦票を見ると、教室を出て行く。向う先はアリーナ、ここで最後の練習をするのだろう。他の生徒も同じく最後の練習をしていた。

「さてと、私も準備に取り掛かりましょう」

セシリアも整備室に向う。そこには既にクルツが先に準備をしていた。

「よし。これでいつでも行けるぜ。所でソースケ達はとうだった？」

「相良さん達はAグループ。私達はBグループでしたわよ」

「なるほど。あいつらと当るのは決勝って訳だな」

「ええ・それまで負けるわけには行きませんわよね」

「当然だ。そして勝つぞ、俺達が!!」

「はい!!」

そして、遂に始まったタツグトーナメント。ここIS学園にはいくつかのアリーナがあり、今回はそのすべてを使用して行われるのだ。ルールは一試合三十分、準決勝、決勝は一時間。お互いのシールドエネルギーか、エネルギーが無くなった方。又は、戦闘が不能と見たされた方の負けとなっている。

「ふむ、今回は前みたいなお事にはなりません事を祈ってますよ」

「ええ、前は大変でしたからな・・・」

「そうですね・・・」

アリーナを見渡せるVIP席。ここにはISの色んな関係者がいる、スカウト、企業とお偉い方が見ているのだ。そんな中一人・・・

「ウェーバー軍曹の言っていた事は本当だったとはな」

そう、ミスリルに少佐のアンドレイ・カリーニンである。カリーニンがここにいる理由は簡単に言えばスパイなのだが、本人はIS自体に興味を持っていたのだが、クルツの報告で宗介がここにいと聞きカリーニンはその事にも興味を持ってここにいるのだ。

さて、視点をセシリア・クルツの方に戻そう。今、二人はアリーナの真ん中にいる。そう、これから二人は一回戦なのだ。その相手は・

・

「まさか、一回戦でアンタと戦うなんてね」

凰鈴音と布仏本音のチームであった。鈴は真ん中で腕を組み、のほほんとは相変わらずのんびりとしていた。

「そうですね。そろそろあなたとの決着をつけたいと思っていましたから丁度いいですよ」

「まつ。今回は私が勝つのは目に見えてるけどね、いや、ここで勝たないと私の出番が無くなるから勝たなきゃ行けないのよ」

鈴、本当に必死だな。

「そうですね。でも、私も負ける訳には行きませんから」

対してセシリアは余裕で鈴にそう言う。そして、両チームはアリーナの端に向う。

「んじゃあ初戦だ。思い切って行くぞセシリア」

「了解ですわクルツさん」

そういつてセシリアはIS” ストライクブルーティアーズ”を。クルツはAS” M9ガンズバック”を展開させ。あっちもISを展開させる。

「では行きますわよ”ハロ”」

『セシリア、イクゼ！！イクゼ！！』

セシリアはスタートの合図とともに相手に向って行く。その姿を後ろから見るクルツは滑腔砲を構えて。

「行くぜケルデム。目標を狙い撃つぜ！！」

何か、色んな意味で危ない事を言うクルツだった。

鈴は焦っていた。それはセシリアがいきなり接近してきた事にだ、それに、セシリアのISを見て更に鈴は驚くがすぐにIS” 甲龍”の双天牙月を構える。

「セシリア、アンタ近接戦何か出来るの？」

「どっでしょっね？」

セシリアは右手を腰のマウントの所に移動してビームサーベルの柄を握り、それを振るう瞬間にビームを展開させる。鈴はその武装に驚きながらもとっさに双天牙月で受け止める。

「なっ、何なのよその武装。あんたにそんなもの無かった筈よ」

「何なんでしょうね？」

セシリアひょうひょうとした態度を取りながらはその場から離れると同時にビームサーベルをしまい、ビームライフルを持ちそれを撃つ。

「くっ!!」

鈴はビームを避け、一旦下がりに龍砲を撃つ。

「ハ口、弾道予測を」

『ワカッタ、ワカッタ』

鈴の砲身が見えない攻撃が来るが、セシリアはその弾道予測を済ませると高起動でそれらを全て避ける。この高起動も”ストライクフ

リードラム”を元にしたと思われるが実は違う。これは”ブルーティ
アーズ”の元々のコプセントであり。今回はそれを使用しただけな
のだ。

「一体何なのよ」

それでも、セシリアの動きに納得のいかない鈴だった。

「そろそろあれを使ってみましょう。ハロ」

『フィン・ファンネル、レッツゴー』

セシリアは後ろにある武装”フィン・ファンネルを放つ。何故、ビ
ットの名前が ガンドムの武装になったのか？それはセシリアが展
開したそれを見てほしい。元来のビットは言わばファンネルやドラ
グーンの形に似ていた。しかし、改良した段階でクルツが「自分の
機体と武装の名前が同じってどうよ」と何気ない発言でこの武装に
ついて色々と話し合ったのだ。

そして、その結果。折りたたむとその分、動きやすいとの事で ガ
ンドムフィン・ファンネルと同じように折りたたみ式になったのだ。
操作方法はセシリアには当然、不思議な力など持っていないため前
回と同じフィン・ファンネルも制御で動きを止めてしまう。そこで、
AIによる補助制御を使うことにより展開しながら自身が攻撃や回
避など出来るようにしたのだ。これは”ブルーティアーズ”弱点で
あったビットを展開させている時、自分が動けないのを克服した証
拠でもある。

だが、それを知らない鈴はそれを無視してセシリア目がけて龍砲を放つが……

「残念ですわね」

それを簡単に避けるセシリアはフィン・ファンネルで”甲龍”のシールドエネルギーを徐々に削る。

「ちよつ。のほほんはやく助けなさいよ!」

「ごめ〜んりん〜先にやられちゃったよ〜」

やったのはクルツ。当然と言えば当然の結果だろう。

「そろそろファイナレにしましょう」

セシリアはフィン・ファンネルを戻すと両腰のビームサーベルを持ち、高起動で鈴に接近する。

「こつちだって!」

鈴もセシリアに向けて双天牙月を振るうが、セシリアの右腕のビームサーベルで双天牙月は弾かれ、左腕のビームサーベルをすれ違いざまに振るい”甲龍”のシールドエネルギーを削る。

「クルツさん」

「任せろ、狙い撃つぜ!!」

「えっ、嘘でしょ!!」

セシリアが叫ぶのと同時に滑腔砲をアリーナの端で構えていたクルツが反応して狙い撃つ。まさか、あんな所から攻撃が来るとは思わず鈴は防御をするが、そこで”甲龍”シールドエネルギーはゼロになってしまふ。

「勝者、セシリア・クルツチーム」

「ウェーバー軍曹、まさかこのトーナメントに出ていたとは・・・」

この戦いを見ていたカリーニンは頭を抱えていた。

この日の戦いは鈴が一回戦で負けた以外、皆は順当に勝ち進んでい

る。そして一日目が終わり、明日はグループ代表、準決勝まで行うよていだ。

第9話・激戦！！学年別タッグトーナメントその2（後書き）

いろいろとやっちゃまった。だが、後悔はしていない。セシリアのブルーティアーズを見て最初にストフリ、次に後ろを見たときに ガンドムを想像してしまった自分がいた結果、このような事になってしまいました。

今回は準決勝戦。ラウラ・宗介チームとかなめ・篤チームの戦いとセシリア・クルツチームと一夏・シャルロットチームの戦いの予定です。

そして、段々鈴が空気に・・・

この回が終わったら機体と人物説明を書こうかな・・・

第10話・激戦！！学年別タッグトーナメントその3 準決勝前編（前書き）

最近、ふもっふじゃない・・・でも、このトーナメントが終われば
またふもっふに戻ります。

あと、本当は準決勝の話は一話にまとめたかったのですが、ちょうど区切りがいいかなと思いつに分けることにしました。

今回はラウラの機体が登場します。一体何でしょう・・・

追記・この後の話の内容のため一部大幅に変更しました。変更点は
千冬とマオの会話部分です。4 / 12

第10話・激戦！！学年別タッグトーナメントその3 準決勝前編

さて、次の日。今日は二回戦から準決勝まで決める昨日よりハードな一日である。

ここから少し飛ばして行こう。Aグループの宗介・ラウラチームとかなめ・箒チームは順調に勝ち進み、お互い準決勝進出を決める。

Bグループの方もセシリア・クルツチームと一夏・シャルロットチームが勝ち進み、準決勝に進む。

だが、この四チーム全ては未だに本気を出していない。これからが本当の戦いになる事は誰の目からしても分かる事だった。そして、今から準決勝が行われようとしていた。

「遂に千鳥達と当たったか」

「そうだな。奴ら意外に強いぞ」

宗介とラウラはアリーナの端で反対側のかなめと箒を見る。その二人は……

「箒、ここまで来たんだから勝とう」

「そうだな。ここまで来たんだ、あとは勝つのみだ」

かなめと箒は気合を入れる。そして準決勝の始まりの知らせが流れ

ると、お互いISとASを展開し。審判が合図を鳴らすと同時に四人は飛び出す。

まずは宗介だ。宗介の機体はARX-8”レーバテイン”、”アーバレスト”の後継機でその性能はアーバレストを凌駕している。武装はデモリッションガンの代わりにボクサーに両腰に単分子カッター。それに、後ろ腰に長めの剣を装備している。

次にラウラだ。ラウラのISは”シュバルツエア・レーゲン”を改良した”シュヴァルツエアレーゲン・アルビオン”。元の本体に背中についている緑色の羽”エナジーウイング”。武装も本来持っている大型のレールカノンを外し、スーパーヴァリスが握られて、両腰にはメーザーバイブレーションソードが備え付けられている。

「ラウラのあれって・・・枢木君のランスロット・アルビオンよね」

「何なんだそれは？」

「今は説明は後。とりあえず気をつけて」

対する筈のISは”紅椿”。第四世代型に分けられている。第四世代型に分けられているとはいえ、実際に存在しているのは”紅椿”と”白式”の二体しかないのだ。

かなめは訓練用IS”打鉄”これは量産型でこれらを見てしまうと大分ランクが下がってしまう。しかし、何故かなめはこれで今まで戦えて来たのだ。

「俺は篠ノ之を抑える。お前は千鳥を」

「了解だ」

宗介は筈に向ってボクサーを打つ。散弾銃の弾は名前の通りに散弾している。筈は上空に逃げる。だが、宗介は上空にいる筈をボクサーで再び撃つ、筈は上空で素早く避ける。この繰り返しが続く。

『軍曹。相手が上空にいるとこちらの対応に限られます』

「なら、跳躍でどうにかするぞ」

『ラージャ』

宗介はレーバティンを空高くジャンプさせる。その行為に筈は驚き、宗介はそのまま右腰の単分子カッタを抜き、筈に斬りかかる。

「甘いぞ相良!!」

だが、飛行能力を持たないレーバティンの一直線の攻撃を筈は横に避け、自身の武器、雨月・空裂で斬りかかる。

「甘いのはお前だ篠ノ之!!」

だが、宗介はレーバティンを仰向けにさせ、足を蹴り上げる。最初は蹴りの間合いでは無いのに何故蹴り上げる？と思うが。何とレーバティンの足の裏からナイフが飛び出して来たのだ。

「なっ！！」

箒はそれをギリギリのところまで雨月で斬り払うが、その間に宗介は地面に着地する。

「クロスボーンガンダム」の構想を取り入れておいて正解だったな」

『そのようですな軍曹』

宗介はアマルガムとの戦いの後、暇な時間を使いレーバティンの改良をしていたのだ。それは”クロスボーンガンダム”の隠せる武装は隠すと言うスタンスに宗介は興味を持ち、それをレーバティンに実装したのだ。

この改良を知っているのはミスリルの中でも少なく。テッサ、マデューカス、カーリーニンにクルーゾのみである。

「さてと、こっちも行くぞかなめ」

ラウラはスーパーヴァリスをかなめに実弾の方を撃つ。弾はかなめに向って行くが、かなめは避けようとせず、それをなんと刀で斬ったのだ。

「嘘だろうか？」

「私だってね。伊達に戦場見てきてないわよ」

かなめが刀を鞘にしまいながらこちらに向ってくる。ラウラは牽制の意味を込めてかなめの周りを撃つが、かなめはそれを無視して来るためラウラはスーパーヴァリスを背中に戻すとバイブレーションブレードを持ち、かなめは居合の要領で斬りかかる。

「くっ。中々」

ラウラはかなめの刀を受け止めるが、居合の勢いは凄まじく一旦離れる為にエナジーウイングを展開させて上空に逃げる。

「チアキ、AICは使えるか？」

『使えるが。使つとエナジーウイングやハドロン砲が使えなくなるぞ』

「やはり無理か・・・」

ラウラや先のセシリアの共通の弱点。それはシールドエネルギーの消費である。ラウラの使用している”シュヴァルツエアレーゲン・アルビオン”のエナジーウイングやハドラ砲などはエネルギー消費量が多いのだ。

「なら、これだけで行くしかないな」

ラウラはかなめに向ってエナジーウイングを展開する。高起動で動くラウラにかなめは冷静にその動きを見て。ラウラの斬撃を冷静に対処する。

「まさか、千鳥までもがあれほどの動きをするとは」

この戦いを観客席から見ていた千冬が呟いていた。千冬が観客席にいる理由は自分の弟が準決勝に出る為だ。何だかんだで自分の弟が活躍するのは嬉しい姉であったが、今はかなめが元教え子のラウラの攻撃を凌いでいる事に驚いている。

「でしょう。かなめも結構色んな経験してきたからね」

不意に背後から女性の声が聞こえ。後ろを見る千冬が見たのは。

「お前かマオ」

「久しぶりね千冬」

メリッサ・マオ。ミスリルのSRTの一人で宗介とクルツの仲間
コールサインはウルズ2。ちなみにクルーゾーはウルズ1、クルツ
はウルズ6、宗介はウルズ7である。

「どうしてお前がここに？」

「ちょっとね用事が合ってたね、この学園に」

「……ミスリルなのか？」

なぜ、千冬が傭兵部隊”ミスリル”の事知っているのか……

「まあ。それはそうなんだけどね、何て言うか、”物騒”関係じゃ
ないから安心して」

「そうか」

「それよりも、面白い事になってるじゃん。まさかソースケとかな
めと篇と……まさかラウラが戦ってるなんてね」

「お前は相良を知ってるのか？」

「ソースケもミスリルの一員よ」

「成程、道理で動きが違う訳だ」

千冬は今までの宗介の動きを思い出していた。特に、最初の訓練の時の動きを思い出していた。

「それより、筈もやっぱりここに入学したのね・・・」

「ああ、あのバカが無理やり入れさせたようだが」

「相変わらずのようね東は。ところで・・・なんでラウラまでいるのよ？」

「考えても見るマオ。ラウラは”あの教授”の娘だぞ」

「ああ、納得・・・」

千冬とマオの過去に関係する”あの人物”とはいっただい・・・

「このままではジリ敏だな」

『なら、新装備が使われてはどうか軍曹』

「そつだな・・・アル。ラムダ・ドライバを使用するぞ」

『ラージャ』

宗助は後ろ腰に装備してある新装備の長剣”ディムロス”を抜き、同時にラムダ・ドライバを作動させる。箒はいきなり感じ変わったレーバテインに警戒をする。

「行くぞ！！」

宗介はその場で剣を上にかざし、勢いよく振る。その同時に「斬撃を飛ばす」と言うイメージを強くもつ。すると、斬撃は何とそのまま箒に向って行き、箒はいきなりの事にシールドエネルギーを使って防いでしまう。

『成功の様ですな軍曹』

「そのようだな」

この新装備”ディムロス”は。ラムダ・ドライバのエネルギーを有効活用出来ないものか？と宗介は思い、ミスリルの技術をフルで使い、何度もテストをして昨日ようやく宗介の所に届けられたのだ。だが、このディムロスもまだ試作型なのでムラがかなりあるようだ。

「だが、まだ改良の余地があるな」

宗介はそう言いながらシールドを展開している筈を見る。ここで宗介は”紅椿”も、もしかしたら燃費が悪いのではと予想を立てていた。

「くっ、まさか斬撃を飛ばしてくるとはな。それに・・・まずいな」

筈は”紅椿”の燃費の悪さを実感していた。さらに、こちらが攻撃をすれば避けられ、自分が上空に逃げると攻撃をあまりしてこなくなる。こうなると、エネルギー先に切れるのは自分だと思っていた。

「なら、あれを使うか」

筈は目を瞑り、集中をする。

「・・・絢爛舞踏起動!!」

すると、”紅椿は”から黄金色の粒子が方出され。次の瞬間、瞬間移動したかのような動きで宗介に向かって行く。

『軍曹！！』

「何だあれは！！」

宗介は箒の異変に気付いた瞬間、いつの間にか目の前にいる箒に驚き。斬撃が来るが、ラムダ・ドライバでの「守る」というイメージで斬撃を防いで後ろに下がる。

「はああ」

それでも箒の攻撃は止まらない。宗介は一旦後方に下がるためボクサーを地面に打ち、砂埃を巻き上げその内に後ろに下がる。しかし、その時……

「その行動は読めてたぞ」

箒が目の前にいた。宗介は「守る」と言うイメージを思う時間が無く、手にしていたディムロスで裁くが、ディムロスを弾かれてしまう。

「貰ったぞ」

箒はトドメと言わんばかりに雨月を振るうが、宗介はとっさに箒の腕を掴み投げ飛ばした。

「戦場では油断は命取りだぞ」

宗介はそのまま単分子カッタ を手にして箒に接近する。

「まだまだあ」

箒もすぐに体勢を整えて雨月・空裂を構える。

バキン！！

金属が折れた音がする。この音を生み出したのは宗介の単分子カッタ が折れた音だった。

「まずいな、今でもう単分子カッタ が無い。残りの武装をチエツクしてくれ」

『残りの武装は頭部の機関銃、ダガーが二本、新装備がまだ未使用です。あと、ラムダ・ドライバの稼働時間もそろそろ限界です』

「了解だ」

宗介は”紅椿”を見る。こっちももう武装が無い状態にエネルギーがそろそろ切れそうにある。しかし、あつちは依然”絢爛舞踏”のお蔭で最小の力で最大限の力を発揮している。このままでは負けると思う宗介だった。

「まるで、レナードが使っていた機体だな。いや、攻撃が見える分まだ目の前のアレの方が戦いやすいな」

『軍曹。”紅椿”は使用上、色々と問題があります。あのチート野郎とは一緒にしない方がよろしいかと』

「そうだな・・・おしゃべりはここまでだ」

一方、ラウラとかなめはと言つと・・・

『そろそろ決めてやれよ』

「そうだな」

ほぼ、決着が付こうとした。中盤まではかなめがやや押していたが

ここでISの性能が出てきてしまう。ラウラはドイツの専用機に改良を加えている”シュヴァルツエアレーゲン・アルビオン。対してかなめは訓練機の”打鉄”、性能差は歴然であった。これで戦ってきたかなめは本当に凄いと思う。

ラウラはスーパーヴァリスでハドロン砲をかなめ手前に撃ち、砂埃を巻き上げる。

「そんな手には」

かなめはそのまま前進をして影がある方にラウラがいると思いつりかかるが、ラウラはそこにはいなかった。そこにあったのは・・・

「銃・・・」

「残念だったな」

ワイヤーで釣らせていたスーパーヴァリスだった。ラウラはハドロン砲を打った瞬間、スーパーヴァリスにワイヤーを巻きつかせ、かなめが接近する瞬間に左に大きく旋回、かなめがスーパーヴァリスがある所を斬った後にかなめの背後に現れたのだ。

「チェックメイトだな、かなめ」

「あゝあ。やっぱり専用機には勝てなかったか」

二人は地上に降りて、かなめはISを解除する。

「だが、お前が専用機を持っていたら・・・こっちがやられていたぞ」

「そうかね」

「そうだぞ。・・・さてと、宗介はどうなっている」

ラウラは反対方面で戦っている宗介と箒の方を見る。丁度宗介がデ
イムロスを弾かれる所だった。

196

「宗介、こっちは終わったぞ」

「そうか、こちらはかなりまずい」

宗介はこちらを警戒している箒から視線をずらさずに通信を受ける。

「手伝おうか？」

「本来ならそうしてほしいが・・・ここは俺がやる」

「そうか。なら・・・勝てよ」

「肯定だ」

宗介は通信を切り、再度武装を確認する。

(こっちの武装はダガー二本に”アレ”のみ・・・ここは一か八かやるしかないな)

宗介は遂に動き出した。箒も構えを解かずに宗介の動きを見極めようとする。

「この攻撃ターンで決められなければ俺の負け・・・だが、分の悪い掛けは嫌いじゃない!!」

レーバティンの手には何も持っていない。箒はもうやけになったと思いきやそのまま斬りかかるが。

「かかったな・・・」

宗介はレーバティンの手を両腰の少し下あたりに持っていき、勢い

よく振り上げる。

「なっ、くっ!!」

次の瞬間、箒の左腕に痛みがはしり、空裂を落としてしまう。箒は痛みをこらえて後ろに下がりがながら宗介を見る。そこには先ほどは持っていなかった鞭見たいのが手に持っていた。

「その行動も読めていたぞ」

宗介は今度、レーバティンの前腰の所からアンカーを発射させる。箒は自分に向けられると思い上空に逃げるが、アンカーは箒の方では無く……

「だから、その動きは想定済みだ」

先ほど弾かれたディムロスの方に向って行き、ディムロスの柄にアンカーが掴む。そして、宗介はそのままレーバティンの体を思いっきり回してアンカーに掴まっているディムロスを上空にいる箒に叩きつける。箒はこの予想外な行動にとっさの反応が取れずに雨月で防ぐが、ワイヤーが絡まりそのまま地上に落下してしまう。

「くそ〜ほどけぬ」

箒はワイヤーを解こうとしているが、宗介がそんな隙を逃すはずもなく。足の裏にあるダガーを地面に刺し、それを手にして箒に向う。

「これで終わりだ」

「くっ・・・私の負けだ」

宗介はダガーを箒の首に突き付け。箒は負けを認める。

「それにしても、強い相良は」

「いや。篠ノ之、お前は予想外に手ごわかったぞ。この攻撃が失敗していたら俺が負けていた」

実際に、ラムダ・ドライバを使用しすぎてもうエネルギーが残ってはいなかったのだ。

「そうか、かなめもやられてしまったみたいだな。決勝進出おめでとう、優勝てくれよ」

「肯定だ。それよりも腕の傷は大丈夫か？」

「これぐらいどうってことはないさ」

宗介は笥の左腕を見て言うが、笥は何ともないように言う。

「勝者。ラウラ・相良チーム!!」

審判がコールして準決勝第一試合は宗介・ラウラチーム勝利で幕を閉じた。

「宗介、見ていてこちらがハラハラしたぞ」

「すまない、篠ノ之が予想より手ごわかった」

「こっちもかなめに手こずったからな。でも、これで決勝だな」

「ソースケ、ラウラ。次の試合見に行こう」

「そうだな。行くぞ宗介」

かなめが二人を連れて隣のアリーナに向う。隣のアリーナではセシリア・クルツチーム対一夏・シャルロットチーム戦いの準備がされていた。

「ソースケがやっぱ勝ったわね」

「それでも、篠ノ之と千鳥も中々いい動きをしていた」

「確かに、あのソースケが苦戦するなんて珍しいからね。次は千冬のご自慢の弟の一夏の出番でしょう。行か無くていいの？」

「別に自慢な弟ではない・・・勿論行くさ。マオ、お前はどつするんだ？」

「久しぶりの一夏に興味があるから見にいこつかな？」

「なら、移動するぞ」

この後、別の意味で驚く羽目になるマオであった。

第10話・激戦！！学年別タッグトーナメントその3 準決勝前編（後書き）

はい、ラウラの機体はランスロット・アルビオンでした。色的に無理があるかな〜と思ったのですがなんとなくやってみました。そして、ソースはクロスボーンガンダムX1から持ってきました。

なんかもやりたい放題ですね。いまさらか！！

次回は準決勝二回戦の話です。

第11話・激戦！！学年別タッグトーナメントその3 準決勝後編（前書き）

これを入れて後二回でトーナメント編が終わります。

追記・第10話と同じく、千冬とマオの会話を大分変更しました。

4 / 1 2

第11話・激戦！！学年別タッグトーナメントその3 準決勝後編

「ソースケ達が勝ちあがったか」

「どっちらそのようですよね」

準決勝一回戦の結果を整備室で聞いたセシリアとクルツは次の戦いに向けて準備を・・・終えていた。

「さてと、次は俺たちだ。ここで勝てばソースケ達と当る」

「そうですね。でも、私はこの一戦も重要ですわ」

セシリアは一夏にリベンジをしたくてここまで頑張ってきたのだ。そして、それが次の試合で実現できるのだ。今のセシリアはテンションがかなり高い。

「なら、勝つぞこの戦い」

「はい」

二人は整備室を出て戦場のアリーナに向う。

「一夏、この戦い……」

「分かってる。だが、俺達もそうそう負けてられねえよな」

「そうだね。うん、勝とう」

「そうだな。勝とうぜ」

一夏とシャルは既にアリーナの準備室にいた。そして、この二人もアリーナに出て行くのだ。

「さあ。準決勝第二回戦。その組み合わせはセシリア・クルツチーム対一夏・シャルロットチーム。この二組のうち、決勝に行けるのは一組。さあ、勝つのはどっちだあああ」

ナレーションのテンションが先ほどのより……いや、先の戦いは外は静かだったから今回はうるさいように聞こえる。

そして。両チームがアリーナの端に立つ。

「さあ、行きますわよ”ストライクブルーティアーズ”」

「狙い撃つぜ”ケルディム”」

セシリアとクルツはそれぞれISとAS展開させる。

「あれがセシリアの新しいISとクルツ先生のASか」

「こっちも行こう一夏」

一夏は”白式”、シャルは”ラファール・リヴァルカスタム?”を展開させる。そして、合図がなると同時に三人は前に飛び出した。

「行きますわよー!」

先行したのはセシリア。セシリアはビームライフルで二人を牽制する。

「一夏!」

「おっ!」

一夏とシャルはビームを避けながらセシリアに攻撃をしようとするが。

「おっと。俺の事を忘れてるんじゃないやねえか？」

クルツの狙撃で二人は攻撃のタイミングを逃した。

「そこですわー!!」

その隙にセシリアはビームサーベルを抜くと一夏に斬りかかる。

「一夏」

「おっと、行かせねえぜ！」

シャルが一夏の援護に行こうとするが、クルツが何かでシャルの進行を防いだ。

「今回からコイツの出番なんだよな、このシールドビットの。そして、シャルロット。当面の相手はこの俺だぜ」

「くっ!!」

シャルは自分のISの能力、ラビット・スイッチ高速切替で素早く武装を出しながら攻撃するが、全てクルツのシールドビットに防がれてしまう。

「調子はいいなユーカリ」

『あつたり前よ。ついでにセシリアの所にも二機維持させるわよ』

「助かるぜ」

クルツは会話をしながら走り、シャルをなるべく一夏から遠ざけ尚且つ援護に行かせないようにシールドビットで誘導させている。

「はあああ」

「くっ!」

セシリアと一夏は空中でビームサーベルと雪片二型を激しくぶついていた。

「まさか、セシリアが格闘戦をやるとはな」

「このISをフル活用するには近接戦も使いこなさなければなりませんわ」

「だが、俺だって相良との特訓を受けて来たんだ。ここで簡単に負けられっかよ」

「それは私ですわ」

「夏はここで”白式”を”雪羅”にしようと考えたが、あれはエネルギー消費が半端なくとも一時間戦えきれないと思い、そのまま雪片二型を構える。」

「あら、”雪羅”にしないんですか？」

「ああ。最後まで戦いたいんでな」

そう言うと一夏はセシリアに斬りかかり、セシリアはそれを受け止める。

「そらそら。どんどん行くぜ!!」

クルツはユーカリにシールドビットの制御を任せているので目の前の事にだけ集中している。シャルはどうにかして“動いていない”クルツに攻撃を当てたいところだが。シールドビットに全て先回りされ、全く攻撃が通らないのだ。さらに、その後ろから正確無比な狙撃がやってくる。

幾ら素早く動いてもクルツは攻撃を当てて来る。正直、シャルのシールドエネルギーは半分以下になって来ている。

「な、なんなのクルツ先生って。こっちが素早く動いているのに全部当てて来るなんて」

シャルはクルツの狙撃能力に恐怖を抱いている。まあ、クルツもあの異世界での戦いを経験しているのだ。空中の敵に対しての対抗策なんて持っていて当然だろう。

「さてと、まだまだ時間稼がせてもらっせ」

「やっぱりビームサーベルではきついですわよね。ハ口、他の武装は？」

『キケンキケン。シヨウシタライテノオモウツボ』

「ですわよね」

セシリアと一夏、この戦いはセシリアが苦戦を強いられている。その訳は一夏のISの能力”零落白夜”。効果は対象のエネルギーを全て消滅、または相手のシールドバリアを切り裂く恐ろしい能力を持っている。もっとも、セシリアにとって恐ろしいのは一番目の能力。そう、セシリアの武装は全てビーム・・・エネルギー系の武装で実弾や実剣などは装備されていないのだ。

なので、ビームライフルやフィン・ファンネルといったエネルギー系の武装が使えないのだ。

「でも、今回はこれだけで行きますわよ」

『セシリアトツゲキ、トツゲキ』

セシリアは左腕にもビームサーベルを抜き、一夏に向かって行く。

「なら俺も。零落白夜起動!!」

”白式”は金色の粒子に包まれ、セシリアを迎え撃つ。

空中で何度も武器が交差する、その度セシリアがパワー負けで押され初めてきたのだ、そして・・・

「しまっ・・・」

左手のビームサーベルを落とし、隙が生まれる。

「貰った!!」

一夏は勝機を感じ、雪片二型をセシリア目掛けて振るう。その時、

一夏は手を握ったり開いたりしていた・・・

「あの馬鹿者が・・・」

その行為を見た千冬がそう呟いた。

「・・・かかりましたわね」

「!?!?!」

一夏はセシリアのその台詞を思い出した、それはクラス代表を決める戦いでなかでセシリアは隠し武器で一夏を追い詰めていたのだ。その事が一瞬で頭によぎる一夏、だが攻撃の手は止められずにそのままセシリアに・・・届かなかった。

そう、セシリアの目の前でクルツが先ほど放っていた二機のシールドビットが受け止めていた。シールドビットは攻撃に耐えられずにヒビが入って行くが。

「この時を待っていたぜ!!」

クルツの滑空砲が一夏の”白式”に直撃。”白式”は零落白夜を使用していたせいでエネルギーが無く。クルツの一撃でエネルギーがゼロになる。

「そうな・・・お前、俺との一対一の戦いで蹴りを付けたかったんじゃないのかよ？」

「生憎、この戦いは”タツグ戦”一人で戦うとは限りませんわよ」

そう言いながらセシリアは一夏から離れ、シャルに向かって行く。

「セシリア。あとはお前が決める」

「了解ですわ」

「セシリア。あまり僕をなめないでよね」

シャルは今の言葉でカチンと来たようで、セシリアに向かって高速切替を使うが。

「いいえ、シャルロットさんにはこれが通用しますのよ。フィン・ファンネル」

『ゴォゴォ』

セシリアの背中にあるフィン・ファンネルが全て射出し、シャルロットにオールレンジ攻撃を仕掛ける。

「えっ、ちよつと何この攻撃!!」

初めてのオールレンジ攻撃に戸惑うシャル。だが、それでも攻撃の手を緩めないセシリアはビームライフルを両手に持ち、フィン・ファンネルを空中に滞空させ。

「これでファイナレですわ。ハロ、ターゲットを」

『ロックオン、ロックオン』

セシリアの行動に嫌な予感がしたシャルはひたすら動き回るが、既にロックオンされ。

「これで、お終いですわ!!」

ビームライフルと六機のフィン・ファンネルの総攻撃。これは元になった”ストライクフリーダム”のパイロット、キラ・ヤマトがやっていたハイマツト・フルバーストを真似したものである。

この猛攻にシャルは避け切れずにシールドエネルギーをで防御、クルツに相当減らされていたので直ぐにエネルギーはゼロになった。

「勝者、セシリア・クルツチーム!!」

アナウンスが響き、これで準決勝が終わりを告げた。

「何なのよあれ？」

「すみませんシャルロットさん」

「あんなの見たこと無いよ僕」

「俺は一度あるが・・・あんなじゃなかったな」

セシリア、一夏、シャルがアリーナの控室で会話をしているとクルツがやってくる。

「どうだった、俺らの作戦は？」

「「作戦？」」

「簡単だ。俺がシャルロットを抑え、その間にセシリアが一夏と一対一を作る。あたかも一対一で決める用に思い込ませてセシリアがお前の隙を作った所で俺が攻撃を防ぎ、その隙にドカンってな」

「じゃあ、あの時武器を落としたのは・・・」

「あれはわざとですね。一夏さんの隙を作るための」

やられた・・・そう思ったシャルロットと一夏であった。

「・・・あのバカ。何やってるの?」

観客席で今の戦いを見ていたマオが呟いた。

「何だ、ウエーバー先生とも知り合いか?」

「あいつも私やソースケと同じよ、ここで教員をしてるって聞いてたけど何で出ているの・・・」

マオはそこで言いかけてあるものを目撃する。それは・・・

「やはりあの二人が勝ちあがってきたな」

「そうだな。とりあえず遠隔操作系の武装に気をつけよう」

「肯定だ」

今の戦いの感想を言い合っていた宗介とラウラであった。いつもの如く宗介の膝の上でラウラがちょこんと乗ってる状態の・・・

「・・・」

「あれはもういつもの光景だ」

マオは自分が知らない間に宗介に何が起きたのか物凄く知りたくなつた瞬間だった。

「ま、まあ。それより千冬。一夏カッコよくなってるじゃないの」

「私から見ればまだまだだ」

「お蔵しい事で。それにしても皆大きくなってるわね」

「そうだな・・・卒業してからもう四年がたってるからな」

「そうね・・・」

そう言いながら懐かしむ千冬とマオであった。

第11話・激戦!! 学年別タッグトーナメントその3 準決勝後編(後書き)

シャルは本当はこんなに弱くはないです。でも、相手がクルツじゃあしょうがないって所もありますね。

一夏の倒し方は・・・これはタッグ戦なのでありかなと書いてて思いました。どうでしたか？

次回は遂に決勝戦。宗介・ラウラチームとセシリア・クルツチームはたして勝つのはどっちだ？

第12話・激戦！！学年別タッグトーナメントその4 決勝（前書き）

この回で戦闘は終わりです。長かった・・・

第12話・激戦！！学年別タッグトーナメントその4 決勝

「遂に決勝だな・・・」

「そうだな。そろそろ飯を食べに行こう」

宗介とラウラは明日の決勝のために自分の機体の最終チェックを済ませ、少し遅い晩御飯を食べる為に学園の食堂に向かう。宗介が何故、遅い時間にIS学園にいるのかと言うと。明日の決勝のため、ラウラと作戦などの最終確認などをするためだ。二人は食堂に着くと、時間は十時を回っていたため食堂は静かだった。二人が頼んだのは生姜焼き定食、テーブルに着くと二人は黙々と食べ始めた。

「よっ、ソースケ」

「なんだ、クルツとセシリアか」

「こんばんわですわ」

黙々食べてる二人の前にクルツとセシリアが現れた。この二人も明日の決戦に向けて最終チェックをしていたのだ。

「おっ、旨そうなの食ってんな。俺もそれにしよ」

「私もそれにいたしますわ」

クルツとセシリアも二人が食べているのと同じ物を頼み、二人が座つて居る所の反対の所に座る。

「ソースケ、明日は負けねえからな」

「それはこちらの台詞だぞクルツ」

「ラウラさん、明日こそ勝たせてもらいますわ」

「いつかのようにまた倒してやるさ・・・それにしても旨いな」

「そうですね。このタレがまた美味しいですわ」

クルツとセシリアが加わった所で四人は明日戦つと言つのに呑気にご飯と一緒に食べていた。

その後、宗介はと言うとラウラに「今日は私達の部屋で泊ると良い」と袖を引っ張られ、部屋でくつろいでいたシャルはいきなり入ってきた宗介にビックリしていた。

「ラウラとそ、宗介君？一体どうしたの？」

「宗介は今日、ここに泊める事になった」

「・・・入？」

シャルがそう言うのも無理はない。女の子の部屋に男を泊めるなんて普通はあまり考えないことだからしょうがないだろう。

「い、いやラウラ。それはちょっとまずいんじゃない？」

「?どこに問題あるのだ」

「それはその・・・女子と男子が同じ部屋で・・・寝るのは・・・」

何を言うのですかあなたは。あなただって一月位一夏と同じ部屋じゃなかったですか。

そして、宗介と言うと。ラウラが持つてるのISMマニュアルを読んでいる、どうやら確認のためにISの基本動作を見ているようだ。

「そ、宗介くん・・・？」

しかも、ラウラのベットの所で仏頂面で呼んでいるのだ。ラウラも宗介の前でASのマニュアル書を読んでいた。

「ってラウラ、話し聞いてた・・・わけないか」

シャルははあくため息をついて諦めて布団に入って寝ようとした。二人はその後黙々とマニュアル書を読み続けていた。

「んじゃ。今日はこん位にしておくかな」

「そうですね。では、私はもう部屋に戻ります」

「おう。明日、頑張ろうぜ」

「はい」

クルツとセシリアは「おやすみ」と言って別れ、自分の部屋に戻ろうとした時……

「クルツ。あんた何やってんの？」

「げっ……マオ。何でお前がここにいるんだよ？」

「私は用事があったてここにきてんの。それよりあんた、何でトーナメントに出てるのよ？」

クルツは大まかな理由をマオに話すと、マオは呆れたように頭に手

を当てて唸るようにしてる。

「はあ。そんな理由で」

「じゃねえとつまんねえだろ」

「確かにね・・・それでクルツ。明日は勝てるの？」

「勝ってやるぜ、いつかの決着をつけてやる」

いつかとは宗介とクルツがミスリルに入る前、戦場で一度戦ったことがあるのだ。この事は後ほどマオに聞かされて事なのだが。

「そう。なら頑張りな」

「おつよ」

そう言ってクルツはマオと別れて自室に戻った。

次の日の朝、シャルは目を覚まし体を伸ばしながら隣のベットを見て硬直した。そう、隣のベットでは宗介とラウラが寝ていた・・・マニキュアル書を手にしながら。

「ああ、昨日読みながら寝ちゃったんだね」

冷静に観察するシャルは二人の姿を見て。

「やっぱりこの二人ってどこか兄妹みたい」

この二人が仲のいい兄妹に見えた。確かに眠ってる二人は・・・ラウラは何か幸せそうな顔をしていた。宗介？宗介はいつも通り、寝ていても表情はあまり変わっていない。

「おっと。そろそろ二人を起こさないよ。起きて二人とも」

シャルによっておこされると二人はパツと顔を洗い、決勝戦の準備をするために部屋をでる二人だった。

「では言ってくる」

「部屋を貸してくれた事に礼御言っ」

「うん。頑張ってたね」

「よう、昨日は眠れたか？」

「ええ、十分に」

「うし、なら行こうか」

「ええ。行きましょう」

クルツとセシリアは廊下で会つと、二人も整備室に準備をしに向かうのだ。

「まさか、私のクラスの生徒同士で決勝をするなんてな」

四人と千冬は今、アリーナの準備室にいる。四人は横に並んで千冬がその前に立つと言う形になっている。

「まあ、ウエーバー先生と相良はともかく・・・お前らのIS、突っ込みたい所が沢山あるが・・・まあいい。だが一つお前達に言っておくことがある」

千冬が一旦言葉を止めて、一回間を開けて・・・

「全力で戦え、以上だ!!」

「了解!!」「」

四人は力強く敬礼をする。何故だろうか？

そう思っている間も四人はそれぞれの所に向かって行った。

「マオ、お前から何か言えばよかったのではないか？」

「私はあの金髪の子は知らないから言えなし。ラウラには何言っても効かないわよ」

「それもそうだな。では、私達も観客席に向かうとするか」

四人がいなくなるのと代わりに入ってきたマオ。少し会話をすると二人は観客席に向かって行った。

「さうて。本日は学年別タッグトーナメント決勝。一体どんな戦いになるのやら」。おくと、アリーナに相良・ラウラチームが現れた
「!!」

アリーナの端にラウラと宗介が現れる。

「でろおおお。レーヴァアアティーン!!」

宗介が叫びながら腕を天高くささげ、指をパチンと弾くと宗介はレ
ーバティンを纏う。

「なら私も、いでよ。シュヴァルツエアレーゲン・アルビオン！」

ラウラも叫びながら自分のESを展開させる。

「おくと、相良選手とラウラ選手が叫んだ」

実況が今にも興奮しそうな口調で言っていた。

「あいつら派手にやりやがって。なら、こっちもいっちょやってや
るか。セシリアー！」

二人は射出口でもう準備を終えていた。そして、セシリアは今出撃
をする所であった。

「セシリア・オルコット。ストライクブルーティアーズ、行きます
わー！」

セシリアは行きよいよく飛び出し、その姿を観戦している人は見な

がら興奮している。

「俺も行くか。ケルディム、行くぜ!!」

クルツも行きよいよアリーナに飛び出し。二人は同じタイミングでアリーナの中央に立つ。

そして、カウントダウンの声援が辺りを響かせ。ゼロになった瞬間、両陣営は同時に飛び出した。

さて、まず最初に動いたのはセシリアだった。セシリアはビームライフルを右手に握らせると、それを宗介とラウラの周りに撃つ。二人は冷静にその攻撃が自分達に向けられたものではないと判断して宗介はボクサーを手に持つ。

「私がセシリアを抑える」

ラウラはエナジーウイングを広げるとセシリアにブレードで攻撃しようとするが、横から攻撃が入りセシリアに向かうことが出来なかった。

「俺がそう簡単にやらせると思ってるのか？」

「クルツ先生か。ならまずはあなたを倒させてもらおう」

「上等じゃねえか！！」

ラウラはクルツにターゲットを変えて突撃をする。

「なら俺がセシリアを抑える。お前はクルツを」

「任された」

ラウラはスーパーヴァリスをクルツに向けて実弾を撃つ。

「へっ、当たんねえよ。ユーカリ」

『りょうか〜い。いっくよ〜これが私の全力全壊』

などと危ない発言をするAIのユーカリ。実際はシールドビットを射出しただけである。

当然の如く、実弾はシールドビットに防がれるが、ラウラはそれをも予想してブレードを手にし、斬りかかる。宗介もセシリアを相手しながら同時にラウラの援護を行う用にボクサーを撃つ。

「こりゃ、ちとやべえかも・・・何てな」

クルツはシールドビットを自分の周りに配置させ、ラウラと宗介の攻撃を防ぎながらセシリアの所に行き、同時にセシリアはフィン・ファンネルを放つ。

「まずい、下がるぞラウラ!!」

「遅いですわ!!」

宗介は嫌な予感がしたのでラウラに下がるように促すが。既にそれは遅く、セシリアは先の戦いで決めたフィン・ファンネル六機とビームライフル二丁によるハイマツトフルバーストが放たれていた。それは凄まじいビームの嵐で観客席はこれで決まりだと思っていた。

「これで、決まりましたわ・・・」

「・・・まだまだ、油断するなセシリア!!」

クルツが叫ぶ。ビームの嵐によってそこらじゅう砂埃が漂っているが、その中心を見つめる二人。そして、砂埃が晴れるとそこにいたのは宗介とラウラだった。その姿は何かのマントを纏っていた。

「一体あれはなんだかなめ？」

「あれって・・・確かABCマントだったっけ。略さないとAnti Beam Coating Mantleだったかしら、なんかあのマントはビームや実弾に有効だとか何とかだったわね」

観客席で等に説明するかなめ。そして、その近くにいる皆は凄いものだなと思っている。実際にABCマントはキンケドウ曰く「五発までは耐えられる」と言っていた。その発言が合ってるかのように宗介とラウラが纏っているABCまんとはボロボロだった。

「ちっ、あのマントか」

「装備して置いて正解だったな」

「だな」

クルツは悪態をつき、セシリアは今の攻撃で大分エネルギーを消費してしまった事に動揺しながら苦い顔をする。

「なら、今度はこっちの番だ」

「援護する」

二人は動揺してるセシリアに攻撃をするため、宗介は跳躍、ラウラはエナジーウイングを広げ上空にいるセシリアに向かう。

「させるかよ!!」

クルツも二人に滑空砲で攻撃するが、それを防いだのは右腕を前に差し出しているラウラだった。差し出している右腕の前にクルツが撃った弾が止まっていた、これはラウラの「IS」シユヴァルツェア・レーゲン”に元々あった能力で、アクティブイナ シャルキヤンセラーの略。ラウラ本人はこれを「停止結界」と言っている。これは簡単に言えば任意の対象を停止させることが出来る物なのであるが、これは集中力が必要で複数の相手には使用できない欠点がある。

「感謝する」

宗介はそのままセシリアに向かって行く。

『このバカヤロウ。いいのか？使っても』

「ああ、では無かったらどちらかがやられていたさ」

すぐさま行動を開始するラウラ。それは、一回止めただけではクルツの攻撃が止まるはずも無く、宗介がセシリアに攻撃するのを避けながら待っているのだ。

「これで決める」

一直線に跳んでいる宗介は単分子カッタを手にしてセシリアに斬りつける、普段のセシリアならば余裕で回避出来たもの、動揺がその判断を鈍らせてしまっていたため宗介はレンジ内に入ってこれたのだ。

「なんの！！」

セシリアはとっさに左手にビームサーベルを抜くと、単分子カッタとの刃とビームの刃がぶつかる。だが、跳んでいるに過ぎない宗介はそのままセシリアから離れる様に落下し、落下しながらクルツに向けてボクサーを撃つ。

「今だラウラ！！」

「待ってたぞ！！」

宗介はクルツにボクサーを撃ちながらラウラに叫び、ラウラはセシリアにスーパーヴァリスの照準を合わせ、ハドロン砲を撃つ。

「セシリア。くっ、間に合わねえ」

クルツも急いでシールドビットをセシリアに向かわせるが間に合わず。ビームがセシリアの”ストライクブルーティアーズ”に向かっていく。

「（ここで負ける。ここでお終いなのですか。いいえ・・・私は最後まで諦めませんわ）ハロ！！」

『ヨッシャ イッター〜』

それはまさに一秒。セシリアにハドロン砲が当る瞬間、”ストライクブルーティアーズ”の背中にあったフィン・ファンネルが一瞬でセシリアの周りを展開して、ピラミッド状に展開するとビームのバリアを張り、ハドロン砲を防いだのだ。

「かなめ。あれは何なの？」

「分からないわよ」

今度は鈴がかなめに聞くが、かなめ自身はあれを見るのは初めてだったため説明が出来なかった。

「まずい!！」

宗介がラウラの所に援護に行こうと跳躍しようとしたが……

「行かせねえぜソースケ」

「くっ……」

クルツが通常装備のライフルを撃ってソースケの行動を妨害する。その間にセシリアは動かない……動けないラウラに向けてフィン・ファンネルをしまいながらビームライフルを撃つ。

「回避はチアキ!？」

『無理だ、エナジーウイングにハドロン砲にAICを使ったんだぞ。もうエネルギーが残って無いぞ』

ラウラはエネルギー残量を見ると20の数値が表示されていた。この数値が0になれば負けになる。そして、あのビームが直撃すれば間違いなくエネルギーはゼロになる。

「チアキ。あれを使うぞ!！」

『……どうなってもいいんだな』

「私はあの時とは違う!!」

『わかったよバカヤロウ』

そしてラウラはあのシステムを発動させ。次の瞬間、ビームがラウラに直撃は・・・していなかった。そう、エネルギーがもうわずかな筈の”シュヴァルツエアレーゲン・アルビオン”はAICを作動させていたのだ。

「何でですか?」

セシリアはラウラに問う。戦い中だと言うのはセシリアも分かっていたが、これはクルツも同じ事で摩訶不思議なことが目の前で起こったのならその理由を知りたがるのは当然の行為だろう。宗介もクルツに離れはするが攻撃はしなかった。

「これは・・・セシリア、お前なら覚えているだろう?VTシステムを」

「っ!!あのシステムですか!?!」

かつて、ラウラはこのシステムを”強制”に発動をしまい。自分自身を取りこまれてしまったことがある。その時は一夏によって救出されたのだが。今回は前見たいな変化は起きなかった。

ラウラは一旦宗助介の所に降り。横に立ちエネルギー残量を見た、そこには見事にエネルギーが回復しているのが分かった。

「でもなぜですか？そのシステムは排除されたと聞きましたわ」

「確かにそうだが・・・わからんだ。ISを改良した時に何故かこのシステムが入っていたのだ」

それは本当の事で、実際に宗介もこのシステムだけは把握していなかったのだ。

「それより戦えるかラウラ？」

「勿論だ」

セシリアは何処か納得がいかない表情でクルツの横に降り立つ。

「セシリア、お前大丈夫なのか？かなりエネルギー消費してるみたいだが」

「もう、キツキツです・・・あら？」

セシリアもエネルギー残量を見る。そこには先ほどより、いや寧ろ戦いが始まる時より多くなっていた。そして、ディスプレイには「蒼の雫」と表記されていた。

「何が何だが分かんねえが。まだ戦えるって事だな」

「どつやらそのようすわ」

クルツは原因は何なのか知りたかったが、向こうもこっちも意味不明なことが起こりすぎた為、あえて無視することにしたのだ。

「私のエネルギーも始める前より上がっているな」

「そうか、ならこのまま攻め続けよう」

「そう・・・何だこれは？」

ラウラは身に覚えのない武装がある事に気づき、それを実態化させてみる。それは一メートル位の折りたたまれている何かだった。

「チアキ、何だこれは？」

『それは、この機体の近接武装の”アロンドイト”だ。この機体ベースになってた奴のゆかりのある武器だ、使いこなせよ』

ベースとはランスロット・アルビオンの事を指している。ランスロットとは歴史の人物の名前でもあり、アーサー王伝記に出て来る人物で円卓の騎士に一人のことである。そのランスロットが持っていたとされている剣がアロンダイトだったのだ。

「ふっ、当然だ」

ラウラは折りたたまれてるアロンダイトを伸ばす。この武装は簡単に言えば実体剣とビームを合わせている大剣、あのデステイニーガンダムの主武装の一つなのだ。

そして、宗介も後ろ腰にあるディムロスを抜くと二人は剣を構える。

「どうやらこっからが第二ラウンドのようだな」

「そのようだな」

クルツとセシリアも自分のライフルを構え、クルツはそう言う。

「VTシステムだと？」

「千冬、あんたあのシステムのこと知ってるの？」

「VTシステム。あれは私や束でも分らんだ」

「束でも？」

「そうだ。しかもVTシステムは謎な所が多い。前にシステムが暴走して大変なことになったのが・・・一体何なのだあれは？」

その事で千冬は疑問に思っていた。それに”ブルーティアーズ”の”蒼い雫”も気になっていた。そもそも”ブルーティアーズ”の意味が蒼い雫なのだ。だが、あれは明らかにシステムの名前の用に見えるし、しかも、同じようにエネルギーが回復しているのだ。もう何が何だか分からなくなってる千冬だった。

「千冬。深く考えすぎちゃだめよ」

「何故だ？」

「だって・・・ソースケやラウラが関係してるんでしょ？だってらもう諦めなさい」

「そのようだな」

マオに言われて考える事をやめる千冬。何だかんだでこの話にシリアスは続かないのである。

「てああああ」

エネルギーが回復してることもあってラウラはテンションが上がり、アロنداイトを振るっていた。

「くっ、これでシールドビットが二機落とされたか。だが、まだまだああ」

クルツも応戦とライフルを撃つ。ラウラは直ぐに反応して上空に逃れるが、そこにはセシリアがビームサーベルを構えて迫っていた。

「ちっ・・・だが」

「遅いですわ。ハロ」

『ソウダゼ、オソイゼ』

ビームサーベルとアロنداイトのビームがぶつかり、お互い押し合いになるがセシリアは直ぐにフィン・ファンネルを射出させ、ラウラを狙う。

だが、フィン・ファンネルが襲ってくる前に地上から砲撃が撃たれ、フィン・ファンネルは二機破壊された。

「なんですの？」

セシリアはラウラから離れ、砲撃が放たれた所を見る。するとそこには重装備、デモリツシヨンガンを構えているレーバティンがいた。

「む……やはり反動が強いな」

『それでも二機は破壊しました軍曹』

「アル、もうこれは使用できん。パージしろ」

『ラージャ』

すると、ガシャン！！と凄い音がしてデモリツシヨンガンが外され、宗介はボクサーを手にクルツの方に向かうが、セシリアがビームライフルを撃ってきたためそれを回避し、セシリアの方を見る。

「相良さんのお相手は私ですわ、クルツさんはラウラさんを」

「オーケーだ」

クルツはラウラの方に向かい走る。

「さてと歌姫ちゃん。こっからは俺が相手になるぜ」

「クルツ先生か・・・相手にとって不足はない!!」

「そうかい、ユーカリ。シールドビット」

『りょうか』

クルツは自身の周りにシールドビットを展開さ、手にはライフルを持ちラウラに攻撃を仕掛ける。ライフルは凄まじい音を出しながらラウラへと放たれるが、やはりライフルで対空の敵に攻撃を当てるのは難しいく殆ど避けられる。

ラウラの方もスーパーヴァリスの実弾の方を避けながら撃つが、シールドビットによって防がれてしまう。そして二人が危惧していたのは・・・

(そろそろ弾がきれるな)

そう、実弾の残り数のことである。こればかりはエネルギーの様に増える事はなく、クルツとラウラの両者は残りの弾数を攻撃しながらモニターで確認する。

(ちっ。ライフルの弾が残り200切った、滑空砲も3発しかない。これはヤベえな)

(ヴァリスの実弾は残り10発。ハドロン砲は3発、よくて4発か。無駄使いは出来んな)

二人は戦いながら自分の状況を確認すると共にもう一つの事を確認する、それはこの試合の残り時間であった。決勝戦は一時開設けられているが、今は何と五十分を経過していたのだ。このままでも時間切れでどちらかの被弾率が少ない方が勝利するのだが、二人は・
・いや、四人はちゃんと蹴りを付けたいのだろう。
クルツとラウラは時間を見るとお互い会話を始まる。

「このままじゃ時間が来ちゃう」

「そうだななら・・・」

「ここからは小細工なしだ」

すると、ラウラは左右の腰にあったブレードをシールドビットに投げ、二機のシールドビットを壊すがクルツはそれを気にすることはなくライフルを撃つ。撃ち方は先ほどまでの弾数を気にした撃ち方では無く、目の前の敵を全力で倒すために撃っている。
ライフルの弾をかくぐるラウラであったが、やはり被弾は避けられず徐々にエネルギーを奪われ、スーパーヴァリスに被弾してしま
うが、すかさずアロンドイトを握りクルツに斬りかかる。

「ちっ、弾が切れた」

そして、クルツは弾が切れたライフルを捨てると滑空砲を撃とうするが、既にラウラがアロンドイトの間合いに入っていた。

「貰った!!」

「くっ!!」

クルツはとっさにM9で前に飛び込むが、滑空砲が破壊されてしまった。クルツはそれでも直ぐにM9を立たせ、直ぐに装備してあった単分子カッターを手にする。

「いてて。しかも、こりゃヤベえな」

そう言いながら構えるクルツ、ラウラもアロンドイトを構える。両者の間に少しの時間が流れ、同時に動き出す。

「これで!!」

ラウラはアロンドイトを上から振りおろす、クルツはそれを横に避け単分子カッターをラウラに突き刺す。

「やっぱだめか」

だが、シールドバリアーに阻まれてしまい、その隙にラウラはアロ

ンダイトを横振りをする。クルツはそれを単分子カッターで受け止めるながら押されないようにM9を踏ん張らせていた。

「くっそ……きついぜ……」

「それは……こっちもだ……」

そして、両者はそのまま武器を滑らせ、クルツはをそのまま相手に突き刺し、ラウラはそれを無視して横なぎに払う。ラウラはバリアーを破られ、自分の一部に刃が刺さり、クルツはM9本体を横一文字に斬られ、クルツ本人が外から見えてしまっていた。そして両者、その場で動かなくなる。

「エネルギー切れか……」

「私は駆動部分が損傷してしまったようだな」

二人はそう言いながら戦闘不能を知らせ、生身でその場に出てきた。そして二人が見たものは”ストライクブルーティアーズ”のビームを両手で押さえているレーバティンの姿があった。

少し時間を遡り、宗介とセシリアはと言うと。セシリアは上空から

射撃をして、宗介はそれを避けるといった図式になっていた。

『軍曹、このままでは』

「分かっている」

そう言いつつも既にボクサーの弾が切れてしまい、武器も近接しかない。遠くからの攻撃と言えばディムロスをラムダ・ドライバーに通せば遠距離攻撃ができるが、それをすると防御が出来なくなるのでその考えはなかった。

「まずは、あの遠隔武装をどうにかするしかない。一か八かだ、これが失敗したら唯の的になるな・・・」

宗介は跳躍で空高く跳びあがる。

「それでは的になるだけですわ」

セシリアは勿論、残っているフィン・ファンネルを宗介に放つ。フィン・ファンネルは宗介の周りを囲い、いまこの瞬間攻撃をしようとするが。

「今だ!!」

宗介はレーバティンを仰向けにさせ、その反動で足から二本のダガーを二機のフィン・ファンネルに刺し、すぐさま両手に単分子カタを握りそれを投げる。宗介の周りが一瞬で爆発を起こした。一瞬でフィン・ファンネルを破壊した宗介は腕からワイヤーを出し、それを”ストライクブルーティーズ2の足に絡ませ、それを起点にセシリアに接近する。

「私にはまだ、これがあるのですよ」

セシリアは左右の腰から残しておいたミサイル搭載のBT兵器を近づけてきた宗介目がけて撃つ。

「アル!!」

『ラージャ』

宗介は両手をミサイルに向けて差出し、同時にラムダ・ドライバーを「守る」イメージをしながら展開してミサイルを防ぐが。爆風でワイヤーが壊れて宗介はそのまま地面に落下する。

「まさか、あれをこの距離で、だけど今なら!!」

セシリアは両手に握ってるビームライフルを連結させ、スターライ
トmk?ににさせるとその照準を落下中のレーバティンに向けて引
き金を引く。

『軍曹!?!』

「くっ!?!」

セシリアから放たれた砲撃を再びラムダ・ドライバーを両手に展開
して防ぐが、そのままレーバティンごと押され地面に足が着く。

「まずい!?!このままではエネルギーが」

このままでは負ける、そう思った宗介だが。急にセシリアからの砲
撃が止んだのだ。そう、セシリアのエネルギーにも遂に限界がきた
のだ。

「後少しでしたのに・・・」

飛行が維持できなと感じたセシリアが取った行動は・・・

「ハ口、残りのエネルギーを推進とビームサーベルに回して」

『オツケーセシリアトツゲキ、トツゲキ』

すると、セシリアはビームサーベルを手にして宗介の方に突撃していく。まさに、最後の攻撃である。

宗介も残りエネルギーを考慮して、この攻撃で決めようとディムロスを握り跳んだ。

「行けセシリアアアア」

「決める宗介えええ」

すでに戦い終わってる二人が同時に叫んだのだ。

「私が・・・」

「俺が・・・」

お互いの刃が空中で交差し・・・

「勝つー!!」

両者は地面に着地する。

「くっ……」

先に膝を付いたのはセシリアの”ストライクブルーティアーズ”だったが……

「……」

宗介のレーバテインがその場で「プシュー」と音を立てて、中から宗介が現れた。レーバテインノエネルギーがゼロになったのだ。そして、セシリアのエネルギーは15と赤い字で書かれていた。

「私の……勝ちですね」

「俺の負けだ……」

「勝者〱セシリア〱クルツチーム!!」

アナウンスが大声で勝利者の名前をあげた。

その後、学年別トーナメントの閉会式などは行われる予定だったが。

何故かそれは行われずに各々の教室に戻る。

「おめでとうセシリア!」

「凄かったわよセシリア!」

クラスメイトにもみくちやにされているセシリアだった。その光景を見ているかなめ、篤、シャル、一夏は笑っていた。そして、宗介とラウラは。

「済まなかったな」

「いや、でも。負けてはなんだが。中々楽しかったぞ」

「俺もだ」

自分の席でのんびりしていた。

「残念だったわね二人とも」

「千鳥か、そうだな。でも、中々楽しめたぞ」

「私もだぞかなめ」

「まあ、あんたがそう言うんならそれで良いんだけどね」

かなめは満足そうな顔をしている二人にそれ以上は何も言わなかった。

クルツは何処にいるのか言うと、廊下でマオと話している。

「おめでとクルツ」

「まあな。でも、正直決めたのはセシリアだしな」

「それはそうだけど。アンタ本人はソースケと蹴りを付けたかったんじゃないの？」

「あいつとはいつでも出来るだろう？それに、今回の主役は学生だ。俺はその補佐さ」

「言うようになったじゃない。それで、この後はどうするのよ？」

「この後はセシリアと優勝を祝いにランチに出かける予定さ」

「そう。じゃあ私は用事を済ませて来るわね？」

「なあ。その用事ってなんなんだ？」

「それは明日になったら分かるわよ」

そう言いながらマオはクルツから去って行く。

「さてと、セシリアを呼んで来るか」

クルツもセシリアのクラスに向かう。

トーナメント決勝は午前中と言う事で一年生は午後からの授業は・・・
・行われなかった。

セシリアはクルツと優勝を祝いにランチに出かけ、一夏と篤とかなめとシャルと鈴は駅前の方に遊びにいった。そして。宗介とラウラは・・・

「・・・」

「・・・」

草むらで気持ちよさをそつに昼寝をしていた。

「メリッサ。私はもう準備が出来ました」

「こっちもよ」

「二人とも驚きますねきつと」

「そうね・・・反応が楽しみだわ」

第12話・激戦！！学年別タッグトーナメントその4 決勝（後書き）

やっと次からギャグが書けるぜ！！

決勝戦が結構長く？なった感じがしました、戦闘はめちゃくちゃでしたが。

次回は遂にあのひとがIS学園に来ます。

第13話・テッサ襲来！！（前書き）

今回からテッサが登場です。そして最近、自分ようやくGジエネを買ってはまっています。スサノオが強いですな。そんな最近です。

今回は短めです。

第13話・テッサ襲来！！

なんか久しぶりかな私の視点って・・・

あのトーナメントから数日、いつもの生活に？戻った私は駅でソースケを待っている。少しするとソースケは何かを読みながら歩いて来た。

「おはようソースケ。あんた何読んでるの？」

私は心の中で「どうせ武器やらなんやらの本でしょう？」と思つてると、ソースケは私に本のタイトルを見せてくれる。そこには「フルメタル・パニック！！」と書かれていた。って、この本・・・

「千鳥、この小説は凄いで。主人公が俺と同姓同名の”相良宗介”と言う人物なんだ。ちなみに千鳥、君や他の皆も出て来てるぞ。まるで、俺達の話しが小説みたい・・・」

「当たり前でしょうがってかそれ一番私達が読んじゃいけない本でしょうが！！」

・ 駅前で大声で突っ込む私、てか何でこの本がこの世界にあるのよ・・・

学園に行くまでに私もソースケに違う巻を借りて、パラパラ見せて

貰ったが何だか懐かしくなってきた・・・
それにしてもこの小説に出て来る私って話的に一つ年上なんだ。
他に気づいた所は有明の戦いの所までは歳以外の違いはなかった。
それ以上は駅に着いちゃったから直ぐにソースケに返して読めなかつたけど。
教室に入ると私とソースケは自分の席に座る。私は隣の筈が何か読んでいるのに気づく。

「おはよ。珍しいわね筈が小説読んでるなんて」

「かなめか。いや、ラウラが「これは面白いから是非読んでみる！」と言われたから読んで見たのだけれど・・・中々に面白い話しだぞ」

「へえ〜何て言うのその小説？」

「フルメタル・パニック！！と言う奴だ」

その瞬間。私は盛大にずっこけた。

「そう言えば、この小説に相良やかなめが出てるぞ・・・」

「いやもう・・・」

私は手に腰を当てながら立つと自分の席に座る。

よ？
』

宗介『ああ出来る。必ず行く、待ってる』

かなめ『ソースケ・・・大好きよ』

宗介『俺もだ、愛してる』

かなめ『次にあつた時必ずキスしよ、思いっきり。約束だよ』

宗介『ああ、約束する。必ずだ』

「・・・って何じゃこれはあああ！！」

私は思いっきり手にしてあつた本を床に叩きつける。きっと今の私、顔真っ赤よね。それにしても本の中の私はなんちゅう事言ってるのよ。恥ずかしくて爆発しそうだね。

「か、かなめ。それでどうなのだ・・・」

「こんなのするわけ無いでしょう！！」

言いながら私はソースケをチラ見すると、あいつは黙々とこれと呼んでいる。あゝあの顔に一発パンチかましたくなってきた。

「じゃあ、実際はどんなやり取りだったんだ？」

「そうね、確か……」

私はこの本の所と同じ場面を思い出していた。

宗介「済まない千鳥、こんなことになって」

かなめ「……良いんだけどさ。これ絶対に留年よね……」

宗介「それは何とも言えん……。それともう一つ、君に借りてた古典のノートを……。爆発で木端微塵になってしまった」

かなめ「ぬうわにい……。あなた、ノート木端微塵って何よ。あんたはいつもいつも、そのおかげで私は留年ですか？来年もう一度一年ですか？もうやってらんないわよぬわああ」

……。あつ。あの時の私、ストレス溜まりまくってたんだっただわね。

「そ、そうか。それでその後はどうなったんだ？」

「それはだな……」

ここで、いきなりラウラが話しに入ってきた。

「学校で二人はキスをしたぞ」

「嘘、マジ、それ本当にマジ？」

本の中の私は何をやってるのでしょいかと問いただしくなってきた。小説の中の”千鳥かなめ”に対して。

「それで、実際はどうなったんだ？」

「・・・戻ったら早々に神楽坂先生からの説教プラス補習のオンパレードだったわよ」

そのおかげで何とか二年生になれたんだけどね・・・

「そ、それは災難だったなかなめ」

「全くよ・・・」

そこで織斑先生が教室に入ってきた事からクラスの皆は席に戻り、ホームルームが始まった。

「今日は急だがまた転入生だ」

先生の言葉でクラス中がざわめき始める。

「静かにしろ。入ってこい」

織斑先生に言われた後、教室のドアが開かれ。入ってきたのは銀髪の女の子だったって……

「今日から転入でこのクラスの一員になりますテレサ・テストロッサです。テストサって呼んでください」

テストサがIS学園の制服を着て教壇の前で自己紹介をしている。なんでテストサがIS学園の制服を着てるの？
もういろいろ突っ込みたいのを我慢する。それにしても、テストサの目の前に座ってるソースケの表情はが凄い事になってるわね、両隣に座ってる織斑君とラウラが驚いてる位に。

「テストロッサは千鳥や相良と同じ、陣代高校から交流転入生としてやってきてる。まあ、テストロッサはIS学園の所属になるかな。ではテストロッサ、お前の席はあそこだ」

先生が示した所はセシリアの隣の席だった。

「初めまして。私はセシリア・オルコットですわ。何か分からないことがありましたら私にお聞きなさってください」

「ありがとうございますセシリアさん」

うわぁ・・・見事に声が似てるわね。クラスのみんなやあの織斑先生も驚いてる・・・

テッサが来た事によって騒がしい一日に新たな嵐の予感を感じる私だった。

第13話・テッサ襲来!! (後書き)

今回で設定が大分めちやくちやになっちゃいました。ここで世界的な事を言いますと、宗介とかなめは見たとおり原作より一つ年が下です。じゃないと二人の年が一夏より離れすぎてしまうので・・・

後は、ACERでの影響でいろいろと原作と違う方向に。まあ、この小説はシリアスな話をなくしているのでもしかしたら原作では死んでるキャラがふらっと出てくるかもしれません。

ここで一つ言いますと、あるキャラの登場はもう決めていきます。そのキャラは・・・誰でしょう？

今回はテッサが加わった一日が始まります。

第14話・至って平和な一日でした。(前書き)

地震の関係で小説が書けないでいましたが、ようやく投稿出来ました。

実は、地震の少し後にマクロスの映画を見ていました。そのおかげで帰りは8時間のウォーキングをする羽目になりましたが。でも、マクロスは面白かったです。

第14話・至って平和な一日でした。

テッサが席に座り、その後は普通に授業は行われた。まあ、ここまでは普通に第達とも直ぐに仲良くなったわ。

「でも、本当にテッサとセシリアって声が似てるよね？」

「そうでしょシャル。私とソースケが間違えた理由分かったでしょ」

「「そんなに私達の声って似てるのでしょうか？」」

いや、あなた達。そんな不思議そうな顔されても今完全に同じだったじゃない。どっちがどっちなんてレベルじゃなくて完全なシンク口だったわよ。

「凄いな。本当にそっくりだ」

「ああ、私もビックリだ」

「ほら、二人だって言ってるんじゃない。ソースケとラウラも何か言ってるよ」

私は二人の席の方を見る。すると、二人は机の上で何かの作業をしているようだ。

「あんだ達何やってるのよ？」

「俺は先のトーナメントの戦闘データを報告書にまとめてる所だ」

「私は百分の一サイズのM9の足を組み上げていた所だ」

「ソースケは今回は何も無しで良いけどラウラ、あんだ教室でプラモ作るのやめなさい」

全く、ソースケは珍しく普通にしているのかと思ったらラウラがねえ・
・まあ、教室で銃やその他の武器を広げられるよりましか。

「もう・・・いいからちょっと二人共こっちに來なさい」

すると、二人は私達の方に向かって、テッサの席の前に立つと二人は・・・

「お久しぶりです大佐殿」

「お初にお見えます大佐殿」

びしっと敬礼をした。

「ここは学校じゃあああ」

私はハリセンを取り出して二人の頭を叩く。

「痛いぞ千鳥」

「そうだぞかなめ」

「だまらっしやい」

このようなやり取りは何処に行っても変わらないのよね。最初の頃はクラスの皆は私が大声を出すとこっちの方を見てたけど、今じゃ「ああ、またあの二人ね」程度になって来ていた。

「お久しぶりです相良さん。それと・・・」

「ラウラ・ボーデヴィツヒです。階級は少佐であります」

「あんたって少佐だったの？」

ラウラの意外な階級に私を含めて皆驚いている。そこで私は一つの疑問が浮かんだ。

「ソースケ、あんたって確か軍曹よね。それじゃあラウラとかなり階級離れているけど普通に話してるわよね？」

ソースケは階級が上の人には全て敬語で話しているのだ。これはテッサに対しても同じだった。

「そうなのか？私達は普通に話してるがな」

「俺もそうだな。余り気にならなかったな」

これはソースケも少しだけだが、変わってるってことなのかな？

「じゃあ、私の事もテッサって呼んでくださいねボーデヴィッヒさん」

「テッサ、私の事はラウラでいいぞ」

そこで、教室のドアが「ドン！！」と勢いよく開かれた。

「セシリア、遂に出来たぜ俺のケル・・・デイルム」

「ウェーバーさん、こんにちは」

「・・・なんでここにテツサがいるんだ？」

クルツ君がドアの前で私達の方を見て硬直する。すると、クルツ君の頭を何かで叩く人がクルツ君の後ろに現れた。

「クルツ、あんたがそこにいると中に入れないじゃないのよ」

「ま、マオ。何でお前までここにいるんだよ？」

その人物は何とソースケやクルツ君の仲間のマオさんだった。

「ハロ〜かなめ。元気にしてた？」

「え、ええ。まあ元気にしてましたけど」

「マオ、何でお前がここにいる？」

ソースケがマオさんに聞く。もう、他の人は置いてけぼりねと思っただが、織斑君と箒とラウラが何故か驚いている。

「マオさん・・・なのか？」

「マオ姐だと・・・？」

「なんと・・・なんでここにマオが・・・」

「アンタ達はほんつとそのまんま大きくなったわね」

あれ？なんでマオさんこの三人の事知ってるのかな？

「それは・・・」

マオさんが話そうとした瞬間、後ろの扉から鈴が入ってきた。

「あれ、なんでここにいますか」マオ先生」

・・・さてよ。今鈴は何て言った？

「マオ。それはどう言う事だ？」

「それは、テッサがこの学園にいる間の。私もこの学園で教師として働くことになったのよ」

マオさんが呆れたような表情で言うと、ソースケとクルツ君も「はあ」とため息をついた。

「まあ、それはいいわ。それより他の子達は初めてだからここで言うわ。今日から二組の担任になったメリッサ・マオよ」

「鈴、これって・・・」

「私も驚いたわよ。何でも前の担任が海外に転勤になっちゃったから代理だって」

織斑君と鈴がそんな会話をする。

「んじゃ、私は皆の顔を見れた事だし、職員室に戻るとしますか。行くよ、クルツ」

「はっ？ちよ、おま、まてって」

マオさんはそう言ってクルツ君の首元を掴みながら教室から出て行ったのだ。

「何か凄い先生ですわね」

「セシリアもそう思っってか実際にあの人パワフルよ」

「メリッサですからね・・・」

「それよりもその三人、なんでマオさんの事知ってるの？」

「ん？ああ。マオ姉は千冬姉や東さんと同じ大学でゼミが一緒だったんだ。その時に知り合ったんだ」

「ちなみに、ゼミの教授は私のお父さんだったからな」

私はもう何が何だか分からなくなってきた・・・

さて、またもや時間が飛び。今は放課後、放課後は基本ソースケは織斑君達と訓練をしてるんだけど、たまに生徒会室に呼ばれたりする時もあるのよ。

そして、生徒会室にいるのは会長の更識楯無、私、ソースケ、テッサ、織斑君、ラウラ、シャルと何故かここにいる林水先輩の八人がいる。

「ここは初めましてと言わせてもらおう織斑一夏君、ラウラ・ポードヴィツヒ君、シャルロット・デュノア君。私は陣代高校の生徒会長をしている林水敦信だ。よろしく。そしてテストロッサ君は久しぶりですね」

「はあ。よろしく」

センスをカツコ良く広げながら言う林水先輩。センスには「生徒会長」と書かれていた。

名前を呼ばれた三人は軽く頭を下げ、楯無が話し始める。あっ、楯無は私やソースケと同じ年だから私は楯無、ソースケは楯無殿と呼んでる。皆忘れてると思うけど、私達二年生ですよ。今は一年にいるけど……

「今日、皆に来てもらったのは」

「楯無、もったいぶらずに早く言っ」

「もうかなめつたら……そうね。一月後、この学園で学園祭があるのよ。皆にはその案を出してもらおうかなって思ったのよ」

「まあ、一応私とソースケとラウラは生徒会に所属してるしね。それはそうと、何でシャルとテッサまでいるの？」

私はふっと隣にいるシャルとテッサを見た。この二人は生徒会に係は無いのに、特にテッサは。

「僕はラウラが暴走しないか心配で……」

成程、友人として。友人が変な方向に行かないようにしようとしてるのよね。何てえらい子……

「私は楯無さんに呼ばれたからです」

まあ、生徒会長兼ロシア代表ならこれ位の情報は直ぐに手に入れるでしょうから余り驚かないわ。

「それで、林水先輩はどうしてここにいるんですか？」

「それはね。林水君とはほら、ここって陣代高校と近いでしょう？だからたまにこう言った事で相談したりしてるんだよ」

ああ、確かそんな事前に言ってたわよね・・・

「そう言う事だ千鳥君。それで次期生徒会長である君にこの一件を任せてみよつかと思うんだが」

「それは別に良いんですけど・・・」

「では、君には更識君と共に学園祭の指揮を取ってもらおう」

はあ。何だか大変そうになりそう。そう思いながら何だか静かにしているソースケとラウラの方を見ると。二人は椅子に座ってテレビんの「AS特集」を見ていた。

「あんだ達何やつとるんじやああ」

「むっ、すまん千鳥。どうしてもこれは見ておきたかったからな」

「私もだ」

「まあまあかなめ、落ち着いて」

「そうですねさん」

私は二人をシバこうかと動くが、シャルとテッサに止められてしま
う。

「では相良君、ボーディツヒ君。君達二人には当日の警備を任せよ
う」

「了解です会長閣下」

「私もです林水会長」

二人は椅子から立ち上がり林水先輩に敬礼をする。

「ここって学校だよな・・・」

「ここは学校で合ってるわよ織斑君・・・」

「では私は陣代高校に戻るとしよう。ではまた」

「うん。今日もありがとう林水君」

林水先輩は生徒会室を出て行った。そして、残った私達は・・・

「でも、学園祭ですか。私、そう言うの初めてで凄く楽しみです！」

「僕も初めてだよ！」

テッサとシャルは初めての学園祭ワクワクしていた。

「何か結構責任デカいな・・・俺に出来るかな？」

少し心配そうにしている織斑君。うんうん、普通の子はこういう反応が当たり前なのよね。

そして、ソースケとラウラ、それに楯無も椅子に座り再び「AS特集」を見ていた。

「はあ、大丈夫かな・・・」

この三人を見ると何処か不安を感じる私だった。楯無はああ見えて滅茶苦茶の完璧超人なのだがそれが普段見えないのがな・・・
そして、この時の私は一月後にはまさかああなってるとは予想もしていなかった。

結局、話し合いは行われず。最後は皆でドラマの再放送を見ていた。何だかのんびりしてるな。

「さてと、今日は解散かな？」

「いやいや、解散って何もやってないでしょが」

私は軽くハリセンで楯無の頭を叩き、楯無は「てへっ」「て可愛く言った。

「じゃあ、僕は寮に戻るね」

「そうだな。私も戻るとしよう」

「俺もだな」

生徒会室の外で三人はと別れ、私、テッサ、ソースケは下駄箱で靴に履き替え。学校を後にする。

「どうだった？久しぶりの学校は」

「とても楽しいです。陣代高校も個性がありますけどISS学園も個性豊かな人が多くて楽しいです」

いや・・・そのほとんどがソースケのせいで変わっちゃったんだけどね。原作は皆真面目に織斑君ハーレムしてますからね。

「まあいいや。あんたが楽しいって言えばそれで。ねっ、ソースケ」

「肯定だ」

何だかんだで楽しくなりそうな・・・予感を感じながら私達は帰って行った。

「ふふふ、ここにいるんだね。それで準備は出来たのかい？」

「準備もクソ、我々はもうそのような行動はしないと決めたのでは？」

「……は？」

「だから。我々”アマルガム”襲撃とかそう言った戦闘行為はもうやらないと決めたのだ」

「なん……だと？」

「ではな。やるなら一人でやってくれ。レナード・テストロッサ」

「……でも。僕は一人になろうとも行か無ければならない。待っていてくれプリンセス。いや、千鳥かなめ」

そう、ぶつぶつ言っている男、レナード・テストロッサはAS”ベリアル”に乗り、IS学園を目指していた。

さて、原作なら既に死んでいるこの男により波乱が起こりそうな……
・予感

第14話・至って平和な一日でした。(後書き)

最後にあのお兄さんがちよろっとだけ登場しました。彼もまあ、原作よりキャラは壊れる予定ですね。

それと、作者の勢いでISとフルメタ以外のキャラを出そうと思っています。今の所ではOOとマクロスFから出そうと思っています。(でも、ベースはふもっふなので流れは変わりませんが)

次回、レナードの襲撃に会うIS学園。その時、ソースケとラウラは素早く動く。レナード・テストロツサの運命はいかに!!

第15話・テッサの兄が来たようです。(前書き)

当面、登場キャラが少し増える予定です。でも、シリアスにはなりません。

第15話・テッサの兄が来たようです。

テッサが転入して来てから二日が経った放課後。テッサがISに興味を持ったので放課後の訓練を見学している。と言ってもソースケと織斑君とラウラは生身で走ってるんだけどね。箒やシャルはISを展開して訓練しているけど。

「どうした織斑、まだ始めたばかりだろう?」

「そっだぞー夏。ガッツが足らんのではないか?」

「そ・・・そうは言ってもな・・・」

織斑君は息を切らせながら話している。私とテッサはどうしてるかって言うと、箒達の訓練を少し離れた位置で見学している。

「こっつしてISを生身で見るとやっぱり凄いですね」

テッサはデータ上では知っているが、生で見たの初めてのようで興奮している。ちなみに、箒達の訓練と言つのは・・・

「これが私が編み出した必殺技ですわ、ハロ！」

『レッツゴーフィン・ファンネル』

「祈りなさい・・・イノセント・シャイン」

セシリア対他の三人の変則模擬戦だった。今の現状は上空で待機するセシリアの周りにフィン・ファンネルを全機待機させ。それを地上にいる箒達に向けて一斉に撃った。うわ〜えげつない攻撃してるわよねセシリア。

「ちよつ、セシリアソレ反則〜」

「くつ、これは避け切れん」

「僕もちよつと無理〜」

あゝあ、三人が必死になって避けてるよ。セシリア、その後追加攻撃はしないでよね。まだこの話は一週目なんだから。(二週目とかあるのかな?)

「ん・・・何か近付いてくる」

「あつ、本当ですね。あれは・・・」

私とテッサは学園の外から何かに向かってくるのが見えて、その姿を凝視する。だんだん近付いて来るにつれ、その正体がかつてきたってあれって・・・

「ベリアル・・・よね」

私が呟くと走っていたソースケとラウラが急に止まりだした。他の皆も上を見るとベリアルがアリーナ内に侵入して来ていたのだ。

「久しぶりだね千鳥かなめ。そして、我が妹テレサよ・・・」

あの声レナードよねっと思った瞬間、ソースケがノータイムでポイント弾入りのボクサーをベリアルのメインカメラに向けて撃ち、顔の所に赤いポイントがくつつく。

「アル、レーバティンを展開後。素早く”妖精の羽”を展開」

『ラージャ』

ソースケがレーバティンになると、ラムダ・ドライバー・キャンセ

ルの”妖精の羽”を使用する。すると、ベリアルはその場から落下して地面に落ちた。

「素早く敵の力を削ぐ」

すると、今度はラウラがポイント弾入りのマシンガンを地面にひれ伏しているベリアル目がけて容赦なく撃つ。ベリアルの色が赤、青、緑とカラフルになって行く。ここまでおよそ三十秒。

「チアキ、あの機体ハッキング出来るか？」

『私をなめるなよバカヤロウ』

ラウラは携帯端末を手にするとソースケと共にベリアルに向かい、ラウラはハックさせて中にいるレナードを強制排出させる。

「や、やあ久しぶり・・・」

「死ね!!!」

私はとつさにレナードを踏みつけていた。何でか知らないけど体が動いたわ。

「いつつ。手痛い歓迎ではないか。なあ、そう思わないかテツ・・・」

「さっさと死んじゃってください」

続いてテツサが思いつきりレナードを踏みつける、ここまでおよそ一分。侵入してきたレナードはあっさりと気を失っていた。コイツは何がしたかったのかしら・・・

「え、えっと・・・」

状況が飲み込めない幕達がかつちに集まってきた。

「か、かなめ。コイツは一体何なんだ？」

「テツサの兄でアホよ」

「兄なんて一度も思ったこともありませんけどね」

「そ、そうなんですか・・・」

私は一応、レナードについての話をしている間。ソースケとラウラは・・・

「成程、これを応用すればレーバティンも飛行が出来るかもしれん」

「おお〜ならチアキよ。直ぐにコイツのデータを全て集める」

『もう終わったぞ』

ベリアルを好き勝手にいじくりまわしていた。まあいいんだけどね。

「で、侵入者君っていうのは君かな？」

結局。私達はレナードを生徒会長の楯無の所に連行した。今は生徒会室、いるのは私とシャルと鈴、それにテツサがいる。ソースケとラウラ、セシリア、織斑君、箒はベリアルの細かな解析をしに整備室に行ったのだ。

「そつだ。僕は千鳥かなめに会いに来たんだ」

「かなめ〜この人とは〜？」

楯無がニヤつとしながら言ってきたから私は全力で否定した。

「とどろでどつするのこイツは？一応侵入者なのよね」

「鈴ちゃんの言う通り。この侵入者君どうしよっか・・・あっ、良
い事思いついた」

「何か嫌な予感しかないんだけど。一応聞いわ」

「それは・・・侵入者君を私の下に置き、この学園に通うって言う
のはどうかな？」

「ナニッテルノカナこの会長は。こいつをここに置く？どうして？
何故？ホワイ？」

「それに、侵入者君ってアマルガムの幹部だったわよね。さっき、
社長さんから『そちらにレナードと言う男が襲撃に行った。確保次
第、全てを君達に任せる』って言ってたよ」

「はあ？アマルガムって結構所かなり悪い組織な筈よ。それが何
で・・・」

「かなめさん。それなら大丈夫ですよ。今のアマルガムはカリーニ
ンさんによって全て変えられたそうですよ。ちなみに、今のアマル
ガムの社長は昔のアマルガムと全く関係ない人になっていますよ」

もう、私は言葉が出なかった・・・

「くっ、確かに今のアマルガムはカーリーニンによって変えられている。もう僕はどうしようもない、煮るなり焼くなり好きにするとい
い」

「よし、ならたった今からこの私、更識楯無とここにはいないが陣
代高校の生徒会長の林水敦信の下に付き。尚且つ、明日からここに
通うこと」

「・・・」

今度はテッサも声がでなくなつたようだ。

「何か二人が黙ってるんだけど。そいつは結局何処のクラスになる
わけなんですか？」

「うん。これなら一夏君や宗介君と同じ一組にしたいんだけど流
石にもう転入生は入らないでしょう。だから、鈴ちゃんの二組にし
ようかって」

「ちよつ。私のクラスにコイツガ!？」

「ハイ決定。んじゃ私これから校長に話してくるね」

嵐のように生徒会長室から出て行く楯無ををボー然と見つめる三人
そして、世界が破滅した様な表情をする元悪役のボス、レナード・
テスタロツサが取り残された。

そして、その後。生徒会室からなにやら悲鳴が聞こえたような聞こえないような……

「私は何もしてないわよ。やったのはあの二人だから……」

次の日

「はいはい静かにする。今日はこのクラスに転入生が来るわよ。ちなみに男子よ」

「キヤー!!」

二組の女子が、担任のマオが言うと一緒に叫びだす。その中、その転校生の正体を知ってる鈴だけ、いや、マオも何とも言えない表情をしていた。

「あゝもう静かに。んじゃ入って来な」

すると、ドアから銀髪の長い髪、顔はイケメンの男が入ってきた。

「今日からこのクラスに転入になったレナード・テストロッサです。よろしく」

「キヤー。今日まで生きててよかった!!」

「白馬の王子様キター!!」

レナードが髪をかきあげながら自己紹介すると、またもやクラス中の女子が騒ぎ始めた。まあ、レナードは無駄にイケメンだからね。

「はいはい静かに。じゃあレナードは鈴ののなりの席に座りな」

レナードは鈴の隣の席に座る。

「アンタがかなめやテッサに何をして来たかは聞いたけど私は余り気にしないわよ」

ちよつとムスツとした様な表情で鈴がレナードに言う。

「ふっ、まあ。僕も余り過去を気にしない事にしたよ。それよりもこれからを見ようと思ったのさ、昨日からね。やっぱり人は後ろを見ていちゃいけないんだよな・・・」

何か、色々とおかしくなったレナード。鈴はこの時、昨日、二人がレナードに対してやったことを思い出していた。

「あ、あはは。まあそうだよ。人間これからこれから」

「そうだな。僕はこれから未来を見る事にしたよ。そして、ハーレムを作り出す!!」

レナードがしょうも無い事を言いながら立ちあがり、拳をグツと握り締める。

「アホ丸出しね」

クラス中が騒ぐ中、立ちあがったレナードに出席簿で叩くマオ。それを見てやはりアホだなと思う鈴だった。

第15話・テッサの兄が来たようです。（後書き）

セシリアもそろそろ危なくなってきたかも。レナードの二組行きで鈴の出番が増康事ができた！！

そして、次回もまたまたキャラが登場する予定です。

次回、今度は平行世界からの来訪者？はじめましてだな、ボン太君！！

注意。最後のは本編とあまり関係ありません

第16話・黒いボン太君現る（前書き）

書き終わってから気づいた、テッサが出ていない事に。そして、19日私がこのサイトに初投稿して一年が過ぎました。一年たって自分が成長したのかわかりませんが・・・

第16話・黒いボン太君現る

「ようやく届いたか」

うん？ああ、今回は私、ラウラボードヴィツヒがお送りしよう。
今私は前に頼んでおいたシャルのボン太君を受け取った所なのだ。
これはかなり前に頼んでおいたのだが、タッグトーナメントやらなんやらで伸びてしまい、今日やっと届いたのだ。

「ふふふ、前は失敗したからな。今回は台車をちゃんと持ってきておいて正解だな」

自分の部屋の前に着くと、台車から箱を持ちあげて部屋に入る。

「帰ったぞ」

「おかえりつてまた大きいね荷物」

シャルは椅子に座りながら”AS大全”を呼んでいた。

「シャル。遂にお前のボン太君が届いたぞ」

「えっ……あれ本当に頼んだんだ」

私は早速箱を開けてボン太君を組み上げる。シャルのボン太君はI Sと同じカラーリングのオレンジにしてある。

「さあシャル。早速ボン太君の初期設定を試してみろ」

「う、うん」

シャルは椅子から立ち上がると、ボン太君の中に入る。

「え〜と。最初は・・・ここかな？」

シャルは起動キーを触れると、ボン太君の中に明かりが付く。

『やあ、君が俺のマスターかい？俺の名前はアスベルって言うんだ』

シャルは”アスベル”と言う名前に心当たりがあった。それはラウラが今はまってるゲーム”テイルズオブグレイセスf”の主人公の名前だった。

「あ、うん。よろしくアスベル。僕はシャルロット・デュノアって言うんだ」

『わかったシャルロット。これから君には初期設定をしてほしいんだが……』

シャルはAIのアスベルの説明を受けながら設定をこなし、最後の設定を終えるとISと同じ所に収納された。

「設定は出来たようだな」

「うん。でも凄いなボン太君って。乗ってみて初めて思ったよ、早く動かしたいな」

「まあ、明日の放課後にでも動かせば良いだろう。私と宗介も一緒にやってやるぞ」

「ありがとう」

こうしてシャルはボン太君を手に入れた。

次の日

私は教室に行くとボン太君が届いた事を宗介に話した。

「成程わかった。放課後、デュノアの機体が正常に動くか試運転を

含めて俺達も一緒にやればいいんだな」

「ありがとう宗介君」

すると、かなめが私達の所にやってきた。

「また変なこと考えてないでしょうねってこれは今わは良いわ。最近、陣代高校の周辺に黒いボン太君が見かける様になったって話し知ってる？」

「あゝ僕その話ニュースで見たよ。確か、強盗などした犯人を警察より早く倒して捕まえてるボン太君の話でしょ？」

「そうそう。そのボン太君が最近、陣代高校の周りで見抱えるようになったって恭子が言ってたのよ。ソースケ、アンタ何か知らない？」

「いや。俺は初耳だが気になるな・・・」

ふむ、どうやら怪しい空気になってきたな。

「そうだな・・・では。今日早速調査をしてみよう」

「宗介。私もついて行くぞ」

「かまわない。デユノアはどうする？」

「うん、僕もニュースを見てから気になってたからついて行くよ」

今日の放課後の予定は黒いボン太君の調査に変更になった。

「では楯無殿。本日、これから噂になってる黒いボン太君の調査にあたります」

「うん。いや、私も君達にお願いしようとしてたから助かったよ。で、調査に行くのは宗介君とラウラちゃんとかなちゃん、それにシヤルロットちゃんの四人ね。あつ、一応レナード君もいつでも動けるようにしておくから」

「ありがとうございます会長殿」

「でも、そのボン太君かなりの使い手だから。確か、巷で”マスタ―ボン太君”って言われてる位だから」

「何その名前……」

かなめが呆れたような表情をしながら呟いていた。

これで、生徒会の名目で動けるようになった。私達は一旦寮に戻る事にしたのだが、その途中でレナードと鈴に出会った。

「今から噂になつてる黒いボン太君の調査に向かうのかい？」

「まあ、そうだが」

「一つ忠告しておこう。あのボン太君は異常だ。これが言いたかっただけさ」

「お前、何か知ってるのか？」

「教えても良いけど・・・僕は今、鈴に追われててね。それどころじゃないんだ！」

そう言いかけてレナードは走ってその場から離れ、少しした後鈴がやってきた。

「ここにレナードのバカこなかった？」

「あつちに言ったぞ」

「あんがと」

鈴もレナードが逃げた方に走って行った。一体あいつは何をしたんだ？

さて、私、宗介、かなめ、シャルはの四人は私とシャルの部屋の椅子に座っている。まあ、作戦会議だ。

「昨日の目撃情報から推測すると今晚はこの辺りに出現するだろう」

「こらって学校の近くね」

「でも、その間はとうやって身を隠すの？」

「それはボン太君についている”ECS”を使う」

私はシャルにECSの説明をする。その間に宗介とかなめは大まかな動きの確認をしていた。

「まあ。結局はこないだと同じで私が囿になるってことね。その代わり、しっかり守んなさいよ」

「肯定だ、了解だ、まかせて」

さあ、作戦会議が終わり。私達は夜まで部屋でのんびりしていた、主にテイルズをやってな。ちなみに私のお勧めは”テイルズオブグレイセスf”だ。是非一度やってみべきだぞ。

「よし千鳥。そのままそこに待機だ」

「それにしても本当に来るのかな？」

宗介がかなめに言う。今は夜の九時、かなめをひと通りが少ない道に配置し、かなめの右耳に小型インカムを通して会話をしている。

「それは俺にもわからん、だがもう少し待っている」

「はいはい」

そして、私達は自分のボン太君に乗り込んでいる状態だ。もちろん、”ECS”を作動させているから外部からは見えないようになっている。

「でも、本当に出て来るのかな？黒いボン太君って」

「それを確かめに来たのだろうシャル」

「まあ。そうだけどね」

「静かに・・・」

宗介がいきなり私達を黙らせたので私達は直ぐにかなめの方を見た。そこにはかなめがチャラを三人に絡まれてる所だった。

「かなめが。行かなきゃ!!」

シャルがかなめを助けに出ようとした時。

「ふもっふ!!」(待てい!!)

突如、木の上から声がした。そこにいたのは噂になっている”黒いボン太君”が立っていた。

「ふもふもふも。ふもっふ!!」(夜道に男が女に手を出すなど、言語道断!!)

「はあ。なんだてめえ。てか何言ってるのか分かんねえんだよ」

「それに、なに着ぐるみきてんだあコイツ。アタマ悪いんじゃないの?」

「あははは。ウケル!!折角だからあいつから金を奪おうぜ!!」

三人は指をさしながら大笑いしてバカにしている。すると、黒いボン太君は、自分の隠すようにしていた赤いマントを背中に纏める、それが翼の様になる。そして・・・

「ふもっ！！」（ふん！！）

「ぐはあ！！」

男の内の一人が一瞬でやられる。私は黒いボン太君の動きが全く見えなかった。

「宗介。あいつの動き、見えたか・・・」

「辛うじてだが早い。やはり、只者では無いな」

そうこう言っている内に残り二人の男もあついう間にやられていた。

「ふもふもふつもふも。ふもふもふもふもふもふもっふ」（危なかつたなお嬢さん。今の奴らはこの近辺で最近出沒していた窃盗や強盗の常習犯のやつらじゃい）

「あ、ありがとうございます」

「ふも。ふもふもっ・・・」（何、礼を言われるまでは・・・）

その瞬間、私達はECSを解除して黒いボン太君の前に飛び出でて。宗介は直ぐにボクサーを構える。

「ふもふも、ふもっふ!?!」(貴様、何者だ!?)

「ふもふもふも」(やはり隠れておったか)

どうやらこのボン太君は私達の事に気づいていたようで、直ぐに構えに入る。このボン太君は見た感じ、武器などは装備していないのだが、動きからして武術の達人と言ったところだろう。

「ふもふも!?!」(答える!?!)

宗介は黒いボン太君にボクサーを撃つが・・・

「ふもふも!?!」(甘いわ!?!)

黒いボン太君は何処から取り出したのか、ピンク色の布見たいので弾を斬ったのだ。

「シャル、右から攻める。私は左から行く」(ふも、ふもも。ふもふも)

「わかった」(ふもっふ)

私とシャルはそれぞれ近接用の武器を手にして攻撃をするが。

「ふもっふ、ふもっふも!!」(なっちゃんない、なっちゃんないぞ!!)

軽くジャンプで避けられてしまう。それにしても何なのだよあのボン太君は、動きがまるで私達のはとは違うぞあれは。

「これならどうだ」(ふもっふも)

着地した所に宗介がボクサーを撃つ。

「ふ・・・ふもおおふ、ふもっふもおお!!」(ふっ・・・ダ
アアアクネスフィンガアア!!)

何と黒いボン太君は避けもせず、右腕を前に差し出す。すると、手の辺りが黒いオーラで包まれ、弾を押し返してそのまま宗介の所に向かって行く。

「ふもっ!!」(ぐわあ!!)

攻撃がそのまま宗介に向かい。宗介は吹き飛ばされたのだが、その際に宗介は手榴弾を転がす。

「ふもも!!!」(何と!!!)

黒いボン太君が手榴弾の爆発に飲み込まれるが、砂埃が散るとそこには後ろの羽を最初のマントのようにして立っていた。

「ふもも。ふもふもも。ふもふももふも?」(貴様、やりおるな。名は何と言つ?)

「ふももふもつふ。ふもふも?」(相良宗介だ。貴様は?)

「ふもふもふもふもつふ。ふもも、ふももふもふもふもつふふもふもも。ふもつふもふも、ふもつふもふも」(わしの名は東方不敗そして、これはわしの愛機のマスターボン太君じゃい。今日はついでおる、こんなにも腕が立つ奴らに出会えるとは)

黒いボン太君・・・マスターボン太君は私達の方をも見る。どうやら私達の事もあの少ない動きでどれだけの力があるのか把握したのだろう。正直いって・・・勝てないだろう私達は。

「ふも、ふもつふもふもふもつふふもふもふもつふ」(だが、まだまだ甘いわ。もし、リベンジをしたいのならもっと腕を磨いてから再びわしの前に立つのじゃな)

そう言いながらマスターボン太君はその場から立ち去って行った。そして、私達もボン太君から普通の格好に戻った。

「完全に僕達の負けだね」

「そのようだな・・・宗介？」

「いるのだなあのような奴がまだこの時代にも・・・」

「そうだな・・・私達ももつと強くならなければな」

「そうだね」

私達三人はマスターボン太君が言った方向を見つめながらそう思った。

「あゝ私の事忘れてませんか？」

おまけ

「ようやく見つけたわレナード」

「待て鈴、冷静になるんだ」

「私はいつも冷静よ」

「そう言いながら何故双天牙月を出してるんだ？」

「そ・れ・は。私がちよつと居眠りしている間におでこに『出番なし娘』とか書いたからに決まってるじゃない」

「それは済まないで謝ってるだろう。だから許して・・・」

「普通の落書きだったら許してるわよ・・・でもね・・・私が一番気にしてる事をね・・・書いちゃったんだよねレナードは・・・」

「・・・ごめん」

「うん！だから・・・ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」

「アッー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

学園レナードの悲鳴が響き渡った。

第16話・黒いボン太君現る（後書き）

いろいろやっちゃった感が否めなないです。一応マスターボン太君はこれからちよいちよい登場するよていです。いや、登場します！！

次回。違う地球からの訪問者に驚くIS学園。彼らは一体・・・つて何よそれ。またキャラが増えるってことなの。これ以上変なの来ると私突っ込みきれないわよbyかなめ。

第17話・異世界からの訪問者（前書き）

今回の話で登場作品が増えます。いろいろやってしまった感があります。……

本当にやっちゃまったと思っています。

第17話・異世界からの訪問者

俺達は、紛争根絶のために今まで戦ってきた。だが、世界は違う方に動き出し、俺達は次々とやられて行く。その中でも歪んだ元凶のアレハンドロ・コーナーを何とか倒したが、今度はいつぞやのフラッグ乗りの男が現れた。

そして、今日の前にいるMS乗りも男・・・フラッグファイターも俺達のせいで歪められた内の一人だろう。

「私から空を奪ったガンダム。今日こそこの”GNフラッグ”で勝たせてもらう」

「何故そこまで戦う!?!」

「これは、男のプライドだ。私はガンダムにプライドをスタスタにされた。だから私はガンダムに勝ちたいのだ」

「お前一人のエゴで戦いをするのか!?!」

「そつだと言っ!?!」

エクシアの折れたGNソードとGNフラッグと言うMSのビームサーベルがぶつかる。その瞬間、俺達は眩しい光に包まれたのだ・・・

「待ちなさいレナード!!」

「まったら僕は君に何されるか分からないから待たないさ」

「やたら隣が騒がしいわね」

「それは。あの男がまた何かやったのだろう」

私と篤は隣のクラスから聞こえるレナードの悲鳴を聞きながら話している。あいつが来てから四日たった。あいつは直ぐにこの学園に馴染み、織斑君とも仲良くなっていった。そして、同じクラスの鈴にいつもちよっかいを出しては鈴にやられている。本当にあいつは何がしたいんだろう・・・

「アホな兄の事はほっといて、今日はどうしますか？」

「そうね。学園祭の準備もしたいんだけど・・・ソースケ達はどうする?」

「そうだな、一から鍛え直したいところだがそちらも重要だしな」

こないだのマスターボン太君に敗北して以来、ソースケとラウラとシャルは放課後よく訓練するようになった。ボン太君で。よほど悔しかったみたいね。すると、教室に慌ててクルツ君が入ってきた。

「おいソースケ、アリーナから妙な光が発してるぞ」

「分かった。直ぐに向かう」

ソースケとラウラがクルツ君の後に続いて教室を出て行く。

「何か会ったのかな？」

「行ってみるか、シャルはどうする？」

「ラウラと宗介君が心配だから行くよ」

「私も付いて行きますわ」

セシリアも二人について行くと言いだした。

「なら私と篁も行くわ」

「私も行くのか？」

箒を無理やり連れ出し、いつものメンバー（鈴とレナードは不在）はアリーナを指して走った。

「うっ……ここはどこだ。なっ、重力だと？」

俺は次に気が付くと何故か……地面とご対面していた。

「くっ、ガンダム。私に幻覚を見せるとは!!」

フラッグファイターの声が聞こえる。何か言っているが今の俺は事態の確認で手いっぱいだったため無視する。

取り合えず俺は立ちあがると全く見覚えのない場所に立っていた。

「ここはいつたい……ガンダムは？」

俺は慌ててエクシアを探すと、エクシアを後ろに手と膝を着いてい

て、機能停止していた。その横には同じポーズで機能停止していたGNフラッグがあった。

「・・・いったい何なんだ？」

俺は未だに地面とご対面しているフラッグファイターをただ見つめていた。すると、遠くから物音がして来たので俺はパイロットスーツに装着してある拳銃を取ろうとしてある事に気づく。

「俺の服がいつの間に普段着に・・・」

そう、さっきまで戦闘をしていたのだ。当然俺もパイロットスーツを着ていた筈だ。

「ちっ、マズイ」

そうこうしている内に声がだんだん近づいてきた。

「宗介。あれはガンダムと・・・何だろう？」

「ガンダムだが、見たことのない奴だな・・・あそこに誰がいる」

二人は徐々に俺の所に向かってくる。二人とも銃（ペイント弾）を持っている、まずいな。最悪、フラッグファイターを盾にして逃げ出すか・・・

「動くな。生徒会領域内で謎の光を発していたのはお前か？」

「光？多分そうだが・・・」

「目的はなん・・・」

すると、男の背後から緑かかった色のした髪の女性が男にハリセンを後頭部に強打させる。あれは痛いぞ。

「ソースケ、まずは話しあい。ラウラも！」

「わ、わかった」

「ふー。かなめ走るの早えよ」

俺は更に後ろからやってきた男の声に驚く。そう、その声は忘れられることは出来ない。俺の生き方に大きな影響をあたえ・・・死んだあの男。

「ロックオン・・・」

「おっ、なんだか知らねえが俺の魂の名前を一発で当てやがったよこいつ」

「クルツ、知り合いか？」

顔を見ると全然違い。俺は分かっていたが落胆した。

「はあ、それにしてもこれガンダムよね。なんでこれがここにあるのよ?」

「お前、ガンダムを知っているのか？」

「知ってるって言うのかな?でも、私が驚いてるのそこじゃないの。何でこの世界にガンダムがあるのかな?」

は・・・?この世界・・・?

「一つ聞く。ソレスタルビーイングはどうした?AEUは?ユニオ

んは？人革連は？」

「まてまて。そう一気に言われても分からねえよ」

金髪の男が慌てて言う。確かに俺は少し混乱しているようだ、少し落ち着こう。

「ソースケ。これってもしかしなくても」

「ああ、間違いないだろう。おそらく異世界から来たのだろう。それにそのガンダムに見覚えがある。確か名前は”エクシア”だったな。そして、そのパイロットは”刹那・F・セイエイ”と言っていたな」

「何故俺の事を？」

「前に風間に少し話を聞いた。それに、去年あたりに確か劇場版もやっていたと言っていた」

劇場？なんだそれは。

「ということとは・・・はあ。もういいや、ラウラ〜ちょっと・・・」

緑髪の女性が辺りを見渡す。俺も釣られてエクシアの方を見ると、銀髪の少女がエクシアのコックピット乗り込んでいた。

「動く、動くぞこのガンダム!!」

エクシアが空高く飛びあがってしまう。そして、ロックオンの声に似た男はGNフラッグに乗り込んでいた。

「おつ、コイツはスゲえや。M9より動かしやすいぜ」

言いながら空中でエクシアと戦い始める。

「さあ行くぜ、こないだのリターンマッチだらウラ!!」

「返り討ちにしてくれる。見る、これがガンダムだ!!」

俺はただ、事態について行けずに空で戦ってるエクシアとGNフラッグをただ見つめていた。

「なんかごめんね。君のガンダム勝手に使われて」

「いや・・・それより」

「うん。説明してあげる」

俺は女性・・・千鳥かなめに説明を受けた。この世界にはガンダムやMSと言った物は存在しない。だが、その代わりにASとISと言ったものが存在していること。

なら、何でガンダムを知ってるのかと聞いたら「ガンダムってアニメがあるのよ。その新しいシリーズの主人公がどうやら君とあのガンダム見たいなのよ。ソースが言うにはね」と言われた。

俺達がアニメ？と険しい表情をすると「あつ、でも私や隣のソースケなんかは前にも本物のガンダムを見たことがあるからおそらくは平行世界ね」と言われた。

平行世界とは何だと聞いたが、千鳥かなめの説明は俺には余り理解できなかった。

「まあ、要するに。”もし”の事よ」

「成程・・・俺達は戻れるのか？」

「うん。私達の時は戻れたから戻れるんじゃない？」

「私達？お前はこつ言つ事に経験があるのか？」

俺がそう聞くと千鳥かなめは他の異世界でガンダムやそれ以外の機動兵器を見たと言明してくれた。

「おーい。大丈夫かってうおおお」

背格好が俺より少し高めの男がそんな声を出すと、後ろからぞろぞろと人が現れた。見た感じ、全員俺と大して変わらない歳だろう。

「かなめ。これは一体……」

「うん。ガンダムが現れた？」

「それでは分かりませんか？」

千鳥かなめが後から来た奴らに今の現状を説明する。そこでその内の一人、金髪の少女がフラッグファイターに近付く。

「ねえ。この人大丈夫なのかな？」

「ちょっとヤバそうだな。宗介、シャル。起こすの手伝ってくれ」

三人がかりフラッグファイターを起こすと、フラッグファイターの鼻から血が流れていた。

「起こしてもらってすまぬ……ここは一体どこなのだ!!」

その時、その場にいた全員（空中で戦ってる二人以外）は思った。

(今更かよ、しかも鼻血をだしながら)

「くっ、それに少年だと。私は一体・・・フラッグは何処にあるのだ!!」

フラッグファイターは自分の機体を探し始め、俺は上空を指差す。

「くっ、何だよこの機体。サーベルとバルカンしかねえじゃねえかよ」

「これが私の・・・ガンダムだ!!」

二人の対決が佳境を迎えていた。

「私のフラッグを一体誰が。それにガンダムだと、しかし少年はここにいて。どう言うことなのだ?」

混乱しているフラッグファイターに千鳥かなめは俺と同じように説明をする。

「なんと。異世界に別のガンダムがいるとは。是非ともそのガンダ

ムに出会いたいものだな!!」

何か、的外れの発言をしていた。

「それにしても。あれが本当のガンダムなのですわね」

「私は前に見たことがありますけど、別の様ですね」

「僕はあの黒いにも興味があるな」

「俺もだな、何だか俺の”白式”にスタイルが似てるしな」

そう言つて。俺達は上空の戦いを見つめていた。結局、決着が着く前に”織斑千冬”と言う人物がスピーカー越しの大声で「お前達暴れるなあああ!!」と言われて二機は地面に着陸した。

「で。今回の騒動は違つ地球からきたこの二人が原因なのだな」

「まあ。そう言つ事になりますね」

「大体の事は千鳥から聞いた。お前達の存在はちょっとまずいからな。これからどうしたいか聞きたい」

俺とフラッグファイターはどうするか考えていた。最初に喋つたの

はフラッグファイターからだった。

「私はこの世界の事は全く知らぬ。ゆえにあなた達の指示に従うと
考えています」

「そうか。それでお前はどつする？」

「俺はも同じで構わない」

「分かった。この事は後で校長に話してみよう。それで二人の名前
は……」

「失礼。自分はグラハム・エーカーであります」

「俺は刹那・F・セイエイだ」

はあ。この前のレナードに続いて今度は違う地球からの訪問ですか。
もうちょっとしたことでは驚かなくなってきたわね私は。
あれから織斑先生は二機のMSで戦っていたラウラとクルツ君に拳
骨をすると、校舎の方に向かって歩いて行った。

「さてと、落ち着いと事だし。この二機をどうしようかね」

私はアリーナに立っているエクシアとGNフラッグを見上げていたら、空から見覚えのある戦闘機のような物を見つける。

「あれって……」

『うわああああ。誰か止めてくれええええ』

あれはやっぱバルキリ よね。しかも、多分早乙女君が乗ってる奴ってそんな呑気なこと言ってる場合じゃなかった。バルキリから黒い煙が出ていて絶賛降下中だった。しかもあの声は……

「セシリア」

「了解ですわ」

すると、立っている二機のMSの一番近くにいたセシリアと箒がMSに乗り込んだ。セシリアはエクシアに、箒はGNフラッグに乗り込んだ。

「俺のガンダムが……」

「お嬢達、私のフラッグを壊さんでくれよ……！」

刹那君がぼそつと呟き、グラムさんが大声で二人に言う。てか今更だけどMSの操作出来る事に突っ込むの忘れてたわよ。

「箒さん。私がああの戦闘機を受け止めます。箒さんは私の後ろから支えてください」

「分かった」

セシリアは言う、エクシアを落下中のバルキリを空中で受け止め、箒はエクシアの背後から落下の勢いを殺そうとエクシアとバルキリを支え、勢いを失うと三機は地面に着陸した。

「いや・・・まさかフォールドエンジンが爆発するなんて、ついてない・・・」

そういつてバルキリから降りて来たのはやっぱり早乙女アルト君だった。

「久しぶりだな早乙女」

「おま、相良じゃねえか。なんでここにつて・・・何処だここは？」

「あゝ私が説明するわ」

「千鳥にテッサまで!!」

私、早乙女君に説明中・・・

「はあ。また俺は異世界に飛ばされたってことか。しかも、今度は
真正正銘の地球に」

「まあ。一応そうなるわね」

「大体理解出来たが、ここは何処なんだ？」

少し離れた所の物たちの会話を聞いてい見よう。

「戦闘機から出てきた奴。何か・・・」綺麗”だな」

「一夏も？僕もそう思ったよ」

「私もそう思いわしたわ」

「あいつから”和”の心を感じるな」

早乙女アルトの第一印象をこんな感じだった。ちなみにグラムと
刹那は。

「・・・」

「美しいな少年!!」

刹那は無言。グラハムは危ない発言していた、それを聞いたアルトは。

「俺は男だああああ」

そう心の中から叫んでいた。

結局。織斑先生が戻って来て早乙女君の説明をすると、頭を抱えながら校舎に戻って行った。異世界からやってきた三人の処遇は刹那君、早乙女君はレナードと同じで学生、グラハムさんは教師をすることになったようだ。

その後は、三機を学園内で一番大きな収納スペースにギリギリ入れ。早乙女君と刹那君は寮の部屋を与えられてそこに向かった。

さて、人生二度目となる異世界移動を成し遂げた俺こと早乙女アルトは刹那と言う男と部屋の椅子に座っていた。俺の今の格好はSM

Sの服装で刹那は普段着と言ったところか。

「まさか、こんなことになるわな」

「俺もだ」

(こいつ、無口だな)

「とじろで……」

「あつ。俺は早乙女アルト。出来るだけ下の名前で呼んでほしいな」

「ではアルト……俺は今かなり空腹だ」

その瞬間、俺は部屋の中で思いつきりずっこけた。

「腹減っただと……まあちょっと待ってる」

隣の奴にでも聞いて見るかと思いつながら俺は隣の部屋のドアをノックする。

「はい……え〜と。早乙女だっけ」

「えっと……織斑だったか？出来るだけ下の名前で呼んでほしい」

な
」

「悪い、じゃあアルト。何のようだ？」

「食堂つて何処にあるか教えてほしんだが・・・」

「何なら俺が案内するよ」

「助かる」

俺は部屋から刹那を連れ出し。織斑の案内で食堂に向かった。その途中は、しょうも無い会話をしたな。

「それにしても刹那つて宗介に似てるな」

「言われてみれば、相良の奴に何処となく似てるな」

「そんなに似てるのか？」

「ああ、似てるな」

俺と織斑がはもった。どうやら同じ考えだったようだ。

食堂に着くとある事に俺と刹那は気づいた。そう、お金が無い事に気づくと。織斑が「俺が奢ってやるよ」と言ってくれた。本来なら

拒否する所だがお金が無い以上、織斑の好意を受け取ることにした。

私ことグラハム・エーカーはどうしたかと言うと。織斑千冬と言う美しい女性に連れられてこの学園の職員室にいる。

「グラハム・エーカー。明日からこの学園の教師として配属された。以後、お見知りおきを」

「あれって、さっきの騒動の・・・」

「そうだ。グラハム先生には一年二組の副担任になってもらいます。よろしいですマオ先生」

「別に良いわよ。よろしく、グラハム先生。私はメリッサ・マオよ」

「こちらこそ。これからよろしく頼む」

ユニオンのフラッグ乗りのグラハム・エーカーは二組の副担任になった。

その後は、先ほどの騒道が嘘のように静けさを保ち、一日が終わった。

「さてと、よく眠れた事だし。そろそろ教室に行ってみるか。刹那は準備出来たか？」

意外にぐっすり眠れるものだ。まあ、親睦を深めるために俺と刹那は昨日の夜は織斑と色々話していた。どうやらもう一人男がいるみたいなのだが何故か行方不明と言っていた、かなり気になったが「まあいいや」と思い、三人で色々話した。

内容的には殆ど異世界での出来事で、ガンダムの話をすると刹那が生き生きとする所が新鮮味を感じた所だ。コイツはよほどガンダムが好きなんだな。

織斑の話は相良がここに来てからの珍事件の話しを聞いた。まあ、あいつらしいと言えば納得がいく内容だった。

「俺はいつでも大丈夫だ」

俺達の部屋に先ほど織斑先生が「早乙女と刹那は今日から一年二組に転入扱いになる。時間に遅れるなよ」と言われた。

「ここか二組は」

どうやらここが二組で、隣の一組には相良や千鳥、織斑がいるみたいだ。さっきすれ違った時に相良に聞いた事だ。

「お前達が昨日の騒動の子達でアルト、刹那だったわよね。ちょっと待ってて」

黒髪だが、織斑先生とはまた違った雰陰気を出す女性がそう言う。教室に入って行った。

「え〜。もう知ってる人もいるかも知れないが、今日この二組に転入生が二人入ってくることになった。ちなみに男だ」

「何！！これでは俺のハーレムが・・・」

「あんたは黙れ！！」

銀髪の男がそんな事をを言いかけた所で隣の元気な女子の鉄拳がさく裂した。

「はいはい、カップルは」「誰がカップルだ！！」「静かにして。じゃあ入って来て」

俺と刹那は教室に入る。すると、教室の九割が女子じゃねえか。何、ここって女子高なの？でも、一人だけ男がいるしなって思ってる。

「キヤーカツコイイ!!」

「背の高い子、かつこいいし綺麗だよ!!」

「ちょっと低い子もかなりカツコイイ!!」

いきなりに出来ごとに俺と刹那は後ろに一步、引いてしまつ。ランカやシェリルのライブ並のパワーを感じるぞ。

「はいはい。アンタ達静かに。じゃあまずはアルトから」

「早乙女アルトです。昨日、この世界に来たばかりなので分からないことがあるかもしれませんがよろしくお願いします」

「やっぱりマクロスFのアルト君だ!!」

何だよマクロスFって。あれか、ここの世界での俺のアニメのタイトルか。

「俺は刹那・F・セイエイだ」

「キヤーガンダムOOの刹那君だ!!しかも一期の!!言って、あのセリフを!!」

「俺が・・・俺達が・・・」「ガンダムだ!!」「」

何だ？刹那の奴もこの世界じゃアニメになってるのかよ。しかも刹那のやつノリがいいなおいつてか何だよ今の掛け声はよ・・・

「はあ・・・静かに、じゃあ二人はレナードと鈴の後ろに座って頂戴」

テンションが下がらない中、俺と刹那は言われた席に座る。はたしてこれから俺達は・・・

「あと、二組に副担任も来るわ」

すると、ドアが勢いよく開かれて。

「初めましてだな、諸君!!」

言いながらいきなり入ってきた金髪の男が黒板にでかかど”GT
G”と書き。

「グレート・ティーチャ　・グラハム先生だ。よろしく!!」

いやあんた。そのネタ古い、それにあれはG.T.O.だろうが。なに勝ち誇ったかのようにしてデカデカと書いてるんだアンタは？

それにしてもこのクラスのテンションは異常の様な気がする、この男の登場でもまた「キヤー！！」「本物のグラハムだ！！」「おとめ座キタ　！！」といていた。てかおとめ座ってなんだよ・・・？

「あゝそう言う訳だから皆、よろしくね」

マオ先生はそう言いながら教室を出て行く。

「さて、初めての授業を始めようではないか」

さてと、あれから俺と刹那は昨日いなかったもう一人の男、レナード・テストロツサと専用機持ちの凰鈴音と出会う。まあ、この辺りは大体普通の感じで俺的にも話しやすい奴でよかったと思った。異世界初の学校を終えた俺と刹那は昼休み、相良に「放課後、お前達の機体の所に来てほしい」と言われて自分達の機体が保管される収納スペースに来ているのだが・・・

「ガンダムがない」

「バルキリ もねえ」

周りを見渡しても俺達の機体がないのだ。かなり慌てて辺りを探すと、相良とテッサが入口から現れた。

「おいテッサ。俺達の機体何処に行ったんだよ？」

「それでしたら大丈夫ですよ」

そう言いながらテッサは二枚のカードを俺と刹那に手渡してきた。

「そこに、お二人の機体のデータが入っています」

「まずはそのカードに触れてみる」

俺と刹那は相良に言われたようにカードに触れる。すると、カードに文字が浮かび上がってきた。それは”YF-25”と書かれていた。刹那の方には”ガンダムエクシア”と書かれていた。

「それに触れるとお前達の機体が出て来るぞ」

「はあ？」

俺は半信半疑で文字になると何と、あっという間にバルキリのコックピットに座っていた。しかも、サイズが三メートルに縮んでいた。

『あの・・・えっと。あなたがバルキリのパイロットですか？』

「あ、ああ。そうだが」

すると、急に女の子の声が響いて俺は驚く。

「えっと・・・お前は何なんだ？」

『私はあなたの専用のAIのエスティーゼです、エステルと呼んでください』

「AI？」

そこから俺はAIについて説明を受けた。説明は丁寧にしてくれたおかげで俺は大体理解出来た。

『どうですか？』

「ああ、大体理解出来た。おっと、まだ俺は名乗ってなかったな。俺は早乙女アルトだ」

『アルトですね。これからよろしくお願いします』

「こつちこそな」

ちなみに刹那の方は・・・

「エクシアが縮んでいる・・・」

『おい。お前、AIの説明受けるか？』

「誰だ!?!」

『AIのユーリだ。お前をこれからサポートすることになった』

そこからはアルトと同じなので以下省略。

『でつ。理解できたか？』

「大体はな。そう言えばまだ名乗ってなかったな。俺は刹那・F・セイエイだ」

『刹那か。これからよろしくな』

「ああ」

こんな感じだ。あつちのAIは男のようだな。

「終わったか？」

「ああ、それにしてもいつの間にこんなことをしたんだ？」

「それは、私と相良さんとラウラさんが徹夜で作業したんですよ」

「成程な・・・」

「気になっていただけでした？」

「ああ。ありがとな」

「俺も礼を言おう」

俺と刹那は二人に礼を言う。その後はこのカードの説明を受けた。このカードはまだ名前が無いらしい、それもまだ俺と刹那や相良も含めて四人しかもっていないそうだ。

それはいいとして、このカードは機体を持ち運びできる事らしい。それこそ人並みサイズからリアルサイズまで何処までも出したりしまったり出来る優れものだそうだ。

それに、データがあれば人並みサイズに限るが、他の機体とかも使

えるようだ。だが、それは最大四機までしか出来ないようだ。どうやら容量が足りないらしい。俺には十分な気がするのだが。

「では、早速アリーナで試してみるか？」

「そうだな、刹那はどうする？」

「俺も行こう」

「じゃあ私は生徒会室に行ってきますね」

テッサはこの学園の生徒会室に向かい、俺達はこの学園にあるアリーナで自分達の機体を確かめに向かった。

おまけ

「何と、私のフラッグが見事に復活しているではないか!!」

私は初日と言う事から不慣れの授業に悪戦苦闘しながら全てが終え、職員室でのんびりしていると織斑千冬に呼び出され。私達の機体が収納してある所に連れて行かれる。

そこで目にしたのは・・・自分の機体が無い事だった。

「千冬。これはどう言う事だ!！」

「落ち着け。テストロッサからこれを預かった」

私は千冬から一枚のカードを受け取る。そこに文字が浮かび上がっていて、書いてあったのは”オーバーフラッグ”と”GNフラッグ”であった。私はオーバーフラッグと言う懐かしい単語にとっさにその文字を触れてしまった。

すると、私はいつの間にかフラッグのコックピット内にいたのだ、しかも、オーバーフラッグのだ。私は余りの興奮に「何と、私のフラッグが見事に復活しているのではないか!！」と叫んでしまった。

『アンタ、うっさいわよ』

「何奴!！」

『アンタのAIのキリノよ』

「私はグラハム・エーカーだ。所でAIとは？」

私はキリノにAIの説明を受けるがはつきり言って、わからん。

『はあ?アンタ、私の説明で理解できないってどんだけよ』

「そう言われても私も初めてなものだ。おいおい理解していくつもりだ」

何だかいきなり人生相談とか言われそな気もしないが、そこは余り気にしない事にしよう。

『まあ後で理解してくれるって言うならそれでいいけど。それよりこれから人生……』

「アウトおおお」

私はすぐさまフラッグから降りてカードにしまう。出し入れだけは理解していてよかったと思った。

「随分と騒がしいなお前のAIは」

「それは、私も思った」

「じゃあ。これで今日の業務は終わりだ」

「では、これからディナーなどはいかかでは？」

「ふっ、いいだろ」

私と千冬は部屋を出て夕食を食べに向かった。

第17話・異世界からの訪問者（後書き）

はい、ガンダムOO Fast Seasonから刹那とグラハム。マクロスFから早乙女アルトが登場しました。何故この二作品？と思った方がいらつしやると思います。

その理由はOOはGジェネワールドをやっていて、マクロスFは劇場をみて登場させたいな〜と思い。今回やってしまいました、後悔はしていません。

後、なぜ一期と言いますと。自分は何故か二期より一期が好きだからと刹那の年がちょうどよかったからです。でも、ダブルオーライザーは好きですよ。

でも、この話ではダブルオーライザーは出てこないかもしれませんが、それとブシド です。ぶっちゃけ、一期の二人はGジェネでかなり使ってます。

アルトはまあACERにも出てきますしちょうどいいかな？と思いました。

まあ、路線はふもつふなのでキャラ崩壊は確実ですね。主にハムが。それと、三人はボン太君にはちゃんと乗る予定です。

今回は人物紹介をやら設定やらの予定です。

第18話・俺は姫じゃねえ、僕は王子じゃないよ。(前書き)

アニメのESの方はいよいよクライマックス?に近づいてきましたね。それに福音との闘い熱いですね。そして、こっちは相変わらずの内容です・・・

第18話・俺は姫じゃねえ、僕は王子じゃないよ。

えっと、あれから俺と刹那はアリーナに向かった。そこにISでいいのか？それで練習しているクラスメートの鈴と篠ノ之だっけ？の二人が実践形式で練習していた。まあ、アリーナの端に妙な物体三体がいるが今は無視しておこう。

そこからは刹那と篠ノ之がお互い「私はガンダムと戦ってみたい」「俺は構わないが」との事で早速戦いが始まった。すると、端にいた妙な物体がこちらに来て物体を脱ぐと相良と銀髪と金髪の少女が現れた。たしかラウラとシャルだったかな。

「初めましてだな、ガンダム!!」

「その台詞はお前が言って良い物なのか？」

篠ノ之が危ない発言をした、その台詞はあのアホハムの台詞じゃねえのか？それに刹那が突っ込んだ。俺はそこに一番の驚きを覚えた。そして、鈴を含めた俺達は上を見上げながら二人の戦いを見つめている。

「強いなガンダム。私は嬉しいぞ」

「くっ、だがまだだ!!」

刹那のガンダムは確か”エクシア”だったけ。それに篠ノ之のISは”紅椿”が空中で見事に斬撃戦を繰り広げられている。俺が何故”紅椿”の事を知ってるかって？それは隣にいる鈴に聞いたからだ。それにしても俺達の乗ってるバルキリーの戦い方とえらい違いだな。まあ、アクエリオンやキングゲイナー なんても無茶な戦い方をしていたから今更か。

結局、二人はエネルギーが尽きるまで戦っていた。正直、上を眺め続けていた俺達は首が痛いのか、皆首をさすってる。

「おおくガンダムの生戦闘はやはり良いものだな。そうは思わないかアルト？」

「別に俺はバルキリーがあるからな。」

「私はガンダムも良いけどバルキリーの方が好きね。特にYF-19とYF-21は」

鈴はどうやら俺達のアニメになってる”マクロス”シリーズを全部見ているみたいだった。だから俺の事も詳しく知っているようだ。すると、隣にいたラウラがいきなり。

「何おう？ガンダムの方が言いにか決まってるではないか。何を言う

んだ鈴は？」

「別に、私はバルキリーが好きだって言っただけよ。てかガンダムよりバルキリーの方がいいわよ」

「いいや。ここはガンダムだ、お前、ガンダムの凄さを知らないのだな！？」

「別に知りたくも無いし」

何だか二人で言い合いが始まったようだ。面倒な事になりそうなので俺は相良に二人を任せて俺とシャルは刹那と篠ノ之の所に向かう。

「そういえばシャルって何か”王子”って感じだよな」

「それを言うならアルトだって”姫”て感じだよ」

その瞬間、俺とシャルの間で何かが砕けるような音が響いた。

「お、俺は男だからな”シャル王子”」

「ぼ、僕も女の子だよ”アルト姫”」

くっそう「ここにはミシエルの奴がいないのにその呼び方をされるとは。だから俺もシャルの事をこれから王子と呼ぼう、そうしよう。

「やはりガンダムは強いな」

「お前こそ強かった」

「そう言ってくれると嬉しいが・・・やはり刀だけでは厳しくなってきたな。刹那のGNソード見たいのがあれば少しは戦いにも幅が広がるのだがな」

「いや、GNソードは取りまわしにくい。俺なら近接武装のみの方がいいと思うのだが・・・」

この二人は先の戦いの意見を言い合っていた。俺は二人の会話に入るのは後にしようと思った。

「王子・・・どうする?」

「うん。どうしようかね姫」

後ろではラウラと鈴が言い合いに、相良の奴もいつの間に加わって言い合いをしていて、目の前の刹那と篠ノ之も相変わらず意見を言い合っていた。それから少し王子とどうしようか悩んで語る内に刹那と篠ノ之がこっちに気づいたようで話しをやめてくれた。

「やっと終わったか」

「すまん。色々と見えてこない所が見えたのでな」

そう言いつつ、まだ言い合ってる三人を見る。

「シャル王子、そろそろ止めにいか無くても良いのか？」

「そうだね・・・かなめがいれば直ぐに止められるのにどうして今いないのだろう・・・」

ちなみに千鳥、織斑は生徒会に行ってる為、この場にはいない。

「なあ早乙女、何故お前はシャルの事を”王子”って言ってるんだ？」

篠ノ之が突然そんな事を聞いてきた、何気に刹那も気にしてるじゃねえか。ま、俺はサクッと二人に教えてやると・・・

「言われてみれば・・・と言うか、最初は男でこの学園に来ていたよな」

「ギクッ!！」

「ほお。それはどう言つことですか。シャルロット王子?」

おっ、まさかそんな事をしていたとはな。ここは攻めねばならぬよ
うですな。

「そ、それは・・・それよりもアルト姫だって・・・」

「「姫!?!」」

なっ、王子め。ここに来て俺の話題に触れやがった。そして刹那と
篠ノ之がはもったじゃねえか。

「早乙女、姫って言つのはどう言つ事だ?」

「いや、それはだな・・・」

「私が教えてあげるわよ」

ここで言い合っていた三人の内の一人、鈴がこっちにやってきた。
それに釣られるかのように相良とラウラもやってくる。ってか鈴の
奴、俺の事知ってるんだったよな・・・

「アルトって役者をやったのよ。それでいろんな奴に姫って言われてるのよ」

「へ〜姫って役者だったんだ。それなら尚更アルトは姫だよね」

くっ。鈴が余計な事を言いやがって。王子が調子乗ってきたじゃねえか。

「ふむ、なら今日から姫と呼ばう」

「あつ、それいいわね。私も姫って呼ばう」

鈴とラウラ、やめてくれ。俺が死んでしまつてはないか・・・

「私は・・・」

「篠ノ之、お前は・・・」

「姫、今度私に”和”を教えてはくれんか？役者だったお前ならそう言う事は詳しいと思うんだが」

篠ノ之さんまでですか。しかも、引つ張った割には俺に一番振りかえりたくない物を教えろとは・・・

「大変そうだな早乙女」

「・・・物凄く疲れたよ。たった今」

これだったらミシエルとシェリルに言われてた方がましだったかもしれん・・・

「それより相良、これから篠ノ之のISについて話し合いたいんだが」

刹那、今の流れをぶった切ってくれたな。まあ、ほじくられるよりはマシか・・・

「そうだな。なら整備室するのはどうだ？あそこなら直ぐに作業にも取り掛かれる」

「なにに？ 箒のISがどうしたのよ」

「鈴、きつと刹那達は箒のISを改良しようと考えているのでは？」

「ふん。何だか面白そうよね」

「なら、今から向かうとしようではないか」

「そつだな。では行くとしよう」

そう言いながらラウラと鈴と篠ノ之は整備室に向かって行ってしまった。

「俺達も行くか」

「そつだな」

俺も相良と刹那と整備室に向かって行くことになった。

第18話・俺は姫じゃねえ、僕は王子じゃないよ。(後書き)

アルトが姫ならシャルは王子ではないか？自分はそう思っています。
そして、箒がちよっとブシド 化・・・箒ファンの方すみませんで
したあああ

次回はどうなるかは未定です。

第19話・とある休日の一日。シャル、刹那（前書き）

四月ですね。そして、あと少しでISの最終回ですね。でも、この小説はこれからも続けていきます。

今回から休日編です。学生なら休日がある、それを今回は書いてみました。舞台は池袋です。

第19話・とある休日の日。シャル、刹那

整備室に籠り、”紅椿”の改良案を言い合つ宗介達だったが結局、案がまとまらずにその日はお開きになった。ちなみに、どんな案が出たかと言つと・・・

「強化ならデイバイダ だろ、あれでガロードは強くなったんだぞ
！！」 ラウラ

「いや、ここは無難にECSや陸戦装備を・・・」 宗介

「紅椿つて大分速いわよね。一層のこと、バリキリーにしたら？変
形いいわよ」 鈴

「いや、流石にISに変形は無いだろう・・・」 アルト姫

「じゃあ、射撃武器を加えるのはどうかな？」 シャルロット王子

「いや、ここはガンダムだ」 せつちゃん

「ノン！！ここはフラッグに決まっている！！」 グラハム

「いや・・・私はそこまでは・・・」 篝

真面目に考えているのとネタ見たいなことを織り交ぜながらあーだ

こーだと言い合っていたら結局夜になっていた。そして、いつの間
にグラハムがいたことにも気付かないでいた皆だった。

そして、その日は金曜、明日と明後日は土日なので学生である皆は
学園はお休みになった。

「あつ、刹那」

「デユノアか。どうした？」

土曜日の朝、学園の寮の廊下でシャルは一人で歩いている刹那を見
つけて声を掛ける。

「刹那はこれからどこかに行くの？」

「ああ。これから映画を見に行こうとしたんだ」

「へーなら僕も一緒に見に行っていない？」

「構わないが」

「じゃあちよつと待ってて」

僕は一旦自室に戻り私服に着替え、刹那の所に向かう。ちなみにラウラは爆睡中。

今。僕は刹那と二人で電車から降りて改札口を探している。何で改札口を探しているかっていると、この駅が池袋駅なことでもかなり大きく、僕も刹那も初めてな所なので早速迷っている？状態になっている。

何で池袋？と思うかもしれないけど。それは、刹那が見たい映画が池袋か千葉でしかやってないことなのだ。まあ、僕も池袋には前から興味があつたからよかつたんだけどね。

「あつたあつた。よかつた〜見つかつて」

「それにしても、ここは人が多いいな」

「そうだね。僕もここまでとは思わなかつたよ」

隣にいる刹那は季節が夏と言うこともあつて無地のTシャツにハーフズボンにサンダルとかなりラフな格好をしている。まあ、今日はかなり暑いからしかたがないよね。

「ねえ刹那。この池袋って今凄く話題になっているんだよ？」

「話題とは？」

「うーんとね・・・まずは”首なしライダー”とか、”ダラズ”とか。あとは”池袋最強の男”とか。結構ネット上で話題になってるんだよ」

「首なしライダー??？」

刹那はこいつ何言ってるんだって顔をして僕を見る。

「まあ、そつだよな。僕も本当かどうかあやしいと思ってるんだけどね。それより映画館に行こう・・・西口だよな」

僕と刹那は西口を目指す目印として西武の方に向ったら東口に出ちゃったから慌てて東武の方を目指して何とか西口に出られた。ややこしんだよ、西口に東武、東口に西武って。

「やっと着いたね」

「ああ・・・これからは出口を確認する時は看板を見る事だな」

「も、もう刹那ったら。確かに僕が確認をしなかったのは悪いとは思ったよ」

そう、駅内の天井にはちゃんと西口の案内が書いてあったのだ。

「それで、刹那が見たい映画って？」

「あれだ」

刹那が指を刺した先には「劇場版 機動戦士ガンダムOO - A w a k e n i n g o f t h e T r a i l b l a z e r - 」と書かれてあった。ちなみに、他のラインナップは「天元突破グレンラガン 螺旋編」「劇場版 マクロスF 虚空歌姫〜イツワリノウタヒメ〜」「劇場版 マクロスF 恋離飛翼〜サヨナラノツバサ〜」えっ、自分の映画を見ちゃうの？それはちょっとまずいんじゃないの？色んな意味で・・・

「刹那・・・て」

「学生二人で・・・」

僕がちよっと思考を停止している間に刹那がチケットを買っていた。ついでにパンフも自分のと僕の分を買って、それを僕に手渡してくれた。

「あ、ありがとう」

「いいんだ、俺につき合わせているんだからな」

僕と刹那はチケットを見せて中に入り、席に座る。少し経ったら映画が始まった・・・

「まさか、俺がああなるとは・・・」

「うん。でも面白かったよね」

映画を観終わった僕と刹那は映画の感想を言っていた。でも、映画をみて自分の未来が分かる人って刹那以外に・・・グラハム先生もそうだね。先生も見たのかな・・・？

「それよりも、これからどうする？」

「そうだな・・・」

僕と刹那がこの後どうしようかと考えていると、遠くの方から自販機が・・・飛んできた？

そして、その奥から怒鳴り声が大きく響いてきた。

「まてええイザヤあああ」

「いやいや、まったら僕、シズちゃんにやられちゃうもん」

奥から全身黒の服を着た男と、バーテンダーの格好をした金髪の男が追いかけてこしていた。その光景を見ていた僕と刹那はその場に立ち尽くしていた。

「これが池袋かぁ・・・」

「それは違うと思うぞ・・・」

正直、僕はフランス代表候補生として日本に来ている。それはISについて色々と学ぶためののだが、最近、この日本が面白くてしょうがない。今だってこんなにワクワクすることが起こってるんだもの・・・

「これからどうする？」

「ちょっと遅いけどお昼にしようか」

「そうだな」

僕と刹那は大通りを何処で食べようかと探しながら歩いていると、背の高い黒人に声を掛けられる。

「ヘイ、ソコノお二人。ロシア寿司はドウカネ？オイシイヨ？」

思いつきり片言だった。それにロシア寿司って何だろう？滅茶苦茶気になるんだけど。

「デュノア、ここにしないか？」

「えっ、ここ？でも・・・」

「オオ〜ヤスクシテオクヨ」

「は、はあ・・・」

刹那は普通に、僕は背の高い黒人の人に見せに入れられてしまった。

「おっ、帝。あそこの子可愛い。ちょっとナンパしてくるぜ」

「や、やめなよ正臣。それに、彼氏もいるし」

「ちえ・・・それよりも帝。お前と杏里とは何処までいったんだよ・・・」

こんな感じで店内にいたのは男子学生が二人だけだった。一人は至って普通の子で、もう一人は金髪で見た目クルツ先生を連想させる子だった。それに、とても刹那に声が似ていた。

「あの・・・ごめんね。正臣が変なこと言って」

「ううん、大丈夫だよ。あの・・・よかったら一緒になくても良い？」

「僕は構わないよ」

「俺も良いぜ！」

「ありがとう。刹那も良いよね？」

「俺は大丈夫だ」

僕と刹那は二人の男の子がいる席に向かって座った。

「そつだ、僕の名前は竜ヶ峰帝って言います。上の名前は長いから帝でいいですよ」

「俺は紅田正臣だ。俺もこんなとびつきりな可愛い子ちゃんなら正臣く〜んでいいぜ!」

いいながら決めポーズを取る正臣。何かまた違った男の子のタイプだ。なつて僕は思った。

「僕はシャルロット・デュノアです」

「俺は刹那・F・セイエイだ」

刹那が自分の名前を言うと、帝と正臣は驚いた顔をする。

「ねえ正臣・・・刹那ってよく正臣が物真似してる」

「ガンダム00の刹那じゃねえか。最初は誰かに似てると思ったら・・・てマジ?」

「あゝ」

その瞬間、またもや二人は驚いていたようだ。それはアニメの人物が実際に現れれば驚くよね・・・
僕と刹那は二人と同じものを頼むと料理が来るまで話した。

「へえ〜二人ともあのIS学園の生徒なんだね」

「スゲー俺IS学園に行ってる奴と話すの初めてだな」

「そんなことないよ。二人は池袋に住んでるの？」

「うん。僕と正臣は来々良学園って所に通ってるんだ」

しばらくして注文した料理が出てきた。感想を言つと・・・不思議の一言だったけど、味はおいしかった。また池袋に来た時には来よう、刹那も無表情だけど気にいっているようだ。

「じゃあな。また池袋に来た時はゆっくり案内してやるよ〜」

「またね」

店を出ると僕と刹那は帝と正臣と別れた。あつ、僕は二人の連絡先をさつき教えたんだ。だから今度来た時に案内してもらおう約束をしたんだ。

「刹那、そろそろも戻ろつか」

「ああそうだ・・・」

「あれ、刹那に王子じゃねえか。ここで何やってんだ？」

後ろから声を掛けられ、僕と刹那は後ろを振り返る。僕の事を”王子”って呼ぶのは大体想像出来るけど、振りかえるとアルト姫とゼシリアがそこにいた。

第19話・とある休日の日。シャル、刹那（後書き）

刹那とシャルがデート？みたいな事をしていますが、決してフラグとかそういうのではないです。たぶん・・・

そして、デュラララのメンバーを登場させてしまいました。まあ、デュラララはゲストに近いのでメインにはなりません。休日が終われば出番はありません。

今回はアルト、セシリアのサイドです。そのあとは宗介、ラウラのサイドの話の予定です。

第20話・とある休日の一日。セシリア、アルト（前書き）

ふう、そろそろ学校が始まる。そして、就活が始まる・・・

第20話・とある休日の一日。セシリア、アルト

IS学園にやって来てからの初の休日、俺は隣の布団で寝てる刹那を起こさないように起きてSMSの服に着替える。

「今度、私服を買わなきゃな」

そう、今俺が持つてる服はSMS隊の服と学生服、タイプはこの学園はブレザーなのに何故か相良と同じ学ランだった。

「さてと、メシ食って行くとするか」

俺は部屋を出て学生寮の食堂に向かう。朝ごはんはしゃけと納豆とみそ汁に白いご飯のセットをトレイに乗せて何処で食べようかと回りを見渡す。すると、白いワンピースを着ているセシリアが一人で座ってるのを見つけた。

「よう、おはようさん」

「あら、アルトさん。おはようございます」

「前座つてもいいか？」

「よろしいですわよ」

俺はセシリアの前に座り、箸を手にする。何気なくセシリアの顔を見ると何処か眠そうだった。

「セシリア、何だか眠そうだな？」

「ええ、昨日ちょっと日本の漫画と言つのを読んでいまして」

「・・・ちなみにタイトルは？」

「スラムダンクと言うバスケット漫画ですわ」

あゝそれ俺も前に読んだことがあるな。地球の歴史司書に何故かあって俺も小さい頃読んでたな。

「成程な、確かにあれは読み始めると中々やめられねえからな」

「アルトさんも読んだことがあるのですか？」

「まあな」

そんなしょうも無い会話をしながら朝ごはんを食べ終わる俺とセシリアは食器とトレイを返してまた席に座る。

「セシリア、お前はこれから何か用とかあるのか？」

「いえ、今日はこれと言った用事はございませんよ」

「そうか・・・なら。これから一緒に映画を見に行かねえか？」

「えっ！そ、それは構いませんけど・・・」

「なら。早速行くか」

俺とセシリアはそのまま学園を出て学園前の駅にて電車を待っている。

「それでアルトさん。映画は一体何を見るのですか？」

「ああ、それはな。クラスの奴や鈴が「マクロスFの映画見てみたら？凄いわよ」って言うってくるから気になってな」

「それって、アルトさんが出てるアニメですわよね」

「ああ、そうみたいだな。何だか自分を見に行くって言うのも妙な

感じた」

「ふふふ、そうですね」

セシリアが軽く笑い、俺はセシリアのそんな姿を見て誘って正解だ
なって思った。しばらくして電車に乗りこむ俺達、休日の朝と言っ
こともあって余り人は乗っていないかったから椅子に余裕で座れた。

「ところでアルトさん。映画はどちらでご覧になるのですか？」

「池袋って所だな。丁度前の奴もリピート上映をしているみたいだ
しな」

そう、俺が出てる「マクロスF」の劇場は前後半に別れているため、
前半から見なければ行けないのだ。俺は鈴に「別に俺自身なら後半
でもよくね？」って言ったたら「劇場版は大分変ってるから最初から
見た方がいいわよ」と言われた。

電車に乗って少ししたら池袋に着いたってかでけえなこの駅、一体
どれ位電車走ってんだよ……

「す、凄いですわよねこの駅……」

「あ、ああ。俺も驚いたぜ……」

この後、改札口を探すのにも一苦労したな。何とか改札を出ると俺は西口を探した。

「西口って何処だ・・・」

「あつ、あそこに”西武”と書かれてますわ」

「西武は西って字を使ってるな。よし、あっちだセシリア」

俺は、はぐれないようにセシリアの手を握ると”西武”と書かれた看板目指して歩いた。正直、行きなりセシリアの手を握った俺自身もセシリアも驚いたがこの街、池袋の人ごみが凄く、下手にはぐれてしまうと後がメンドウになると思ったからだ俺はセシリアの手を無意識に握ってしまった。

「くそ・・・まさか、西武が東口だとは思わなかったぜ」

「私もですわ・・・」

あれから俺とセシリアは西武の入り口にたどり着くが、近くの看板に”東口”と書かれてあり。俺達は今来た道を戻り、反対の出口を目指した。

「と、とりあえずチケット買ってくるから待ってる」

俺はセシリアの分と二枚チケットを買って早速中に入る。劇場の広さはまあまあ大きい所で、席もある程度埋まっていた。

「私アニメを見るのは初めてですわ」

「俺もだな。ま、日本はアニメに凄い力を入れてるみたいだから結構楽しみなんだがな」

「そうですね」

少し経ち、映画が始まる。俺とセシリアは最初から初めてのアニメ映画を集中して見ていた……

「凄かったな、アニメって言うのは」

「それに、ストーリーも面白かったですわ」

「だけどな……俺、あんな事した覚えがねえ……これが鈴が言ってた奴なのか」

「そうなのですか？アルトさん」

今、俺とセシリアは”マクロスF 虚空歌姫〜イツワリノウタヒメ〜”を見終わり、次の”マクロスF 恋離飛翼〜サヨナラノツバサ〜”が上映されるまでの間の時間を昼飯を食べながら時間を潰していた。

「そうだな・・・そもそもランカとの出会い自体が書かれてねえし、シエリルとの出会いやその後も全然違った。あの時はシエリルのイヤリング無くして大変だったんだぜ」

「なんか私、ランカさんとシエリルさんにお会いしたくなってきましたわ」

「機会があればな。さてと、そろそろ行くか」

「はい」

俺とセシリアは本日二回目の映画を見に映画館に戻って行く。サヨナラのツバサは新作と言うことがあってさっきより客が多い。

「まさか、シエリルが・・・」

「アルトさん。それ以上はまだ見てない読者様にネタばれになってしまいますわよ」

「お、おう。そうだな。気になってくれたのなら是非見てくれるよ」
「嬉しいですわ!」

そんな感じで中々面白かった映画の内容を話しながら歩いていると、前に見覚えのある二人がいた。

「あれ、刹那に王子じゃねえか。ここで何やってるんだ?」

「成程、お前ら二人も映画を見に来てたんだな」

「うん。でも、姫がセシリアと二人で映画か〜これってデートだよ
ね」

「ば、ばか。何言ってるんだよお前!」

「そ、そうですわよ王子さん。わ、私とアルトさんは・・・」

何故かセシリアがもじもじとしはじめる。

「そ、そう言うなら王子と刹那だってデートしてただろう？」

「ぼ、僕と刹那は別にそんなんじゃない……」

「……どうしたんだデユノア？」

何故か王子ももじもじを始める。それを疑問に思った刹那、これは面白いな。俺は言っておこう、どこぞのむっつり軍曹や朴念仁一夏や寡黙刹那と違って俺は普通の男だ。まあ、レナードもこの点については普通の男だろう。

だから、今日のセシリアと映画を見たこともきっちりデートだと認識してるぞ。セシリアの方はどうだが分からねえけど。

「アルト、二人はどうしたのだ？」

「いや、多分簡単な処理落ちだろ」

「処理落ち？」

「ようするに、二人はデートをしたのが初めてだったんだろ」

「……デートとはあれか、好きな男女と一緒に遊ぶと言う」

「まあ、そつだな」

刹那が真面目な顔でそう言うから俺は一瞬笑いそうになるが、鋼の心で笑いをこらえる。思ったら刹那の奴も初めてだったんだなこういうの。

何で俺がこんなに冷静かって？それはデートはランカやシエリルと何度かしたことがあるからな。それに、俺まであたふたすると誰が治めるんだ？早い話し、俺はストッパーだ。

この四人じゃあ必要ないかなと思っただが、セシリアと王子が見事に処理落ちをしてるからな。そろそろ現実に戻してやるう。

「おい二人とも、そろそろ戻ってこい」

「はあ！」

「あう！」

俺が声をあげると二人は奇妙な声をあげたが、どうやら現実に戻ってこれたようだな。

「私としたことが・・・」

「ううう僕もだよ・・・」

「二人とも可愛かったぜ。余りのかわいらしさに刹那が写メ取ってたぜ」

「ほ、ほほほんとうですか刹那さん」

「う、うつつそだよね刹那？」

「……どうだろうな……」

セシリアと王子はまた顔を真っ赤にしてその場につづくまる。そろそろこの辺にしておくか。そして、まさか刹那が乗ってくれるとはな。

「二人とも、刹那は何もしてねえよ」

「……本当ですか？」

「ああ、悪かった」

「うつつ、酷いよ姫」

「さてと、王子と刹那。お前達はこれからどうするんだ？」

「実はまだ決めてないんだ」

「それでしたら、一緒に回りませんかこの街を」

「いいのか、オルコット？」

「私は構いませんわ」

「俺もいいぜ」

こうして俺達四人は池袋の街を回る事にした。

くおまけく

「エーカー先生。今日の夜は空いてるか？」

「ああ、今日は特に何も無いので空いてるが」

「なら、夜は山田先生やメリッサ、ウェーバー先生と私の知り合いで飲む事になっている」

「了解した。そして今度はこちらから聞く。千冬、今は空いてるか？」

「そうだな・・・今日はこれと言って用事はないからな。空いている」

「よし、なら今から映画を見に行こう」

・ グラムと千冬は映画を見に行くことになった・・・池袋の地で・・・

「グラハム。何の映画を見るのだ？」

「無論、これだ」

早速池袋に着いた二人は迷わずに西口に出る。迷わずに出れたのは流石大人と言ったところだろう。

夏と言う季節もある中、千冬の格好は学校無いとさほど変わらない黒のスーツだが、スーツも夏用で大人の女の魅力が出ている。

グラハムもスーツだが、ワイシャツのみと言うクールビズな格好をしている。周りの人から二人を見た感想は「うわぁ、美男美女だ」である。

「・・・アニメーションだな」

「そうだ。私とさえもこれしかない!!」

そう、グラハムが手にしている案内には「機動戦士ガンダムOO

- Awakening of the Trailblazer

-」と書かれている。

「はあ。まあ、この機会に私もアニメと言う物を見てみるか」

「では早速行くとしよじ」

グラハムと千冬は映画館に向かって行った。

第20話・とある休日の日。セシリア、アルト（後書き）

二話連続ソースケとかなめが出ていないでも、次はちゃんと出ますので安心してください。

何だかもう勢いだけの作品になって気がしてきた・・・

後、前書きにも書きましたが四月の半ばから学校が始まりますので、少し更新スピードが遅くなります。

次回、宗介とラウラが池袋に。颯爽と走る首なしライダー。そして、目の間に現れる池袋最強の男。はたして二人の運命はどうなる！！

予告は勢いですので当たるか当たらないかは自分も分かりません。

第21話・とある休日の一日。 宗介、ラウラ（前書き）

IS七巻よみました。そして、また増えるのね・・・

まあ、この小説はもう”原作？何それおいしいの？”状態だからい
つか・・・

第21話・とある休日の日。宗介、ラウラ

『我が世の春がやってきたああああああ』 御大将ボイス

「うん・・・」

この御大将ボイスが流れているのはラウラとシャルの部屋からである。ちなみに、このボイスはラウラの着メロである。

ラウラは眠い目をこすりながら電話を・・・手に持っていたコントローラーと取り替えて手に持ち、電話に出る。

『今日は空いてるか？』

「そ〜すけか・・・今日はやすみだからあいてるぞ〜」

『そうか。いや、今日池袋で遂にアーバレストの百分の一サイズが発売されるのだが・・・』

「行くぞ、私は何が何でも行くぞ!〜!」

『そ、そうか。なら俺は駅で待ってるぞ』

ラウラは電話を切るとすぐさま服を着替え、部屋を飛び出した。ち

なみにラウラが目覚めたのは11時を過ぎていた・・・

さてと、私は急い身支度をしたのでご飯を食べるのを忘れてしまった。まあ、どっかで食べれば良いだろう。

うん？皆どうして私の服を見ているのだ？私が来ているのは黒のTシャツに白い字で「やってやるぜえ！」とデカく書かれている、カッコいいだろう。

おっと、そうこうしている内に駅に着いたぞ。休日とあって人が沢山いる、中にはES学園の制服を着てる奴もいるではないか。私は少し辺りを見渡すいつもの学生服を着ている宗介を見つけた。

「宗介」

「ラウラか。では早速行くぞ」

私と宗介は切符を買い、改札を通るとホームにたどり着く。

「それにしても、かなめとテッサはどうした？」

「千鳥と大佐殿はメリダ島に行っている。大佐殿は報告に、千鳥はそれについて行っているみたいだ」

「ほゞメリダ島か、今度私も行ってみたいな」

「そうだな・・・夏休みになったら行ってみるか」

電車に乗る私と宗介。最近、日本の鉄道にも興味が出てきてこの頃だ。だが、まだ私鉄の方は覚えきれない所が多いのが今の現状だ。それにしてもお腹空いた・・・

「むう、改札はどっちだ？」

「あっちではないか？」

池袋の駅に着いたのはいいが、早速迷子になってしまふ。まだ駅から出ていないと言うのに・・・

「宗介、腹が減ったぞ」

「そうだな。俺も空腹になってきた所だが・・・まずは外に出よう」

それから十分、何とか外に出てこられた私達は大通りに出てきた。やはりここも人が多くいるなっと私がそう思っていると遠くから黒いバイクが走ってきた。ただのバイクなら周りの人達は関心を持つ筈が無いのだが・・・

「おお、黒バイクだ」

「あれが噂の”首なしライダー”か。すごい」

などと皆、黒いバイクを見ているのだ。私はなんだろうと思っ
てい
ると・・・

「セルティ・・・？」

「・・・？」

宗介がバイクの後姿を見ながらそう呟いたのだ。

「宗介？今のバイク知ってるのか？」

「ああ、一応知り合いだ。そうだな・・・簡単にいえば”デュラハ
ン”だな」

デュラハンとは何なのか私は分からなかったが、私と宗介は目当て
の”アーバレスト百分の一サイズ”を買うことが出来た。

「意外に簡単に手に入ったな。これからどうする宗介？」

「そうだな・・・」

私達は公園の中を歩いている時、宗介が何かを見つけたようだ。宗介の視線を追うとそこにいたのはベンチに座ってる先ほどのバイクに乗っていた人物と、金髪にサングラスにバーテンダーの格好をしている男が座っていた。

「久しぶりだな、平和島、セルティ」

宗介はベンチに座ってる二人に声を掛けた。

「ん・・・相良じゃねえか」

『さつきちらつと見かけたが、やはりそうだったか』

何故かバイクに乗っていた人が話さず、何かの機械を打ちこんではこちらに見せて来る。そして、何故にヘルメットをかぶってるんだろっ？

「何だかお前に会うの大分久しぶりだな。丁度一年か？」

「そうだな。俺が前に来た時は一年前だったからな」

「宗介、この二人は知り合いか？」

私はとっさに話しに入りこんでしまったって、金髪の男が私の全身

を見てみて。

「相良、コイツはなんなんだ？」

『それは私も気になった』

「わ、私はラウラ・ボーデヴィツヒです」

とっさに名乗り。しかも、何故か普段使わない敬語を使ってしまった。

「彼女はドイツの代表候補生だ」

「と、言うと。ISかあ？」

『だが、お前とISの関係性が全く分からないのだが』

「ああ。今は俺はある理由でIS学園に通ってるんだ」

「ふうん。お前も大変・・・て訳じゃねえようだな」

金髪の男が余り興味を持たずに胸ポケットにしまってあった煙草をライター取り出して煙草を吸う。

「相良の知り合いじゃあ、あのやかましい女の知り合いでもあるん

だな？」

「やかましい女？」

「ありや、千鳥だったか？ああ悪い、まだ名乗ってなかったな。俺は平和島静雄」

『私はセルティ・ステュルルソんだ』

私と宗介も二人が座ってるベンチの隣のベンチに腰掛ける。それにしても暑いな、汗が自然と流れて来る。なのに、平和島静雄は長袖を。セルティに至っては黒のライダースーツを着ているのに汗一つ掻いていない。

「相良、あのやかましい女はどうした？」

「千鳥なら今日は別用でない」

「なあ静雄。かなめの事知ってるのか？」

「お前な・・・いきなり呼び捨てかよ。まあ、気にしねえけど・・・」

『静雄は前に宗介と盛大に喧嘩をしてな。それはもう池袋上が大騒ぎになったものだが。それを止めたのがかなめだったんだ』

「まさかあの時に女子高生が乱入してくるとは思わなかったな」

静雄はふっーと煙草の煙を空目がけて吹く。

「なあラウラ。お前のその目は何なんだ？」

「何もないぞ、ただの家族の遺伝でこうなったただけだ」

「成程、にしても随分珍しいな。両目がの色が違うなんて」

『私も余り見たことが無いな。でも、とても素敵だと思う』

「そ、そう言われると恥ずかしいぞ・・・」

私は暑さのせいで余計顔が真っ赤になってるだろう。

「ところで平和島、お前は何をしていたんだ？」

「トムさんと取り立てしてたんだが。途中でノミ野郎を見つけたから追っかけてた」

「ノミ野郎ってなんだ？」

「おそらくは折原臨也の事だろう」

「そのとおりだ、で。あの野郎を逃してこの公園でセルティにあっ
たんだ」

静雄は煙草の吸殻を携帯灰皿にしまつとサングラスを少し直す。

『私は仕事が終わつたからこの公園で休憩してたんだ』

セルティは喋らずに端末を打つて会話をする。それにしても端末打つの速いな

「仕事？」

『私は運び屋をやつてるんだ』

「へ。あつ、そつだ。さっき宗介がセルティの事を”デュラハン”と言つていたが……？」

すると、セルティは回りを見渡す。これは誰にも見られたくはないことなのだろうと私は思った。

『今から見せる。余り大声を出さないでくれ』

そついいながらセルティはヘルメットを取る、すると、本来はそこにあるはずの物が無い。そう……首が……

「・・・なるほど。それで宗介が”デュラハン”と言っていたのか。それに、さっきの人達が言っていた首なしライダーと言うことにも納得した」

セルティはヘルメットを再び被る。宗介はともかく、静雄は知っていたみたいだ。

「ISかあ・・・」

「ん？静雄どうしたんだ？」

「いやな・・・前にISを持った女と戦ったことがあったなって。ありや確か水色の髪をした女だったような・・・」

水色の髪にIS持ちと言ったらと私は一人の女性を連想した・・・生徒会長の顔を・・・

「そ、それで。結果はどうなったんだ？」

「あゝ訳分かんねえ攻撃ばっかしやがってきたから全部叩き落としたりやったな」

『ちなみに、静雄はその戦いに勝っていたぞ』

わあゝお。素手でISに勝っちゃうなんて・・・って思った瞬間。

あれ？探せばいそうな感じがして来た。

『ちなみに、そのISの操縦者は・・・』

セルティが続きを打とうとした時、携帯の着信音流れた。携帯は静雄の携帯の様で静雄は直ぐに携帯に出た。

『静雄君、今度こそリベンジしに行っていていいかな？』

「お断りだ。大体てめえ生徒会長だろう？今てめえの後輩が俺の目の前にいるぞ楯無」

『えっ。だれだれ？』

「相良にラウラって奴だ」

『ほおほお成程成程。で、勝負・・・』

その瞬間、静雄は電話を切った。

『この通り、楯無は負けてから一月に一回は静雄に勝負を挑んでいくんだ』

「・・・」

宗介は何とも言えないような表情をしていた。まあ、私ものだが
な・・・

「相良、あの生徒会長どうにかしてくんねえか？あいつ仕事の途中
とかもお構いなしに勝負を挑んでくるでこっちはいい迷惑してんだ」

「・・・それは無理だと思っ」

『そう言っておきながら静雄はちゃんと相手をしているけどな』

「つつせえ」

静雄は悪態をつきながら再び煙草を吸い始める。

「はあ・・・」

「中々に大変だな平和島」

「逆にお前は気楽そうで羨ましいぜ」

何が気楽そうなのか分からない宗介は少し頭を傾けて考えている。

「ふう・・・それじゃあ俺はそろそろ仕事に戻るわ。またな、セル

テイ、相良、ラウラ」

煙草を吸い終わると静雄は仕事に戻って行った。

『私も家に戻るとしよう』

「そうか」

『そうだ。これは私と静雄の連絡先だ』

そう言つて私と宗介は二人の連絡先を自分の携帯のアドレス帳に入れた。セルテイはその場からバイクに乗つてその場から離れて行った。その時、馬の泣き声が聞こえたような気がした・・・

「中々に面白いな、この池袋は？」

「俺には余り分らないがそうなのか？」

その後、私は宗介と池袋内を散歩していた。その途中で王子・刹那ペアーとセシリア・姫ペアーと一夏・篝ペアーとグラハム先生・織斑教官のペアーを見かけたが、多分デートの途中だろうと私は思い、声を掛けなかった。私は偉いだろう!!

「では、そろそろ帰るとするか」

「そうだな。帰ったら楯無生徒会長閣下に色々聞かねばならないことがあるからな」

「その前にアーバレストを組み立てようではないか」

「そうだな」

私と宗介は手をつなぎながら駅に向かった。手をつないでる？ああ、これは私が・・・迷子にならないようにな・・・

くおまけく

「何と！！私がああなるとは！！」

「・・・」

今、グラハムと千冬は映画館の外にいる。二人は映画を観終わったあとだった。そして、うざいほどにテンションが高いグラハム・エーカーに呆れてる織斑千冬がそこにいる。

「それは分かったから少しは落ち着かんか？」

「これは落ち着いていられると言つのか？私は死んではないぞ。あれは死ではないいい」

「落ち着けグラハム！！」

思いつきりハリセンで叩かれるグラハム。周りの人も思わず二人を見てしまう。

「周りに思いつきり見られたいるではないか」

「くっ・・・それより、これからはどうするのだ？」

「そうだな・・・そろそろここを出れば丁度良いだろう」

グラハムと千冬は駅に向かって歩き出す。この後、駅でばったりあった宗介とラウラにからかわれたのは内緒にしておこう・・・

くおまけ2く

「ねえレナード・・・」

「なんだい鈴？」

「・・・何してるの？」

「何って。君のISをアマルガムの技術を使ってパワーアップさせてる所だよ」

そう、今鈴とレナードはアマルガムの本拠地にいる。そして、鈴のIS”甲龍”はアマルガムの技術者によって改良されている所だった。

「技術者って言うけどねアンタ・・・あれの何処か技術者なの・・・？」

私がそう言って指さす方には割烹着を着ている女性と、何故かメイドの格好をしてるロボットが整備をしているのだ。

「琥珀の技術は凄いでー!!」

そう、豪語してるレナードを見て私は不安が更に加速していく。だって・・・琥珀はいつも騒動を起こす要因なのよ。私と一夏はあれに何度巻き込まれたことか・・・

くおまけっ)

「一夏」

「なんだ？ 箒」

「今日は休みだろう。私の部屋にこないか？」

「うん。今日は外に出ようとしてただけだな・・・お前の部屋で何をするんだ？」

「それはな・・・エターニアと一緒にやらないか？」

「ここで言うエターニアとは”テイルズオブエターニア”に事を言っている。」

「おう、別に構わないぜ」

俺は箒の部屋に行く。部屋は箒以外いないようだ。

「では早速・・・」

この後、エターニアで感動したり、俺の部屋からPSS3を引つ張つてヴェスペリアをやったりとして一日を過ごしていた。

「やっぱり主人公って言ったらユーリだよな」

「いや、リッドだろう」

俺と篤は主人公の事で軽い言い合いをしていた。まあ、ここに他の連中がいると色々とかオスになるんだよな。ま、俺の目標は当面はユーリだな。あのカツコよさに余裕、俺もしくは原作の俺に欲しいものだけ……

「一夏。お前ではユーリにはなれんぞ」

「な、ないおう〜」

やっぱり平和っていいね。原作の俺じゃ考えられない事だよ……

第21話・とある休日の一日。 宗介、ラウラ（後書き）

休日ってどうして過ごしてるんですかね原作の一夏達は。今回はいろいろとつつこみ所がありますね。まあ、この小説ですから。

とりあえず、休日編はここで終わりなので当面はデュララは出てこないでしょう？

次回はグラハムと千冬のそのあとの話です。こんどはまた違う作品の登場キャラがでる予定です。

第22話・とある休日、大人達の夜（前書き）

少し報告。今回の話をするために何か所か修正を加えました。といっても辻褄を合せる程度ですが。まだまだ矛盾してる所があるかもしれないので自分もなるべく探すようにします。

今回はISの開発理由が明らかになります。この小説は原作100%無視しているために開発理由も大分違います。あしからず。それと、今回にようやく東とゲストが登場します。

第22話・とある休日、大人達の夜

さてと、今回は未成年の登場は無いのであしからず。

「千冬、ここは・・・？」

「そうか、グラハム。お前は一応外国人だったな。ここは居酒屋だ、いわばジャパニーズバーだ」

さてと、今回はの視点はこの二人・・・ではないのだが。今二人は居酒屋”剣製”の前にいる。時間は当然夜だ。

「おつ。いたいた」

すると。グラハムと千冬の前にクルツとマオが現れた。二人とも格好は普段着である。

「やはり、山田先生は駄目だったか」

「うん。流石に出張じゃしょうがないわよ。やまっちも悔しがってたわね」

「そうだな。今度、山田先生に何かしてやるとするか。それより、そろそろ中に入るう。あいつらはもういるだろっからな」

「そうね」

早々と店の中に入って行く千冬とマオ。その光景に少し着いて行けない男が二名。

「何と。私が置いて行かれてるだ」と

「俺もとはな・・・んじゃ俺らも中に入るうぜ」

「そうだな」

そう言ってクルツとグラハムも中に入って行く。

「予約している織斑だが」

「はい、織斑様ですね。既に来ているお客様が先にいますので・・・席はあちらになります」

「ありがとうございます」

千冬達は指定された席に向かうと、そこには既に何人かが座っていた。

「お、やっと来たか」

「先に頂いてるわよ」

「皆さんお久しぶりです」

「やつほ、ちーちゃん、まーちゃん」

先に来ていると思われる女性四人千冬達に気づいたらしく、声を掛けてきた。

「久しぶりね愛穂、桔梗」

「それに小萌先輩も」

「あれあれ。私は」

どこか、ウサミミが似合う女性が千冬に抱きつこうとしたが千冬はその前に……

「お前は相変わらずだな束……」

「いたいいたいよちーちゃん。頭割れるううう」

千冬のアイアンクローが炸裂していた。

「もうちーちゃんったら。頭がピアになる所だったよ……」

いきなりの出来ごとにグラハムとクルツはその場を動けずにいた。その二人を見た千冬は。

「あーすまん。コイツは篠ノ之束、私の親友の一人だ。座ってる皆も私の親友で、ジャージを着ているのは黄泉川愛穂、知的美人っぽいのが芳川愛穂。そして、一見小学生に見えるのが小萌先輩だ」

「よろしくじゃん」

「ちょっと千冬。ぽいって何よ？」

「私は小学生ではないですよー」

何て三人が言ってる間に千冬、マオ、グラハム、クルツは椅子に座る。

「まだ名前を行って無かった。私はグラハム・エーカーと言う」

「それにしても皆美人だな、俺はクルツ・ウエーバーだ」

二人も自分の名前を教える。二人を興味津々に見つめる四人。

「マオ、この人達は一体？」

「ああ。私含めて五人は同じ大学の同じゼミだったのよ。本当は後一人いるんだけどね」

「成程な」

「ねえねえちーちゃん、まーちゃん。ハム君とくっ君とはどういう関係？」

「この二人は今、IS学園の教師をしているのよ」

マオは学園都市組にグラハムとクルツの説明をする。その後は軽い自分の紹介などを話し、お酒と料理を注文をする。

「ふむ、居酒屋とは中々落ち着くな」

「俺も居酒屋に来るのは初めてだな」

初めての居酒屋にそんな感想を漏らすグラムとクルツ。

「それにしても、こうして飲むのも久しぶりだな」

「そうだね〜おっと、これおいし〜」

「まったく、束は変わってないわね」

「こうしてみると、とてもISを開発した人物にはみえないじゃん」

「ちょっと愛穂。ISの基礎理論は私が開発したのよ」

「武装は私が考えたわよ」

「マオ、それは私もだぞ。小萌先輩はISの動作を開発してましたよね」

「そうですね。それにしても懐かしいですね」

小萌の一言で女性陣が何かに思いふける感じになる。そこでクルツは女性陣にある質問を試してみる。

「何だか話しを聞いてるとマオ達はISの開発に関係していたのか？」

「そうとも言っけど、私や千冬や愛穂は殆ど何もやってないわよ。やったのは束と桔梗と小萌だけ」

「そうだな。しかし、今思えばあの頃の私達はまさかこうなるとは思ってもしいなかったな」

「まさか、自分達の研究テーマが世界を驚愕させるとはあの頃の私達は誰も思っていないじゃん」

「そうですね、クライド先生も驚いてましたもんね」

まさか世界を驚かした発明が大学の研究テーマだった事を知ったクルツは「あはは・・・」と苦笑いするしかなかった。

「ところで小萌殿。そのクライド先生とは？」

「クライド教授とはクライド・ボーデヴィツヒ。つまり、ラウラの父親だ」

グラハムが気になったので小萌に聞いたのだが、隣に座ってる千冬が代わりに答えた。

「ところで、ラウラちゃんはどっしてるのでしょうかね」

「あのやんちゃ娘の性格じゃ余り変わっておらんじゃないんじゃない?」

「言ってるわね。あの子の突撃を思い出すと腹筋が痛くなるわよ」

「いやいや。ラウにゃんはきつととても可愛くなってる筈だよ」

四人のはラウラの事を知ってるようで、各々ラウラの現在の予想を言っている。

「なあマオ。お前って昔からラウラの事知ってたのか？」

「まあね。教授がよく連れてきてたし。それに一夏と箒もその時から知ってたわよ」

「あの頃の一君と箒ちゃん。もえちゃん同じ位の背で可愛かったな」

「それにしても。箒と一夏がIS学園に入るなんて全く想像してなかったじゃん」

「二人はそうだが・・・お前達、ラウラなんだがな・・・今IS学園にいるぞ、ドイツ代表候補生としてな」

「それ本当なの・・・って考えていれば教授の娘だものね」

「言われて納得するじゃん」

「えっえっ。するとラウにゃんは今箒ちゃん達と一緒にいるの？」

「わあ〜久しぶりに会いたいですね」

「相変わらず・・・いや。それ以上に暴走してるぞ」

千冬は本当にやれやれと言った表情をしながら言った。

「それって新しく入った男の子のせいなんですか？」

「ええ。相良って言うんですけどね。これがまた一夏と違った意味で大変ですよ」

「そうなんですか。私のクラスにも上条ちゃんっていういつも問題に首を突っ込んだり、その度に怪我をしたり。あげ句には毎回違う女の子が周りにいるんですよ」

その上条と言う男子の事を気になった千冬とマオは更に小萌に聞く。

「上条ちゃんですか？上条ちゃんは・・・」

ここからは皆さんもご存じ、上条伝説の内容なので割愛させていただきます。

「なんと・・・原作の一夏より凄いな・・・」

「それがまさにフラグ一級建築士ってわけね」

二人は上条当麻と言う人物の違う意味で言った恐ろしさを実感した。

ここで、ある事を気になったクルツが小萌に質問をする。

「小萌って何処かの教師をやっているのか？」

「はい。私と黄泉川さんと篠ノ之さんは学園都市で教師をやっています」

「私は小萌先生と同じ学校で教師と治安組織のアンチスキルをやっているよ」

「私は〴〵柵川中学で教師をやっているんだよ」

「今考えたらここで何もやってないの。桔梗だけじゃん？」

「い、いいですよ。今仕事はしたくないのよ」

二ト発言をしてしまう芳川桔梗であった。

「それにしても、東が教師とはな。本当に出来てるのか？」

「もう〴〵ちーちゃんまで言うの〴〵。ちょっとグッ君も何か言ってよ」

「そこで私に振るのかね！」

「あはは。グツ君の反応おもしろい」

「グラハム言ってやれ」

「グツ君」

「・・・ダリル、ワード、ジョシユア、カタギリ。私はガンダム以前に女性にやられる・・・くっ!!」

グラハムは千冬と束に言い寄られ。その何とも言えない威圧に屈してしまうがの如く酒を飲み始める。

「グラハムの奴大変だな」

「そういえばクルツ先生。私達の知り合いに物凄く似てるじゃん。特に声とか」

「ん・・・？そんなに似てるのか？」

「そうですね。確かにクルツ先生、ニール先生に似てますね」

「へへそんなに俺に似てるのか。一度そいつに会ってみてえな」

クルツは自分に似ているニールと言う男に会ってみたいと思ったの

である。
ここからは酒が入り、各々愚痴を言い始めたのだ。その後、時間的に出ないと戻れない時間が来たので皆は会計を済ませると店の外に出た。

「あれ〜ちーちゃんが三人いるよ〜」

「お前は飲みすぎだ」

「あはは。相変わらず東は酒に弱いじゃん」

「笑いごとでは無いぞ愛穂。コイツはどうする?」

「私は〜篝ちゃんと一君とラウにゃんにあいたいよ〜」

「って言ってるわよ。何なら連れて帰ったら?」

「でも、東も学校があるでしょ?」

「明日も休みですから大丈夫ですよ〜」

「はあ、仕方ない。東は私達が持ち帰るわ」

「そうか。んじゃ東のことは任せたじゃん」

「それじゃあまた一緒に飲みましょうね〜」

愛穂、桔梗、小萌の学園都市組はその場から立ち去って行った。

「中々の人達であったな……うっ」

「無理をするなグラハム。本当はもう一人いるのだがな……」

「それって……」

「いつか紹介するわ。さてと、私達も帰るとするか。クルツ、アンタは束を担ぎなさい」

「何で俺が？」

「あんた、今の状態のグラハムに背負わせる気？」

クルツはグラハムを見る。グラハムは無理に飲んだせいで今にも爆発しそうな表情をしていて、クルツは背負わせるのは無理だなと思った。

「あいつも意外に酒弱えんだな」

そう言いながら四人プラスクルツの背中で寝てる束も帰るのであった。

「全力全壊だぜ」

クルツの背中で物騒な事を呟く束ねであった。

第22話・とある休日、大人達の夜（後書き）

はい、ゲストとはある魔術の禁書目録から科学サイドの大人達でした。今回のゲスト達は千冬やマオと同じ大学出身という設定なのでもしかしたら登場がちよつと多いかもしれませんが。あとは大学の同期はもう一人出す予定です。その人物もまた違う作品の人物の予定です。

次回、篝の姉束がIS学園にやって来る。そこで彼女がとつた行動はいかに!!

もう、ISじゃあないですね。何回かシリアスを書くことしたけど何故かしようもないネタしか思いつかない。いつか楯無対静雄の戦いを書いてみたい・・・こんな感じです、今の自分は。

ではではまた次回で。

第23話・束、IS学園に立つ。(前書き)

第二次スパロボZを買い。クリアしてまいりました。感想としては前半、前哨戦と言った感じで次の後半が本番のような感じでした。それでも面白いですけどね。

ISもいつかスパロボに参戦・・・は厳しいかな？

今回から登場人物の一人にカウントした束さんの話です。ここの束は原作の束よりはチート化はしません(笑)

第23話・束、IS学園に立つ。

「ふむ、昨日は一夏とずっと部屋に籠っていたからな。今日は外に出るとするか」

昨日は一夏とずっと遊んでいたからな。まさか一日中ゲームしているとは私としたことが・・・まあ、たまになら良いかな？

「一夏はまだ寝てるか・・・」

ちなみに私は今、一夏とレナードの部屋にいる。当然一夏と一緒に寝たからである。あつ、勿論そういう意味では無いからな。私と一夏は別のベットで寝たからな・・・
つてそうじゃない。私は寝てる一夏を起こさないように部屋を出て寮の食堂に向かう。

「・・・」

「あゝたゞまゝがわ〜れ〜る〜」

食堂に着いた私が目撃したのは・・・テーブルで頭を抱えながら唸ってる私の姉、篠ノ之束だった。

「姉さん。ここで何をしているんだ？」

「あゝ筭ちゃん。いやね、昨日ちよつとお酒を沢山飲んじやって・
」

「姉さんはお酒をあまり飲めないの何故に？」

「うゝだって。昨日は久しぶりに皆とあつたんだもん・・・」

「はあ。それより姉さんは朝食は取ったの？」

「うゝん。まだだよ」

「私が何か頼んでおこうか？」

「うん。よろしく」

まったく。私の姉は自分でお酒が飲めないと知っているのにいつもあそこまで飲んでくるのだからな・・・まあ、いつものところか。私は自分の分と姐さんの分の朝食を手にして席に着く。ちなみに朝食はシャケ定食だ。

「あゝやっぱりご飯はおいしい」

「そうだな。それより姉さん。姉さんは今学園都市にいたのだったな？」

「そだよ。今は私も立派な教師なわけです」

姉さんはエツヘンと胸を張ってそう言う。正直私はこの姉が教師になっっている事に未だに疑問に感じていたりしている。

「篝ちゃん。それはどう言う意味かな？」

「そう言う意味です」

「なんと」

この姉のテンションはどうしてこう高いのだろう。私はつくづくそう思う。それにしても休みの朝だから食堂が静かだ、そのせいで姉の声が一層響いて聞こえる。

「それでねそれでね。最近、私の所に来たんだ」

「何をです？」

「ガンダムが!!」

「・・・は？」

「だ・か・ら。ガンダムだよ。あのアニメのガンダム」

私は一瞬思考が停止した。いや、ガンダムは既にこの学園にいるのだからそこには驚いていない。私は別の所に驚いている。

「姉さん。そのガンダムは何処に現れたのです？」

「学園都市の第二十三学区だよ。あの時は大騒ぎになったよ。それで、色々あって今そのガンダムは私の研究室にあるんだ」

「ちなみに、そのガンダムの名前は・・・？」

「”デュナメス”って名前だよ。ほら、新しいガンダムシリーズ、ガンダム〇〇に出て来る奴だよ。あと、そのパイロットも今学園都市にいるんだよ」

それって、もしかしなくてもあの”ロックオン・ストラトス”だったよな。本物の・・・

「まあ。この話はまた今度じっくりとだね」

「え、ええ」

「それにしても、今日は静かだね」

「姉さん。今日は日曜日ですよ。皆寝てるのでしょ」

「そっか。じゃあ私は早速学園を探索してきますか」

「ちよつ、姉さん!!」

姉さんは食器を返すと行きよいよ何処かへ走り去って行き、私の呼び声はむなしく食堂に響く。

「どうした篠ノ之？」

「織斑先生……」

「いい。どうせ束だろ？」

「はい……」

「まあ。あいつはここに来るのは初めてだし仕方が無いな。私の方でも見つけといたら捕まえておくからな」

「ありがとうございます」

私は織斑先生に挨拶をすると姉さんを追いかけて走る。

「何処に行ったのだ姉さんは？」

私はまず校舎を探すことにした。今日は日曜日という事から教室には誰もいない、私は一階から順に探し生徒会室の前を通り過ぎた時に中から声が聞こえたので私は足を止めてそれを聞いてします。

「楯無会長。昨日の事を説明してもらえますか？」

「宗介がまさか静雄君の知り合いだったなんて私予想外だったよ」

「それは自分でもあります」

「そうだね。私と静雄君は・・・ライバルかな？」

「ライバル？」

「そう。私は静雄君にずっと戦いを挑んでるのよ」

「池袋最強と言われてる平和島静雄にですか？」

「そう。そして勝った暁には私は静雄君に・・・愛の告白をするの
!?!」

「愛!?!？」

「そう、愛よ!?!」

私はとんでもない事を聞いてしまった。学園の生徒会長がまさか池袋最強と有名なあの平和島静雄の事が好きだとは・・・それに相良の奴は何て言ったらいいか分からない表情をしてるな。まあ頑張れ相良、私は姉を探す事を再会させよう。

「校舎にはいないとなると、今度は寮を見てみよう」

今度は寮で探すために私はまた走る。そして、寮に着いた私が見つけたのは・・・

「久しぶりだねラウにゃん」

「のおお。東お姉ちゃん。なんぞここにいるの」

姉さんにハグされているラウラを見つけた。

「ほ、篝。ぼすけてくれ」

「今は篝ちゃんに捕まるわけにはいかないのだ」

「あつ、姉さん!!」

姉さんがラウラを抱きかかえながら逃げたので私は直ぐに追いかける。だが、ちょっとした先の所に眠そうな顔をした一夏があるいて来たのだ。

「ついでにいつくんもゲットだぜ！」

「えっ、ってえええ。何なに何ですか？」

何と姉さんはISらしき何かを展開をすると一夏を片手で抱き抱えて尚私から逃げるている。

「よっしゃ〜ラウにゃんといっくんがいれば無敵なのだ〜」

姉さんが私の方を向きながら角を曲がる。すると、姉さんが何かにぶつかった様で、床に倒れてしまう。

「いたたた・・・」

「済まない・・・ってあんた誰だ？」

ぶつかったのはどうやら早乙女だったらしい。早乙女が姉さんに手を差し伸べる。

「うわゝあなた物凄く”綺麗”ね」

「俺は男だあああ」

姉さんは早乙女が気にしている事を言っつてしまい。早乙女は綺麗と言われた事で大声をだしたようだ。

「アルトかって何でここに束さんがいるんだ？」

「一夏お前。この人の事知ってるのか？」

「ああ。この人は篠ノ之束さん。篝のお姉さんだ」

「初めましてゝ篝ちゃんの姉の篠ノ之束です」

「あ、ああ。俺は早乙女アルトだ。篠ノ之……篝か。丁度よかつた」

「私に用か？」

「ほら、こないだの”紅椿”の改良会議。この後やるみたいだからさ、お前を探してた所だったんだ」

「なになに、紅椿の改良？」

あゝあれか。私としては今までのので良いのだけれどな、改良は……

「私もそれにまかせてまけて〜」

「でもな・・・」

「大丈夫だぜアルト。東さんはISのコアを開発した人物で、ISの開発者の一人何だぜ」

「おつ。専門家所が作った本人の一人か。これなら何とか案がまとまるかも知れない」

「うんうん。東さんにまっかせなさい」

そう言いながら早乙女の後について行く姉さん。ラウラを抱えたままで、少し茫然としていた私と一夏はその後を直ぐに追う。

「おつす相良。篠ノ之・・・二人を連れて来たぞ？」

「篠ノ之二人？」

「ほいほい。篠ノ之二人の内の一人の東さんだよ」

ああ、やっぱり皆ぼかん状態だよな。ちなみにここは整備室で、いるのは相良、セシリア、シャルロットの三人だった。

「篠ノ之、この人は？」

「私の姉だ」

「まさか。篠ノ之博士ですか？」

「何でここに居るの？今篠ノ之博士は行方がつかめないってフランスの政府が言ってたのに・・・」

「シャルロット。それは姉さんは今、学園都市にいるからな」

「あゝそれなら納得」

学園都市と言う場所は世界中から注目されてる所の一つだ。更にあそこは外部との交流が余りないので中の現状を知ることが中々出来ないのだ。

「じゃあ。ちょっと紅椿の改良プランを見せて」

姉さんはこないだまでのと。今やっていたらうソレを姉さんに見せる。姉さんは「うんうん」とか「ほおほお」とか言いながら一枚一枚見る。

「凄い・・・私が思いも付かない機能とかあるよ・・・でも、何とか出来るかも」

「本当ですか？」

「うん。でも、これは流石に此処じゃあ改良は無理かな？」

無理と言われて少し落ち込む皆。皆どれだけ私の紅椿を改良したいんだ？

「でも、私の研究所なら何とか出来るよ。向こうにはきーちゃん達がいるから」

きーちゃんって桔梗さんの事か。あの人も学園都市にいるんですか。

「てな訳で篝ちゃん。紅椿、しばらく預かってても良いかな？」

「もう、どうにでもなれです」

その時整備室のドアが開かれ、刹那が入ってきた。

「すまない、遅れた」

「いや。今丁度解決した所だ」

「どう言う事だ？」

「東さんが来てたんだ」

私は自分の姉の事を刹那に教える。

「そうか。俺は刹那・F・セイエイだ」

「お、おお〜君が刹那君か〜ふむふむ。成程ね〜」

姉さんが刹那の事を興味深く見る。さっきのあの発言が物凄く気になりだしてきた

「姉さん……」

「おつと。そろそろ戻らないと明日の授業の準備してないんだっただじゃあ私はこれで帰るから、バイバーイ」

聞こえなかったのだが姉さんは勢いよく部屋を飛び出して行ってしまった。

「なんか。まるで嵐の様な方ですわね」

「そつだな」

「俺も同感だ」

「でもよかったじゃねえか篤」

「そう・・・なのか？」

その後は整備室で自分の機体のチェックや、昨日の池袋の話などを
して一日が過ぎて行った。

「もう行くのか束」

「うん。でもやっぱり今でも信じられないな。あれがここまで来る
なんて」

「そうだな。ま、私としてはお前が教師をしているのが一番の驚き
なのだがな？」

「も〜私だってちゃんと出来てます」

「ふっ。まあ、お前なら心配いらないか」

「そうそう。私は出来る子なのですよ。じゃあ行くね。まーちゃん
やくっ君やハム君にはよろしくって」

「ああ。桔梗や愛穂や小萌先輩にもよろしくと言っておいてくれ」

「りょうかい〜じゃあね〜ちーちゃん」

束は手を振りながらIS学園を後にしたのだった。

第23話・束、IS学園に立つ。(後書き)

紅椿の改良フラグにあの男の登場フラグをたたせました。なので早速フラグを回収させようかと思いつき、次回からまた場所が違ふ所になりまかも。章としては宗介、ラウラ、友人を作る。という感じで宗介とラウラをいろんな奴と出会わせてみたいな感じでな感じの予定です。

あと、千冬の過去を描いた話も始めました。そっちの方はゆっくり更新ですがよかったら読んでみてください。

第24話・一日の風景（前書き）

今回はシャル視点で一日の流れを描いてみました。

それにしても第二次スパロボZ楽しいですね。後編でフルメタ参入を期待したいですが、厳しそうですね・・・

第24話・一日の風景

こんにちは、シャルロット・デュノアです。今日は僕達が通ってるIS学園での一日を紹介してみようかなと。

IS学園とはその名の通り、ISを動かす技術を学ぶところです。なのでこのIS学園は世界中から色んな人達が通ってます。そう言う僕もフランスから来ました。

しかし、ISと言う物は何故か女性にしか反応しないため自然と女子高化しているのですが、僕達の歳に世界で由一ISを動かせる男子が現れました、一夏の事です。

それでも、IS学園は女子が多勢、男子一人と妙な学校になりました。しかし、つい一月ちよっと前に男の子が更に一人増え、そこからは次々と色んなことが起こり、男子は五人に増えました。

でも、基本的な事は変わらず学園は徐々にISの抗議のレベルを上げて来ました。

ここで専用機について少し触れてみようと思います。専用機とは名前の通りI自分専用のISの事を言います。そして、それを持つている人の事を専用機持ちと言います。

専用機持ちの条件はかなり厳しく、尚且つ国家の代表でなければなりません。僕もこう見えてフランスの代表候補生です、凄いですよ。

専用機持ちの数は一年で七人。上級生で二、三人らしいです。どうやら今年の一年生は異常との事見たいです。

なので、専用機持ちはかなり優遇されますが、その分の重責は結構重かったです。だって国の威信をなんと見たいな、わかりやすく

言つとオリンピック選手見たいな感じです。

「ふう、何か思いつめちゃいそうだった・・・よし。朝練に行こう」

僕は少し頭を振ると、隣でいい笑顔で寝てるラウラ・ボーデヴィツヒを起こす。ラウラも一応ドイツの代表候補生なんだよ。今更だけど。

「うん。あと一年」

「それじゃあアーバレストは僕が作っちゃうよ」

「むゝそれはいかんぞ」

ラウラを起こした僕は運動着に着替えると訓練アリーナに向かう。ちなみに今の時間は六時半だよ。

アリーナに着くと一人の男の子が立っていた。髪は日本人特有の黒、しかし髪はおおざっぱに切られていて顔には十字傷。顔は普通より上で体格はがっしりと鍛えられてる感が分かる体型の男の子。相良宗介君だ。

相良君はIS学園の近くにある陣代高校と言う所の学生で、学年は僕達の一個上の二年生。何で彼がIS学園にいるのかと言うと、陣代高校の生徒会長さんに強制にここに来させられたと言っていた。

「おはよう、宗介君」

「ああ、デユノア。ラウラはまだ眠そうだな」

「私は大丈夫だぞ」

「そうか、なら早速・・・」

さて、僕達が朝早くアリーナで訓練する内容は「ここがIS学園だから普通はISの練習だろう？」と思うでしょう。でも、僕達訓練するのは・・・

「よし、まずは回りをランニングだ」

ネズミ見たいな。どこかのテーマパークにいそうなマスコットの中に入ってる僕達三人。そう、僕達が訓練しているのはボン太君と言う小型ASの訓練なのだ。

ASとは？と思う人もいるよね。ASと言うのは七メートルクラスの人型ロボットの事を言い。少し前に大きな事件があったことが有名な、それを小型のしたのがこのボン太君。

このボン太君は宗介君が昔に大量に作ったの良いが全然売れなく、それが余っていたので僕達にくれたみたいだ。僕はラウラにいつの間にか頼まれてたみたいだったけど。

「ふもふもふもふもっふもっ」

「ふもふもふもふもっふもっ」

この掛け声は、ボン太君に乗ると外のスピーカー音声は何故か「ふも」系統にしかならず。これを切るとシステムがダウンすると言う致命的な事になるので切るに切れないのだ。最近はなれて来たんだけどね。

それにこのボン太君。外見は着ぐるみなのに中身は機械だらけ。正直、ISより動かすのが大変だ。最初はAIに補助してもらっていたけど最近はずいぶん動かせるようになってきた。

「うわぁー!!」

その瞬間。僕は操作をミスをして思いっきりこけてしまった。このようにASは動かすのが大変だ、宗介君は長年ASに乗っているだけのこともあり普通に走っている。ラウラはおかしいからまあいいや。

このように、ISでは意味ないランニングもASになると一つ一つの動作で操作をしなければ行けない。だからボン太君を着てのランニングは言わば、操作になれる事を前提なのだ。

「ふもふもふも？（大丈夫かシャル？）」

「ふも、ふもふも（あつ、うん大丈夫）」

ランニングは一时间きっちり走る。正直、ISの授業より大変だ。

それよりも何で僕達三人がボン太君に乗って訓練しているのかと言うと。こないだ現れた”マスターボン太君”の事件。あの時、僕やラウラ、それに宗介君が完膚無きマスターボン太君にやられてしまったのだ。その後の宗介やラウラはかなり悔しがっていた、僕も当然悔しかった。

それが理由で僕達は暇があればボン太君での訓練を重点的に置くようにしているのだ。

「よし、朝練はこんなものだな」

「そうだな。私はお腹が空いたぞ」

「じゃあ。食堂で朝ごはんだね」

僕達はボン太君をしまつと食堂に向かう。ここでボン太君は何処にいった？と思う人もいるでしょう。

ISには元々待機形態と言うのがある。形態は人それぞれなのだが、僕がボン太君を渡された時あるカードを渡された。カードの名前はまだ無いみたいなんだけど、このカードは何とISを仕舞い込める優れものだったし。それだけでは無く、ボン太君も仕舞い込めるのだ。僕はメチャクチャ驚いたよ。

出すときはカードに表を触れると収納してある物の名前が浮かび上

がり、それに触れると触れた奴が現れると言う仕組みだ。ラウラは叫んで出してる時があるからもしかして音声機能もあるかもしれない。後で説明書かアスベルに聞いてみよう。

カードは持ち主それぞれのカラーリングがしてあるんだ。僕のはオレンジ色で、ラウラは銀色、宗介君は赤と銀の二色、セシリアは青と白の二色。きっと皆自分の機体のカラーをイメージしてるんだね。

食堂に着くと僕達は早速食堂のおばちゃんに注文を頼む。頼んだのはシヤケ定食、最近僕はこれが好きなんだよね。日本に来たのなら和食を食べなきゃ損だよ、それに宗介君とラウラも朝から生姜焼き定食を頼んでいる。本当に好きだよ、この二人。

僕は席を探していると、朝ごはんを食べている筈と刹那を見つけたから僕は二人の所に向かった。

「二人ともおはよう」

「シャルか、おはよう」

「ああ」

黒髪をポニーテールにしている女性は篠ノ之箒。箒は大和撫子を連想させる子で、こないだ来た篠ノ之束さんの妹さんだ。今は剣の稽古をした後の様で稽古着の格好をしている。

もう一人の男の子は刹那・F・セイエイ。何とあの機動戦士ガンダム00の主人公なのだ、ここまで言えば分かるでしょう。刹那は宗君と同じような感じで、余り喋らない。でも、最近は話しかければ会話をするし、割と普通の男の子と同じ感じになってきた。

二人は戦闘スタイルが似ている事もありよく一緒に稽古をしている。本当は一夏もいる筈なのだが・・・きつとまだ寝てるんだろっな。

「篠ノ之に刹那か。お前達も訓練か？」

「ああ。私の紅椿も姉さんに奪われてしまったからな。することが少なくなってしまったが」

「まあ。あれはしょうがないな」

宗介君とラウラも席に着き、そこから黙々と食べる。僕も黙々と食べ始める。あっ、このみそ汁おいしい〜

「よう、おはよう」

「おはようございます」

今度は二人の男女が現れた。女性の方は僕とは違う形の金髪で感じがお嬢様感を出しているのはセシリア・オルコット。彼女はイギリスの代表候補生であり、前回のタッグトーナメントの優勝者の一人である。

男性の方はこれはまた綺麗な長髪でもう女の子じゃない？って感じの・・・

「おい王子。今変なこと思っただろ？」

「え・・・何の事かな・・・？」

本当に姫・・・早乙女アルトなんだけど。アルトは見た感じ、姫のイメージが強いから僕は姫って言ってるんだ。これは鈴も言ってるんだけどね。

「上の文の事だろうが」

はあ、その代わりに僕も王子って呼ばれるんだけどな。僕は女の子なのに・・・

「なら、俺は男だ」

まあ、この話は置いておいて。最近、この二人はよく一緒にいる所を見る。訓練も二人で高機動の練習をよくやったりしてるしね。ちなみに姫はマクロスFの主役だよ、しかも二股の。いつか刺されちゃえばいいのに・・・

「俺は二股なんか掛けてねえよ」

もう、勝手に心の中を読まないでくれるかな。二人も互いに向き合

うようにして座り、手にしていた朝食を乗せてるトレイをテーブルに置き、食べ始める。ちなみに二人とも僕と同じシヤケ定食だ。

「ふう〜危うく寝過ぎす所だった〜」

「全くだ」

「あんだ達は寝すぎなのよ」

そう言いながら今度は二人の男と一人の女の子が現れた。一人は織斑一夏、原作ではここにいる僕を含める女の子が好きな男性。もう一人はレナード・テストロツサ、テツサのお兄さんだ。

そして、元気そうな女の子は鳳鈴音。彼女は中国の代表候補生だ、最近レナードと鈴のセットもよく見かける。やっぱ二人は・・・

「付きあって無いわよ（ないさ）」

もう、何で僕の心を読むのかな。でも、二人はよく、ねえ・・・

朝ごはんを食べた後は僕達はそれぞれのクラスに行く。教室に着くとクラスメイトの皆が挨拶をして来る。

「おはよう。今日はソースケは何も・・・大丈夫そうね」

そう言うのは千鳥かなめ。宗介君と同じく陣代高校の生徒で宗介君と同じ日に転入してきたのだ。性格はさっぱりしていてリーダーに向いてる感じを持つてる。

「俺はいつも問題は無いが？」

「アンタが昔にして来た事を考えてそんな台詞が出るのかしら？」

宗介君。陣代高校では色んな事をやらかしていたらしい。主に爆破とか銃の発砲、拳銃に細菌兵器を持ちこみソレを感染させたりと。うわぁ、今思ったらその学校って凄いな・・・

さて、ここからは授業だ。IS学園なのでISに関しての授業は毎日あるが、流石にそれだけでは無く他の普通の授業もやる。原作とかなら日本人とそれ以外の国の子と分けて授業をするのだが、ここは一括で日本と同じ授業体型で行っている。だから、僕は日本史、古典、現代文が苦手だな。セシリアも僕と同じ教科が苦手のようだ。

「では相良、ここの文を現代語訳で訳してみる」

「・・・分かりません」

ちなみに今の授業は古典。宗介君が一番苦手な科目である。

「しょうが無い。ボーデヴィツ・・・」

「分かりません!!」

「自信満々に言うな！」

教科書で頭を叩かれるラウラ。ラウラも古典を・・・と言っかラウラが得意な教科って何だろう。あっ、体育か。

「まったく。では織斑・・・」

「俺も分かりません！」

そう言えば一夏も得意な科目ってあるのかな？

こんな感じで一番前の席に座る三人が高確率で先生たちに指されながら授業は消化していく。昼休みとかは他の学校と同じだから以下省略だね。

午後の授業はISの実践の訓練。今日は一組と二組合同の日なのでいつものメンバーが全員いるのだ。

本来なら専用機持ちがISを展開して見本を見せながら他の子達に教えるのだが、今いるのはレーバティン、ガンダムエクシア、バルキリー、オーバーフラッグ。あれ？ISの授業なのにISがいないんだけど。それに、いつも思うんだけど英語の教師のグラハム先生はどうして高確率でいるんだろう。

「それは、私が暇なのだよ」

また、僕の心を読まれたよ・・・

「では、この四機の動きを見て各自動きのイメージをしろ」

そう言うのは我がクラスの担任の織斑千冬先生。織斑先生はかなりの有名人で尚且つクールビューティーなので人気が物凄い。他にも理由があるけどそれは原作を知ってる人が大いから省略ね。

「エクシア。目標を駆逐する」

「それはどうかな？アル」

「はっ。俺のスピードに付いてこれるかよー！」

「見よ、これがグラハムスペシャルウウ」

四人は自由に戦闘をしている。正直、あんまりISと関係ないよね。その後は各専用機持ちが他の生徒に訓練用ISに乗せて指導する時間等がある。

でも、噂によれば今度、学園にいる生徒全員にISが配布される見たいな噂が流れてるんだよね。それが本当だったら専用機持ちとか余り意味が無くなってくるなって思った。

こうして一日の授業が終わった。しかし、僕達はある事に疑問を抱いた。

「ねえソースケ。テッサはどうしたの？今日は学校に来ないし、さつきから連絡着かないし」

「いや、俺は何も聞いていないが。千鳥、君は何も聞いてないのか？」

「なんも言つて無かつたわよ」

そう、レナードの妹のテッサが来ていないのだ。これが唯の休みなら騒ぐほどではないのだけど、その瞬間、宗介君の携帯に一つのメールが入った。

「この女は預かった」

メールはその一文とテッサが掴まってる写真と、何処の地図が一緒に送られてきた。

第24話・一日の風景（後書き）

さて、次回はさらわれたテッサ、それに火がついた宗介とラウラはボン太君小隊を結成させる。まだ乗ってないあの子やあの子がボン太君に乗り、暴れる。そんな回の予定です。

第25話・結成、ボン太君小隊（前書き）

やっとボン太君小隊が出せた。

第25話・結成、ボン太君小队

「なんだってえええ!!」

「デユノア?」

「ごめん、なんかやっておかないとって思って」

前回までのあらすじ、シャル視点で一日を見ていたらテッサが拉致られていました。

「くっ、まさか大佐殿が・・・もう戦いが終わっていたからとはいえ油断していた!」

「ソースケ、それよりテッサを拉致した奴ら、地図の下に何か書いてあるわよ」

宗介はメールの一番下の方を見る。そこには見覚えのある字が書かれていた。

「竜神会？」

「それって、去年私とお蓮さんが攫われた時のやつらじゃない」

「成程、これで大方理解した」

説明しよう。竜神会とは去年、美樹原組と縄張り争いをしていた組の名前である。組とはクラスとかではなく、強面のの人達の事である。

そして、その当時。美樹原組の一人娘、美樹原連とかなめが竜神会に攫われてしう事件の事である。結果はまあ、皆さんの想像にお任せします。

「ああ、そのようだ」

ここで、まったくわからないラウラ達が聞いてきて来たのでかなめは簡単に説明をする。

「では、今回テッサをさらった輩は去年相良たちにやられた奴等の仕業なのだな？」

「その通りだ篠ノ乃」

「でも、どうするのよ。さすがにISを使うわけにはいかないし・

「・

そのとき、教室にテッサが拉致されたことを聞きつけたレナードが現れた。

「おい、僕の可愛い妹が拉致されたとはどういうことだ!？」

「あゝうるさいのが来たわね」

「うるさいのは余計だ。それよりテッサは無事・・・」

その瞬間、宗介はゴム弾入りのショットガンをレナードの額に打ち、レナードはその場に倒れる。

「少し静かにしている」

「ソースケ、あんたねえ・・・まっ、今はそれどころじゃないしね」

「そつだ。これが中佐殿に知れたら・・・」

宗介はマデューカスにこのことを知られて、とんでもない形相で言い寄られる事を想像して顔を真っ青にさせる。

「これはどうにかしないと俺が中佐殿に殺されてしまう、どうした

ものか……」

宗介は本当に真剣に考える。それは周りが声をかけられないくらいに……

「やはり、これしかないか。俺は少し家に戻る」

「あつ、ちよつとソースケ！」

宗介はあわてて教室を飛び出していった。それと入れ替わるようにクルツが教室に入ってくる。

「テッサが誘拐されたって、それマジで？」

「はい、本当の事です」

「こりゃ大変だな。んじゃソースケのやつが戻るまでどうするか話し合おうぜ」

クルツはそういいながら隣のクラスで掃除をしている刹那とアルトを呼んで一組の教室で待機する。

宗介が戻ってきたのは意外に早く、実際にはあまり話し合いは出来なかった。

「ずいぶん早えなソースケ」

「はあはあ。全速力プラスASを使った。それよりも、今回はIS、AS、MSを使えない以上。ボン太君を使うことが最良だと思う」

実際、前回もボン太君軍団で事件を解決したので宗介は同じ手段を使おうと考えていた。

「じゃあ、何で一旦家に帰ったのだ？」

「今回は前より人数が足りない。その補強だ」

宗介はポケットから三枚のカードを取り出した。その色は赤色と少し薄い黒い色と、スカイブルーに白いラインが入っているものだった。

「今回のことで篠ノ乃、鳳、それにセシリア。お前たちにボン太君を渡す」

「「「・・・は？」」」

篤と鈴とセシリアは変な声を発してしまう。

「本当は一夏や早乙女達のも用意したかったのだが、まだ武装が安

定させてなくて無理だった」

「まてまて。あんたいつの間になんな物用意していたのよ？」

「だいぶ前からだが」

「はあ。もうこれ以上は突っ込まないわよ」

「そうか、では二人とも・・・」

「ちょ・・・ちょっとまて鈴、これを」

箒と鈴がボン太君を起動させようとした時、倒れてたレナードが鈴に何かを渡す。

「これって・・・」

「そつだ、お前のだ」

箒と鈴はカードに触れるとボン太君名前が現れたのでそれに触れると二人は一瞬でボン太君に包まれる。箒のボン太君は赤色をメインとしており、鈴のは少し薄い黒に白いラインがはいっている。

「これがボン太君か・・・紅椿とは違うな」

『お〜。お前が私の主人か？』

「あ、ああ。お前は私のAI・・・なのか？」

『おう。私はリッツって言うんだ。よろしくな！』

「私は箒だ。それよりも・・・お前は少しは静かに出来ないのか？」

『それはむりだな』

箒は自分のAIがテンション高い事に少し戸惑いを持ちながら説明を受ける。一方鈴は・・・

「成程ね。ISとは大分違うけど大体理解したわ」

『ふむ。今回も優秀なマスターに恵まれた・・・と言っことかな』

「アンタが私のAI？」

『如何にも。私の名はアーチャーと名乗っておこう』

「私は凰鈴音よ。それにしてもアンタ、その名前偽名ね」

『どうしてそう思うのかね？』

「女の感よ」

『ふむ・・・君は名前だけではなく色んなところに似てるな。私の

「元マスターに」

「それは誉めてるのかしら？」

『勿論だとも。私の元マスターも優秀だったからな』

「ありがと。それよりアーチャー、これの武装は何なの？」

『それはだな・・・』

その瞬間、鈴の頭に何かが流れる。それは何とも言えない様な物だったが、表現すると”剣の高野”だった。

「アンタ、ただのAIじゃないわね」

『なに、ただの”正義の味方”なだけさ。それよりも今は攫われた子を取り戻すのが先決ではないのかね？』

「そうね。この事件が解決したらレナードとアンタを問いたただすけどね」

こんな会話をしていた。それにしてもマスターとは何でしょう・・・？

セシリアは既にAIを持っていたので二人よりスムーズに初期設定を終えていた。

「俺も欲しいなボン太君」

「俺は・・・いいや」

「俺もだ」

ボン太君をみて欲しがる一夏と微妙な反応をするアルトと刹那。

「俺もあれはな・・・」

クルツは何度か見たことがあるが、反応は刹那達と同じだった。

「問題ない。一夏の方はちゃんとある。それに二人の物もだ」

さてと、あれからなんだかんだで竜神会からのメールに付いてた地図の所に向かうボン太君持ちの六人。竜神会が示した場所は去年、宗介がボン太君小隊を率いて襲撃した場所と同じ所だった。

「ふも、ふもふも（よし、周りには・・・）」

「ふもふもふも（入口に五人）」

「ふも、ふもふも（なら、私が行ってくる）」

箒はボン太君の通常武装の警棒を握ると入口にいる見張りの背後にこつそりと忍び込み、一瞬で五人を伸す。何故、箒がこんな凄い芸当が出来たかと言うと、単にボン太君に搭載してあるECSを使っただけである。

「ふも、ふもふも（よし、突入だ）」

宗介が合図すると、六人の・・・六匹のボン太君が建物の中に入る。

「大丈夫かしら・・・」

「やっぱり心配なのか千鳥？」

「ううん、違うのよ織斑君。私が心配してるのは相手よ」

「成程な」

かなめの切実そうな表情をしながら言った事に一夏とアルトは納得していた。ちなみに三人は少し離れた所で待機、刹那は学園で更に待機している。

ここからは、大体ボン太君の蹂躪が始まった・・・

「な、何だてめえらは・・・」

「ふもふもふも（アンタに説明するわけないでしょ）」

鈴が容赦なくペイント弾入りショットガンを打ち。

「う、うわああ」

「ふもふも（逃がさない）」

シャルが驚いてる男にボン太君装備の警棒で気絶させ。

「ふもふも・・・ふも（切り捨て・・・御免）」

箒は両手に警棒で三人の男たちを倒していた。

「ふもふもふもっふ（こちらには無しですわ）」

「ふもふもふも（こっちにもいない）」

ラウラとセシリアはテッサを探すために一つ一つ部屋を調べるがテッサを見つけれないでいた。

「ま、またボン太君かよ。一体何なんだよこのボン太君達はよ！！」

叫んでいるのは去年、かなめと美木原連を誘拐した竜神会のボスである。

（ボン太君といますと、相良さん達ですわね。ならもう安心ですわね）

テッサは宗介達が来てる事が分かるともう安心しきっていた。

「くっそ〜またボン太君かよ。一体何なんだよあのボン太君はよ！」

悪態を突くボス、その間にもボン太君達は暴れまわっている、そして・・・

「ふもっふ（動くな）」

ボスの所に宗介のボン太君が現れたのだ。

「て、てめえ。前回も今回も邪魔しやがって。何なんだよてめえは」

ボスは錯乱しているのか、手に持っていた銃をボン太君に向けて引き金を引いた。しかし、ボン太君は外見こそはただの着ぐるみだが中身は小型AS、さらに宗介の手によつて一年前より更に性能が上がってる。そんじゃそこの拳銃では当然ボン太君に傷を負わずの不可能に近い。

「ば、化け物かよ」

何発も銃を打つボス。しかし、その表情は恐怖一色だった。そして、ボスは銃を捨ててナイフでボン太君に斬りかかるのだった。宗介はナイフを左に軽くかわすとそのまま勢いで。

「ふもももももももふもっも！！」

北斗の神拳張りの声を出しながらパンチを繰り出した。

「ふもふもふもふもつも（お前らは本当に学習能力が足りないな）」

既に気絶してるボスに向かって言う宗介だった。そして、宗介はボン太君から降りるとテッサの両腕を縛っていた縄をほどいた。

「ご無事でしたか大佐殿」

「ええ、ありがとうございます相良さん」

「いえ。自分は任務を果たしただけです」

宗介はテッサ救出を他の潜入メンバーと外にいる三人に伝えると宗介とテッサは部屋を出る。途中で他のメンバーと合流して外にでる。

こうして、何だかんだで早く終わってしまった今回の事件。ボン太君小隊初出勤にはいささか簡単な事件だっただろう。しかし、これから起こるだろう事件はもつと大変・・・なのかな？

「ふもふもふもふもつふも」

「「「「ふもふもふもふもつふも」「「「「

「はあ、結局こうなるのね」

「でも、可愛いですわよねボン太君」

「なんだがあれいつら、割と楽しそうだったな」

「織斑もか、俺もそう思ったよ。本当にこの世界は楽しいな、色々な意味で」

ボン太君が朝日を追いながら走る後ろでそんな会話をしている四人であった。

ふもっふ

第25話・結成、ボン太君小隊（後書き）

ボン太君小隊はこれ以降も登場します、その際には一夏や刹那達も加入の予定です。一応、小隊の隊長は宗介、副隊長はラウラと言う設定です。

次回、鈴のAIの謎と謎の少女が現れる。一体鈴のAIと少女は何者なのか！！

「おお〜何だかわからないけどミサカはミサカはとても楽しみなのだ〜」

第26話・宗介、第一位と出会う。(前書き)

今回もとあるからゲストキャラが登場します。誰だかはタイトルでお解かりと思います。

第26話・宗介、第一位と出会う。

「ちつ、なんで俺が外に出なくちゃならねんだア？」

一人の少年が悪態を付きながら外を歩いている。外見はからのイメー
ジは白、髪も服も白。それでいて少年は男と言うには少し華奢な体
格をしていた。

その手には現代に科学で使われている杖を握っている。

「それに、クソガキもどっか行きやがったしよオ」

その瞬間、少年の背後から十歳位の少女が少年の背後に現れた。

「テメエ、勝手に歩き回るな」

「え〜だっては外の世界に出るの初めてなんだもんってミサカはミ
サカは駄々をこねてみたり」

「前にロシアに行っただろうがア、もう忘れちまったのかア？」

「だって、その時は余りにも急な展開だったじゃんってミサカはミ
サカは……」

「はア……」

そんなため息をつく少年。だが次の瞬間、少年の前に奇妙な物が走っていた。

「ナンナンですかアの物体はよオ」

「え、あなた知らないの、あれはボン太君って言うんだよってミサカはミサカは威張ってみるのだ」

「だからよオ。ナンでそいつが外で走ってるんだあ？」

少年は一瞬少女から目を離す、そして少年が再び少女の方を見ると少女は……

「わ、いボン太君だってミサカはミサカはボン太君に飛びついてみる」

ボン太君に飛びついていていた。

「あのクソガキ、余計な手間を掛けさせやがって」

少年は首のチョーカーの電源に入れようとするが、何故か電源が入

らない。

「おいおい、何で反応しないんですかアアアこのチョーカーはよオオオ」

少年……一方通行はその場で大声を出していた。

そのボン太君の正体は言わずとも、宗介の物だった。何で宗介が朝からボン太君に乗っているのかと言うと、単に朝練の一環でのランニングのため、今は自宅からIS学園までのランニング途中である。

「おはようソースケ。あんたも頑張るわ……ね……」

「ふもふもふつも？（どうしたのだ千鳥？）」

「あんた……遂に犯罪を……いつかやると思ってたけど」

「ふっ、ふもふもふも？（なっ、何を言ってるのだ千鳥？）」

すると、ボン太君の背中から声がしたので宗介は慌ててボン太君をしまっ。

「あゝボン太君がいなくなっちゃったよってミサカはミサカはしょ

んぼりしてみる」

「ソースケ、アンタ何処からこの子を拉致してきたの!!」

「い、いや俺は何も・・・」

「つべこべ言わずにさっさと返ってきてあげなさ!!」

かなめは物凄い形相で宗介の首根っこを掴みながら思いつきり揺らす。

「お、お姉ちゃん凄い顔しているのだってミサカはミサカは恐る恐る尋ねてみたり」

ここでかなめは少女に言われ、一旦深呼吸をしてからもう一度少女の方を見る。

「君、何処から来たのかな？」

「私は学園都市から来たの。本当はもう一人いたんだけどねってミサカはミサカは説明する」

「学園都市か〜それで一体何の用で外に出てきたの？」

「何か、IS学園に渡すものがあるって言ってたよ」

「学園都市からIS学園に・・・全く分からんな」

宗介はなにやら深く考えているようだった。

「まあ。それはいいとして君の名前は何て言うの？私は千鳥かなめって言うんだけど」

「私はラストオーダーって言うんだよってミサカはミサカはシスタの真似して言うてみる。そっちのお兄さんは」

「俺は相良宗介と言う」

「それより、一回織斑先生の所に行つて説明しましょう」

「そうだな」

三人はそのまま職員室に向かう。その途中でラストオーダーがフラフラとするのをかなめは見事に阻止していた。

「で、その子がお前にくつついてたんだな？」

「はっ、その通りであります」

「それは分かった。ラストオーダーと言ったか。お前は何のためにここに向かっていたんだ？」

「うん。私はただあの人に着いてきただから分からないな。でも、芳川が何か言っていた気もしないんだけど」

「芳川・・・それは芳川桔梗の事か？」

今、宗介達がいるのはIS学園の職員室。今の時間帯はHRの準備をしている先生が多数いる。

「先生はその人の事知ってるんですか？」

「ああ、大学の同期だ。それにしても桔梗が言っていた子供達ってお前の事だったのだな。なら愛穂もいるのだろうか？」

「黄泉川のこと？うん、いるよ」

「なるほど、わかった。あいつらが関係してるとなると私が預かって何も問題はないだろう」

「それで織斑殿、これからどうなさいますのか？」

「この子を見たからにしてやんちゃだ。今日は私が一緒にいよう、そろそろお前達も教室に行け、遅刻するぞ」

宗介とかなめは職員室を出て教室に入る。朝のHRの際に千冬の隣にちっこい少女がいる事にクラスは疑問に思うが、あまりつまみづくりにラスとオーダーと仲が良くなる。もうこのクラスもこのクラス

と隣のクラスはこの程度ではもう動揺しないだろう。ちなみに似たような行動原理をするラウラとは直ぐに仲良くなっていた。

今日は授業が半日で終わる日、それは先生方が月に一度の大きな職員会議をするためであり生徒達にとっては嬉しい事なのだが、先生たちの辛い行事なのだ。クルツとグラハムは特にこの行事を苦手としている。

「私は我慢強い男なのだ!!」

「はあくねみい」

場所は変わって一方通行。彼は未だに外を歩き回るのが全く情報が無いため、流石の第一位でもお手上げに近い状態だった。そこで彼は携帯を取り出した。

「おい黄泉川、今現在のクソガキの居場所を検索しろ」

『おまえ、またはぐれたのか』

「.....」

『わかったじゃん。ちょっと待ってな、今GPSで調べるから』

一方通行が掛けた相手は黄泉川愛穂であった。黄泉川はパソコンで居場所を調べてるようで、カチカチと言う音が聞こえる。

『一方通行、ラストオーダーの居場所が分かったじゃん』

「どこだ・・・」

『IS学園、お前達にお使いを頼んだ目的地だ。ついでに地図も送って置くじゃん』

通話はそこで終了し、彼は携帯に記されている場所に向かって歩き始める。

「ってミサカはミサカは」

「なにおう。私は」

現在整備室。いるのはいつものメンバー、騒いでるのはラウラとラストオーダーの二人。騒いでる理由は味噌ラーメンと醤油ラーメン、どちらがおいしいかと言うどうでもいい理由であった。

「あの二人は放置で良いわね」

「構わない。では・・・」

鈴に言われてレナードは珍しく真面目な表情をする。そう、これから鈴のAIについての説明が行われるのだ。

「皆は鈴のAI”アーチャー”に付いて聞きたいのだろうか？」

レナードが言うと、皆は頷く。ここにいる皆は既にアーチャーの異常性について何となくだが分かっているのだ。

「そうだな。あれは正確に言うとAIでは無い」

「じゃあ、何なのよ？」

「その前にアーチャー。君の事とアレに付いても話しても良いかね」
「？」

『構わない』

レナードは机の上に置いてある薄黒色のカードの・・・アーチャーに話しかける。

「まず一つ、魔術……この言葉がキーワードだ」

魔術と言われてもパツとし無メンバー、しかし、一人だけその単語に反応した。

「その単語、聞いたことあるようなくってミサカはミサカは考えてみたり」

ラウラと言い争いをしていたラストオーダーだった。

「そしてもう一つ、アーチャーの正体は元人間、いや、元英霊と言った方がいいな」

「英霊？」

『簡単に言えば英雄みたいなものだ。まあ、私の場合は英雄とはとも呼べないものだがな』

ここまでの簡単な説明に誰もが声が出なかったが、宗介が手を上げて質問をする。

「魔術……とは一体何なのだ？」

「魔術とは簡単に言つと科学と相反する存在って事について言えばいいのかな」

「相反する存在？」

ここで、今まで黙っていた刹那が質問をする。

「科学は文字の如く科学、テクノロジー と言つた物で進化し続けてきた。これはアマルガムやミスリル、そして学園都市などがそれに入る。それに対して魔術はオカルト方面に進化して行ったものなんだ進化の過程ではおそらく魔術の方が古いだろうね、それこそ下手したら千年以上前からあつたかもしれないからね」

「科学と魔術の関係は理解した。だが俺はこの世界の人間ではないから余り実感できないな」

『なら。今から私が魔術を見せよう。本来なら魔術は隠避するものだが、この世界は私の知ってる魔術とは少し違う方向のようだからな。鈴、私を持ってくれ』

鈴はアーチャーに言われた通りに机の上にあるカードを手にする。

『投影開始』

アーチャーが何かの台詞を吐くと、鈴の右手に何かの剣が現れた。

『私が肉体があつた時に得意としていた魔術は投影と強化、この二つだ。今見せたのは投影の魔術の方・・・』

「ちよつ。ちよつとアンタ。いきなり変なの使わないでよ。ビックリしたじゃない」

剣が現れた事で鈴も含めて言い合いをしていたラウラ達も驚いていた。

「何か、スゲえな魔術って」

投影をみた一夏は単純に思った感想を漏らした。

『生憎、私は生涯でこれらしか習得が出来なかつたのでな』

「さて、一応大体の説明をしたが。理解できたか」

「まっただ」

皆の発言でレナードはすつ転んだ。それはそうだ、いきなり魔術と
言われても理解できるはずがない。IS学園にしるミスリルにしる、
ソレスタルビーイングにしる、フロンティア船団にしる全てが科学

サイドなのだ。魔術サイドの事をいきなり説明されても直ぐには理解は出来ないだろう。

『まあ、私の事は高性能AIとっていて構わない』

「はあ。私ってとんでもない物手に入れたみたいね」

鈴はカードを手にしてそんな事を呟く。そして次の瞬間、ラウラと言い争いをしていたラストオーダーがいきなり後ろを向いたのだ。

「あつ、あの人がここに来たのだからミサカはミサカは部屋をでるのだ」

そして、ラストオーダーは部屋を出て行ってしまった。

「あの人が誰だ？」

「さあってアンタ達、あの子を追いなさい！！」

かなめはすかさず宗介とラウラに指示を与えると、二人は直ぐにラストオーダーを追いかけるのであった。

「でも、魔術か。そもそも俺は地球生まれじゃねえから魔術って単

語も初めて聞いたぜ」

アルトは生まれも船団なので当然と言えば当然の事であった。

「ここがアイズ学園。まずはあのクソガキを探すとするかア」

一方通行は校門を潜り、中に入る。彼がまず目指したのは職員室、いきなり部外者が入れれば問題になると思った彼は職員室を探すために建物内部の案内板を見る。

「それにしても、なんで女しかいねんだアここは？」

一方通行はここまですれ違つ人物が全て女子と言つ事に疑問を抱く。

「まア。気にしても仕方ねエ」

彼は職員室の場所を見つけ、階段を上がる。ちなみにすれ違つた女子達は「キャー白馬の王子様みたい!!」なんて言っていた。

「アン？職員会議？」

一方通行は職員室の前に立つが、職員室の扉に「職員会議中」と書いてある札が立て掛けられていた。

「チツ。早速メンドウになって来やがったぜ」

彼はその場でどうするか考えると、後ろから聞き覚えのある声がして来た。

「ふふふ。どうだ、私は速いだろう!!」

「なにおう、ミサカだって負けてられないぜってミサカはミサカはお姉ちゃんに抵抗して見せるぜ!!」

ラウラとラストオーダーが物凄いスピードで廊下を駆け抜けているのだ・・・一方通行の横を通り過ぎて・・・

「・・・帰るか」

一方通行は見なかったことにして来た道を戻ろうとした時。そこに二人を追いかけている宗に遭遇する。

「誰だお前は」

(アン? コイツ・・・唯モンじゃあねえなア)

一方通行は宗介を一目見た瞬間に只者ではないと感じ取った。だが、それは一方通行だけでは無かった。

(何だコイツは。体は華奢だが、潜りぬけてきた物が違う)

宗介も一方通行の空気が違う事を肌で感じ取っていた。

(ここはどうするか・・・)

宗介はどうするかと、今でも動きだせる体勢で考えていると一方通行が動き出した。

「オマエ。この辺に自販機ねえかア?」

「成程。お前はラストオーダーの保護者だったのか」

「不覚にもなア。俺はコイツをさっさと渡して帰りたいンだがな」

宗介と一方通行の二人は食堂で座って飲み物を飲んでる。一方通行が自販機の場所を聞いてきたため宗介は食堂に案内する、その途中でお互いの名前と事情を話していた。一方通行は当然缶コーヒー、宗介はヤシの実サイダーだ。

「これは？」

「わからン。ただ、おそらくISに関係しているンじゃあねえか？」

「どうしてISと関係しているんだ？学園都市は主に超能力開発に力を入れていると聞くが」

「俺の家主達がISの開発関係者って言ったなア確か」

一方通行はそう言いながら宗介にUSBメモリを渡してコーヒーを飲む。会話はそれ以降は無くなる、お互い会話と言うのが余り得意な方では無いので必然とこうなるのは目に見えていた。

「おっ。宗介じゃねえか？ってかそいつ誰なんだ？」

のんびりしている二人の前に一夏と刹那が現れた。

「ああ、こいつは一方通行。ラストオーダーの保護者だそうだ」

「ほ、オマエが織斑一夏くんですかア」

一方通行は一夏の事を興味深く見る。

「オマエが世界で珍しくISが動かせるって奴かア・・・見た感じ三下と余り変わりねエな」

「三下？」

「イヤ。こつちの話だ、それより隣にいる奴は？」

「刹那・F・セイエイだ」

一夏と刹那も座ったが、ここで一夏は激しく後悔することになった。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

(誰か喋れよ。この空気何なんだよ、俺耐えられねえよ・・・)

四人の主役が集まっているのに会話が無い。これは一夏にとっては精神的に一番辛いものだった。

「あゝいたいた。ラストオーダー、あんたが探してた奴ってあの白いの?」

「そうだよってミサカはミサカは指をさして答える」

「そろそろ離してくれぬかなめ・・・」

一夏が後もう少しのところまで精神に異常を来す瞬間、食堂にと右腕にラウラ、左腕にラストオーダーを抱えているかなめが現れた。

「ソースケ、あんた一体何やってるのよ」

「俺は一方通行に自販機の所を教えていたのだが」

「オイ、その女ア。誰が白いのだって」

「アンタよアンタ。はい、お届け物よ」

かなめは一方通行にラストオーダーを渡すと、ラストオーダーは一方通行に抱きついた。

「アンタ、私は何も言わないけどロリコンは程々にしなさいよ。じやないと捕まるわよ」

「オレはアアロリじゃねエエ」

「一夏、ロリコンとは何だ？」

「それはだな刹那・・・」

「一夏クウウン。余計な事は教えないようにしましようねエエエ」

「うわアアア。わかったわかった。杖で殴るな地味にいたいぞ」

杖で一夏を殴る一方通行それを見て面白がるラウラとラストオーダー。未だに疑問の刹那、呆れて見ているかなめと一夏、何事も無かったようにヤシの実サイダーを飲んでいる宗介だった。

その後、他のメンバーも食堂にやって来た事でかなめは折角の事と思いを紹介をする。紹介と共に一方通行は嫌々ながらも、いや、女子パワーに押されて渋々と連絡先を交換することになった。一日で一方通行の携帯の連絡先は沢山増えたのであった。

そうこうしている内に結構時間が立っていた事に気づき、一方通行とラストオーダーは帰ると言い皆と別れるのだった。彼の顔は疲れたと分かるような表情だったが、ラストオーダーは満足そうな顔をしていた。

校門前、二人はそこに誰かだ立っているのに気づく。

「お前が一方通行だな」

「アンタは確か・・・織斑千冬」

「そつだ。成程・・・まっ、素直そつではないようだな」

「・・・もうオレは疲れてんで帰りたいんですけど」

「そつだな、引きとめて悪かった。じゃあ最後に、あの二人も癖のある奴らだが・・・」

「わかつてるよオソンぐらいよオ」

「じゃあね〜てミサカはミサカは挨拶するのであった」

二人は千冬の横を通り、学園から出て行き学園都市に戻るのであった。

「ふっ、あいつらも中々と苦労はしているみたいだな」

二人の後姿を見ながら呟くのであった。

くおまけく

「あゝもう。会議は何でこんなに長いのよヤマヤマ」

「そうだけ。どうにかなんねえのかこの会議はよ。なあヤマヤマ」

「確かに。私もこの会議の長さには少し嫌気をさしていた。君はどう思う山田先生」

「えっ、えくと私は・・・」

三人に愚痴を言われてあたふたする山田先生であった。

くおまけく

「ねえねえ。あなた、今日は沢山お友達出来たねってミサカはミサカは嬉しそうに聞いてみる」

「別にオレは友達なんて・・・」

「そう言いながら皆と連絡先交換してたじゃん」

「そ、それは・・・」

「あつ。もしかして照れてるのってミサカはミサカはからかってみるの」

「照れてねエ。下らねエ事言つてシな、置いて行くぞオ」

「わお。私放置される」

そうは言ってるが、若干照れていたのは一方通行本人も自覚していたが、それを悟られないように振舞っている一方通行であった。

第26話・宗介、第一位と出会う。(後書き)

アーチャの説明は結構適当ですみません。でも、鈴もこれです少し強くなったのかな？

一方通行が渡したデータは後々活躍します、主に強化での。

次回、千冬に学園都市に行けと言われる宗介とラウラと刹那。そして、束の連絡を受けて篝とかなめも学園都市に向かう。そこで彼らは何と出会うのか。

「ロックオン・・・なのか？」

「よっ。元気そうじゃねえか刹那」

第27話・はぐれるのはよくあるよね（前書き）

今回から宗介達は学園都市に行きます。よって、今回から宗介、ラウラ、かなめ、箒、刹那以外のレギュラーメンバーはあまり登場しません。

第27話・はぐれるのはよくあるよね

さて、かれこれ色々な事があった一週間であったが、金曜日の放課後を迎えた生徒達。皆は休みを何処に行くとの話で持ちきりだった。

「あゝ千鳥に篠ノ之、悪いんだが明日学園都市に行つて来てくれ」

「どうしてですか」

「東がな紅椿の改良が終わつたと言つて来たからな。本来ならあいつに来させようと思つたのだがな」

「あのゝ篇はわかるんですけどこれって私が行く理由はあるんですか？」

「東は最終意見としてお前の意見が欲しいみたいだ」

そう言い、千冬はあるものを二人に渡す。

「これは？」

「学園都市に入る通行証みたいなものだ。あとは・・・相良、ボーデヴィツヒ」

千冬は教室でのんびりしてる宗介とラウラを呼んだ。

「何でしょう」

「お前たちにも明日、学園都市に行ってもらおう」

「教官、それは何故でしょうか？」

「さあ。それはわからん」

その瞬間、かなめがズルツと滑った。

「ちよっ、わからないって」

「しょうがないだろう。お前ら二人の理由は言っていたがこいつらは無言で送られて来たのだ」

「はあ。まあ、あの姉ですから」

諦めきつた表情で言う筈であった。

「私からは以上だ。あとはそれを刹那にも渡しておいてくれ」

「何で刹那??？」

余計にわからなくなるかなめであった。

次の日、場所は学園都市のゲート前。いるのはかなめと篤であった。

「かなめ。あいつらは？」

「ラウラが寝坊したって言って。宗介と刹那は後で合流するって」

「そうか、では私達は行くでしょう」

二人はゲートにいる警備員に通行証を見せ、中に入って行くのだった。宗介達がゲート前に着いたのはかなめと篤が着いてから一時間した後だった。

「ここが学園都市か」

「そのようだな」

「なんか、ワクワクしてきたなあ。早く入るぞ」

三人も通行証を見せる。この時、宗介の武器を殆ど取られたのは言うまでも無いだろう。三人は内部に入った瞬間の感想は……

「成程、都市とい事からあって中々の出来だな」

「・・・」

「おゝあれが掃除ロボか。流石は未来都市」

こんな感想であつた。

「さて。まずは篠ノ之研究場に向かおう。場所は・・・二十三学区。どこだ？」

「俺に聞かれてもわからん。とりあえず現在位置の確認をするべきだな」

「そうだな」

「宗介、ここは第七学区と言う所らしいぞ」

「七学区・・・まずは地図を入手する必要があるな」

「そうだな」

「じゃあ。まずは地図探しだな」

ここまでの会話はよかった。そして。地図を入手するために動いたのもよかった。しかし、何と三人は違う方向に歩いて行ってしまっ

てるのだ。しかも、誰も気づいていないなのだ。

「しかし、流石は科学最先端の都市。見たことがない物があるなつて・・・ラウラ、刹那！」

宗介は回りを見ながら歩いていたが、二人の気配が無くなった事が気になり後ろを振り向くが、二人の姿はそこには無かった。

「はぐれてしまったか・・・どうしたものか」

宗介は歩きながら考え込むと、前方から奇妙な声が聞こえてきた。

「うつゝお腹が・・・減ったんだよ・・・」

宗介の目の前に銀髪のシスターがそんな事を言いながら倒れていたのだ。

（何だあれは。あれからは非常に厄介事に巻き込まれる空気を感じる。ここは関わるのは得策ではない。迂回しよう）この人も厄介事を巻き起こす人間です

宗介は見なかった事にしてその場から立ち去ろうとした時。

「その人・・・私に何か食べさせてくれると・・・嬉しいな」

宗介は見事にシスターに声を掛けられてしまった。これは、違う意味での科学と魔術が出会った瞬間でもあった。

「凄いなこの街は。見たことがないものばかりだな」

ラウラもまた、周りを見ながら歩いていた。勿論はぐれてる事にはまだ気づいていない。少し歩いた所でスーパーが見えてきた所で項垂れている青年を見つけたラウラは・・・

（何だろう。あの男から不幸と言う物を感じてしまう）

それでもラウラは興味本位でその青年に話しかけてしまった。

「どつしたのだお前は？」

「一パック89円の特売の卵が・・・俺が必死に走り、行列にも並び、ようやく買ったと思ったら自動ドアの隙間に靴ひもが引っ掛か

り、こけそうになるのを必死にこらえたらおばちゃんに押され・・・
卵が・・・」

ラウラは悲惨になってしまった卵を見て何だかこの青年がかわいそうに思えてきた。

「ま、まあ、気お取り直せ。私も一緒に並んでやるし、たまごも買ってやるかな泣くなよ」

「本当でございますか!?!」

「あつ、ああ」

「でも、流石に金は自分で払うよ。見ず知らずの人に払わせるのは悪いからな」

「そ、そうか。では、並びに行くぞ」

ラウラ、すでにはぐれている事に気づいていないのであった。

「ありがとう。おかげでお腹いっぱいになったよ」

「ああ。それにしてもお前はよく食べるな」

宗介は近くのファミレスでシスターにご飯を食べさせていたのだ。だが、このシスターの食べる量は半端なく、宗介はどこにあの量の食べ物少女に入っているのか疑問に思った。

「そうすけはいい人だね。まったく、とうまは何処に行ったんだろ
う……」

「インデックス。その”とうま”と言う奴はお前の兄弟か？」

二人は料理が来る間に名前を聞いていた。まあ、それ以上はインデックスの空腹で話さなかったのだが。

「ちがうよ」

「そうか」

「そういえば、そうすけは何処から来たの？」

「俺は外……外部からさっきやってきたばかりだ。そうだ、よかったらこの辺りを案内してはくれないか？」

「ごめんね。私も外から来たからまだ余り分かんないんだ」

「そうか……ふむ、どうしたものかな」

宗介はここで連絡を取ろうと思ったが、学園都市内ではたして連絡を取れるのかと思い。携帯を手にするが連絡を足らずにポケットに入れる。

「そうだ。とうまに聞けば何かわかるかも」

「そいつは学園都市の人間か？」

「そうだよ」

「今は手詰まりだ。インデックス、その人物を紹介してくれ」

そのあと、宗介はレジで少女が食べた金額を見て唾然するのであった。その後、店を出た宗介はインデックスの案内で”とうま”と言う人物の家に向かうのであった。

「いや、本当に助かった。ありがとうな、え」と

「おっと。まだ名乗ってなかったな。私はラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「俺は上条、上条当麻だ」

「それにしてもお前は不幸体質でもあるのか？」

「これは、上条さんが生まれ持っているスキルです」

ラウラと青年・・・上条当麻はスーパーで無事買い終わり、道歩いている途中であった。

「何だそれは。面白いな！」

「いや、上条さん的には面白くはないのですが・・・」

「私が面白いのだ」

「それでせうか。それにしてもお前、どっかから来たんだ？」

「私はIS学園から来たのだ」

「IS学園ってあのIS専門の学校だろう。と言う事はお前はどっかの代表候補生なのか？」

「私はドイツの代表候補生だ。凄いだろう!!」

ラウラは無い胸を張って威張る。その姿をみて上条は・・・

「候補生に見えないな。本当に候補生か？」

「にゃんだとゞ私は候補生だぞ」

ポカポカとラウラに殴られる上条さんであった。

「わかったわかった。だから殴るのをやめろ」

「まったく、当麻はまったく・・・」

「あはは。それで、お前は どうして学園都市にいるんだ？ I S 学園
とここはあまり関係は無い筈と思うのだが・・・」

「私は篠ノ之研究所に行きたいんだ」

「篠ノ之！！」

上条が篠ノ之と言う単語を聞いてビックリする。その勢いで卵を落
としそうになる。

「うお、どうしたのだ当麻？」

「いや・・・まさか、ここであの人の名前を聞くことになると思
わなかったから」

「当麻は東お姉ちゃんを知ってるのか？」

「お姉ちゃん？あ、まあな。それで、ラウラはそこに行きたいのだ
な？」

「うむ。そうなのだ。そこに行けばおそらくはくれた皆とも会えると思うから」

「なら、俺が案内してやるよ」

「ホントか？」

「ああ、一緒に並んでくれたしな。それに、困ってる奴を見過ごせないしな」

「済まぬな」

「いいんだ。それより先に家に卵を置いて行っても良いか？」

「いいぞ」

上条とラウラは上条の家に向かい歩くのだった。

「じじは・・・どっだ」

刹那もはくれた事に気づくが既に遅く、見事に一人になっていた。

「じじはどっつやらどっかの学校の近くのようだな」

刹那が辺りを見渡しながら歩く、周りはブラウン色の学生服の夏服を着ている女子学生が多かった、特にブラウン色のサマーセーターを着てる物が多いのが特徴だった。

「どうしたものか・・・」

刹那は気にすることも無く歩き回る。だが、刹那はあるものを、いや。ある人物の顔を見てその場に立ち止まってしまう。

「お前は・・・ロックオン」

「よっ、刹那じゃねえか」

その人物はロックオン・ストラトス。刹那が変わるきっかけを与え、それでいて周りからの兄貴的存在であった。そして、同時に同じガンダムマイスターの一人で戦いの中で死んだとされた男である。

第27話・はぐれるのはよくあるよね（後書き）

何かもう、原作とはかけ離れすぎているような・・・いまさらか!!

次回、刹那とロックオンは会う。その中で学園都市に出没するようになったマスターボン太君の話聞いた宗介は一体どう動くのか!!

次回も戦闘はありませんよ〜byシヤルロット

第28話・再会（前書き）

今回は刹那とロックオンがメインです。なので多少短いです。

後書きにアンケート見たいのをやりますのでよかったらどうぞ。

第28話・再会

「ロックオン…なのかな？」

「…ああ。久しぶりだな。まさかお前までこの世界にいるとはな」

刹那の前に現れた男の名前はロックオン・ストラス。ソレスタルビーイングのガンダムマイスターの一人で、元の世界ではアリ・アル・サーシエスとの戦いで死んだとされていた。

「それより刹那、世界はどうなった？」

「…世界の歪みの前に俺達は破れた」

「そうか…」

「それよりロックオン。お前は どうしてこの世界に？」

「俺はサーシエスの野郎にトドメを刺そうとした瞬間、何かに引っ張られる感じがして気が付いたらこの世界…学園都市にいたんだ。で、今はそこの常盤台中学で教師をしている」

「そうか。それよりロックオン、お前の右目」

「ああこれか。これは義眼だ、ここの技術はスゲえな。まるで本物のような感じなんだぜ」

ロックオンは右目をさすりながら言った。

「ところで刹那。お前は どうしてここに いるんだ？」

刹那はロックオンにこの世界に 来た経緯を話した。

「お前、IS 学園に いるのか。刹那が 学生…これは 中々に 想像が つかねえぜ」

「俺も そう 思っ てる。 だが、 今の 生活 に は 不 満 は ない な」

「なら いい じゃ ねえ か、 この 世界 は 俺 達 の 世界 ほど 歪 ん じ ゃ い ねえ。 なら、 本 来 の 楽 し み を 謳 歌 す れ ば い い さ」

「そ っ だ な」

「と ころ で 刹 那。 お 前 は 外 か ら 学 園 都 市 に 何 の 用 で 来 た ん だ？」

「俺 は 篠 ノ 之 研 究 所 に 用 が あ っ て こ こ に 来 た」

「篠 ノ 之 束 だ と ー ー！」

刹那が束の名前をだすとロックオンが驚いた顔をした。

「知ってるのかロックオン？」

「ああ。今俺はその研究所で世話になってる、んなら今から案内するぜ」

「助かる」

刹那とロックオンは篠ノ之研究所に向かって行った。

篠ノ之研究所の場所は第二十三学区。よって刹那達はバスを乗り継ぎながら二十三学区を目指したのだ。刹那が研究所についた時の感想は「広い」だった。

だが、これは建物が大きいと言うことではなく、建物は回りの物より一回り小さい。広いのは単純に何かをするためのスペースの事であった。簡単に言うとグラウンド。でも地面はアスファルトになっている。

この広さはIS学園のアリーナ二つ分の広さはあるだろう。二人は建物の中に入る。

「よう束」

「あれニ一君。どうしたのこんなに早く帰って来て。あ、もしかし

て私が恋しくなつて帰つて来ちゃったとか？」

「それは無い。それよりもある奴を連れてきた」

束はロックオンの隣にいる刹那を見る。

「せつちゃん。こないだぶり〜」

「そうだったな、お前こないだIS学園に行つて来たんだつたな。それで刹那、用つて何だ？」

「その前に篠ノ之… 篤や相良達は来てないのか？」

「ううん。まだ来てないよ」

「なあ。俺にわかるように説明してくれ、篤つて言うのは束の妹つて言うのは知ってるけど。相良つて誰だ？」

刹那は宗介について知ってる限りの事を説明をした。ついでに篤がここにいる来る理由も話した。

「…理由は大体わかった。だが、刹那をここに呼んだ理由つて言うのは…」

「そだよ〜ニー君とせつちゃんを会わせるためだよ」

「はあくまあ、刹那に会えたっていうことにはお前に感謝するけどよ…」

「いや〜そう言われちゃうと私嬉しいな〜」

ロックオンは溜息をつくが、直ぐに顔を上げて何かを思い出したかのような顔をする。

「そつだ刹那。お前に見せたいものがある。束、いいだろ？」

「せつちゃんなら問題ないから大丈夫だよ」

「一体何なんだロックオン？」

「まあ、黙ってついてきな」

すると束が何かのキーを打ち。何かが開いた音が聞こえたかと思つたら束とロックオンは扉の方に歩く。刹那も何が何だかわからないままついて行く。

扉の中はエレベーターになっていて。束は地下に行くボタンを押す、エレベーターは下に向かって行き扉が開かれる。

開かれた扉から出る三人。そしてそこで刹那が目にしたのは…

「これは…ガンダム」

そう、そこにあつたのはロックオン・ストラトスの搭乗機、ガンダムデユナメスがフルサイズで立っていたのだ。
デユナメスはロックオンが行方不明になったのと同時に一緒に行方不明になっていたのだ。

「どうだ刹那。驚いただろう？」

「ああ、それにこれを俺になら見せても問題ない理由がわかった」

その理由はオリジナル太陽炉。これはラムダ・ドライバと同じく、ソレスタル・ビーイングにとって重要な機密なのだ。この情報がアレハンドロ・コーナーと言う男が情報を流したため、ソレスタル・ビーイングが負けたと言っても良いぐらいの重要な装置なのだ。

「ロックオン…GNドライブは…」

「それなら大丈夫だよ。デユナメスの存在は学園都市にはあまり知られてないから大丈夫だよ」

「そのようだぜ。まあ、この世界じゃあ使わねえけどな」

ロックオンがそう言うと、近くのモニターに誰かが映った。このモニターは上の階を映しているようだ。つまり、誰かが来たと言う事だ。

「あつ、篝ちゃんにかなちゃんにラウにゃんにシスターちゃんに当麻君だ」

「それに相良もいるな」

「一旦上に戻るうぜ」

「そつだね」

三人はエレベーターで上に戻った。

第28話・再会（後書き）

ロックオンの義眼は麦野沈利のをイメージしたものです。

今回は新紅椿の登場です。

アンケートです。シャルロットの改良ISについてです。武装やどういった機体に近くするか、これを読んで下さった皆様によかったらなんでもいいので案を書いていただけると嬉しいです。過去に感想で書いてくれた方ももう一度書いてくれると助かります。

期限は五月いっぱいとさせていただきます。

第29話・新生紅椿（前書き）

ISとフルメタの諸説なのにメカが出てこなかったの今回ようやく出せました。

アンケートやっていますのよかったら気軽に案を書いてください。
お題はシャルロットのIS改良です。

第29話・新生紅椿

さて、刹那が篠ノ之研究所にたどり着く少し前にさかのぼろう。

相良宗介は道端で出会ったインデックスと言うシスターと共に”とうま”なる人物が住んでいる所に案内されていた。そこは、至って普通の建物。インデックス曰く男子寮との事であった。

二人は男子寮のエレベーターに乗り、家の前にたった。

「あ……」

「どうした？」

「鍵がないんだよ……」

どうやらインデックスは鍵がないよう中で中に入れないようだ。ここで宗介は男子寮な筈なのに何故この少女は鍵を持っている事をほめかすのかわからなかった。

ラウラ・ボーデヴィッツとは言うと。スーパー前で凹んでいた上条

当麻と一緒に歩いていた。

二人は買った卵を一旦家に置いてから篠ノ之研究所に案内してもらった事になっていた。

何だかんだで二人は家の前に着くと。そこにいたのはシスターと宗介が猫じゃらしを持って猫と遊んでいたのだ。

「あつ、とうまだ」

「インデックス、お前勝手にいなくなるよなって…そいつは？」

「安心しろ。そいつは私が探してた人の内の一人、相良宗介だ」

「お前がとうまと言う奴か？」

「ああ。もしかしてインデックスの面倒を見てくれたのか？ありがとうがとうな」

「いや。俺はただ一緒にいただけだ。それより俺からもラウラと一緒にいてくれたことに礼を言おう」

「いって。それに俺こそラウラに助けてもらったからな。それよりも外で話すのも何だから家に入れよ」

上条は鍵を開け、宗介達は中に入る。部屋は寮と言う事だけあって部屋一つに風呂と簡単なキッチンとシンプルな部屋であった。部屋は男子学生の割に質素…では無かった。壁にこないだラウラとシャルロットが歌っている姿のポスターが貼られていた。

「えっ…これってお前なのかラウラ？」

ポスターには衣装を着てるラウラとシャルロットがポーズを取っていた。当然、二人とも舞台用の衣装なので髪型が違う。なので上条は気づかなかったのである。

「そうだと。凄いだろう？」

「驚きだよ。俺、あのライブに行ってたんだぜ」

「私とスフィンクスもだよ」

スフィンクスとはインデックスが飼っている猫の名前である。

「さてと。研究所に行く前に何か食うか？」

「それは悪いだろう…」

「いや。相良、お前にはインデックスが世話になったみたいだしな」

「そうか。なら任せよう」

「じゃあ何か作るからちょっと待ってる」

キッチンに向かう上条、何を作るのかと言つと…

「……いただきます」「」「」

八人分はあるだろうと言つ位のそうめんであった。そうめんの理由は上条曰く貰いものが溜まりにたまっていたからだそうだ。八人分があるので誰もが残るだろうかと思いきや、何と綺麗に無くなつたのだ。

「ふう。食べた食べた」

「お腹いっぱいなんだよ」

主に食べたのはこの二人。宗介と上条は至つて普通の量しか食べていない、沢山食べたのはこの二人であった。

「んじゃこれから行くか」

「そうだな。案内頼むぞ」

四人は男子寮を後にしてバスに乗る。四人はバスに乗るとある人物達と出会つた。

「あれ、ソースケ」

「千鳥に篠ノ之ではないか」

バスで出会ったのはかなめと篝であった。

「千鳥、君は先に出て行ったのではないのか？」

「ま、迷ったのよ。それに学園都市なんて滅多に入れないからね、迷ってるついでに色々見てたのよ。ねっ、篝」

「ああ。私もここにあるものには目移りしてしまっただな。中々にいい経験だったぞ」

ちやつかり観光をしていた二人であった。

「ところでソースケ。その二人は誰なの？」

「ああ。俺とラウラがここで会った人物だ」

「俺は上条当麻です」

「私はインデックス。この子はスフィンクスって言うんだよ」

「じゃ〜」

バス内で自己紹介をする初対面組。この時に上条と篝の学年が同じことを知るのだった、まあこれは些細な事であるが。

車内で騒がしくしていて車窓に迷惑ではないか？と思う方もいるが、学園都市は完全オート走行で行われているので運転している人間はいないのである。これも科学が進化してる街だからこそその光景である。

バスに乗ること二十分、すっかり仲が良くなる皆を乗せるバスは二十三学区に着いたのである。

「そう言えば上条君って篠ノ之博士とどう言った経緯で知り合ったの？」

「ああ。俺の右腕には異能の力ならどんなものでも消せる”幻想殺し”って言うのがあってな。束さんは俺のこの力を解明しようとしてくれる人なんだ。それに俺の担任の友人って言うこともあってそれなりと会っているんだ」

「私も何度もたばねに会っているんだよ」

バスから降りた宗介達は研究所を目指しながら会話をしていた。

「そう言えば篠ノ之って束さんの妹なんだよな？」

「そうだが…その…姉はお前に迷惑は掛けてないだろう」

「あ…まあ…そうだな」

「いや。お前の反応で大体は察した。すまん私の姉が」

「いいんだよ。俺は不幸体質でそう言った事に慣れてるからな」

上条がから笑いをしていた。この少年も色々と苦労しているのだからと宗介は思っていた。

「まあ上条君。色々大変だろうと思うけど頑張ってるね」

「ああ、ありがとう千鳥さん」

研究所に着いた皆はまず思った事は「広っ!」とのこと。確かにグラウンド二個分はあるくらいの広さであった。

広さに驚きながらも建物の中に入る。するとそこにいたのははぐれた刹那に篝の姉の束、それと見知らぬ男であった。

「やつほ〜みんな待ちかねたよって当麻君とデッチャんじゃない」

「やつほ〜なんだよ束にニール」

束が手を上げて言うとインデックスも真似て言うのである。

「おいおい東。こいつらに俺の自己紹介をさせてくれよ」

「おお〜そうだね。ではではどうぞ〜」

「あ〜俺の名前はニール・ディランデイ。ロックオン・ストラトスって名乗ってた時もあった。俺は刹那と同じ世界の人間でガンダムマイスターの一人だった男だ。今はここの常盤台中学って所で教師をしている」

ロックオンの仕草と名前で宗介はこの男をクルツと同じ空気を感じたのだ。

「ニール先生。その刹那って言うのは」

「こいつも俺と同じマイスターだ。それよりも上条、そろそろ御坂とつき合う気はねえのか？」

「何でここでビリビリの名前が出るんですか？」

「いや。あいついつも担任の俺にお前の事の小言を聞かされるからな。そろそろお前らがくつついてくれるとこっちは助かるんだ」

「いやいや。流石にそれは…」

上条は学園都市の学生で、常盤台中学に縁があるためにロックオンとは知り合いなのだ。

「ロックオン。お前は大変そうだな」

隣にいた刹那は本当に大変そうだなと言う表情でロックオンに言う。

「まあな。それより東、例のやつは？」

「箒ちゃん、カード貸してくれる？」

「あっ、はい姉さん」

「じゃあちよっちまっててね」

東はカードにデータを入れる、作業を始めたがすぐに終わりカードを箒に返す。

「はい。終わったよ、紅椿の新しいデータはその”サモンカード”に入れといたから」

「サモンカード？」

宗介とラウラとかなめと箒は名前を疑問風にする。

「そう、いい加減そのカードに名前を付けなきゃねって。それより

箒ちゃん、早速IS展開してみて」

「はい…紅椿!」

紅椿は素早く展開された。展開された紅椿を見る皆、初めてISを見る上条とインデックスとロックオンは興味深く紅椿を見ていた。

「これは…」

「そう、それは箒ちゃんの新しいIS”紅椿聖天八極式”だよ」

そう、これは名前の通り宗介が異世界で出会った人物の一人、紅月カレンが乗っていた”紅蓮聖天八極式”イメージしたものだ。イメージ通り、背中にはラウラが乗る”シュヴァルツアレーゲン・アルビオン”と同じエナジーウイングがあり、両腰には雨月・空裂と追加に雲縫・不知火と言う刀が腰にある。そして…

「それには輻射波動も装備されてるよ」

束の発言に少し驚く宗介とかなめ。実は前に紅椿の改良プランのことで言い合つことがあった時、案が出なかったのは輻射波動はどうするかとの事でもめて、最後は案がまとまらなかったのである。

箒は自分の武装をAIのリツと確認をしている所である。

「刹那。ISってスゲえな」

「俺も最初に見た時は驚いた」

「とうまとつま。私もあれ欲しいんだよ」

「おまえは作品が違うから無理だろう。それにしてもISって初めて見たけど迫力あるな」

「ふむ、後ろにあるエナジーウイングは私と同じ…これは面白いな」

「これで篠ノ之も手ごわくなるな」

各々の感想はこんな感じであった。

「それじゃあ箒ちゃん。早速試運転してみようか」

「そうだな…それより姉さん。誰かと模擬戦してもいいかな？」

「いいよ」

「では刹那。私と戦ってくれるか？」

「構わない」

こうして”紅椿聖天八極式”と”ガンダムエクシア”… 筭と刹那は
戦うことになるのだった。

第29話・新生紅椿（後書き）

カードに遂に名前を付けました。そろそろ名前を付けないとまずいかな〜と思いましたので。

ここでサモンカードの軽い説明。サモンカードは一枚のカードに自分の所有機体を量子化させてカードに収納するものです。機体にも容量がありますが、一番多く取っているのはボン太君でなのはこのだけの事です。

今回は紅椿聖天八極式とエクシアの戦いです。エクシアもちよっとだけ武装が増えます。

アンケートもやってます。是非みんなの案をくねると東さんうれしいな〜

第30話・次に進む者（前書き）

今回急ですが刹那のガンダムが変わります、それは後書きで。

それと、いつの間にか30話まで言ってた。なのにふもつふ原作の話が中々できてない。ほんっとうにすみません、でも少しずつやっていきますのでこれからよろしくお願いします。

第30話・次に進む者

いま、刹那と篤はお互い向き合うように立ってる。二人は自分の愛機に乗ってる、そう、今からこの二人は模擬戦を行うのだ。それ以外の皆は離れた所で観戦モードに写ってる。

「せっちゃん。これ追加武装」

束が急に刹那に何かのデータを渡して来たので刹那はそのデータを具現させる。それは両手剣の様な物だった。

「これは…GNソード？」

GNソード？と言うのは刹那が四年後に乗る予定のダブルオーガンダムの主武装である。

「そうだよ。でもライザーソードは使用しないでね」

「了解した」

刹那は両腰にあったGNブレードを消すと、GNブレードがあった

所にGNソード？を仕舞う。

その後、箒と刹那はじつと動かず少しの時間が流れた。

「行くぞ刹那！！」

「刹那・F・セイエイ。これより戦闘を開始する」

お互い、同じタイミングで両腰の剣を抜くと物凄いスピードで空を駆け抜ける。箒が抜いた刀は元々装備してある雨月・空裂ではなく雲縫・不知火である。

刹那もGNソード？をスライドさせて両手にGNソード？を持つ。

刹那はここ最近は両手剣での戦闘訓練をしている、そしてその相手は主に一夏か箒が相手押している。

「エナジーウイング…試してみるか」

箒は背中にある八枚の紅い翼を広げるとそのまま刹那に向かって行く。そのスピードは紅椿の時の約二倍の速さを出していた。

「何！！」

刹那はとんでもない速さで迫ってくる紅椿にGNソード？のライフ
ルモードで牽制する。箒もまさかここまでスピードが出るとは思わ
ず、ビームを大きく回避したのである。

本来、回避行動は最小限の動きで行うのが理想的である。箒この
事は知っている、だが、今回はそれが出来なかった。なぜなら箒は
超スピードに慣れてはいなかったからである。

これがセシリアやアルト、グラハムと言った者たちなら難なくすく
に慣れただろう。しかし、箒はここまでのスピードは生まれて初め
での体験だったのだ。

それを見逃す刹那では無い。刹那はすかさずにGNソード？で斬り
かかる。

「何なのだこの機体は！」

箒はとっさに右手の雲縫でGNソードを受け止める。しかし、箒は
八枚の紅い翼の力に翻弄され、かなり焦っている。

「紅椿のエナジーウイング。私のは違う物なのか束姉ちゃん」

「うーん。あれをくっ付けたのはきーちゃんだから私はあまり詳し
く分かんないんだ」

「それにしても、エクシアと同じスピード…下手したらアレルヤの
キュリオスと同じ位じゃねえか」

「俺の見立てではS B Tと同スピードか」

ストライク・ブルーティアーズ

「っていつか。もう何も驚かない私ってどうなのかな？」

皆が冷静に分析してる横でかなめが何故か溜息をついていた。

「うわっーとっても速くて目がついて行かないんだよ」

「まるで御使墮しの際の神裂見たいな戦いだな」

上条とインデックスは初めて見る光景に驚いていた。

「ユーリ。あの機体の解析は？」

『大体終わった。にしてもあの機体、全てのスペックでこのエクシアを超えてるぞ』

「そうか」

刹那はA Iのユーリに戦闘開始から今まで相手の分析を頼んでおいていた。そして、結果を聞いた刹那は何処納得をしてる表情をしていた。

『あんま驚かねえんだな』

「動きを見ておよその予想は出来ていた。だが、篠ノ之はまだあの機体に慣れていない。優勢は俺にある」

『それに…』

「俺はガンダムマイスターだ。これぐらい、乗り越えて見せる」

刹那は再び切りかかる。スピードでは不利だと思ふ刹那はあえて高速戦闘を仕掛ける。箒は未だに紅椿のスピードに慣れず、十分にスベックを引き出せていない。だから本来ではスベックでは上回る紅椿が押されているのだ。それでも何とか刹那の攻撃を防いでる箒は頑張ってる方であった。

「そろそろまずいな」

『おい箒、このまま何もしないで負けるのか？スベックじゃあこつちが上なんだぞ』

「わかってるさ。そうだな…このまま負けるのは何だか悔しいな。なら、足掻いてみるか」

『それこそ箒だぜ』

そんなAIのリツの声を聞きながら箒は再び紅い翼を広げ、再び大空を翔ける。

「くうううう」

箒は紅椿が出すスピードに耐えながらエクシアに向かう。

「うわあ。ねえねえとうま、あれ凄いね！」

「本物のISを見るのも初めてなのに、戦闘とかも間近で見るとやっぱりスゲえな」

二人は初めて見る機械同士の戦闘を見て言葉数が減って見取れていた。

エクシアと紅椿は空中で刃を交わせること数十分、箒が紅椿の特性、スピードに慣れてきた事からスペックで勝ってる所を腕でカバーしていた刹那が押され始めて来たのだ。そして、遂にエクシアの右手に持っていたGNソード？が弾かれて地面に刺さった。

「貰ったぞ！！」

「くっ!!」

篤は右手に持つ雲縫を鞘にしまい、右腕をエクシアに向けて差し出す。刹那とつさにGNソードをスライドさせて刃を展開させ、紅椿の右腕がGNソードの刃を掴む。

「ふっ飛べ!!」

紅椿の右腕から放たれたのは、”紅椿聖天八極式”のベースになった”紅蓮聖天八極式”の武装である輻射波動である。輻射波動とは「輻射波動機構」と呼ばれるマイクロ波誘導加熱ハイブリッドシステム。このシステムは右掌から高周波を短いサイクルで対象物に直接照射することで、膨大な熱量を発生させて爆発・膨張等を引き起こし破壊するというもの。

よって、紅椿の右腕で掴まれたGNソードは輻射波動の熱によって解かされ、加熱破壊されたのだ。

「何…チィィ!!」

刹那はGNソードを破壊された事で一瞬隙が出来てしまい、その隙を紅椿に突かれてしまいエクシアは紅椿に殴り倒されたのだ。

「ちっ」

刹那は地面すれすれで体勢を立て直し、地面に足をつける。

『やべえな…武装は左手のソード一本にGNサーベル四本。これはきついな』

「…」

ユーリは武装を確認するが、刹那は紅椿をじっと見つめていた。この時、刹那は紅い翼を広げながら中に浮かんでいる紅椿を見て過去の…ガンダムとの出会いの事を思い出していた。

その時、エクシアのコンソールに何かを送られて来たのだ。ユーリはすぐにそれを開くと、音声だけが、誰かの声が聞こえてきた。

「何だ？」

『わからねえって』

紅椿は再びエクシアに向かって来たので刹那は一旦、音声を聞きながら待避するのである。

『この音声が届いたことと言う事は…この時代に”ガンダム”が現れたと言つことだな』

「何を言っているんだ？」

刹那は声の発する物に答うが、音声は刹那の回答には答えない。どうやら録音した音声を送って来ているのだろう。

『この”時代”にはまだ”ガンダム”は存在しない。だが、もしこの”時代”に”ガンダム”を持つものが現れ、この音声を聞いたのならこれを与えよう』

すると、エクシア内のコンソールに何かのパネルが現れた。そこに書かれてあったのは”これは、次を切り開く力”と書かれてあった。

『なんなんだこれは？』

「わからない。だが…」

刹那は紅椿の攻撃を回避しながらパネルに触れる。

『よいだろう。なら、”この機体”の名を叫ぶのだ』

「IJの名を…」

刹那を考える。今自分が乗るのはガンダムエクシア、それに未来で乗る予定のダブルオー、ダブルオークアンタ。だが刹那は直感でこれでは無いと感じた。そして刹那は…

「…そうだな、なら…ネクストオオオオ」

刹那が叫ぶと、エクシアのGNエンジンから緑色の粒子が大量に放出され。粒子はエクシアを包んだのだ。箒はこの事態を異常だと感じ、一旦エクシアから離れる。

この変化は観戦していた宗介達からも見えていた。束は直ぐにエクシアを解析するがわからず、宗介とロックオンと上条はこの状態を静かに見守り、ラウラとインデックスは逆に興奮していた。かなめはもう「驚かないわよ」と心に決めながらもビクビクしていた。

粒子が晴れるとそこにはエクシアだったガンダムが立っていたのだ。そのガンダムはエクシアの面影を残しながら全身、少しずつ変化していたのであった。

「これは…」

『次に繋げるものだ。これはどう使うのかはお前次第だ。これは私イオリア・シュヘンベルグからのちよつとしたプレゼントだ。是非一度この力を手にしたものとはあってみたいものだな、ではいずれ会おう』

「イオリア・シュヘンベルグ…だと…」

イオリア・シュヘンベルグ。それはソレスタルビーイングの創立者であり、刹那達がのるガンダムの動力源”太陽炉”開発した人物なのである。それがなぜ、今この世界でこの名前が出てきたのか、刹那にはわからなかった。

「刹那、それは一体…」

「あっ…ああ。どうやらガンダムのようにだ」

「大丈夫なのか」

篤はエクシアが変化した事が心配になり話しかける。

「どうやら戦闘は行えそうだな」

「そうか…」

刹那はエクシア改めネクストを起動させる、まずは離れている所にあるGNソード？を取り両手に持つと紅椿に向かって飛んで行く。そのスピードはエクシアの時より少し早くなっていた。

「なら私もだ」

箒は雲縫、不知火を前に構えると急に二本の刀の形が崩れ、それが融合して一本の大太刀に姿を買えたのだ。そう、斬艦刀に。

「行くぞ刹那あああ」

箒は斬艦刀を構えながらネクストに。刹那はGNソード？を振るい、空中で二人の剣がぶつかりと物凄い大きい金属音が辺りに響いたのだ。

「な、なんかもう色々と凄かったんだよ」

「シスターの言う通り、お前ら派手にやりすぎだ」

結局、勝負は中々つかず。箒は絢爛舞踏、刹那はトランザムを使用しようとしたが流石にまずいと思ったかなめがロックオンに止めるように言い、ロックオンが中断させた事で模擬戦は終了したのだ。

「それより刹那、お前のガンダム何なんだ？」

「俺にもわからない」

「うーん、せつちゃんのガンダム調べてみたけど。性能はエクシアより少し上がってるくらいで他は何もないよ」

「なあ。それよりその”イオリア・シュヘンベルグ”って言う人は何者なんだ？」

上条は気になった事を刹那に聞く。刹那は最初、説明するか悩んだかロックオンが先に話してしまった。上条は話しを聞き終わるとまたまた驚いた。

「でも。刹那君に音声を送ってきた人は本当にイオリア・シュヘンベルグなの？」

「千鳥、それはわからない。俺達が映像で見た時は老人だった、だが、俺に音声を送ってきたイオリアは少し若い印象があった」

ここで皆はうーんと考えるが、当然のように答えは出ないのだ

ぐうううう

静かな空間にお腹の音らしきものが響いた。

「とうま。おなかへったんだよ」

「おまえな、さっき食ったばっかだろ？」

「私もお腹が空いたぞ」

「ラウラ。あんたが珍しく静かだと思ったら…」

「じゃあじゃあ。これからどっかに食べに行こうよ。もちろん、口
ッ君のおごりで」

「俺のおごりかよ!!」

「すまないなロックオン」

「刹那。何だか少し見ない間にキャラ変わったか？」

「よし。私たくさん食べるところに宣言しよう」

「ありがとうございますニール先生」

「ちよっ、シスター。お前が本気で食べると、上条もノリノリだな
オイ」

ロックオンはインデックスの無限のブラックホール存在を知っているのだ。そして、確実にこのままでは財布が寂しくなることも…

「インデックス。私も負けんぞ」

「ラウラだったらもう…」

ここに来て苦労人復活のかなめ、すでに頭が痛そうに抱えているのであった。

「本当にすみませんロックオンさん」

「おまえ…本当に束妹なのか不思議に思えてきたぜ…」

ロックオン・ストラトスもどうやら苦労人のようであった。

「よし、ではロックオンのおごりでメシを食べに行こう」

「ソースケ。オメエが言うなアアア」

ロックオンは某クルツの様に叫んだのであった。

イオリア・シュヘンベルグ。この男と出会う時、刹那達が衝撃を受けるのだがそれはまだ少し先のお話であった。

第30話・次に進む者（後書き）

刹那の新ガンダム、ネクストは今自分が書いてる小説のリリなのとスパロボZのクロス小説の中で出てきたオリジナルガンダムです。まあ、理由はそっちの小説は放置気味なので、せつかく刹那がいると思い今回登場させてみました。能力は少しずつ紹介していこうかと思えます。

イオリアは後々重要キャラとして登場します。まあ、登場は夏休み編の予定ですね。

あと、シャルの武装のアンケートをやってるのでよかったですね。

次回、IS学園に帰ろうとする宗介達。しかし、目の前で事件起きる、宗介達は介入をしようとした時、そこに現れたのはなんと、マスターボン太君であった。

第31話・輝け、俺の手よ！！（前書き）

題名はあまり気にしないでください。そして、今回で出会い編は一応終わりです。次の話からは夏休み編の予定です。そこでもまだまだ出会いはあるので続きと想っていてください。

それと、スピノフ的なのはとインふものクロスも始めました。よかったら読んでみてください。

第31話・輝け、俺の手よ!!

あれからロックオン・ストラトスことニール・デイランデイの奢り（強制的）でご飯を食べた一向。特にインデックスは満足のご様子だった模様。ロックオンはかなり凹んでいたようだが…

「給料の半分が…」

「ニール先生。元氣出してください」

そんなロックオンを見て上条はそっとロックオンを慰める。流石は不幸の達人。

「では姉さん。私達はこれで帰ります」

「うん。ちーちゃんやいつ君に他の子たちにもよろしくって言っておいてね」

「もう行っちまうのか相良。まあ、また学園都市に来たら今度はゆつくり遊ぼうぜ」

「ああ、そうだな」

「らつらもかなめももまた遊ぼうね」

「今度は負けないからな!!」

「そうね。また来るからその時もつと遊んじやおう」

「ロックオン…頑張れ」

「刹那。オメエは気が楽で羨ましいぜ」

そして、宗介達は別れを言って立ち去ろうとした時、突如、近くに
あつた銀行から爆発音がした。

「何だ？」

一同は銀行の方を見る。そこにはシャッターが閉められているのが
見える。だが、それがただ事ではない事は回りにいる人間も感じ取
っていた。

「宗介」

「そーくん。今アンチスキルが来るから余り動かない方がいいよ」

宗介が動こうとした瞬間、束に止められる。アンチスキルとは言わ
ば警察見たいなものだ。だが次の瞬間、黒い何かが銀行の前に現れ
たのだ。

「ふん。何処に行つても愚かなことをする輩はいるものだな…ふんつ。ダアアアアクネスフィンガアアアアア!!!」

それは、マスターボン太君であつた。マスターボン太君は腕を黒いオーラを纏わせると、そのままシャッターを突き破り中に入つていた。そこからは銀行強盗をした人物が何か言っているようだが、次第に戦闘の音が響き、少ししたら音が収まつたのだ。

「おい、あれつて最近話題の…」

「マスターボン太君だ」

宗介は苦い虫を噛んだような表情をする。そんな宗介の意図をしらず、マスターボン太君は外に出て来たのだ。

「わぁとうまとうま。あれボン太君だよ」

「おまえな…この状態でよくはしゃげるよな」

インデックスは興奮状態だが、ラウラ、箒、刹那は警戒体勢を取り。ロククオンはそんな空気を感じて同じく警戒態勢を取る。そして宗介は…

「出るオオボン太君!!」

宗介はボン太君に乗り出し、マスターボン太君の前に立つ。

「ほう。いつぞやのボン太君ではないか。あれから腕を上げたのか？」

「それを今から試す」

ボン太君の手にはいつもの武器が…握られていなかった。そして、ボン太君は腕を掲げ。

「行くぞ!! 必殺!!」

「返り討ちにしてくれるわ!!」

「シャアアアアイニング!!」

「ダアアアアアクネス!!」

「フインガアアアアアアアアア!!!!!!」

ボン太君の腕が何と緑く光り輝き、マスターボン太君のダークネスフィンガーと激しくぶつかり合うのだ。

「ちよっ！！ソースケ！！それは流石にまずいんじゃないの！！」

皆が唾然としている中でもつつこむかなめ、流石はつつこみ達人。

まあ、それは置いておいて。激しくぶつかるとなるエネルギー、しかし、遂にそれが破られるのであった。

「うわあああ！！」

宗介が乗るボン太君が吹き飛ばされると言う意味で破られたのだ。

「どうやら少しは腕を上げたようだが…その程度の腕でワシに勝とうなどとは…笑止！！ワシを倒したいのならもっと精進をするのだな」

「くっ！！」

マスターボン太君に何も言い返せない宗介はとても悔しそうな表情をしていた。そして、颯爽と姿を消すマスターボン太君である。

「何だか大ごとになりそうだね。私はあいちゃんに事情を話してく

るから箒ちゃん達はその間に」

「ああ。ではまた姉上」

「刹那：またな」

「ああ」

こうして、今度こそ本当に別れた一向。皆の表情は明るい、一人位奴がいた。

「ソースケ、あんたいつまで仏頂面してるのよ」

「千鳥、俺はあいつに勝てるのだろうか？」

「珍しいわね、アンタが弱気になるなんて。しっかりしなさい、アンタがそんな調子じゃ私も皆の調子が狂うわよ。それに、アンタは強いし勝てるわよ。それは付き合いが長い私が言っんですもの。だから自信持ちなさい」

「そうだな…済まない千鳥。俺はどうかしていた」

「そうよ、アンタはそれが一番よ」

こんな会話が学園に着くまでしていた。二人の会話を見ていた箒、

ラウラ、刹那は無言で、しかし見守るように二人を見ていたのだっ
た。

第31話・輝け、俺の手よ!!（後書き）

予告

夏休み…それは学生が一番喜ぶ期間、だが、そこにも出会いはたくさんある。

「フウツハハハハハ。狂気のマッドサイエンティスト、鳳凰院凶真に不可能はない!!」

「岡部、うるさいわよ。それに私は助手でもティーナでもない!!」

時を超える技術を持つ者達との出会い。

「私こそがイオリア・シュヘンベルグだ」

天上人の創設者との出会い、そこで衝撃的な事実を知る事になる。

「俺の歌を聞け!!」

歌を歌う流離う者との出会い。

「私達が習志野フラッグファイターズだ」

グラハムは失った部下との再会をする。

「見えた、水の一滴が!!」

宗介は修行でギアナ高地に行き、あるものを手に入れる。

「これが相良の新しい機体、ようやく完成しました」

宗介は新しい力を手に入れる。

これは、ほんのささやかな触り。一体夏休みはどうなるのかまだ誰も知らない…

ラウラ

「ふう、こんなものかな。じゃあ次回から夏休み編になるから楽しみにしてるんだぞ。あつ、ちゃんと海や温泉の話もやるから安心してしろ。じゃあな」

次回からこんな感じですよ。では

第32話・時を超えた者と出会い（前書き）

今回から夏休み編と最近ハマっているsteins;gateが準レギュラーとして登場します。

アンケートもまだやっているので案があったらよろしくです。

第32話・時を超えた者と出会い

さて、学生の宗介達は当然のことながら学生の運命ともいえるべき物、テストが当然のようにある。IS学園では一学期には中間テストを行わないため期末テストのみである。

だが、IS学園はISを学びに世界から選ばれた子達しか来れない。よって当然皆は毎日予習復習をしている。ある一例を除いて…

いつものメンバーで言う。代表候補生であるセシリア、シャル、鈴は当然勉強をしているので問題はない。箒はテスト前にたちやんと勉強をする子なのでテストは問題はない。

かなめやテッサ、レナードも問題は無く、アルトも向こうの世界でも学生だったのでテスト前の行動の仕方はわかっていたので問題はない。

問題があつたのは宗介、ラウラ、一夏、刹那の四人であつた。宗介は苦手な古文、現代文、日本史で苦戦をし、ラウラに至っては全科が全滅していた。本当に代表候補生か怪しくなってきた瞬間だつた。

そして刹那は元の世界では学生だつた事はなく。勉強自体が初めてだつたため分からないことだらけであつた。これはしょうがないと言えましょうが、ないかもしれない。

一夏はそれほど酷いわけではないがそれでも苦手な勉強だつたので困っていた。

テスト前はこの四人を助ける事を含めてよく勉強会をしていた。勉強会はテスト一週間前から毎日していた結果、不安だつた四人は赤点を一つも取らずに済んだのである。

そして7月18日、あれよあれよと終業式を終え、夏休みが始まったのである。

「ソースケ。場所はここで会ってるわよね……」

「その地図通りなら」

久しぶり、千鳥かなめです。今日は夏休み初日の7月19日。今私とソースケは秋葉原にある”未来ガジェット研究所”とがある建物の目の前に来ています。何でここに私達がいるのかと言うと、夏休みに入り、異世界組の人達をどうやって元の世界に戻すかと言う話が出たのだ。

「なあ千鳥、異世界に行くにはどうすればいいんだ？」

「それ私に聞くの？まあ、刹那君達を元の世界に戻してあげないとね。でも……」

「だな……」

当然、私達には思い浮かばなかった。前に鈴のAIであるアーチ

ヤーに聞いた話しでは平行世界の移動をするには”第二魔法”と言
うらしい。それは並大抵の出来ないと聞かされていた。
溜息をついている私達の下にラウラがこっちに来た。両腕にはコン
パクトノートパソコンがあった。

「なあ宗介、かなめ。いま@チャンネルに興味深い話が出ているん
だ」

「何が出ているんだ？」

「タイムマシンを作った人間がいるみたいなんだ。まあ、当然殆ど
の人が信じてはいないが」

私もその話を聞いた時、すぐに信じなかった。

「タイムマシンか…たしか2000年辺りにジョン・タイターと言
う人物が現れて色々と世間を賑わかせていたな」

「ジョン・タイター？」

宗介が誰かの名前を言うが、私はそんな人物を聞いたことはなかつ
たがラウラはどうやら違っていた。

「タイターか、私も知っているぞ。でも何故だか皆がタイターの事
を知らないんだ。正直、覚えている奴を見たのは宗介が初めてだぞ」

「確かに俺も前にクルツやマオに聞いたが誰も覚えていないと言っていた」

二人はうぐんと唸るが、私はきっぱりと覚えていないと言つと二人は考えるのを諦めた。

「で、ラウラ。タイムマシンがどうかしの？」

「いやな。普通ならタイムマシンなんか妄言と思うだろう？ けど何だろう。私はこのタイムマシンは本当にあるかもしれないと思つたのだ」

「仮定にもしタイムマシンがあるとしたなら…平行世界に行ける手掛かりがあるかもしれないわね」

「なら、それを確かめに行くのはどうだ？」

「そうね…夏休みだし」

「ちなみに、その場所は秋葉原にある”未来ガジェット研究所”と言う所らしいぞ」

こんな会話を昨日していて今に至るのよ。ちなみにラウラはアキバ巡りをしている、後で場所を知らせるから問題はないわよ。

「では行くか」

私とソースケは建物の階段に上がり、二階に行く。それにしても一回の店、”ブラウン工房”って店よね。何か凄くブラウン管テレビがあったのが印象ね。私が考えているとソースケは二階に着き扉をノックしようとしたが…

「まったく使えない助手だな」

「だから私は助手じゃないってっていつてるでしょうが」

なにやら男女の言い争いの声が聞こえる。しかし、何か女性の声に聞き覚えがあるのよね。宗介は中でもお構いなく扉をノックして中に入る。

「失礼をする。ここが未来ガジェット研究所であっているか？」

「ちよつソースケって…」

「えっ…」

私は中にいるさっきの男性の声の人だろう白衣を着たの男性の横に

いる女性と目が合い…

「あなた…もしかしなくてもかなめ？」

「あんだこそ…もしかしなくて紅莉栖？」

「何だ助手、その女子高生と知り合いなのか？」

「向こうにいた時に同じジュニアハイスクールに通ってたのよ」

向こうとはアメリカの事で。私は中学までアメリカに住んでいたのだ、言わば帰国子女だったのだ。

「ほうほう。まあそれはいいとしてお前達はこの我がラボ、未来ガジェット研究所に何の用だ？」

「ここにタイムマシンがあると聞き、それを確かめに来た」

「何！！まさかお前は機関の人間か！！…もしもし俺だ、緊急事態が起きた。今機関の刺客が俺の目の前にいる、俺はどうすればいい…なるほど。なんとかしてみようでは。エル・プサイ・コングルウ」

急に白衣を着た男が大きなりアクションをしながら電話をしたので私はビククリしてその様子を見ていた。

「かなめ。あれは気にしなくていいから。あれは岡部の病気みたいなものだから」

「オカリン自演乙」

そこで、奥の方にあるパソコンをしていた男性がこっちに来た。つてかこの人の声ソースケに似てるわよね。ソースケはあんな事は言わないけど…

「どうした千鳥？」

「なんでもないわよ」

「くっ、貴様たち。ここに何の用…」

「はいはい。岡部は邪魔だからあっち行ってなさい、かなめと…」

「俺は相良宗介だ」

「そう、じゃあ二人ともあがって」

私のイメージから研究所って言う位だからこないだいった篠ノ之研

究所みたいなのをイメージしてたけど、ビルの二階にあると聞いた時点から大体は予想できた。まあ、中は色々な道具や本などがあるからそれなりの事はしてるんだなっと思った。

それより私が驚いているのはアメリカにいる筈の紅莉栖が日本に、しかもアキバにいるなんて予想もしてなかったし、ここで再会するとは思わなかった。

「えつと牧瀬氏、その女子高生とは知り合いなの？」

「そうよ。かなめとはジュニアハイスクールが一緒だったのよ。歳は一つ下だけど同じ日本人だから結構一緒にいたのよ」

「ほう。クリスティーナに友人がいるとは知らなかったな。助手の友人なら自己紹介をせねばならんな。ならまずはこのマッドサイエントティストこのラボの創設者であるこの俺、鳳凰院……」

「こいつは岡部倫太郎よ」

鳳凰院：岡部さんが名乗る途中に紅莉栖が間に入って名前を言うて来た。この人いつもこの調子なのかな……

「ちっ、助手め……まあいい。そこにいる大きいのはスーパーハカールのダルこと橋田至だ」

「ハカーじゃなくてハッカーだる常考」

「そして、俺の助手ことクリスティー……」

「私は牧瀬紅莉栖よ。よろしくね」

私達はい自己紹介を終えるとラボの床に腰を下ろす。ラボなのに床がフローリングなのが何とも言えない微妙な感じだった。

「それでかなめ。いったいこんな所にどうしたのよ？」

「うん。それがね…」

私は今の状況と、IS学園にいる刹那君やアルト君の事を話した。

「異世界…平行世界…」

「そう、私達はここでタイムマシンがあると聞いてここに来たの」

「かなめ…残念だけどそれは不可能よ」

「どうして？」

「それは俺が説明しよう」

説明は岡部さんがするようだ。説明によれば縦軸にある線を”世界線”と言い。その世界線内で過去を何度も違う行動やらをして”

世界線の収束”と言う物で、どんな形でも答えは同じくなくなってしまうとの事である。

だからもし、本当の意味での平行世界に行くのならその世界線自体を壊すか何らか知らの方法をすれば移動が出来る見たい。でも、その際に移動前：岡部さんはこれを改変と言っていた。改変前の記憶はなくなると言っていた。

でも。ここで一つの疑問が出て来る。そう…

「岡部さん。私とソースケ、一年前にある世界に行きました」

今度は私とソースケが体験した去年の事を話した。あれはたしかに別の地球から来た人たちが集まってたからね。

「何だと…ふつ。だが、その話が本当かどうか…」

「あつ。それって去年の六月くらいにビックサイトで起こった事件なんじゃね？あれのせいで去年のコミケが延期になった」

「何だと。それは本当かダル？」

「モチのロン」

ここで岡部さんは頭を抱え込みながら何かを呟いていたが私は気にしない事にする。

「そうだ岡部。お前に一つ聞きたいことがある。ジョン・タイターと言っつのは知っているか？」

「ああ、知っている。最近現れた奴だろう？それがどうした」

「いや、俺が言っつのは2000年に現れたタイターの事だ」

宗介がタイターの話しをした瞬間。頭を抱えていた岡部さんが…いや、紅莉栖や橋田さんも驚いた表情で宗介を見る。

「相良！！それは本当か！？」

「ああ。だが、周りは誰も覚えていないそうだ」

岡部さんは激しく動揺…なのかどうかは分からないけど、また奇怪な行動をし始めた。だけど今度は紅莉栖や橋田さんも驚いていた。

「あ、あなた。それは本当なの？」

「そうだが、何か問題でもあるのか？」

ここで、紅莉栖は表情を深刻そうにしながら考え、少し時間が流れ、口を開いた。

紅莉栖の口から語られたのは時を超える技術を偶然に開発してしまったガジェット研究所、最初は面白半分でしていた実験だったが”SEREN”と言う現代の学園都市に次いで科学が進歩している所の裏の顔、そしてSERENによる襲撃、ある少女の悲劇。

岡部さん達はその悲劇を回避しようと開発した”タイムリープマシン”を使い何とか違う世界線に移動した、だが、今度は紅莉栖の悲劇。その悲劇を今度は本物のタイムマシンを使い、紅莉栖と少女が死なない世界線…つまり、この世界線に来たこと。

そして、その中心にいた岡部さんが持つ世界線を移動しても前の世界線での記憶を引き継いで覚えている力”リーディングシュタイナー”と呼ばれる力があってこそ出来た事だと言うこと。

岡部さんは紅莉栖がこの話をしている間は何か辛そうな表情をしていた事が気になったが私はそれを聞く事は出来なかった。

「じゃあ宗介も、そのリーディングシュタイナーって言う力を持つてるかも知れないって事？」

「うーん、それは確定できな。今このラボには時を超える機械はないから」

「いーやダルよ。あれがあるではか？」

「オカリン。あれは欠陥品だつてこないだ決まったじゃん」

岡部さんと橋田さんはなにやら口論を始めてしまったようだ。ちなみに話しを聞いていた宗介は何かを考えているかのように黙っている。

る。

「でも、まさか紅莉栖がそんな大変な事になってたとわね」

「かなめ…あなたも大変な事を経験してるでしょう。これは私の勘
だけ」

私は紅莉栖に私が体験してきた事を全て話すと、紅莉栖は「それ…
本当なの？」と言われた。それはこっちが言いたいわよ。

「そうか…ではクリスティーナ。君の結論は平行世界の任意の移動
は出来ない」と

「私にはティーナは無いって…今の段階ではね。でも、いつ何が起
こるか分からないから何とも言えないけど…」

紅莉栖が言ってた「いつ何が起こるか分からない」、確かにそれは
言えてた。だって異世界に飛ばされたり、飛んできたりと最近で色
んな事が起きている。もう慣れたがよくよく思うとこれは結構大変
な経験ではないかと今になって思う私だった。

そして、私は頭の隅の方にこのセリフを頭の隅にとどめておくよう
にしていた。

第32話・時を超えた者と出会い（後書き）

steins;gateの設定は一応、原作真エンド後と言う設定なのですが自分はまだ原作未プレイです。でも、大概の内容は知っているので何とか行けると思いますがどこか抜けていたり変でしたら指摘していただけるとともうれしいです。

66月に出るPSP版は買う予定なので発売日が楽しみです。

次回もラボがメインになります。シユタゲキャラも続々と登場予定です。

第33話・タイムマシン（前書き）

タイムマシン…決してネコ型ロボットのような単純なものではありませんのであしからず。

第33話・タイムマシン

こんにちは、私はラウラだ。今私は”未来ガジェット研究所”と言う所に宗介とかなめと一緒に向かっていたのだが、どうやらはぐれてしまったようだ。

携帯にメールしようにも私の携帯は運悪くバッテリー切れを起こして使い物にならなくなっている。

さて、どうしたものかと私はアニメイト前のベンチに座って考えていると、隣に水色のワンピースを着た私より一つか二つ上くらいの少女が座ってきた。

「ねえあなた、どうしたの？」

「いやな、友人とはぐれてしまって如何しようかと考えていたんだ」

私はその少女を改めて見る。少女は見た目おっとりとした感じを感じる。

「それならまゆしいも一緒に探してあげるのは」

「いや、それは悪いだろう…」

「大丈夫！今まゆしいはとっても暇なのです！」

「そ、そうか。おっと、私はラウラ、ラウラ・ボーデヴィッツだ」

「私は椎名まゆりだよ。よろしくねラウラちゃん」

私は今出会ったまゆりと一緒にベンチから腰を上げる。

「ねえねえラウラちゃん。ラウラちゃんが探してる人ってどんな人？」

「そうだな……」

ここで私は二人を探すより先に目的地に行つてからそこで携帯を充電させてもらつて二人に電話をした方がいいのでは思い私はまゆりに聞く。

「なあまゆり。お前は”未来ガジェット研究所”ってしってるか？」

私はまゆりに知らないだろうと思ひながら一応聞いてみたのだが……

「まゆしいはその場所を知っているのです」

まさか、一発目で知ってる人に、しかも、こののんびりとした子から聞けるとは思いもよらなかった。

「なら。私が案内してあげるね」

「う、うむ。助かる」

私はまゆりに手を握られながら秋葉原の街を歩いた。秋葉原の街に来たのは今日が初めてなので色んな物が新鮮に見えた。あつ、あとでソフマップに行こう。

少し大通り歩くと小路に入り、一二分歩くとあるビルにたどり着く。そのビルの一階はなにやらブラウン管のテレビが沢山置いてある。おそらくブラウン管のテレビを専門とした店だろう。あとで少し寄ってみよう。

「この二階がそうなのです」

どうやらこの建物の二階が研究所のようだ、とてもそうには見えな
いのだが。

「それで。タイムマシンとやらは何処に？」

「タイムマシンは今が無い…いや、あるにはあるのだが…」

さっきまではきはきと話していた岡部さんは急に歯切れの悪く話してくる。

「それってどういう意味ですか？」

「それはこゆ意味」

岡部さんの代わりに橋田さんが奥から機械の塊を持ってきてくれる。

「あの〜これは一体…」

「これがタイムマシンよかなめ。これは一応、人を時間移動させるのは理論所可能だけど物理上人を時間移動させるのは無理ね」

あゝ大体理由が分かる。だって、これなにかの追加パーツに見えるから。

「くっ…俺達が経験してきた事を元にした未来ガジェット九号電話レンジ（仮）を改良に改良を重ね、俺達はそこで新たな物を見つけ
たあ」

岡部さんがまた変な喋り方で説明してきた。

「ふふふ。知りたいか？いいだろう、それは時間移動をするときにある粒子が発生することに気づいた！」

「気づいたのは僕だけだね」

「うるさいぞダル。そして、その粒子を使用した時間移動はどうかから世界線を簡単に越えることが可能だと気付いたのだ！」

「気づいたのは私よ」

「うるさいぞ助手よ。俺はその粒子に時粒子と名付けた。そして、この不完全なタイムマシンの名は未来ガジェット十号エクサランスと名付けることにしたのだ」

「ちなみに、エクサランスって名前はスパロボRの主人公機から取ったものだよ」

…え〜と、どこから突っ込もうかしら。

「トウツトウルーただいま帰って来たのです」

そこに、ラボの玄関のドアが開く音が聞こえ、女の子の声が聞こえ

てきたってそのあいさつはなんなの？

「頼まれたドクペ買って来たよ、あと可愛い女の子を拾って来たのです」

「おじゃまします…」

そう言って入ってきたのは銀髪で両目が赤と金のオッドアイのってラウラじゃないの。

「ま、まゆ氏。その美少女は何者？」

「橋田、変な眼で見ないの」

「この子はラウラちゃんって言うんだよ」

「あゝその子は私と宗介の連れなんです」

私はラウラの説明をする。その後の女の子、椎名まゆりと言う女の子と自己紹介を済ませた。まゆりは何と私や宗介と同年だった、同年の子に会うのは実は最近無かったから何故か少し感動しちゃうたりして…

「かなめちゃんに宗介君だね。よろしくね。ところでオカリン達は何をしていたの？」

「それはだな……」

「なんだと！これがタイムマシン。これがあれば織田信長や豊臣秀吉などに会えるのではないか！」

えっと……ラウラ。あんた一応ドイツ人よね……？

「コイツ達にタイムマシンを見せていた」

「でもオカリン。あれって……」

まゆりもあれが欠陥品って知っているみたいね。私は未完成のタイムマシンを見てある事に気づく。

「あれ……これって……やっぱり……」

「どうかしたのかなめ？」

「紅莉栖。これもしかしたら……宗介」

私はタイムマシンを手に取りあちこちを見る。

「これ、アンタのレーバテイン装備すればもしかしたら……」

「まてまて千鳥かなめよ。お前が言うレーバティンとやらはなんだ？」

レーバティンの説明をする私。ASは今現在では一般にも知られて
いるけど最新機で米軍が所持しているM9。レーバティンはまさに
ワンオフの機体である事を説明する。

その事を踏まえてソースケがASに関係している組織に入っている
事も説明した。

「ま、こんなところですね。…それにしても面白そうよね。よしソ
ースケ、あとでテッサに改良しても良いか聞いてみるわよ」

「ちよっ、千鳥？」

ソースケが何か言っているけど気にしない気にしない。

「ふっ、ふはははは。なにやら面白い事になってきたではないか助
手よ…」

「そうね…私はASはわからないけど…」

「僕もASには少し興味があつたからちよっどいいタイミング」

「まゆしいには難しすぎてよくわからないのです

レーバティンを改良する流れになってきたわね。そういえばラウラは…

「ふむ、武装はやはり…」

早速プランを練っていた。

「ふう。まさか本当にタイムマシンがあるなんて思わなかったわよ

「俺もだ」

「私もだ」

でも、私は思った。この夏休みは忙しくなるな〜って。

「それにしても。このタイムマシン…エクサランスを使う日が来る
とはね」

「まったくその通り。ま、どうなるかはわからないけど」

「それにだ…俺達は何故7月2日にいたのか…しかも今までの事が
全て覚えているのか…その謎がわかる気がするかも…」

「オカリン妄想乙」

「えっへへ。ラウラちゃん可愛かったな〜今度まゆしいが作ったコ
スプレを着させてみよう」

「まゆ氏。その時は僕も呼んでくれると凄く大興奮!!」

「大興奮するなこのHENTAI」

第33話・タイムマシン（後書き）

タイムマシンの名前はスパロボRの主役機から名前をとりました。それに伴い時粒子も出させてみました。いや、自分がやった初のスパロボがRで、未だにタイムマシンと言ったらエクサランスの名前が最初に浮かぶくらいに印象深いものでした。

シユタゲのタイムマシンって最後はどうなってるのかな？早くゲームをやりたい。

次回、話はIS学園…

「箒…話があるんだが」

「なんだ一夏？」

「実は俺…お前の事が…」

一夏は箒に何を言おうとするのか！…！！

第34話・幕の決意、一夏にとって忘れられない日（前書き）

今回の話はがらりと変わります。なんだったって宗介やラウラが出てこないのですから。たぶん初めてだと思えます。

第34話・幕の決意、一夏にとって忘れられない日

よっ。久しぶりかな？織斑一夏だ。一応、ISの主人公なんだけど…それはいいや。

今日は夏休み初日の七月十九日だ。朝からラウラが”未来ガジェツト研究所”に行つてくると騒いでいたがあれは何なんだ？まあいい。俺は今、ルームメイトのレナード・テストロツサがまだ寝ているのでこっそり部屋を出た所だ。そう、俺はこれから…

「一夏、これから何処に行くのだ？」

「幕か。今から実家に帰ろうとしてたんだ」

そう、自分の家に帰ろうとしていた。その理由は千冬姉が余り家に帰らないのし、更に俺まで帰らなくなると両親に悪いだろう？お前に両親がいるのかって…おいおい。いなかったら俺はどうやって生まれて来たんだよ。

そう言う事で俺はこの夏休みを実家で暮らそうと思っていた。

「そうか、私も丁度実家に帰ろうとしていた所だ。途中まで一緒に行かないか？」

「ああ、いいぜ」

箒の実家は俺の家の近所にあるんだ。まあ、そうと決まった俺と箒は寮長である千冬姉のいる寮長室に向かう。

「あゝ一夏に箒。家に帰るのはいいけど…親、いないぞ」

「はあ？それどういう意味だよ千冬姉？」

「そうですよ千冬さん」

俺が千冬姉に言つと千冬姉はそんな事を言つて来た。意味が分からず千冬姉に問いただしてしまふ。

「父さんと母さん。それに箒の両親の四人で何でもベネズエラ、何て言つていたかな…ラ・グラン・サバナと言つ所を調査しに行くと言つていた」

父さんと母さん。それに箒の両親は世界のありとあらゆる不思議を追い求めて昔から世界中を旅をして、研究をしている。そして、見つけた不思議を本に書き売り出しているのだ。だから昔から割と俺の両親や箒の両親は家に余りいなかったのだ。

「あゝ大体理由はわかった。そうだな…でもやっぱ俺一回家に帰るわ。たまには部屋の掃除とかやっていないゲームとかしたいしな」

「私も一回家に帰ろうと思います」

「そうか、わかった。なら一夏、私も今日家に帰るからな」

「ああわかった」

そう言いながら俺と篤は部屋を後にした。その後は学園内に残っている皆に家に帰る事を伝えると俺と篤は学園を出て自分の家に向かった。

「一夏、私はここで」

「おう。じゃあな」

家の近くまで来ると俺は篤と別れて久々の我が家を見るって言うても何も変わらないんだけどね。

「ただいまっ」と

玄関のドアを開けるとそこにはやはり誰もいない感じを受ける俺はまず一回の居間に行き荷物を置くとキッチンに向かい冷蔵庫などを確認する。

居間は余り汚れ無かったから自分の部屋に行く。割と久々に来た我が部屋、IS学園に通ってから最初の方は割と週末には戻っていた

が、色々あったり宗介やらなんやらと本当に色々あった。

「さてと。片づけすっか」

片づけを初めて二時間位した所で俺は一息を入れる。部屋自体は割と綺麗だったが布団とか本棚のしたとか細かいところが汚かったから掃除をした。

ピンポン

「ん？誰だろう」

俺は一階に降りてドアを開ける。

「はーいって篙か」

そこにいたのはさっき別れた篙だった。格好は学園の制服では無くて篙の私服だろう、ジーンズに黒いＴシャツと動きやすいラフな格好をしていた。

「どうしたんだ篙？」

「何、部屋の掃除が終わってな。暇だったから来たんだ」

「そうか。あがれよ」

「ああ。お邪魔する」

俺は箸を家に入れ、居間に案内すると箸をソファーに座らせ。冷蔵庫からお茶を出そうとしたが俺は冷蔵庫に何も無い事に思い出した。

「わりい箸。今家、何も無いんだった」

「そうだろうと思って買って来た」

うわあ。めちゃ気がきく。やっぱりお嫁に貰うんなら箸見たいな人がいいよな」

「なっ／＼何を言い出すんだお前は？」

やべ、心よまれちゃった。

「何でもねえよ。ありがとな。それよりお前昼飯食ったか？」

「いやまだだ。だがついでにと材料も買って来た」

「マジで！！本当に助かるな。なら一緒に作らないか？」

「ああ。別にいいぞ」

俺と箒はキッチンに向かい、箒が買ってきてくれた材料を見る。材料を見ると色々と作れそうだが時間的にも俺はかなり腹が減っていたから手短にチャーハンを作ろうと考えた。幸いにも米だけは残っていたからな。

食べるものが決まると俺と箒は調理を開始した。米を炊いている間にまずは放置気味の食器を洗い、その後はチャーハンの具を二人で分担しながら切り、ついでにみそ汁も作ってみた。まあ、みそ汁は箒が殆どだけだな。

何だかんだでチャーハンとみそ汁は出来て、お皿に盛りつけると居間のテーブルの上に運んだ。

「うし、食つか」

「そうだな」

「いただきます」

俺と箒は手を合わせていただきますを言って食べ始める…

「ふゝ食った食った」

「行儀が悪いぞ一夏」

食べ終わった食器を水に着けると俺と箒はソファアに座る。

「そう言えば一夏。お前は何をしていたのだ？」

「お前と一緒に、部屋の片づけ」

「終わったのか？」

「いや。まだまだ」

「そうか、なら私も手伝っても良いか？」

「それは嬉しいんだけどいいのか？」

「ああ」

「そっか。んじゃ片づけの続きをやりますか」

俺は気合を入れるとソファアから立ち上がり、箒と一緒に俺の部屋に向かう。

「一夏、これは何処に置けばいい？」

「それはそこに置いておいてくれ」

「一夏、これはどうすればいい？」

「それは……」

俺と箒は騒がしもしながら部屋を片付けて行った。

「ふう何とかなったな。ありがとな箒」

俺は箒に礼を言って時計を見るといつの間にか五時を過ぎていた。

「箒、一階で一休みしよう」

「……」

「箒？」

「ど、ど、どしたのだ一夏？」

「いや。一階で一休みしようぜ」

「あ、ああ」

そう言いながら箒は一階に行った。なんか様子がおかしいな？

俺はそんな事を考えながら居間に行くと、真剣な表情をして立って俺を見つめている筈がいた。

「どうしたんだ筈？」

「一夏、お前に言っておきたいことがあるんだ。聞いてくれるか？」

「あ、ああ」

筈はどうやら本当に真剣な話しをしようとしているのだ。

「私は…昔からお前の事が…織斑一夏の事が…」

筈が頬を赤らめせながら言葉を繋げて行った。何か俺、心臓がバクバクしてきたぞ。

「好きです…！」

「…はい？」

「だから私はお前の事が昔から好きだった言っただけだ…！」

へっ？ 箒が俺の事が好き…だが、そう言われると何となくだがわかる。宗介が来た後は色々あって余り感じなくなってきたが、来る前はそう…何となくだが感じてきた。それにしてもそっか…見た目大和撫子の様な美人で中身はしっかり者箒が俺の事をね…嬉しいな。そして、俺もきつと同じ感情があったに違いない。だから俺は次にこう言っただろう…

「俺もだよ箒。俺はお前のことが好きだ」

「本当…なのか？」

「ああ、本当だ。こんな俺でいいならだけどな」

その瞬間、箒が俺に抱きついて来たのだ。俺は箒の頭をそっと撫でてやる。

「ほうほう。遂に一夏と箒がくつついたな。まったく、長く一緒にいたのにやっと言っべきか」

俺は抱きつかれている箒の頭を撫でながら声が出た方を見る、そこにいたのは黒いスーツを着ている千冬姉がいた。

普通は慌てたりする所なのかもしれないが、今の俺は逆に千冬姉見てもらいたいという感情があったから至って冷静だった。

「何と。私は素晴らしいタイミングで来てしまったようだな」

更に後ろから金髪長身の男、グラハム・エーカー先生まで現れたのだ。っと。グラハム先生の声でようやく気付いた筈は…

「えっ…あっ…」

俺に抱きつきながら慌てている。慌てている筈が俺の目には可愛くて仕方ないのはどうしてだろう。

「慌てるな筈。私としてもお前達がくっついてくれるのは嬉しい。こんなダメな弟だが、これからよろしく頼むぞ筈」

「あっ。はい」

キリッと言う筈だが、未だに俺に抱きついている。可愛いなコンチクショウ。

「おお！そんな熱いものを見せつけられると私も…千冬！」

「ノーサンキュウだ。それにしてもお腹がすいたな」

「千冬姉。今家に余り材料は無いけど」

「そうだな…よし。今から一夏と筈がつき合う記念パーティーをや

るか」

「それはいいアイデアだ千冬。私の義弟の門出だ!」「」

おいおい、いつアンタの義弟になったんだい…近い将来なりそうな予感はあるけどな。

「んじゃ今から買出しに行くか。箒、一旦離れてくれるかな?」

「あつ、ああ済まない」

「よし、では行くか」

俺達四人は近くのスーパーに買い物に出かけた。俺は多分、いや、絶対。今日と言つ日を忘れないだろうな…箒と付き合いだした日を…

第34話・箒の決意、一夏にとって忘れられない日（後書き）

はい、箒と一夏をくつつけてしまいました。自分、一夏の彼女なら箒が一番似合ってると原作読んでいてずっと思っていました。それにしても自分、こういった話を描くのはあまり描いた事がないのでこんなもので良いのか不安が残ります。でも、やったことには後悔はありませんね。だって箒可愛いですし、もちろんラウラも可愛いですよ。

次回、一夏と箒が付き合いだした日から次の日、刹那・F・セイエイは生まれて初めてバイトをすることになった。一体刹那は何処にバイトをするのか!?

「ブラウン管の事なら何でも受け付けるぜ!」

番外編第一話・終わりと始まりのプロローグ（前書き）

お久しぶりです、最近更新出来ないでいて申し訳ありませんでした。今回は初の番外編で話の内容は `steins;gate` とちょっとデユラララのお話です。

なので、本編キャラは登場はしませんが、申し訳ありません。

番外編第一話・終わりと始まりのプロローグ

俺は答えを見つけた…それはもう繰り返される悲劇を回避しようとして俺は？き足掻き、ようやく俺は答えを見つけ出した。そう…

「ここは…ラボか」

俺は蒸し暑さを感じながら周りを見渡す。そこは見なれたラボの風景だった。どうやら俺は”この世界”にたどり着いたようだな。

早速俺はラボの中を見渡す、そこにはパソコンの机で寝そべっている我が右腕のダル寝ていた。俺はそれを見るとソファの方に視線を動かす。

すると、そこにいたのは気持ちよく寝ているまゆりと…紅莉栖がいたのだ。

「……………」

俺は声に出なかった。まゆりがここにいる理由はわかるが紅莉栖が本来”ここ”にいる筈がないのだ。それなのに何故ここにいるのだ。俺は頭が混乱しながら白衣のポケットから携帯を取り出し。

「俺だ、遂に機関が俺に直接精神攻撃を…」

俺はそう言つと携帯を持っていた腕をだらんと下に垂らすように下ろした。

「機関つて…SERNの事ではないか」

思い出す数々の 世界線での出来事。俺は思い出すとふっと小さく笑う。

「ふわあ〜」

「起きたか助手よ。俺の事を知っているか？」

「…はあ？アンタ何言ってるの…」

起きかけの紅莉栖も今の状態に気づいたようだ。

「何で私”アンタ”の事覚えているわけ？」

「わからん…」

本当にわからない… 世界線上では俺は紅莉栖とは他人の筈なのだ

が覚えている筈がない。

「まあ。それはいいとして…まゆり、起きて」

「にゅ〜まゆしいはもう食べられないのです…」

こいつはいつになってもこうだな。俺は寝てるダルの頭を叩き起す。

「オカリン、人が気持よく寝てるのに頭叩くなんてひどくね？」

「だまれ。ダルとまゆりよ。お前ら何か違和感とかあるか？」

「僕は特に…ただ、今までの事を覚えてるって事だけかな？」

「まゆしいも同じくです」

「それなら私もよ。ちなみに…アンタに刺された事も覚えてるは。あれは痛かったわよ」

ぐっ…俺のトラウマを引きずり出すなんて!!相変わらずこの助手は…

「てか、何？僕達世界線移動した筈なのに覚えてるわけ？」

世界線を移動すると、移動前の記憶は誰も覚えていない。この俺以外はな。その理由は俺が”リーディング・シュタイナー”と言う能力があるかららしい。だが、この”リーディング・シュタイナー”は誰もが持っているもので。俺はそれが強く出ているに過ぎないのだ。

「それは俺にもわからん…にしても暑いな今日は」

八月に入りもう中頃、夏真っ盛りな今日は人が死ぬんじゃないかと言っ位に暑いのだ。俺は気分を紛らわすためにブラウンTVの電源を入れると丁度よくニュースがやっていた。

ニュースは今年の暑さの事や政治の事を言っているだけで、テレビの左端に小さく32度と書かれていた。

『さて今日は七月二日ですが。一年前にありました有明の事件の事ですが…』

俺はとっさに座っていた椅子から勢いよく立ちあがる。

「どうしたんオカリン」

「ダル…今の聞いてなかったのか？」

「まだ眠いから余り聞いてないお」

くっ…俺はソファで座っている筈の紅莉栖の方を見ると。紅莉栖もソファから立ちあがっていた。

「今…ニュースキャスター…」

紅莉栖は言葉が繋がっていないが何を言いたいのかは俺にはわかり領き、ダルをどかし、ネットで今日の日付を確認する。そして、今日の日付はこうだった。

「七月二日…」

もう、何が何だかわからなくなってきた。俺は紅莉栖を助ける為に七月二十八日には戻った。だが、それ以前には戻った事は無い。これは断言できる。

「え〜て言う事はまゆしいはまだ学校があるって言うこと？」

ここでもずれている事を言うコイツは本当に凄いなと思いつつながら俺はスルーする。

「…はっ！電話レンジ（仮）は？」

俺は思い出すかのようにラボの奥に行く。するとそこには完成してある電話レンジ（仮）があった。それを見ると俺は広間に戻る。

「でさ、これからどするオカリン？」

「今まで言っところ言っ経験は初めてだ…まずは情報収集だ」

そつ、世界線を移動しているのは确实だ。だから俺が知らない事があるはずだ。

そつ言っ俺はネットで情報を集める。まず俺が知らなかつた事は”IS”通称インフィニット・ストラトスなるものがある事だ。そして次に、東京都の約三分の一の大きさがあつた”学園都市”なる物が存在している事。

俺が知らないで大きなものはこの二つである。他の三人に今の二つの事を聞くとやはり三人は”知つていた”つまりここはやはり違つた世界線であつた。

だが、何故俺以外に違つた世界線の記憶を持つているのか…？そして、俺はある事を調べる。

「やはりこの世界にはあるのか…」

それはSERNの事であった。だが、ここでも違いが多少あった。それは技術が一番に進んでいない事だ。これは学園都市なる物があつたためだ。

「と言つ事は…このままいけばまた襲撃にあつかもしれん」

それは 世界線でのラウンダー襲撃の事であるがまだ一ヶ月以上あつた、そこまでに作戦を立てればよい。

「…やめだやめだ、考えてもわからん。それよりも助手がダルよ。

このISとか言つ奴と学園都市について説明を要求する」

俺は二人に説明を受ける。どうやらISと言うのはロボット見たいで違うもので、パワードスーツに近いものらしい。しかも何故か女性にしか動かせないらしい。ロボットなら既にASがあるはずなのに何故?と思つた。

次に学園都市の事だが…学園都市は外、つまり俺達がいることとの交流がまったくもつて無く、鎖国に近い状態になつていて余りわからないようだ。いつの時代だ!!しかし、その学園都市の技術はSERNを上回っているらしい。

「で、理解できたかしら岡部君」

「大体だな」

「よろしい」

久しぶりに見る生意気な助手の姿を見る俺はつい小笑いをしてしま
う。

「となると…することが無くなってしまったな」

タイムマシンやそれらにはもう関わるのはごめんだ。もうめんどく
さい事は勘弁してほしいからな。だが、電話レンジ（仮）がある以
上恐らく実験をしていたに違いないので襲撃対策をしておこう。

対策してどうなるのか？世界規模の機関に俺達見たいな物が対策し
てどうなるのか？と普通は思うがこの時何故か俺は何とかなると思
ってしまっ。

「じゃあさじゃあさ。これから池袋に行かない？」

「俺は別に構わんが」

池袋か、しばらく戻ってないあの街に。

「私は任せるわ」

「僕はここで寝ているお」

そんなこんなでダルをラボに置いて俺達はビルを出ると一回にある如何にも人が来ないような店”ブラウン管工房”と言う店がいる。実はこの店の店主、天王寺裕悟はSERENの工作員、ラウンダーと言う物のリーダーであった。そのせいで娘にも色々大変な目にあつたのはよく覚えている。

そして、ここにバイトとして働いていた阿万音鈴羽と言う少女がいた。最初にあつた時は何かずれている奴だと思つたがその正体が何と未来人であつた事には俺はとても驚いた。さらに、阿万音鈴羽の父親と言うのがラボでぐうたらしているダルと知つた時は…世界が崩壊するのではないかと思つた。俺は今でも信じられん！！

俺はそんな事を思いながらブラウン管工房を覗くと、中には一人いながつた。

「誰もいないか」

俺達は池袋の街を訪れる。池袋の街は俺やまゆりの家がある所である、まゆりは家から秋葉に通っているが俺は大学に通って以来なので久しぶりだつた。

「凄いわね。秋葉も結構人がいるけどここも凄いわね」

そんな中、今俺達は池袋の東口を出て大通りを歩いている。今日は
どうやら休日見たいらしく若者が多く歩いたり色んな事をしている。

「変わらないなこの街は」

「でしょ。ここはいつも活気があっていいよね」

「それに…どうやら物騒な連中もなくなったようだしな」

俺がまだこの街にいた時はカラーギャングがその辺を歩いていたか
らな。あの時は絡まれないように必死だったな。

「ねえ岡部、そのカラーギャングって言うのは？」

「カラーギャングと言うのは名前の通り色のギャング。色がチーム
印になっていて。色がわかりやすいように頭に巻いたり首に巻いた
りとした連中の事を言うんだ。俺がいた時に黄巾族って言うのとブ
ルースクウェアって言う派閥が大きく争っていたな。まっ、その二
つのグループは大きな争いがあって無くなったのだがな」

俺は正直、この黄巾族のボスとは知り合いで友人だ。

「ねえねえオカリン。ついこの前切り裂き魔って言う事件があった
の知ってる？」

ああ、一時ニュースで取り上げられたな。死人こそ出ていないが相
当の被害が出たって言っていたな。

「それがどうした？」

「…ううん。やっぱり何でもない」

珍しくまゆりははつきりと答えなかったが俺は深く言及するつもり
はなかった。

すると、公園が急に騒がしくなり。俺達は公園に向かうとそこには
一人の金髪の男がIS…だよな？と向き合っていた。
まあ、ISはいいとしてあの金髪の男、もしか…

「楯無よお。おまえ、いい加減に仕事の邪魔をするのはやめると何
度も言ってるだろうが」

「そ・れ・は・無理。私の愛が静雄君に届くまであきらめないわよ」
やっぱり平和島静雄だったか…

「ねえ岡部。あれかなりまずいんじゃないの？」

「そのようだな…」

「そだね」

「あんだ、それにまゆりも…何でそんなに平然としてられるわけ？あれISでしょ、それと生身の人間が戦ったら…」

「あのISが吹っ飛ぶな」

「それも盛大にどかーんって」

「はっ…？」

助手が意味が分からないと言う表情をしながら公園を見ると、丁度平和島静雄が盛大に標識をフルスイングをしてISを吹き飛ばしていた所だった。

「…ここは現実よね？」

「現実だ。そうだな、説明しておこう。あの金髪の男は通称”池袋最強”の男、平和島静雄だ。この街では人が吹っ飛ぶのは日常茶飯事だからさして誰も驚かないがな」

俺も昔は一日に一回は人間が飛ぶ光景を見ていたからな。そう思いながら俺は公園の真ん中で溜息をついている平和島静雄に声をかける。

「おまえ…岡部か？」

「鳳凰院凶真だ…！」

「トウツトウルー静雄君」

「なんだ、椎名もいるのか。それと…」

「ま、牧瀬紅莉栖です」

助手は緊張しながら自己紹介をする。緊張とは中々可愛いではないか。

「それにしてもお前久しぶり見たな。今秋葉にいるんだってな？」

「どうして知ってるんですか？」

「椎名に聞いたんだ。お前相変わらず訳わかんない事言ってるって」

「おいおいまゆりよ。お前は何を言っているのだ。そもそもなぜこの人は俺が秋葉にいるって知ってるんだ？」

「たまに静雄君と街でばったり会つと家まで送ってくれてたのです」

「大かた、その時に色々と話したのだろうな。」

「へーあなた、大学出てんのか」

「はい。今は岡部のラボに…」

「助手としているのですよ」

「……」

無言で俺をにらむ紅莉栖はとても怖いな。それとして俺はこの平和島静雄の敬語な理由は何故と思っただろう。簡単だ、高校の先輩だったからだ。歳は二つ離れている。

「あなたも大変だろう、コイツと一緒に」

「ええ。ものすっつ〜く」

「そうか。まっ、コイツは根はいい奴だからな。んじゃそろそろ仕事に戻るかじゃあな”狂気のマッドサイエンティスト”」

静雄先輩はそのまま煙草を吸いながらその場を後にする。

「ねえ岡部、あの人の仕事してるの？」

「さあ。俺が聞いた時は牛井屋のバイトをしてるって聞いたけどす

ぐにやめた見たいだった」

あの人は我慢が余りできない人だからな。

「私は知ってるよ。今は借金の取り立てをしてるって」

それはとてもあの人にピッタリな仕事だな。あの人に取り立てを受けた奴は終わったな…

その後俺達はアニメイト本店でまゆりの買い物に付き合う。助手も秋葉のアニメイトには行ったことがあるので本店の広さに驚いていた。

アニメイトを出ると東急ハンス前の通りを歩く、ここはいつも人が多い通りだ。

「ねえねえオカリン。ここってこないだニュースでやってたところだね」

「ああそうだったな」

切り裂き魔事件の少し前、東急ハンス前に”首なしライダー”が盛大に暴れたとのニュースをやっていた事を思い出してた。

「岡部、その首なしライダーって何？」

「そのまんまだ。首がないライダーの事だ」

俺が助手に説明すると助手は「一体何なのよこの街は、信じられない…そもそも首が無いなんて…」と言っていた。
俺は前を何となく見るとそこに金髪の少年を見つけて俺はその少年に声を掛けていた。

「久しぶりだな紅田正臣」

「岡部さん…」

紅田正臣、俺の知り合いで二つか三つ歳が下で。黄巾族のボスをしていた奴だ。

「トウツトウルー」

「それにまゆりさん。そして…その美しい女性はどなたですか？」

「ん？コイツは俺の助手で…」

「ちゃんと紹介させる。私は牧瀬紅莉栖です。所であなたは岡部の
どう言った関係ですか？」

「あゝまあ。昔俺、岡部さん色々世話になったので…」

「岡部が？」

助手が信じられないと言った表情で俺を見る。くっ、俺をなんだと思っっている！！

まあ、俺とまゆりがコイツに出会ったのも一年前だったな。一年前は色んな事があった。渋谷崩壊、陣代高校襲撃、池袋戦争。去年はネタに尽きない年であったが俺も巻き込まれていたので余り樂觀視出来なかった。

「ええ。まあそうですね」

「へへ所で紅田君って何か岡部に声が似てるわよね」

「よく言われましたよ。俺あの真似出来るんですよ…フウーハハハハ。この鳳凰院凶真が世界の支配構造を壊してやる！！」

壊せねえよ。ったくコイツのこのノリには相変わらずだな。

「凄い、本当にそっくりだったわ」

「いや〜てれますな〜」

「照れるな」

俺は正臣の頭を軽くこつく。

「正臣、少しいいか？」

「…ええ」

俺が真剣に正臣に言つと正臣も真剣に俺に答える。

「助手とまゆりは少し待っていてくれ」

「私は別にいいけど」

「私も」

二人の確認を取ると俺と正臣は人気のいない裏路地に行く。

「お前はもうふっ切れたのか？」

「ええ、あの後も色々とありましたけど」

一年前、普通の高校生だった俺はこの不良のボスと出会った。出会
いを語るのはめんどくさいのでそこは皆の想像に任せる。

喧嘩もした事がない俺がコイツと何故ここまでの長い付き合いをしているのか。俺は見たとおり喧嘩などはした事がない。それに頭も普通でそのあたりにいる奴らと変わりはない。

だが、俺はコイツをの話し相手をしている内に色々知り、気づいたら俺はコイツの相談役をやっていた。あの事件が起こるまで…

「そうか。ではお前とここで出会った事も何かの縁として一つ聞きたい事がある」

「何でしょう？」

「ついこの前の切り裂き事件。あれはお前は何か関係しているのか？」

「…はい。岡部さんには言っておかないといけませんね」

正臣は淡々と話す。切り裂き魔事件の犯人、最近のカラーギャング”ダラズ”。そのボスが正臣の友人、切り裂き魔の関係の友人の少女。そして、仲が良かった三人がすれ違っていた事等…
その後も詳しい詳細を聞いた俺は池袋で本当に大変な事になっていたんだと理解した。

「それでも。お前達は解決したんだろ？」

「はい」

正臣の表情をすっきりしていた。

「それで岡部さんは秋葉で何をしていたんですか？」

そこで俺も俺自身が経験した来た事を話す。コイツは辛い話しを俺にしてくれたんだ、俺も話すべきだと思った。全て語ると長くなるので大まかに話す。

「岡部さんも大変だったんですね」

「まあな」

「ふっ、俺達はどうかやら大人の階段を一步登ったようですね」

「生意気な事を言うな」

「じゃにおつ」

「さてと、そろそろ戻るぞ」

俺と正臣は通りに戻り、助手とまゆりと合流する。

「じゃあ俺はこれから友達と遊ぶんで」

「ああ」

「今度はタイムマシンの話しを詳しくしてくださいよ」

そう言いながら正臣は駅の方に走って行く。

「何か元気な子ね」

「それがあいつの取柄だからな」

「そうそう、正臣君は元気な子なのです」

その後は、店巡りをして色々回り、時間が六時になった来たのでまゆりは実家に帰るために俺と助手と別れ。俺達二人も秋葉に戻るため電車にのる。

「今日は意外な岡部を見れたわね」

「…どこかだ？」

「全部よ。何か秋葉にいるときは空気が違っって所から」

助手が言うのはあながち間違いではない。俺は異常が日常な街で育つて来たって事もあるが、あの街はとにかく人間臭い街だと俺は思う。だから自然と俺もそんな人間になっっていたんだと秋葉にいるようになってから思った事だった。

「さてと助手よ。明日から早速実験をするぞ」

「はぁ？何の実験よ？」

「それは帰ってから円卓会議で決める」

「はいはい、いつもの岡部おかえり」

助手がそう言った瞬間、秋葉原についていた。

番外編第一話・終わりと始まりのプロローグ（後書き）

steins;gateはエンディングの後をいじっています。自分は原作を絶賛プレイ中なのでクリアをしてありえないと思っただら修正をする予定です。

今回はオカリンがデユラララの紅田正臣の知り合いと言う設定を作りました。オカリンとまゆりって池袋出身って知ったときにこのネタやりたいと思ったのでやっちゃいましたって感じです。まあ、デユラララ勢も本編でちょい出てますしちょうどいいかなって。

ここで原作との違いを軽く。

オカリンとまゆりは正臣と知り合い
オカリンは正臣の正体を知っている
オカリンは良ケ来出身。必然とダルも
切り裂き魔事件の月がずれている

これくらいです。次回はこの続きか、本編かどうしようか迷っています。

第35話・結ばれた二人（前書き）

お久しぶりです。最近いろいろと忙しくて中々更新できませんでした。

今回は大人二人がメインの話です。

第35話・結ばれた二人

七月二十日

さて、昨日俺は篝の彼氏となった訳だが。これといって何か変わるわけでもなく、只昨日千冬姉が俺達がかくつついた記念をしてくれた位だ。

「おはようー夏」

「おう、おはよう」

今俺は朝誰もいないリビングの椅子に座ってのんびりしてた所に篝がピンクでウサギの絵が描いてあるパジャマ姿で現れた。ちなみにパジャマは千冬姉のものだ。

篝は昨日のあれから家に泊まったのだ。まあ、篝の家には両親、東さんがいないので一人になってしまっ。

女の子を一人にさせるのは危険と言い、千冬姉が家に泊める事にしたのだ。

「グラハム先生は？」

「まだ寝てんじゃねえの？」

寝る場所というと俺は当然自室、グラハム先生は余ってる部屋、箒は千冬姉と同じ部屋で寝ていた。

「千冬姉は？」

「まだ寝ている」

そうかと言って時計を見ると六時半になったばかりだった。で、俺と箒はすることも無かったから着替えて散歩するために外に出た。まだ朝とはいえ、もう七月の後半になるとこの時間でもかなり暑いな。

「それにしてもこの三ヶ月色々あったな」

「そうだな、まさか俺がIS学園に通うとは」

「それにラウラもだ」

「ああ。あいつがドイツ代表候補生で来たって時俺腹がおかしくなる位笑ったな」

ラウラがシャルと一緒に転入してきた時の事を思い出す…

『きよ、今日からこのクラチュに入る事にな、なる、ラウラ・ポー
デヴィッツフィで、でちゅ』

「その自己紹介の後に俺が笑いだしたらラウラが恥ずかしくて俺
に攻撃しようとして俺の前でこけて涙目になってたな！」

そうそう、あの日は一日中笑っぱなしだったな。ラウラらしいと
言えばらしいかったけどな。

「その後は宗介や千鳥、レナードに刹那にアルトと色々賑やかに
なったな」

「私はむしろそのほうが面白いがな。私としてはかなめやテッサに
出会えた事はかなり嬉しい出来事でもあるからな」

そう言えば箒は千鳥やテッサとかなり仲がいいんだったよな。その
後は談笑をしながら歩き、家に着くと起きてた千冬姉が朝食を作っ
ていた。

「おはよう一夏に箒、そのついでにグラハムを起こしてきてくれな
いか？」

「おっ」

「はい」

俺と篤は二階に上がり、グラハム先生が寝ている部屋に入ると先生は…

「初めましてだなガンダム!!」

そんな寝言を言っていた…

千冬姉が作ってくれた朝食を食べ終わると俺達はあるものを見ていた。え？千冬姉が料理出来るのかって？千冬姉も女性だぜ、むしろ千冬姉は料理が得意なんだぜ！

「懐かしいものを見てるな一夏」

俺が見ているのは七年前のに撮った写真だった。そこに映っているのは千冬姉の大学の仲間たちで千冬姉、東さん、小萌さん、桔梗さん、愛穂さん、教授のクライドさんに小さい俺、篤、ラウラ、それに…

「アムロさん…」

右端に映ってる茶髪がすこし癖っ毛の男性を見と俺と篝と千冬姉は何処か懐かしそうにする。

「あいつがいなくなってもう五年か」

「ですね」

「千冬。このアムロなる人物…まさか！」

グラハム先生がアムロさんの顔を見て千冬姉に聞く。おそらく予想は出来るけどね。

「この人物が…ガンダムに初めて乗ったと言うあのアムロ・レイなのか？」

「初めてのガンダムは知らんがそうだ」

「アムロ・レイ…一度手合わせしてみたいものだな!!」

この話をここでしても良いけど、そうなると四話位使いそうなのでまた別の所で話そう。

「千冬よ。今日は暇か？」

「ああ。これと言って何も無いが」

「では。これからデートに行こうではないか」

「デートか…まあいいだろう」

リビングですること無くのんびりしてた俺達はだつたか急にグラハム先生が千冬姉をデートに誘ったのだ。千冬姉もそれに乗り二人は二階に上がって行った。

「千冬さんとグラハム先生もそろそろ…では無いのか？」

「かもな。そうなるとグラハム先生が俺と篝の義兄さんになるな」

これは結構近い将来なりうる事だろう。千冬姉も二十六歳、そろそろ彼氏の一人もいておかしくない歳なのに今まで誰もいなかったかな。でも、千冬姉とグラハム先生がくっつけば弟の俺としてはかなり嬉しい、早く結婚してくれないかな。

そんな事を思っていると、二階から千冬姉とグラハム先生が降りてきた。二人とも学校でみるスーツを着ていた。普通、デートの時にそんなの普通着るか？と言ってしまいがちだが、この二人に関してスーツ姿とても似合っていたのだ。まあ、当然として上着は脱いでいるけどな。

「では言ってくるぞ」

「遅くなる時は連絡を入れる」

「おう、いつてらっしや〜い」

「気をつけて行って来て下さい」

俺と篤は二人を見送ると居間に戻り、この後どうするか考える。

「一夏、これからどうする？」

「そだな…久々に家にいるからゲームでもするか」

「ゲームもいいが程々にしろよ」

「そう言う篤こそ、こないだヴェスペリア徹夜でやってたじゃねえか？」

「そ、それを言うな」

そうそう、ゲームとは無縁に近かった篤が今じゃゲームをやるようになったからな。これもあの学園の人間の影響だな。

「んじゃ今日はセシリアが絶賛してるアビスでもやるか？」

「私は構わないぞ」

俺と篤は俺の部屋に行き押入れに仕舞ってるPSS2を取り出してアビスを二人プレイで始める。ちなみにヴェスペリア、アビス言うのはテイルズシリーズの作品名の事だ。

そう言えば周りにも結構テイルズ好きがいるな。篤はシンフォニア、鈴はファンタジア、セシリアはアビス、シャルはグレイセス、ラウラは俺と同じヴェスペリア。最近は宗介がデステイニーが面白いって言ってたし。無言だが刹那もレジエンディアが気に入ってるみたいだな。後はアルトとレナードをどうにかやらせたいものだなってか付き合っただけなのにゲームしていいのか？ここはデートに行くべきではと言われそうだが今日は暑い、故に外に出たくない。これが俺と篤の思った事だ。

それに千冬姉たちがデートに行ってるからな、俺達はまた違う日に行くかな。

その後の俺と篤は昼までゲームをして、二人で昼ご飯を食べると部屋に戻り特に何もせずのんびりとしていた。

そう言って俺と篤は一階に降り居間に入ろうとした瞬間。

「千冬。私はここで君にある事を言おう」

「何だ？」

「私、グラハム・エーカーは織斑千冬に婚姻を求む。私と結婚してくれー！」

何て言うフラッグファイターで乙女座で英語教師な男が千冬姉に言っていた。

「なっ／＼お前はいきなり何言い出すんだ！！？」

おっ、千冬姉が珍しく動揺してるな。あっ、ちなみに今隣にいる筈は携帯の動画で今のをばっちり撮っている。

「お、お前。冗談は…」

「私はいつも真面目さ。そして今この瞬間もだ」

「そ、そうか…」

千冬姉はなにやらもじもじしながら考えているようだ。うわあーいまの千冬姉めちゃくちゃ可愛いすぎる。いやマジで！

「い、こんな私でもい…いいのか？」

「当然！！」

「そうか…」

千冬姉がそう言った次の瞬間、千冬姉はグラハム先生に抱きつき、そのまま唇を重ね合わせた。…ってうおおおお。千冬姉キスしてらうううう。

「これが私の答えだ／＼」

「千冬…」

「こんな私でもこれからよろしく頼むぞ”あなた”」

「ああ。私も断言しよう。千冬を一生愛すると」

………あまゝい。甘過ぎて隣で見てる筈が顔真っ赤っかだぞ。そろそろここにいるのも辛いしな、色んな意味で…

「筈、そろそろ行くか」

「そ、そうだな」

そう言うと俺と箒は扉を開けて部屋に入る。俺達を見てあたふたする千冬姉と堂々としているグラハム先生に向かって俺と箒は。

「おめでと〜ございます!〜!」

いい笑顔で二人を祝福をした。

第35話・結ばれた二人（後書き）

話の途中で出てきたアムロですが、このアムロもACERに出てきたアムロと思ってください。アムロが過去に千冬達と面識があるように描きましたがこの話はいつか書こうと思っています。

次回は前にアンケートしてもらったシャルのISを登場させたいと思います。

うはぁ…今現在のプロットだと夏休み編がとても長くなりそうな感じ
じです

番外編第二話・きっかけ（前書き）

番外編で、内容はまたシュタゲになります。今回は32話の前の話で。どういった経緯でタイムマシンが現れたかと言いつのです。

番外編第二話・きっかけ

さて、俺達がこの世界線に来てから一週間が経過した。未だに七月九日と言う事でまゆりや紅莉栖が死ぬかも知れない。だが、俺はこの世界線では二人は死なないと確信している。何となくだがな。

「俺はこれからラボに行くがお前は どうするんだ？」

「僕はメイクインに行つてからにするお」

七月の中頃と言う事で俺達はまだ夏休みでは無い。よつてこうして授業に出ている訳だ、俺はダルと別れてラボに向かう。ここで変化があつた。一階の古びた店、ブラウン管工房にバイトがやつて来たのだ。

最初は阿万音鈴羽かと思つたが、何と桐生萌郁がやつて来たのだ。これには俺は驚いたがそれ以上は突っ込まなかつた。俺は…既に赦しているのだからな。

「早いではないか助手」

「まあね〜」

ラボに入るとソファアに座つて洋書を読んでいる紅莉栖と目があつ

た。

「それより岡部。今日はどうするの？」

「そうだな……」

そう言いながら冷蔵庫にしまっているドクペを取り出して飲む。

「ねえ岡部……」

「なんだ？」

「あの事…覚えてる？」

あの事？何の事だ？

「岡部が私の事を…好きだって言ったこと……」

はて？俺はそんな事を……言った。確かに俺は言った。

「覚えてるよ。今でもその気持ちは変わらんさ。そう言えばお前の答えは聞いていなかったな」

「あ…ちよつ…私も…私もあんたの事、好きよ！」

恥じらいながら俺の事を好きだと言ってくれる。

「そ、そうか」

「そ、そうよ…」

そこから俺と紅莉栖は無言になってしまう。正直何を話せばいいのかわからない状態なだけであった。

「まあ、お前の気持ちは嬉しいさ。さてと、重苦しい空気はここのま
でだ」

「そ、そうね。でも、これから何するわけ？」

「そうだな…」

俺は隣の開発室からあるものを持ってきて、それをソファの前の
テーブルの上に置く。

「これって岡部が作った目覚まし時計よね」

「ああ」

俺はこの一週間暇つぶしのためにラボにある機材とちょっと秋葉で買ったパーツで自作目覚まし時計を作った。

「よし。これからこいつの起動テストでもするか」

俺は目ざまし時計のタイマーを動かす。この目覚ましは”何分後”になるように設定をするタイプにしたのだ。

「よし、まずは三分後だな」

三分後にセットすると俺は目覚ましのタイマーを起動する。タイマーが動き出し俺と紅莉栖はじっと目覚ましを見つめる。しかし、次の瞬間。目覚ましから緑色の何かが放出され…

「き、消えた…だと…」

目覚ましが急に消えたのだ。

「…」

紅莉栖も消えた目覚ましを目で探すように辺りを探しているが、やはり何処にも見当たらない。

「岡部、アンター一体何作つたのよ？」

「いや。俺はただ目覚ましを作っただけだが…」

「はあ？いきなり消える目覚ましなんて聞いたことないわよ」

俺だってそんなの聞いた事も見た事も無い。

その瞬間、テーブルの上に消えていた目覚ましがいきなり現れたのだ。

「テーブルの上に戻ってきた」

「…いや。違うぞ」

俺は目覚ましのタイマーを見るとそこには0の表示になっていた。そこで俺はふつとある事を思い携帯の時計を見て声を失う。

「あ…」

「どっした岡部？」

「ま、まさか…」

そんな筈はない。あれはたまたま生まれた産物だ。もう二度と生まれるわけがない。だが、目の前の現象。ちよつとの事だが俺は直ぐにピンと来る。そう…

「これは…”三分後”に現れた」

「っ！！まさか」

「…これはもしかしたら…タイムマシンなのかもしれん」

なんて事だ、タイムマシン。本来の世間の認識ではタイムマシンは時を行き来出来る夢物語のもののだが、俺はその化け物のせいで色々、そう、色々と経験してきた。そして俺はもう二度とタイムマシンとは関わらないと決めた。筈なのに…

「…ははは。何だよこれ。何なんだよこれ！！」

「落ち着け岡部」

「あ、ああ」

俺がテンパリそうになりかけた所に紅莉栖が落ち着かせてくれた。

「まず岡部に一つ。これは”電話レンジ”の技術を使ったの？」

「そんなわけあるか」

目覚ましを作るのにあんなの必要はないからな。当然だろう。

「ならもう一つ。これは何なのだ？」

「目覚まし…のようだが」

「ふう…」

そこで紅莉栖は一息入れ、目覚ましを持ち研究室に入る。

「お、おい助手？」

「私はコイツの解明をこれからするわ」

「し、しかし」

「いい。私は科学者で目の前の不思議をスル 出来るほど私は人間
出来てないの。オーケー？」

「だ、だがな？」

「ああ。もう鬱陶しい。あんたもコイツが何なのか知りたいんじゃないの？」

確かに知りたい。だが、俺の脳裏にタイムマシンで絡んだ出来事が浮かんできてしまう。だが、そんな事とは別に俺の中で小さいがやはりコイツが何なのか知りたいと言う気持ちもある。

「フ…フウーハハハハハ。クリステイーナよ。この俺を誰だと思っている。泣く子も黙る狂気のマッドサイエンティスト、鳳凰院凶真だぞ。知りたい？ 違うな。それはこの俺が生み出した。故にそれは俺のこれから第一歩！」

「はいはい。久しぶりの厨二病乙。でも…岡部らしいわよ」

「そうだな」

厳密には 世界線でもやってたのだが紅莉栖は知らないからあえて言わなかった。こうして俺と紅莉栖は目覚ましの解明を始めた。

この目覚ましが後々色々な人物と出会い、色々な出来事が始まるきっかけになるなんてこの時の俺は想像できなかったであろう。

そして七月二十九日。未来ガジェット研究所に相良宗介、ラウラ・ボーデヴィツヒ、千鳥かなめが現れた事がきつかけであった事も…

番外編第二話・きっかけ（後書き）

助手はラウラクラスに可愛いすぎる。いや、あれはもうただのツンデレではないな、完璧のツンデレだ。原作をやったあんなツンデレ誰も見たことがないと思いました。

助手、さっさと岡部とくつついちゃえ。

はい、勢いでえらい事言ってますね。今回で一応ラボ過去話は終わりの予定です。夏休み編から現れたタイムマシンと言つのはこの夏休み編でのキーパーソンになる存在です。これからタイムマシンがどうなるのか今プロットを考えています。

夏休み編のキーパーソン

タイムマシン

イオリア・シュヘンベルグ

コミックマーケット、通称コミケ？コミマ？

まだまだ増える予定ですが今のところはこれぐらいです。

今回は本編の続きでシャルの話です。

第36話・執事って何かかっこいいよね（前書き）

ここで報告。この度、この小説が50万PVを迎えました。こんなたくさんの方が読んで下さるなんて。この小説はほぼネタで始めたのに気づいたらここまで来ちゃって、これも皆様のおかげです。これに着きました何か特別な事をやるのかなと思います。

・無難にキャラ投票？

・短編小説？

今のところはそんな感じですよ。

第36話・執事って何かかっこいいよね

七月十九日

こんにちは、シャルロット・デュノアです。今日から夏休みに入つたので当然だけど授業は無いんだ。それはそうと朝早くからラウラが「タイムマシン来たコレ!!」と言いなながら部屋を出て行った、どうしたんだろう？

それはそうと…これからどうしよう。僕日本の夏休みって初めてだからどうすればいいのかわかんないんだ。そんな事を考え寮の廊下を歩いていると。

「あ、刹那？」

「デュノアか」

刹那と廊下でばったりあった。刹那の格好は如何にも夏って感じの無地の白Tシャツに青色のハーフズボン姿だった。

「あれ、アルト姫は？」

「アルトならオルコットと何処かに出かけて行ったぞ」

ふふーん。姫とセシリア、デートに行ったな？帰ってきたらからか

ってやるっ。

「それで、刹那はこれから何かするの？」

「エクシアの手入れをしようかと。それとネクストを調べようかと」

「あっ、じゃあ僕も付いてくよ」

「構わない。好きにしる」

僕と刹那は学園にある整備室に向かう、整備室に着くと人一人いなかった。休み初日だからしょうがないよね。

刹那は早速エクシアを出して点検を始めた。僕は来たのはいいがやることになかったからその辺りをふらふらする。

「うん？何だろう？」

机の上に何かがあったからそれを手にすると僕はそれを見る。そこには「ラファール・リヴァル改良案b y相良」と書いてあった。

「これって僕のかな？」

僕は改良案をしてみる。そこには大型の武装、リボルビング・バン

カー、両肩にクレイモヤ、バックパックに大量のミサイルって…これじゃあ僕の機体の面影残ってないよ。
あつ、次のページに何か書いてある。なになに、「紅椿強化武装、ムラマサブレードを主軸としたもので、ABCマントを…」ってこれ海賊だよな？ 箒、このままだと宇宙海賊にされちゃうよ…

「僕のリファールどうなるんだろう…」

「どうしたデユノア？」

「これだよ刹那…」

僕は刹那に改良プランを見せる。刹那は淡々と読んで行った。

「独特の改良だな」

「でしょう。刹那の方は終わったの？」

「ああ、大方メンテは終了した。ネクストも大体把握した」

「そっか、じゃあこれからどうする？」

「そうだな…」

刹那がそう言うと、メンテを終えたエクシアを眺めていた。

「俺は将来ダブルオーやクアンタに乗る運命かもしれないが…やはりエクシアが一番しっくり来るな」

「刹那はエクシアに思入れがあるんだね」

「ああ。俺はコイツで戦い抜いたからな…」

そこに立つてるエクシア、ちゃんと整備されているが所々汚れが見える。これもずっと戦って来た証なんだよね。
ここで急に整備室の扉が開かれ、そこにいたのはぶかぶかの服を着ている少女、布仏本音がいた。

「久しぶりの登場」

「どうしたのほんね？」

「うーん。ちょっと今とつてもバイトの人手が足りないの。そこで今私助っ人探してたんだけど…丁度いい所に二人がいた！」

「えっ!!」

今、僕はかなり嫌な予感しかしないんだけど…

「二人に執事やつてもらいたいな」

「お帰りなさいませお嬢様」

あつれ〜どうしてこうなったんだろ？

あのあと、本音に無理やり連れてこられたのはメイド喫茶ならぬ執事喫茶だった。なんで本音が執事喫茶でバイトをしてるのかわからなかったら「え〜執事ってかっこいいじゃん。私は女の子だから裏方だけだね〜」って言うてた。

「お嬢様、あちらの席にご案内いたします」

うつわ〜刹那馴染みすぎ。女の子の客がさつきより増えてるよ。それにしてもどうして僕が執事の格好してるんだろ〜、僕女の子なのに。こんな所アルト姫に見られたら…

「お帰りなさいませお嬢さ…ま…」

僕は二人組のお客様が来たので挨拶をして二人の顔を見た、そして僕はその瞬間目の前が真っ白になりかけた。そう、僕の前にいるのはセシリアと…アルト姫なのだから。

「じゃ、シャルロットさん…ですわよね」

「間違いないぜセシリア。コイツはシャルだ…ぷ、お前…似合います」

「うっうっ」

くっ、どうしてこの二人がここにいるんだ？しかも一番出会いたくない人物に見つかるとは…
とはいえ、一応お客様なので僕は何気ない振りをして二人を席に案内する。

「それにしてもシャルロットさん。とても執事の格好が似合ってますわ」

「ああ、本物の執事だな」

そう言いながらバカアルトは僕をまじまじと見る。

「どづしたデュノア…」

「刹那。お前もいるのか!!」

「に、似合いすぎですわ刹那さん」

二人が驚いて見ているのは当然と言えば当然だが執事服を着ている刹那だ。刹那はセシリアとアルトが現れたにも関わらず余り驚いていないようだった。

「えっ、え〜と二人とも、とりあえず何か注文する?」

「そうだな。メシはさっき食ったから俺はコーヒーを」

「私は紅茶をいただきますわ」

「かしこ参りました、少々お待ち下さいませ」

僕と刹那はオーダーを言い厨房に行く。その間にも僕達はいろんなお客様に黄色い声をあげられた（主に女の子に）

その後はアルト達以外にもお客様の接待をしてあれこれ時間が立った。

「お〜二人ともおつかれ〜。向こうにせっしーとひめひめがいるよ。どつちら記念撮影してほしいみたいだよ」

そう、ここの執事喫茶“明星”は執事の格好をしている従業員と記念撮影が出来ると言うのだ。

「はあ、行こっか」

「ああ…」

僕と刹那はセシリアとアルトがいる所に向かう。

「おっ、来た来た」

「では、早速撮っていただきましょうか」

「OK、シャッターもセッチーも二人の所によってよって」

本音に言われるがままに僕はアルトの、刹那はセシリアの隣に立つ。

「じゃあ行くよ」

パシャ

本音がカメラのシャッターを切る。写真は直ぐに現像して渡せるようになっていて、数分位で撮った写真が出来上がった。

「やっぱシャルは男装が似合うな」

「ですわよね。流石、転入の時に男装で来た事だけありますわね。それに、刹那さんもやはり執事の姿がしっくり来ますわ」

二人で写真を見ながら僕と刹那の事を色々言っていた。そして二人はやっと店を出て行ってくれた、正直疲れたよ。

「おつかれ〜今日はどうもありがとう〜」

「ううん。僕もバイトって初めてだから楽しかったよ」

「俺も今までこう言った事をしたことがなかったからな。いい経験になった」

「そう言ってくれると嬉しいな〜」

本音はそう言いながら嬉しそうにくるくると回る。

「じゃあ。今日は本当にありがとう。私はこの後フェイリスに会いに行くから、じゃあね〜」

本音はそう言いながら僕達に手を振りながら去って行った。

「僕達も帰ろっか」

「そうだな」

僕と刹那は二人並びながら労働をした体を動かしながら学園に向かった。隣を歩いていく刹那をちらっと見ると、刹那は何処か満足そうな顔をしていた。

「刹那、楽しかった？」

「ああ、というかここにきてから俺は初めての事ばかりに出会う」

「そっか。でも、それって悪くない事でしょう？」

「そうだな。元の世界では考えられなかった事だがな。今の俺はそれなりに楽しんでいると言っ自覚がある」

「ふっん。…じゃあ今度は一人でデートでもしてみる？」

「ふっ…それもいいな」

あれ、僕冗談半分で言ったんだけどまさか刹那が…まっ、いっか。

でもデートかあ…

「どうしたデュノア、顔が赤いぞ？」

「え、な、なんでもないよ」

はうぐデートなんて僕初めてだよ…でも、まだまだ夏休みは始まったばかりだからこれからゆっくりに考えよう。

第36話・執事って何かかっこいいよね（後書き）

今回は刹那とシャルのお話です。二人を執事にしてみました、うん、容易に想像出来て良いですね。すっかり似会ってますし。最近、まよチキと言うアニメにはまっています。その影響もありますね。

シャル「執事流最終奥義、エンド・オブ・アース!!!」

ラウラ「ネーミングセンスないなシャルは」

っ的な感じで。次回はそのまま流れなら鈴に話に行きたいのですが。鈴の話は時間系列的に少し離れているので別の話になる予定です。

追記、リアルにセシリアを忘れてた。この流れだとセシリアの話になります。

第36 5話・白い流星と未来少女（前書き）

本当ならセシリアとアルトの話を書こうとしたのですがこちらの方が執が進んだので先にこちらを上げます。

今回は久しぶりの新キャラ登場です。題名通りあの人です。

第36 5話・白い流星と未来少女

「こんな石ころ、ガンダムで押し返して見せる!!」

「ガンダムは伊達じゃない!!」

俺の視界はアクシズを押し返している最中に途切れた。俺はここで死ぬだろう…だがシャア、俺は世界に希望を見せたぞ…

「ここは…空が見える?」

俺が次に目が責めると、まず最初に目に映ったのは真っ青な空だった。空?…成程。俺は今仰向けで大の字になっているんだな。

「それに重力を感じる…まさか！」

俺はその場から立ち上がる、やはりここは地球だった。だが俺はさつきまで宇宙に、それもシャアと戦っていた。それが何で地球に…

「っシャアは!?!」

次に、シャアの乗っていたモビルスーツのコックピットを抑えていたのを思い出し、辺りを見回すがシャアの姿は無かった。

「それよりここは何処なんだ？」

俺は頭を冷静にさせながら後ろを見ると、ポロポロになっているガンダムが両手両膝をつけてそこにあっただ。

「ガンダム、済まない。シャアを倒しきれなかった」

ポロポロのガンダムを見て俺はそう呟いた。そして俺は情報を得るために歩き始めようとした瞬間、足音が聞こえてきた。足音がする方を見るとそこにいたのは四十ちよつとの男がいた。

「君はこのガンダムのパイロットかね？」

「…あなたは？」

俺は少し警戒しながら男に問う。いつでも動けるように体勢を整える。

「失礼、私はイオリア・シュヘンベルグと言う。初めまして、”連邦の白い流星”アムロ・レイ君」

「あなたは俺の事を知っているのですか？」

「ああ、勿論だともさ。歴史上初めてのガンダムのパイロット、君はかなり有名だね」

そこまで俺は有名だったか？

「イオリア・シュヘンベルグ。あなたに一つ聞きたい、ここは何処なんですか？」

「ここは沖縄にあるニライカナイと言う島だよ。国で言うと日本と言う国だ」

日本？日本と言うとあのアジアにある国で、前に出会った黒の騎士団のゼロが解放しようとした国の事か？

「そうだな…まずは君に説明せねばならないようだ」

俺はイオリア・シユヘンベルグにこの世界に付いて説明を聞く。まず、今の暦が西暦2010年。次にこの世界の情勢、軽い歴史に付いて聞かされる。そして俺はその歴史で起きた中で一つ聞き覚えのある単語を耳にする。

「白騎士事件…」

「アムロ君。君はその事件を知っているのか？」

「はい、昔に…」

懐かしいな。俺がまだエウーゴに参加する前、軟禁されてた時に違う世界に来た時に遭遇した事件だ。まさかこの世界でもその事件があったのか…もしかして…

その後はA S、I Sと言う物に付いても説明を受ける。A Sと言うのは惑星で出会った相良軍曹が乗っていた物だろう、I Sについては…やはり俺が知る物だった。

「大体はこの位だ」

「ありがとうございます」

俺はここでわかった。この世界は前に俺が来た地球だ、だとするとこの世界に千冬や束、クライド教授がいるだろう。

「ところでアムロ君。君に願がある、私に協力してほしいのだ」

「協力…ですか。一体何をですか？」

「それは…」

俺はイオリア・シュヘンベルグが協力してほしいと言う内容を聞く。その内容は…

「あなたは…」

「信じられないと思うが私がここにいる。信じられないと言うなら私に付いて来てくれたまえ。ガンダムはそのままでも大丈夫だ。ここは私の所有地だから」

俺はイオリア・シュヘンベルグの後を追うように歩く。少し歩くと小さな建物が見え、建物から一人の少女が現れた。その少女はおさげをしていて、活発そうな印象を持った。

「も〜何処に行ってたの？探したんだからね〜ってその人誰？」

「ああ。この人はアムロ・レイ君だ」

「アムロ・レイだ。君は？」

「あたしは阿万音鈴羽。よろしくね」

元氣よく挨拶をした阿万音鈴羽と言う少女は俺と握手をする。

「イオリアさん。この娘は？」

「彼女も私の協力者だよ」

「見た目は普通の少女に見えますけど…」

「なに、彼女はこう見えて未来人なんだね」

「……」

さっきのイオリアがしている事にも驚いたが、まさか未来人とは…

「驚いているかね、彼女は真正正面の未来人だよ」

「うん。あたしは2036年の世界から来たんだよ。で、お父さんの言う通りにイオリア・シュヘンベルグの手伝いしてるの」

「ここでの立話しもあれだ。アムロ君、君に見て貰いたい物があるのだ」

そう言いながらイオリアと阿万音鈴羽は奥に向かって歩き出し、俺もその後を追う。

「君に見て貰いたいのはこれだ」

「これは…」

全体から見たら二十メートル、ガンダムと同じ大きさ。シルエットは頭にアンテナが二本、まさにガンダムと呼ばれるものだが…

「ダブルオークアンタ。このガンダムの名前だ。残念なことに失敗作なのだがね」

「失敗作？」

「ああ、この世界線では”純粋種”になるべき青年が”純粋種”にならないとわかったのな」

世界線？純粋種とはなんだ？

「なので、私達の計画は今一からやりなをしている最中なのだよ」

「そうそう。もう大変なんだからね」

「アムロ君、失敗作になったこのダブルオークアンタ、君の目からどう見えるかね？」

イオリアはそう言いながらダブルオークアンタの設計図を見せてくれる。

「GNソード？、GNソードビット、GNソード？を応用するライフル：俺視点から見ると安定したMSだと思います。しかし、この”トランザム”は大体わかりますが”クアンタバースト”と言った内容がいまいち、それに異種との対話専用と言うのがわかりません」

「異種との対話。これが私の計画最終目標、そして…いや。何でもないよ。このMSはその最終計画の要であったのだよ」

「そうですか」

「そうだ、君に太陽炉を与えよう」

「太陽炉？」

俺はまた聞き覚えのない単語が現れたのでイオリアに説明してもらった。内容は半永久エネルギー、製造場所は木星でなければならぬ。そして製造には百年以上かかること。そして、このガンダムに必要な不可欠なものだと。

そして、この太陽炉と呼ばれるもの設計図を見せて貰う。確かにこれは詳しくない俺でも数年で出来る代物ではないとわかる。ここで俺はさっきの計画の事を思い出す。

「これで信じて貰えたかね？」

「ええ、未だに疑う所もありますけど今は信じてみようと思います」

「ありがとう。そして済まない、君にはいつか全てを話さす」

「ところで所でいいのですか？そのような大切な物な筈だ」

「いいんだよ。それに次の計画にはもうこれはあまり必要はないからね」

「じゃあじゃあ。アムロのガンダム、ここまで持ってきてくれるかな？」

俺は一旦建物の外に出るとガンダムに乗り込む。計器を見るとギリギリで動くとわかり俺はさっきの建物のファクトリーに動かし、ガンダムから降りる。

「うっわ〜凄く壊れてるね〜」

「ついさっきまで戦っていたからな」

「そっか。よし、直すぞ〜」

そう言いながら阿万音鈴羽がガンダムに近付き、コックピットに入るとすぐに出てきて、次の瞬間ガンダムが三メートル位まで縮んだのだ。

ガンダムが縮んだ…だが俺は過去にこれと同じような物を見たことがあるから余り驚かないが懐かしさが込みあがってきた。

「ブライトが見たら驚くだろうな」

その後、俺とイオリア、鈴羽の三人でガンダムの修理を行った。小さくなった事もありガンダムの修理は三人でも余裕だったがそれでも三日はかかった。

その間、俺は今までパイロットスーツの格好だったからそれを脱ぎ、普通の服に着替える。それにしても暑いなこは。

「ふい〜修理終わりっ」と

「ああ、済まない手伝ってもらって」

「あつ、いいのいいの〜気にしないで」

俺はガンダムを見る。見た目は ガンダムと同じ。だが武装元々ビームライフルがあつたのだがシャアとの闘いで壊してしまい、手持ちがなかったのではクアンタと呼ばれるMSの武装のGNソード？が握られている。

背中には通常のエンジンではなく太陽炉、GNドライブが装着してある。これでなんと重力化で飛行が可能となった、それに一定期間能力が上がるトランザムと言つのも可能になった。

「あとはフィン・ファンネルが戻れば…」

「それについても追々何とかなるだろう」

「そうですね」

俺はそう言つと、鈴羽もこっちにやってくる。

「それでは。これから計画の続き再開するとしよう」

「そうだね。じゃあパツパとやっっちゃおう〜」

シャア。俺はイオリア計画を聞いた時、最初は出来るのかと思つた。

だが、俺はやり遂げて見せるさ、人間の可能性を信じて。

「ところで鈴羽」

「ん？どうかしたの आमロ・レイ？」

早速することが無くなった俺は同じようにそのあたりをふらふらし
ている鈴羽に声をかける。

「君は未来人と言っていたね。君はこの時代で何をしようとここに
来たんだ？」

「父さんに言われたとおりにこの計画の手伝い……って言うのもそう
だけど。本当は若い頃の母さんに会ってみたいのが本音かな？」

そう言っつて鈴羽は俺に女性が写つてる写真を見せてきた。きつとこ
の女性が鈴羽の母なんだろう。かなりの美人だ。

「それにしても未来人とは簡単に過去に行けたりするんだな？」

「まあ。ウチの父さんタイムマシン開発に関わってたからね」

「でも。それだと色々大変なことが起こるんじゃないか？タイムパラドックスとか？」

余り詳しくないがその程度の単語は聞いた事はある。

「それは大丈夫。何かこの世界線”シユタインズゲートの世界線”は。父さんが言うには他の世界線より頑丈に出来ているらしいんだって。理由は分かんないみたいだけど。だから多少異物が混じっても何ともないんだって」

異物と言うのは多分俺の事だろう。それともこの世界に俺以外にも異世界から来てる人間がいるかもしれないが…

「ところでその”シユタインズゲート”と言うのは？」

「うーん、シユタインズゲートって言う意味は無いんだけど。この世界線は”誰もが死なない”世界線なんだって。あたしはまだ確認していないからわからないんだけどね」

「それはどう言う意味なのだ？」

「あたしの歳は十八歳で普通の大学生。これまでの人生もいたって平和。だけど、その一方でレジスタンスに入っていたりと色んな”もし”の私が今の私の中にいるの。まあ、その時に経験した事なんだよね。結果は父さんに聞いてるけどやっぱり自分の目で見てみたい

じゃん、変わった所」

俄かに信じ難いが今までの話しをまとめると信じるしかないようだな。だが、一つだけわからないことがある。

「一つ聞きたい。何で君の中に”もし”の君がいるんだい？」

「それはあたしにも分かんないんだ。これは父さん達もわからなかったって言ってたんだ。この調査をするのもあたしの目的」

鈴羽はそう言うが俺は何か作為的な意思を感じる、あの時の様に。

「まつ。ここで君に会えたのも何かの縁かも知れないから。これからもよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

だが、今はそんな事はどうでもいい。俺はこの世界でどうするかこれから考えればいいんだ。この宇宙にはラリアはいない、だけどそろそろ忘れるべきかもしれないな。

「じゃないとラリアに笑われてしまうかもな」

「ん？何か言ったアムロ・レイ？」

「いや、何でもないさ」

第36 / 5話・白い流星と未来少女（後書き）

アムロ・レイと阿万音鈴羽の登場でした。アムロの設定はACERに出ている設定で宗介達の事を知っています。あと、オリジナルで昔の千冬達とも出会ってることになっています。

鈴羽の方は世界線論を少し変えました。じゃないと平行世界論が無くなっちゃうので。

ガンダムにGNドライブくっつけちゃいました。これでアムロも「トランザム！」が出来ますね。いつかセシリアと一対一で戦わせてみたいな〜

二人の合流は八月の上旬位の予定ですね。あつ、小説内ですから。

ダブルオークアンタ・・・登場したのにすでに廃棄処分、仕方ないですね。

次回こそセシリアとアルトの話です。

それにしても本当にフルメタ、ISじゃなくなって気がしてきたなあ・・・

第37話・アルトとセシリアの普通の一日。(前書き)

ちよつと間があいてしまいましたが投稿しました。歌詞が載ってる
7話も歌詞の所を消させていただきました。きまりました。

後書きにアンケートを描きますのでよろしかったら見てください。

第37話・アルトとセシリアの普通の日。

七月十九日

うつす。今日から夏休みなんだよなって悪い悪い。俺は早乙女アルトだ。俺はSMS所属のバルキリー乗りだ。まあ今は相良の世界に来ちまってIS学園って言う所にいるんだがな。

それにしてもまさか二度目の異世界に来るなんて思わなかったぜ。それも俺が懂れていた地球に来るなんて、多分心配していると思うミシエルやルカには悪いが今の俺はかなり満足してるぜ。だって本物の空の下で飛べるんだぜ。

「にしても、いつもの癖で早く起きちまったな」

そう、夏休み初日だ。わざわざ早く起きる必要にも無いのに部屋にある時計は六時を回った所だ。

「二度寝する気も起きねえし。しょうがない、メシ食つか」

俺はまだ寝ている刹那を起こさないように部屋を出る。食堂に着くとやはり人はあまりいない、いて数人しかいなかった。適当に注文して俺は何処に座ろうか席を探すと見なれた金髪を見つけたから声をかける。

「よっ、セシリア。おはよう」

「アルトさん、おはようございます。それにしてもお早いですわね」

「まあな。何か目が覚めちまってよ。お前も早いじゃねえか？」

「私はいつも通りに起きてしまいましたの」

俺はセシリアの目の前に座るとメシを食べ始める。当然、日本食だ。朝のシヤケ定食は旨いからな。それに、目の前にいるセシリアも日本食を食べている。今も納豆をおいしそうに食べている。

「じっそうさん」

「じっそうさま」

俺とセシリアは同時に食べ終えて食器を片づけ、セシリアは紅茶、俺はコーヒーを飲む。

「はあ、今日から夏休みなんだよな。ったく、夏休みって何をすればいいんだ？」

そもそも俺は地球の事を余り知らないし、元の世界で通っていた星

見学園じゃあバジユラやなんやらで夏休みつてあつたっけ状態だ。

「それでしたら私が色々と連れて行って差し上げましょうか？」

「おっ、いいのか？」

「ええ。構いませんわよ」

セシリアはうふふと軽く笑みをこぼす。

「アルトさん。今日はお暇ですか？」

「ああ、今日は特にすることもねえしな」

「なら、私とデートに行きませんか？」

ふう、今時間は十時。俺は今セシリアと二人で外を歩いている。セシリアの格好は白いワンピースとそれはかなり似合っていた。俺はSMSの服だ、今度服買わねえとな。

「あら、それでしたら今服を買いに行きましょう」

「あれ、何で心の中読まれた？それに服を買いに行くのは決定で

すか？」

心を読まれた俺はセシリアと近くのショッピングセンターに行き、あれこれと夏用の服を買う。

「アルトさん。これは似合うのではないですか？」

「ああ」

「アルトさん。これも似合いますわ」

「あ、ああ」

「アルトさん。これも似合うのではないですか？」

「あ、ああ……」

とまあ。こんな感じでセシリアは張り切って俺をコーディネートしてくれている。ちなみに周りは「きゃあ！みてみて。美男美女のカップル」「あの男性カッコイイ〜」等など言われているがセシリアは聞こえておらず、俺は無視することにした。にしても「あの男の人、美しい」と言われたのは堪えたな。ここで一言言っぞ、俺は男だああああ。

「セシリア。もう一時を過ぎてるぞ」

「あつ、本当ですわ」

俺は何気に時計を見ると一時を過ぎていた。道理で腹が減るわけだ、なので俺は服を手に持ち会計を済ませると店の外に出て昼飯を何処で食べようかと辺りを見渡すとセシリアが何かを見つけたようだ。

「執事喫茶”明星”？」

セシリアが見ていたのはそう書いてある看板であった。

「執事喫茶ってなんだ？」

「さあ。私にもわかりませんわ。でも、何でか物凄く気になりますの」

「そつか。んじゃ入ってみようぜ」

「え、ええ」

俺はセシリアの手を取ると店の中に入る。

「お帰りなさいませお嬢…さま…」

うおい。店に入るやいきなり聞きなれたアルトボイスが聞こえる。
俺は声を発した奴を見る…

「じゃ、シャルロットさん…ですわよね」

「間違いないぜセシリア。コイツはシャルだ……ぷ、お前…似合いすぎ」

「うっうっ」

おいおい、何でシャルがここで”執事”の格好してるんだよ。それにしても本当に似合ってるよな。
そんな事思っている奥からまた一人見知った顔が現れた。

「刹那。お前もいるのか!」

「に、似合いすぎですわ刹那さん」

セシリアが言うように本当に似合ってるぞ刹那。

その後、俺とセシリアは二人の執事服を楽しみ、最後は記念写真を取らせてもらった。ふっ…うかつだったなシャル…

「中々素敵でしたわねあの二人」

「そうだな…さてと、これからどうすっかな？」

「それでしたら、いい所がありますわよ」

セシリアはそう言うと俺の手を取り歩き出す。俺はそれに抵抗するわけでもなくセシリアの歩幅に合わせて歩いた。少し歩くとセシリアは目的地に付いたようだ。まあ、周りを見ればどこだかわかるんだけどな。

「へえ、結構眺めいい所だな」

「はい、こないだ偶然見つけた所なのです。それでアルトさんにこの景色を見せたくて今連れてきました。どうでしょうか？」

公園の一角なんだが、元々高台に位置していたのか、そこから街を一望することが出来るのだ。しかも東京であるのに大きい建物が余り無いため富士山が見えるのだ。

「ああ…文句なしだ」

「そう言っていただけるところに連れて来て正解だったと思いますわ」

そう言うセシリアは嬉しそうにして微笑んだ。その笑顔はランカや

シエリルとまた違う、心奪われる笑顔だった。
俺はその笑顔を見ながら落ちてたチラシを拾い、紙飛行機を作り飛ばした。

「旨いですわね」

「前はよく作っては飛ばしてたからな」

俺とセシリアは跳んで行った紙飛行機をじっと見つめてこのゆっくりとした時間を満喫した。

「今日は楽しかったですわね」

「そうだな。また今度もデートすっか。今は夏休みだしな」

「そうですわね。あつ、寮に帰りましたら私の部屋でこないだ借りてきたDVDでも一緒に見ませんか？」

「そうだな。帰ってもすることないしな、それで何見るんだ？」

「そうですわね…マクロスプラスですわ」

こんな事でセシリアとのデートは終わったが、はつきり言って今日が初めてじゃないんだよな。今日のはいままででは言っていないかった俺達のデートを初めて公開したもののようさ。

まあ、こんな所をミシエルやルカには見せられねえな。絶対からかわれるしな。だが正直な話し、俺はセシリアと一緒にいて楽しいと思う。これは嘘偽りない俺の本心だ。

「俺は…お前のことが…」

「うん？何か言いましたか？」

「いや、何でもねえよ」

さてと、この気持ちどうしようかね。せめてフロンティアに戻るまでは考えなくちゃな。

第37話・アルトとセシリアの普通の一日。(後書き)

宗介「急で悪いがえつと…アンケートを取る」

ラウラ「何のアンケートだ？」

宗介「それはだな…なんでも人気投票と言うやつなのだが」

ラウラ「遂にこの小説もやるのか」

宗介「概要は『50万人アクセス記念、特別編人気投票!!』だそう
うだ。詳しい事は」

1・キャラはお一人様三名まで感想かメッセージで。

2・対象キャラは今現在の話に登場したキャラの中
で。

3・期限は8/20の予定。

by千鳥かなめ

宗介「だそうだ」

ラウラ「ふむ。一体だれが一位になるのだろうか」

宗介「そういう事なので。なるべくアンケートに答えてもらいたい」

ラウラ「そうだな。では私は結果を楽しみにするかな」

宗介「そうだな。ではまた」

はい、今回は二人が言うように人気投票をやってみようかなと。期限はもしかして投票数があまりにも少ないと伸ばすかもしれないかもしれませんが一応今月の20日の予定です。どしどし送ってください。

第38話・オーバーフラッグス現る 前編（前書き）

今回の話はグラハムの部下とフルメタのあの娘の登場です。

そして私。8月の12、13、14と有明で行われるアニメの祭典に行つてまいりますので少し更新とか遅くなるかもしれませんが、今でも十分に遅いか!!」

あと、アンケートもやっているのでどしどし応募して下さい。

第38話・オーバーフラッグス現る 前編

七月二十一日

我々の主人公である相良宗介は黄色いラインが入っている鉄道、JR総武線に乗っている。宗介の隣にはラウラと宗介の友達の間、それに何故かグラハム・エーカーの順で座っている。彼らが向かっているのは風間信二の父が働いている習志野自衛隊と言う所だ。そもそも、彼らがそこに向かう理由は何故か？

まず、宗介は未来ガジェット研究所での出来事の後、風間からあるメールが届いた。

『ねえねえ相良君。最近、父さんが働いている所にフラッグらしき物があるんだって。だから明日見に行かない？』

この内容を見た後、宗介はラウラに報告するとラウラはグラハムにも知らせた方がいいと言い。宗介はグラハムの居場所を探し、織斑の家に電話をかける。

宗介はグラハムにフラッグの事を言うとグラハムは物凄い勢いで食いつき、今現在に至る。

そもそも習志野自衛隊の場所は何処だ？とフルメタを知っている人は思うだろう。習志野と言う土地は千葉県の船橋市にある土地の名前であり、千葉県で言うと北西部にあたる。

宗介達は総武線を津田沼駅と言う所まで乗り、そこから新京成電鉄と言う私鉄に乗り換え、三駅目の習志野駅と言う所で下車、そこから徒歩十分程歩き彼等は習志野自衛隊駐屯基地に到着したのである。ちなみに、宗介は去年も来ているので二回目であった。

「割と遠かった」

「まあね。東京の端から来たからね」

「それよりも風間少年。フラッグは何処に……」

「あつ、ちょっと父さんに聞いてみるよ」

風間は父がいる所に向かっていった。少し経ち、風間が戻って来て中に入っても良いと言われ四人は中に入る。

「あれはたしかにフラッグ。しかもオーバーフラッグ!!」

グラハムは訓練してるASの隣に三機の黒いフラッグを見つけた。そう、グラハムが乗っているのと同じオーバーフラッグであった。フラッグの近くにいた三人の男たちはグラハム達に気づき、こっち

に向かって来た。そしてグラハムは三人の顔を見ると驚いた表情をした。

「まさか…ハワード・メイスンにダリル・ダッジに…ジョシユア・エドワーズなのか…？」

やってきたこの三人はグラハムが指揮していたオーバーフラッグスの隊員であり、全員前の戦争で死んでいった者たちであった。

「そうですよ隊長。お久しぶりです」

「自分、こうして隊長に再びこうやって出会えるなんて…光栄です」
「ふん…」

三者の反応はこうだった。ジョシユアの場合は多少しょうがないと言っ点はあるだろう。

「凄い…本物のグラハム・エーカーさんだけでは無くオーバーフラッグスの皆さんがこうしてそろってるなんて僕感激！」

「ああ。この光景は割と凄いものだぞ」

「そうだな」

風間とラウラはオーバーフラッグスの人達を見て興奮している。Oを見ている人なら興奮しない訳はない光景だからしょうがないだろう。

「それにしても三名はどうしてここにいるのだ？」

グラハムは理由を聞くとハワードが説明してくれた。まず三人は死んだ時間も少し離れている、最初に死んだのはジョシユア、その後にハワード、ダリルとなっている。

ジョシユアはデュナミスにコックピットを打ち抜かれる瞬間、今から一年前の習志野自衛隊に飛ばされ辛うじて生環も意識不明の重症。そののち三ヶ月で退院しすることが無いため自衛隊に入隊。

ハワードはスローネツヴァイのGNファンクが動力部に直撃をし、爆発と共にこちらの世界に、ハワードは軽傷で済んだので直ぐに世界情勢を調べ、たまたま近くにあった習志野自衛隊に入隊。そこでジョシユアと再会し、ASのノウハウを応用してフラッグの修理を頼む。

ダリルも同じくジnkスの疑似太陽炉が爆発し、自衛隊内に転移。そこで二人と再会。

彼等はこの世界で言う空軍エース達。なので自衛隊入隊は容易であったのだ。それにフラッグを動かせる要因としてもと言う理由もある。

「そうか…お前達に苦勞を掛けた…すまない」

グラハムは三人に頭を下げる。これは単に三人謝ると言う意味では無く、自分が不甲斐ないばかり彼らを大変な目に遭わせてしまったと言つ意味も含んでいる。

「た、隊長、頭を上げてください」

ダリルが慌ててグラハムに言う。

「それで隊長さんよ。アンタは何でここにいるんだ？」

「ジョシユア!!」

「いいんだ。話そう」

グラハムもソレスタルビーイングとの最終決戦の事を話した。話している間の三人は真剣な顔をしていた、その空気で宗介達も静かに見守っていた。

「それで、国連軍は勝ったんですね」

「おそらくはそうだろう、だが…」

「四年後にまた現れる…だろ。俺はこの世界に来て一年、色々な物を見てきたからな」

「その通りだ。そして自分の結末も知っている…」

グラハムの言葉で三人と宗介達は黙り込む。彼が七年後、ELSとの対話の際に戦死を知っているからであったために。

「それはこの際いい。ここでお前達の話聞いていて一つ疑問に思った。ダリルのフラッグはどうしてここにあるのだ？」

ジヨシユア、ハワードの二人はフラッグに乗っていたがダリルはリンクスに乗っていた。なのに少し離れた所にある黒いフラッグに疑問を持ったのだろうか。

「はい、あれはこの世界のASのM9と言う機体をフラッグのデータを元に改造した機体なのです遠くから見ると似ていますが近くで見ると少し違うかと」

ダリルがそう言うとグラハム達四人はフラッグの近くに行き見ると一機だけ明らかに少し変な機体があった。

「それが自分のフラッグです」

「成程、M9の武装を全て取り外し、バックパックを付け加え全身にスラスターを装備、これはM9であって違う機体になっているな」

宗介はM9乗りとしてじっくり見てそう言った。

「君はASに随分詳しいな？」

「自分はASのスペシャリストです。それにM9にもずっと乗っていましたし一目で大体わかります」

宗介の感想にハワードが気になり宗介に聞く。

「スペシャリスト？」

「ハワード。ミスリルと言うのは聞いた事はあるか？」

「今は世界規模の自衛隊のような所ですよ。前は確か傭兵の集まりだったとか…」

「この少年、相良宗介はそのミスリルに所属している。故にASの知識は豊富だ」

グラハムの言葉に三人は納得するように頷く。そこでダリルが口を開く。

「隊長。風間事務官の息子の隣にいる少女は？」

「ああ。彼女の名前はラウラ・ボーデヴィツヒと言う」

「なっ…ボーデヴィツヒと言うと…」

「そうだ。ISを開発したクライド教授の娘だ」

今度は三人は納得では無く驚いた。ラウラは無い胸を張って「えっへん」と言っていた。

「隊長。凄いメンバーを連れてきましたね」

「ちなみに、このグラハム・エーカーはあの織斑千冬教官と付き合っているぞ。あれ？もう結婚前提だったっけ？」

「…な、なんだって…」

ラウラの爆弾発言で三人は大声を出しながら驚いた。

「た、隊長。いつの間に彼女なんか!!」

「それよりも、あの織斑千冬と結婚前提で付き合っているとは本当なのですか!?!」

「隊長：やっぱあんたは最高のフラッグファイターだよ。それでその話は本当なのですか？」

ハワード、ダリル、ジョシユアの順でそんな問いが飛んでくる。ちなみにジョシユアが驚いた理由は千冬のファンであるためであった。

「ああ、本当だダリル、ジョシユア。ハワード、千冬とはこないだ告白したばかりだ」

ちなみに、何故ラウラが知っているのかと言うと昨日の夜、一夏からのメールにそう書かれたあったのだ。無論、宗介も知っているし、おそらく殆どの者は知っているだろう。

711

「相良君、その話は本当なの？」

「ああ。昨日織斑からメールが来た」

「何か凄いカップルだよな。ブリュンヒルデとフラッグファイター、お似合いつて考えるとしっくり来るけど」

宗介と風間はそんな会話をしていた。その直後、遠くから女性の声が聞こえて来る。

「こらっあんた達、フラッグの整備をするから早く格納庫に入れなさい。」

女性は叫びながらこっちに向かってくる。女性の顔がはっきりとわかる位までの距離まで来ると宗介はその女性を見て驚きを見せる。

「なっ…ナミっ！」

「あれ？どっかで見た事のある奴がいるな〜って思ってたらソースケじゃない。久しぶり！」

「い、いや。それはいいのだが、何故君がここにいるのだ？ナムサクにいたのではないのか？」

この叫んできた少女の名前はナミ。宗介が去年、世界を流浪している時に東南アジアのナムサクと言う所で出会った少女。ナムサクではASアリーヌ闘技場と言うASを戦わせる競技があり、ナミはそのクロスボウと言うチームのオーナーをしていた。宗介とはそこで知り合ったのだ。

「ナミ。君は相良君とは知り合いなのか？」

「まあ、ナムサクにいた時にちょっとね。それよりも三人とも、早

くフラッグを格納庫に仕舞っちゃってよ。後がつつかえるから」

「そうだな。それじゃあ隊長。自分達はフラッグを収納してきます」

ハワード言うと三人はグラハムの方を向いて敬礼をしてからフラッグに乗り込んで格納庫に向かって行った。

「ナミ。君は何で日本にいる？」

「うん。本当はここに来る予定なんて無かったんだけど、向こうで仕事してたらこの責任者と風間さんと会ってね、私の腕をここで使わせてほしいって言われたの。最初は考えたけどフラッグの事を聞いたら気になって日本まで来たって事」

「そうか」

そう言いながらナミは格納庫に向かい。その後追うように宗介達も付いて行く。

第38話・オーバーフラッグス現る 前編（後書き）

今回、話の場所になっている習志野自衛隊と言う所は実は実家から結構近くの場所にあるのです。なのでフルメタを見たとき「うお、ここ近所じゃんww」などと思ってたりしました。そう言えばビツクサイトでもソースケ戦闘してみましたよね。

フラッグの三人は男だからどうでもいいとしてナミを登場させてみました。ナミはまだアニメでは登場してないのですが自分は結構好きです。なので今回登場させてみました。

次回もこの話の続きです。あとはアンケートもまだまだやってます。

第番外話・アンケート

ただ今、人気アンケートをやっていますのですが、期限を20日間でとじていたのですが今月いっぱいまでに延期させていただきます。

ここでもう一度。

お一人様三人まで投票を、対象キャラは最新話までに登場したキャラ（今ですとグラハムの部下達）

これを読んで下さった皆様にはどうか投票していただけますと作者は大喜びなのでよろしくお願いします。

人気キャラトップ3に入ったキャラには何かしてあげようかと思っていますので。（単独ストーリーやらそのキャラの強化などなどを考えています。

第39話・金色ってかなり目立つよね。(前書き)

すみません、前回の続きの予定の筈だったのですか急に描きたくなつたので。今回は前々からとあるともクロスしていたのですがまだ登場していなかった超電磁砲からの佐天涙子の登場です。

第39話・金色ってかなり目立つよね。

七月十九日

「うう夏休みだ〜!!」

あつ、ゴメン。いきなり変なテンションで。私は佐天涙子、学園都市内にある柵川中学校の普通の中学生。なんでこんなにテンションが高いかって？そりゃあ今日から夏休みですからね。

「よし、今日は初春や白井さん、御坂さんと思いつきり遊ぶ…」

「あつ、佐天さんすみません。今日は風紀委員の合同会議がありまして遊べません」

「なん…だと…」

そう言いながら初春は教室を出て行ってしまった。そんな所に担任の篠ノ之束先生が教室に戻って来て私の所にやってきた。

篠ノ之束先生。私い達の担任で今現在あるISと言う物の開発者の一人でもある人で、でも実際は一言で言うといったって普通のお姉さんって感じの人なんだよね。

「あ、いたいたるーちゃん。よかった、まだいてくれて」

「どうしたんですか東先生」

「いや〜ついさっきるーちゃんのISが出来たって報告があつて…」

「ほ、本当ですか？」

IS、それは女子しか扱えないロボットみたいなもの。私は前に東先生に「自分のも欲しい」って冗談で何と「お〜じゃあちよつと時間かかるけどまっつてね〜」など言っていた。それが本当になるなんて正直驚いた。

「うん。今から取りに行くけど時間は大丈夫？」

「はい、大丈夫です」

私と東先生は研究所がある二十三学区までバスで移動している所。

「そうそうるーちゃん。今ってISの普及率って余り少ないでしょ？」

「え、はい。多分」

「そこで考えたんだ。ISをもっと普及させて、それ以外のASやMSも普及させて。皆で世界一を目指して戦うって言うのは面白そうでしょ?」

えっと、一介の中学生の私にASやらMSやらといのはあまりわからない。ASはニュースでたまに見る位で知ってる程度だけどMSってあのガンダムだよな?

「世界一?」

「そう、世界一。だから八月の中旬位に発表しようかなって。まあ、実際に始まるのは十一月位だからまだまだ先なんだけどね」

「は、はあ」

余りにも規模がでかすぎだったから私は言葉を無くしてしまった。こうしている内にバスは二十三学区に到着した。バスから降りると私と先生は少し歩き、先生の研究所に付いた。

私は先生の研究所には何度も初春や御坂さん達と来た事がある。その理由は…

「よう涙子、待ってたぜ」

研究所に入ると一人の男性が現れる。この人の名前はニール・ディランディさん。御坂さんと白井さんが通う常盤台中学校で英語教師

をされていて、御坂さんの担任なのである。

「こんにちはニール先生」

「おう、早速で悪いんだか、見てくれねえか？」

ニール先生はポケットから一枚の何かのカードを取り出して何かを操作するといきなり三メートル位のロボットが現れた。

「コイツの名前は”ゴールドフレームの天” ISって言ったが殆どはガンダムに近いな。一回これに乗ってくれないか？」

私は言われるままにゴールドフレームに乗り込んだ。すると、目の前にモニターが現れて何か武器見たいのが表示される。

「えっと…」

モニターに映ってる文字を読み上げて行く。ビームライフル、ビームサーベル。ここまでは何とか想像は出来たけど。攻盾システム「トリケロス」、トツカノツルギ、ミラージュ・コロイド。

もう、何が何だか分からなくなってきた。カタカナ表記わかりにくい

「この後はどうすればいいですか？」

「そうだな…それで俺と一回戦ってくれねえか」

ニール先生はそう言うと、ポケットから私に渡してくれたのと似たようなカードを取り出して同じようにロボットが現れた。

「こいつは俺の相棒の”デユナメス”だ」

「あゝ私、戦いつてあんまり分かんないんですけど…」

私の周りにはレベル5の御坂さんや風紀委員の白井さんなど強い人の戦いは何度か見てきたけど私自身、只の中学生だからそんな経験はないのだ。

「大丈夫、その所はニール君が教えてくれるから」

「そうだな、んじゃまずは…」

ニール先生の簡単な説明を聞いた私。最初は歩行など簡単な動作からだったけれど意外に簡単に動かせた。感覚的には自転車に乗っている感じであった。

「よし、じゃあ早速外で戦ってみるか、束」

「はいはい。いつでもオツケだよ」

「ロックオン・ストラトス、デユナミス、出るぞ！」

そう叫びながらニール先生は空いた扉から飛び出して行った。ていうか、あの名乗りかつこいいな。私もやってみよう。

「佐天涙子、アマツ、いつきまーす」

私もニール先生の真似して叫び、扉から出て行った。まずは空中姿勢をとつと、難しいな。空を飛ぶのなんて生まれて初めてだから変な感じもするし。

「んじゃあこつからは模擬戦だ。八口に戦い方の簡単なレクチャーをしながらやっていくぞ」

「はい！！」

そこから二時間位私は基本的な動作から戦いの動き等を教わりながらコイツになれるように歩いたり走ったり跳んだり飛行したりと色々やって時間が過ぎ去って行った。

「よし、今日はこんなもんだな」

「はあはあ…ありがとうございます」

息を切らした私とニール先生は中に入り、MS（このタイプはこう言うんだって）から降りて何気なくアマツを見た。

「ってか。コイツ今になって思ってたんですけど、金ぴかですね」

「そうそう、かつこいいでしょう?」

「いえ、只眩しいだけです」

「それは俺も同感」

「えゝ二人とも金色の素晴らしさが分かんないんだよ。金色に乗る人は皆クールで、ユニイバアアアアスって叫ぶんだよ」

「いや、ないって…」

「じゃあ、私そろそろスーパーの特売がありますので帰ります」

私は特売の時間が近付いてきたのでアマツが入ってる（どう言う原理何だろっ？）カードを返そうとするが。

「いや、コイツはお前が持ってる」

「いいんですか？」

「ああ、後で整備のマニュアルも送っておくからな。よし、帰るんなら車で送って行かせ」

「ありがとうございます」

私は東先生に挨拶するとニール先生の車に乗る。

「ニール先生。学校での御坂さんってどんな感じですか？」

「御坂？あいつはちゃんとお嬢様してるよ。とても自販機に回し蹴りをするような奴には見えない位だぜ」

「あはは…」

「まっ、あいつもレベル5ってmondだから色々大変だろうけどそこは大人の俺たちや友達のお前らがフォローすればいいんだ」

「そうですね」

「ま、あいつは刹那よりは全然手がかからねえからその分楽なんだ

けどな」

「刹那さんってニール先生の弟見たいな人で、今I S学園にいる人ですよね？」

「ああ。いつか紹介してやるよ」

他愛無い会話をする私とニール先生。ニール先生とは知り合ってもう三ヶ月は立つのかって思うと私だった。時間と言うのは過ぎるのが早いみたいでもうスーパーの近くまで着いたようだった。

「気をつけて帰れよ」

「はい、ありがとうございますニール先生」

「おう、じゃあな」

私はニール先生と別れてスーパーの特売に向かった。さあ、今日は豚肉が安いぞ〜

「とうま、私のISはいつできるのかな？」

「さあ？でも後少しで出来る見たいだぞ」

「本当？楽しみだな！あと、お腹空いた。当麻！早くご飯！！」

学園都市の物たちはまだ知らない、戦う力を持たないこの二人が後に学園都市頂上を賭けて戦う事になるとは…

第39話・金色ってかなり目立つよね。（後書き）

佐天の機体はゴールドフレーム天にしてみました。そしてあのインデックスさんにも何かの機体が：最後のはあまり気にしないでください。

それにしても未だに美琴が登場してない事に気づいた自分でした。

後、今も人気アンケートやっていますのでよろしかったら投票してください。とともありがたいです。

第40話・生徒会の日（前書き）

またまた続きではなくて申し訳ないです。今回は生徒会がメインです。

第40話・生徒会の日

これは夏休みのある学園の話し、このIS学園にも当然生徒会と言う物がある。ただし、陣代高校の様なものではない。生徒会があるなら当然、生徒会長が存在するのも当然の事だろう。そして、生徒会を支える役員も当然存在する。

「……九月にある学園祭について話しあいたかったんだけど」

その言葉を言うのは陣代高校では副生徒会長を務めている千鳥かなめであった。その他に、生徒会室にいるのはかなめを含めて四人だった。

「ふわあ〜」

「本音。今は話し合い中よ」

「だって〜眠いんだもん」

眠そうな少女とそれを叱る女性は布仏本音とその姉の布仏虚である。

「本音、寝るのは後よ」

そしてもう一人。見た目はおとなしそうでメガネをかけた少女の名前は更識簪、この学園の生徒会長の更識楯無の妹である。

「…ねえ簪、あんたの姉、生徒会長はどうしたのよ？」

「お姉ちゃん。朝『よし、今日こそ静雄君に勝ってやる』って言って飛び出して行っちゃった」

「あのバカ楯無。昨日話し合いするって言ったのに」

そう、話し合いをするに至って中心人物である生徒会長が不在なのである。まあ、この学園ではよくある事なのでしょうがないと言えばそれまでだった。ちなみに簪は姉がいない時の代理に来ているのだ。

「お姉ちゃんだもん」

「そだよ、楯無お嬢様の暴走は今に始まったことじゃないしね」

「ふう、更識家の当主の暴走をどうにかしないとイケませんね」

そんな事を話しては先に進めないと思ったかなめは無理やり話し合いを進める事にした。かなめの立ち位置は交流転入生と言う扱いだ、陣代高校では生徒会に入っていたためにこの学園でも生徒会に入っている。

役所はよく生徒会長の楯無が失踪するために第二の生徒会長と言う本来ならありえない役所にいる。これは陣代高校でも現生徒会長の林水が辞めた後にかなめが次期生徒会長になるための経験積みと言っても良いだろう。

それに、かなめは一年一組のクラス代表を務めている。えっ？一夏はどうしたかって？彼はかなめの方がクラスを引つ張ってくれらるうと言っただけにかなめにクラス代表の座を渡していたのだ。ちなみに二組のクラス代表は早乙女アルトだ。

「じゃあ、今日は学園祭についての…」

四人は学園祭の事について話し合った。内容は会場のスペースや機材の確認など裏方についての話し合いであった。話し合う事二時間、簪の携帯のバイブ音が部屋の中に響いた。

簪はディスプレイに表示されている名前を見るとすぐに電話にでた。

『簪い、お前の姉ちゃんいい加減どうにかしてくんねえかな？』

電話の相手は男、しかもその男は明らかに不機嫌でドスの効いた声になってる。一般の女の子だったら一発でビビるだろう声に簪は…

「いつもいつもすみません静雄さん」

『まったく。お前も変な姉をもって苦労するだろう』

「もう慣れました」

『そつでお前の姉はどうすればいいんだ？』

「今、生徒会で迎えに行けないので…放置しても構いません」

なんと、妹の爆弾発言が炸裂した。

『いや、流石に放置だと後がメンドイからな…しょうかねえ、今からそつちに届けに行く。いまブクロだから一時間以内に着くと思う』

「わかりました。お姉ちゃんをよろしくお願いします」

『おつ』

そして簪は携帯の電源を切り、ポケットにしまってはあとた溜息を吐いた。

「それで、お嬢様は戻ってくるのですね」

「うん」

「それにしても懲りないね〜いつも返り討ちにあってるのに」

「それは私も思っわ、楯無って結構負けず嫌いな所あるしね」

四人は楯無が戻ってくるだろう時間まで話し合いを続ける事にした。そして四十分位した時、簪の携帯のバイブが再び鳴り出した。

『着いたぞ。今校門前だ』

「わかりました、今行きます」

簪はそう言つと電源を切り、椅子から立ち上がる。

「私も行くわ、二人ともちよつと行ってくるね」

かなめと簪は生徒会室を出て校門に向かって走っていく。校門に着いた二人が目にしたのは金髪にサングラス、バーテンダーの格好を

している池袋最強の男、平和島静雄とその背中でおんぶされてる
S学園生徒会長の更識楯無がいた。

「連れてきたぜ、ほら降りろ」

「え〜もつと静雄君の温もりを感じたい〜」

「簪、コイツ投げ捨てても良いか？」

「いいですよ」

「えっ！ー！ちよ簪ちゃん！ー！」

そこで本気で投げようとした静雄をかなめはギリギリ止める。

「はいはい、アンタが投げると楯無が大気圏突破しちゃうからやめ
なさい」

「チィ……」

舌打ちしながら無理やり楯無を剥がして下ろす。

「んじゃ、俺は帰るわ。楯無、あんま簪に迷惑かけんなよ」

そう言いながら平和島静雄は三人から立ち去って行った。

「やっぱり静雄君カッコイイね」

「アンタ、本当に好きなのね」

「うん。一番大好き、だから勝って告白するの。それが私の今の目標なの!」

「お姉ちゃん。その前に仕事サボらないでね」

「うっ…何で私生徒会長してるんだろっ。このままかなめに全部任せて…」

「こら、私はここの生徒じゃないから無理よ。はいはい、無駄口言っつないでやる事はまだまだあるから戻るわよ」

「はい」

「うえっい」

三人は生徒会室に戻り話し合いの続きを楯無を加えて再会させた。

第40話・生徒会の日（後書き）

気づいたら更識妹がまだ登場していないのに気づいたのでちょうど40話と言う事で登場させてみました。あと、クラス代表も変えて一組をかなめ、二組をアルトにさせています。まあ意味はあまりないのですがね。

そろそろキャラがかなり出てきたと思いますけどまだまだ出す予定なので（作者は把握しきれるのか？）

次回の予定は未定ですがそろそろ鈴の話もかきたいな〜と思ってますが気分しだいですね。

あと、まだ人気アンケートは続いていますよ〜

第41話・島って夏に行くと暑いね(前書き)

タイトルは適当ですので気にしないでください。

第41話・島って夏に行くと言いな

七月二十一日

「…テッサ、レナード。これから何処に行くのよ？」

鳳鈴音は空高く飛ぶ飛行機にテレサ・テストロツサとレナード・テストロツサ。少し離れた席にクルツとマオが座っている。

「うん？ああ、今行くのか」民間自衛企業ミスリル」の本社があるメリダ島だ」

民間自衛企業と言うのは国籍を持たない自衛隊、言いなおすと世界の自衛隊の様なものだ。国籍を持たない事なので世界各国からの要請を引き受けている。もっとも、引き受ける内容は自然災害等の救護等で、戦争の援助等は一切行っていない。

宗介やクルツ、マオも当然この組織の一員で。過去のミスリル、アマルガムの戦いに生き延びたものは殆どそこに所属している。名前がミスリルなのは単にミスリル側が勝利したためで深い意味はない。

「ふん。ミスリルねえ…じゃあ何でアンタまで来てるわけ？」

鈴が言うのももつともだ。レナードは過去、アマルガム側の幹部、しかも”ウイスパード”なる能力を所持し、色々とミスリルに対して攻撃を仕掛けていた経歴がある。

「そうですね…兄さんはここで突き落とすと言つのもアリですね」
「そうですね…」

鈴が立ちあがると非常扉がるところに行き扉に手を乗せる。

「いやいや、二人ともマジで僕を突き落とそうと？」

「うん（はい）！！」

レナードが慌てて二人に問うが、二人はいい笑顔で返事した。

「いやちょっと落ち着こう、他の男（主に一夏やアルトや刹那）はいい感じの話しだったのに僕だけ酷くないかい？」

「えっ…だって兄さん。あれだけこの事しかしたのにですか？」

「ぐっ…」

「しかも兄さん。原作だと死んでいますよね。だからここでパラシユート無しのスカイダイビングしても問題は無いかと」

「テッサ。その部分見せて」

「こちらですわ」

「テッサは鞆から”フルメタル・パニック”の書籍を取り出した。タイトルは”ずっと、スタンバイミー（下）”、まさに最終決戦でフルメタル・パニック最終巻のタイトル名だった。

「へへそつちのレナード中々に宗介を苦しめてるじゃん。それなのにこつちのレナードは…やっぱパラシユート無しのスカイダイビングするべきよ」

「ちよっ！！何か僕の扱い酷くない！？」

「」「いまさら？」「」

レナードが驚いたように言うが二人は今更と言いながら小首をかしげる。

「はいはい、あんだ達その辺にして置きなさいよ。レナードも一応ミスリルの幹部なのよ…一応？」

「えっ…あなた借りに僕の担任でしょ？何？なんなのその疑問は」

「オイオイ、元気があるねえ。後ちよいで着くからその元気は着くまで取っておいて方がいいぜ」

三人のあいだこーだ言っていると離れた位置に座っていたマオとクルツが現れた。

「メリツサの言う通りですわね」

「そうね…」

「ふう…」

三人は席に戻り、マオとクルツも席に戻る。それから二十分くらいし、小型飛行機は降下を始め、着陸をした。

島に着くと元ミスリル三人組は司令部の方に報告に行き、鈴とレナードはASが収納されている所にいる。

そこにはミスリルが主力として使用しているM9が原寸大サイズで何機も立っていた。

「さてと鈴、君の持っているAIのアーチャーを出してくれないか？」

「いいけど…アーチャー？」

鈴がカードをポケットから取り出すと管制人格の筈のアーチャーを呼びだす。

『ふむ… AI 枠として登場するのは久しぶりのようだが… 作者よ。他の AI どもも出してやってはくれぬか』

「アーチャー？ 何言ってるのよ？」

『すまない鈴。所で私を呼びだした理由は？』

相変わらず渋い声で話すアーチャーだったが久しぶりの登場なのか少し声質が高い様な気もした。

「アーチャー、君の事について詳しく知りたいのだが…」

『私の事は既に話したと思うが』

「そうではない… 君は他の AI と違い確かに”人”の人格だ。だからこそ君は”今”の段階で何ができる？」

『ふむ… そうだな…』

「えっ！！」

急に鈴が驚いたように声を上げる。

「ちょ…何でアーチャーが私の頭の中に…えっ…イメージする…こ
うっ？」

鈴は誰かと喋るように話すけれどレナードではなく、本当に誰かに話しているようだった。その誰かに何を言われているのかはわからないが鈴は目を瞑る。

「……投影開始」

鈴がぼつりと呟くと鈴の両手から対になる剣を出した。

「それは以前に見せて貰ったぞ」

レナードは鈴と恐らくいるだろうとアーチャーに言う。

「違うわレナード…あそこに三人の人間が釣りやってるわね。一人は男性、二人は女性ね」

「あそこって…」

レナードは鈴が言う方向を見るが釣りをやる人間なんかいない、と

言つかそもそも整備室にいたので釣りなんてするスペースなんてある筈が無いのだ。

「あそこよあそこ」

鈴は指をさす方向を見る、それは…ざっと見て二キロ以上先の所を指を指していた。

「マジかよ」

「マジよ、何かこれ”強化魔術”って言う見たいよ。他には…ほっ」

鈴は軽い気持ちで上にジャンプしたがなんと五メートル以上飛んでいたのだ。

「す、凄いわね…」

『だが、私は生憎この二つしか出来ぬ未熟者だ…それはいい。鈴、今度はISを装着した状況で投影と強化魔術をしてくれぬか?』

鈴は素早く自身のIS”甲龍”を展開する。

「投影開始……」

鈴が再び呟くとISの両手に先と同じ剣が握られていた。

『ふむ、投影は可能。では次に強化魔術だ。少し動いてみてくれ』

甲龍は整備室から出ると鈴は機体の内部をイメージし、機体の部品や装甲を強化させる。

『どつやらISにも魔術は通用するようだな』

鈴は甲龍をしまつとレナードの所に戻る。

「アーチャーが出来るのはこれ位見たいよ」

「アーチャーは何もやってないように見えたが」

『いや、私は鈴の体を一時的に借りているのだよ。それに鈴は多少だが魔力を持っているようだ、とは言いが魔術回路等は私が持っているものを使用しているからなんら問題はない』

「と言う事は、アーチャーは鈴の体を借りていると言う事って良い

のだな」

『その解釈で問題はない』

そうかとレナードは納得し、レナードは少し考えるように下を向く。

「鈴、君の甲龍にある武器を渡したいんだ」

「何の武器よ」

「ちょっとついて来てくれ」

レナードは歩き出し、鈴はそれを追うように歩く。整備室の端の方まで歩くとある武器が置いてあった。

「レナード、これは？」

「これは”アイザイアン・ボーン・ボウ”。僕が乗っていたベリアルの主武装だ、これを鈴、君に渡そうと思う」

「…レナード、ちょっとこれ見せて貰うわよ」

鈴はそういうとアイザイアン・ボーン・ボウに触れてアーチャーと同化すると解析を始める。

「なるほど…これ、不可視の矢を撃ちだす武器ね」

「そう、アーチャーと言う者がいる鈴、君に似合うのではないかと思つてな。正直僕じゃこの武器は活用は出来ないからね」

「じゃありがたいと貰うわ」

「そうか、では僕はこれを小型化させて甲龍に合うようにセッティングさせて置くから君はここを見学でもしていてくれ」

鈴はレナードから離れると適当な場所に向かう。

『素直では無いな君は』

「うっさいわね」

『ふう、私のマスターはどうしてこうも素直ではないのかね』

「アンタの前のマスターって遠坂凜って人でしょ。どんな人なの？」

『君と同じく素直では無い所とそれでお人よしでうっかりで…
機械音痴だった』

等と会話をする二人だが、傍から見れば一人ごとをぶつぶつ言っている様に見える。

第41話・島って夏に行くと暑いね(後書き)

今回は鈴の話です。この話はたぶん続くと思います、そして鈴が強
化されましたね。これでやっと鈴も対等になったような…

アンケートはまだやってますよ〜

第42話・島って夏に行くと暑いね その2（前書き）

お久しぶりの投稿になります、遅くなりましてすみませんでした。最近いろいろあり、落ち着いたらテイルズオブエクシリアにハマってしまいました…

少し話が変わりますがフルメタルパニック・アナザーを早速読みました。感想としては中々面白い内容で、クルツとマオの間に娘が出てきている事に驚きでした。あと、小野Dが初っ端から出てきた事に吹いてしまいました。

とりあえず一言、ミラ美しすぎるうううう

第42話・島って夏に行くと暑いね その2

さて、鈴が一人で隊内を歩いていると少し離れた所にテッサと中年の男性が話している所が見えた。

「テッサ、何やってるの？」

「鈴さん。あつ、紹介しますね。この人はアンドレイ・カリーニンさん、ここの技術部門全体を指揮してる人です」

アンドレイ・カリーニン。かつて宗介を拾い、相良の名字を与え、色々あり寝がえり、宗介との生身の決闘で負けた経歴がある。いまこうしてここに立っているのは正直奇跡に等しい所だった。

「ふむ、今我々はあるものを作っているのだよお嬢さん」

「そつだ、鈴さんにも意見を聞いてみたらどうでしょう？」

「大佐、これは機密事項に触れてしまうのでは？」

「大丈夫です、むしろ鈴さんの方が我々より詳しいと思います」

「へ…？」

話しについて行けない鈴はポカンとした表情になり、テッサとカリニンにさつきとは違う格納庫、第二格納庫に連れてこられる。第二格納庫に着くとそこには一機の戦闘機が作られている途中だったが、鈴はそれを見てその戦闘機の所に走って行く。

「ちょっとテッサ、これってバルキリーじゃないの？しかも形とカラーリングを見ると…これ、劇場版でアルトが最後に乗ってたYF-29デュランダルでしょう？」

「流石は鈴さん、知ってましたか」

忘れていた人もいるかもしれないので言っておこう。凰鈴音はマクロスシリーズの大ファンだ、勿論ファーストから最新版の劇場版Fまでしっかり見ているつわものなのだ。

「でもテッサ、何でバルキリーなんて作ってるのよ」

「それは少し前にアルトさんに頼まれたのです」

少し時間が遡り…

「なあテッサ。お前って凄い所の大佐なんだから？」

「はい、そうですけど。どうなさったのですか？」

「最近、空を飛んでいるがセシリアやグラハムについて行けなくなつたって言うのか、何て言うか、俺もそろそろ次の段階に進まねえと行けねえなつてと思つて、新しいバルキリーを作りたいと思つたんだが」

アルトはよくセシリアとグラハムの三人で空を飛んでいる、セシリアは既にISを改良し、空中での高速移動は既にバルキリーと同レベルまでに出せるようになっていゝ。グラハムもスペックの低いフラッグを見た目はわからないがいつの間にか改良をしていた。

そこでアルトはバルキリーをパワーアップさせようと考え、バジユラ決戦当時には装備していたスーパーパックを装備させようと思つたが、あれは宇宙でしか使えない事を思い出し次に思いついたのはこないだ見に行った自分自身の劇場で最後に使つていたデュランダルが思いついたのだ。

「でもアルトさん、ここの地球はそもそもバルキリーが発展してませですけど、それでも作りますか？」

「ああ、頼む。俺も色々と案を出すから」

「わかりました」

時間は戻る…

「へ〜そう言うことがあったのね」

「はい、あれからセシリアさんやエーカー先生などに色々と空中での動きや変形、武装などを参考にするために聞いて何とかあそこまで出来あがったのですが…」

「何か問題でもあったのね？」

「それは、あの機体のワン・オフ・アビリティが決まらないのだ」

『鈴、少しアレを解析してもらえないだろうか？』

「いいけど…」

鈴は作りかけのデュランダルに触れ、解析を始める。

「内部構造は…異常なし。ワン・オフ・アビリティは…なるほどね」

何かを理解した鈴はデュランダルから離れ二人がいる所に戻る。

「何かわかりました？」

「これ、フォールド技術使ってるわね」

「はい、アルトさんが単独短距離フォールドを使えないかって事で私達独自で編み出したのですが…」

「フォールドは可能、でもこれじゃあ一回の戦闘で二回が無理をすれば三回。それ以上すると何処か違う場所に飛ばされるわね」

今現在、この地球の技術でフォールドを再現させるのはかなり難しい。それでもミスリル、アマルガムの技術を合わせて何とか短距離のみだがフォールド技術を生み出す事に成功していたのだ。

実際にEOTエキストラ・オーバー・テクノロジを使って無くフォールド技術を再現したミスリルの技術力は凄い所だ。まあ、ミスリルもEOTに近い物使用しているが…

「そうなんです。でも、今現状ではこれが限界でして…」

「いやいや、二回もフォールド出来るだけでも十分じゃない」

「そうですか…それなら後はカラーリングを完璧にしてアルトさん届けるだけですな。ありがとうございます鈴さん」

「あたしは何もしてないわよ」

「いいえ、鈴さんに相談してなかったら私、もっと悩んでいました。ではこれからカリーニンさんに伝えに行ってきますね」

テッサは鈴に頭を下げると走って鈴の元から去って行った。途中何

もない所で転んだ姿を見て鈴は苦笑した。

「さてと、あたしはどうしようかな」

鈴は更にメリダ島を探索するために歩き出した。

第42話・島って夏に行くと言いな その2（後書き）

今回は少し内容が少なくなっただけで申し訳ありません。今回でアルトのデュランダルフラグを出したただけなのでこの分量になってしまいました。

それはともかく、テイルズオブエクシリアのミラにどストライク中の自分ですが、急遽ミラを登場させたいな〜と思ってきました。いや、たぶん登場させるつもりです。いつ登場させるかはまだ未定ですが近い内には登場すると思います。

アンケート結果は九月中にはします。

第43話・家が爆発、そして新たな住まい（前書き）

今回、またまたある作品が追加します。ああ、キャラがまたたくさん増えるぜ…

第43話・家が爆発、そして新たな住まい

これは、相良宗介の身に起きた重大な事件の一つを話そう…

「宗介〜ひ〜ま〜だ〜」

本日は八月一日、現在地は宗介の家。宗介の家はマンションであり、当初護衛対象であった千鳥かなめの家の近くにある。

「待ってる、後少して書類は終わる」

そして、家にいるのは宗介とラウラの二人。宗介はミスリルの報告書を書いて、ラウラはベットの上でごろごろとしていた。
一見、普通の風景に見えるがこの後。あのようなことが起こるとはこの時誰も予想していなかっただろう…

「報告書なぞいつでもできるだろう？」

「そもいかん。遅れるとマデューカス中佐に怒られるからな」

「ぶ〜ぶ〜」

ラウラは退屈になり、そのあたりを物色を始める。宗介の部屋は高校生の部屋にしては殺風景であり、あるのは銃や武器、それらに係している物が多い。それでも最近は少しづつ物が増えて来ていた。これは彼を知っているのなら良い光景だろう。

「色んな武器があるんだな」

「気をつける。それらは本物だからな」

宗介は視線をそのままにラウラに注意を促す。

「大丈夫だ……」

ラウラは急に手を止め、あるものに手を伸ばす。それは水筒の様な銀色をしてる筒の様なものだった。

「なんだこれは……」

ラウラが筒の蓋を開けようとした時、宗介は何気にラウラの方を見て慌てる。

「待てラウラ！！ソレは…！」

宗介は慌ててラウラを止めようとしたが間に合わず蓋が開かれ、次の瞬間部屋中が物凄い光に包まれた。

「くっ！！！」

宗介は急いでラウラを抱え窓をぶち破りそのまま飛び出す。次の瞬間、部屋の内部は爆発したのだった。

「な、何だったのだあれは？」

「あれは閃光弾と手榴弾を同時にさせる開発中の武器だ。今回は余っていた筒で試しに作っていたのだが…」

「そんなもん作ってるんじゃないやねええええええ」

とっさに出したボン太君で着地するやいな、ラウラは思いっきり宗介をハリセンでシバいた。

「うわぁ…無残だな」

「うむ。そのようだな」

二人は急いで部屋に戻るとそこには爆発のせいで部屋が真っ黒
ブラ
ス無残な光景があった。

「俺は管理人に訳を話してくる」

宗介は管理人室に向い、管理人を連れて来る。

「こ、これは凄い事になってますね……」

「すみません。こちらの不注意で……」

この後、宗介は管理人に謝り、今度業者の人を呼んでもらう事にな
った。ここまででは良かったのだが……

「この状況じゃ一月以上かかるかも知れないね」

「そうですね」

「その間、何処違う場所に移ってもらうしかないね」

「わかりました」

そう言って管理人は管理人室に向い、残った宗介とラウラは無残な

姿になった部屋を眺めていた。

「さてと、住む場所を探さねばな」

「お前、マイペースだな」

「慌ててもどうにもならん。それよりも武器系統を処理せねばいかん」

宗介は無残な部屋に入り、武器や辛うじて無事な秘密な物を回収すると管理人に挨拶をしてマンションを出た。

「で、どうするんだ宗介？」

「まずは不動産だ」

その後、二人は不動産に向ったがここで問題が起きた。何と宗介が求めている部屋がピンポイントで売られていなかったのだ。その後も何件か回ったが何処も部屋が無く困り果てる事になったのだ。

「…今まで見た所で一番近いのは千葉か」

「どんだけ部屋が無いんだっことは？」

トボトボと歩く二人はどうしたものかと考えていると一本の電柱にある張り紙が貼られているのに気づく。

「只今入居者募集中、なんと今なら執事付き。ムラサキノヤカタ…
だつてさ」

「場所はそれほど離れては無いようだ」

「それより私は執事付きと言うのが気になるのだが…」

「もう当ては無い、そこに行ってみるとしよう」

宗介は電柱に張つてあつたチラシを剥がし。チラシに書かれている住所を指して歩き出した。歩くこと三十分、二人の目の前にあるのはそこそこ大きい二階建ての建物だが、見た目かなり古い。いいかえると民宿と言つた方がいいかもしれない。

「凄い古そうだな」

「では訪ねて来る」

ラウラが建物を眺めていると宗介が玄関の扉を開ける。

「すまない、誰かいるか？」

「はい、どちら様ですか？」

奥から一人の執事服を着た青年が現れた。見た目どこか幸薄そうな少年であった。

「相良宗介と言う。ある理由で家が使えなくなりたまたまこのチラシを見てここに来た」

「え…まさかの入居者ですか？」

「そうなるな」

執事の青年は驚いたようにびっくりした。

「じゃ、じゃあ一回上がってくれませんか？奥で詳しい話しを聞きたいので」

「外にもう一人いるから呼んでくる」

宗介は外にいるラウラを呼び、執事の青年の後を追う。中はやはり外見通り、一昔前を連想させるような内装であった。

「えっと…相良さんはどうして家が使えなくなったのですか？」

「それはだな…」

宗介は家が使えなくなった経緯を話し、執事の青年は苦笑する。

「そ、それは大変でしたね」

「まったくだ。宗介があんなものを家の中に置いておくからだ」

「それについてはまったく言い返せない」

「と、とりあえずそれは置いてきまして。相良さんは見た感じ、僕と歳が近いように思うのですが？」

「学年は二年の十七歳だ」

「あ、僕も今二年生、と言う事は同じ年なんですね」

執事の青年は宗介と話しながらお茶を入れていたが、その姿をじつとみるラウラは「動きが…本物の執事だ…」と呟いていた。

「わかりました。部屋の事は管理してるお嬢様に話しを聞いてきます」

「すまない、助かる」

「いいえ。あつ、そう言えばまだ僕自己紹介していませんでしたね。僕は綾崎ハヤテです」

「俺は先も言ったが相良宗介だ」

「私はラウラ・ボーデヴィツヒだ」

家が使えなくなった宗介はムラサキノヤカタと言う所で出会った執事服の青年綾崎ハヤテ、彼も一夏や刹那等と同じく物語の主人公である。こうして宗介はまた物語の主役と出会ったのだ。そして、ここから宗介は本当の意味で新たな生活が始まる…のか？

次回はこの話の続きの予定です。ああ、まだ話が終えてないのがあ
る…九月中に終わらせたいな…

第43話・家が爆発、そして新たな住まい（後書き）

はい、新たにハヤテのごとく！が加わりました。ハヤテは前から加えようと考えていたのですが中々タイミングが合わず今回何とか加えてみました。

それよりハヤテの映画楽しかったですよ！

次回はこの話の続きの予定です。ああ、まだ話が終えてないのがある…九月中に終わらせたいな…

第44話・現る！！三人目の完璧生徒会長（前書き）

なんか久しぶりに執が進み一日二回目の更新です。

そしていまさらですが、富士見、電撃、MF、サンデーといろいろな出版社が混ざったな〜と思う今日この頃…

第44話・現る!!!三人目の完璧生徒会長

前回のおさらい。宗介の部屋が爆発して使い物にならなくなりました。以上

「って、何なんですか。この回を初めて読んでくれた読者様に全然伝わらないですよ!!!」

「何を言っているのだお前は？」

あれからハヤテは二人をそのままに何処か行き、少し時間が経つと戻ってきた。金髪ツインテールのちっちゃな少女を連れて…

「お前が入居を希望する奴だな」

結構上から目線で話しかけてきた。

「ああ、相良宗介と言う」

「そうか、相良宗介と言うの…なん…だと…相良宗介…だと…?」

「どうかしたのですかお嬢様？」

「は、ハヤテ…ちょっと待ってる」

金髪の少女は宗介の名前を聞くと驚き。急に部屋を飛び出して行ってしまった。

「何なんだ一体…」

「わからん」

少し経つと金髪の少女は一冊の小説を手に戻ってきた。その小説のタイトルは…

「これだハヤテ」

「フルメタル・パニック…僕はそれについては全然分からないのですがそれがどうかしたのですか？」

「あ…あほー。相良宗介と言えばフルメタの主人公ではないか！！ええい、一体何なのだ今日は！！は！！これぞまさに運命石の扉の選択なのか！？」

「お嬢様、この世界には鳳凰院さんは存在してますからその発言はマズイですよおお」

金髪の少女が一人でに興奮しているので宗介とラウラはどう反応すればいいのか困っていた。

「お前に一つ聞く。何処の高校に通っているのだ？」

「都立陣代高校だ」

「陣高キター。次だ、お前はミスリルに入っているのか？」

「ああ、俺はその特殊部隊に所属していた」

「うおおおお。では次は…」

「お、お嬢様。落ち着いてください」

金髪の少女のテンションは止まることが無さそうだったのでハヤテは慌てて金髪の少女を止めた。
その間、ラウラはテーブルの上に置いて小説をパラパラと読んでみた。

「成程、確かに宗介が出ているな」

「俺も一応それは知ってる。千鳥や篠ノ之が読んでいたからな。確かにそれは俺が主役のようだが、中盤から後半が似た様で全然話が違っけどな」

同じだったらアマルガムは壊滅、レナードは死亡してますからね。

「す、すまないハヤテ。取り乱してしまった」

「いえ、良いんですけどお嬢様：？」

「入居か？別に構わんぞ。二階に空いてる部屋もあるしな」

「そうか、それは助かる」

相良宗介、ムラサキノヤカタに入居が決まった。

「おっと、紹介してなかったな。私はこの管理人の三千院ナギだ」

「私はてっきりシャナだと思ってたがな…」

「ラウラさん、身も蓋も無い事を言わないでくださいよ。確かに中の人は同じですけど」

ラウラがいきなり意味の分からない事を言い始めたが、宗介以外は分かっていたようだった。

「では相良さん。部屋を案内しますので着いて来て下さい」

「ああ」

宗介とハヤテは二階に行き、残されたラウラとナギは…

「お前…中々出来るな…」

「そう言うお前こそ…」

そんな意味の分からない事を言いながらガンダムエクストリームV
Sをやっていた…

「ここがお部屋になります」

部屋を案内された宗介。部屋は見た目通り畳の和室、広さは普通の
位の大きさだった。

「後で契約とがありますのでそれまでは部屋でゆっくりして下
さい。今お茶を入れて来ます」

「ふむ、すまないな」

「いえ、僕はここの執事ですから」

そう言ってハヤテは部屋から出て行った。

「うおおおトランザム!!」

「ゼロ…私を導いてくれ!!」

すっかり仲が良くなったラウラとナギ。ちなみに二人が使用しているのはラウラがダブルオークアンタ。ナギはウイングゼロEW版である。

「……………誰？」

二人が白熱している後ろでピンク色の少女がそれを見つめて啞然としていた。

「あれ？ヒナギクさんじゃないですか」

「は、ハヤテ君!!びっくりさせないでよ」

「すみません、所でそんな所で突っ立っていてどうしたんですか？」

「ナギの隣にいる子って誰なのかなって、まさかハヤテ君あなたまたフラグを……」

説明しよう。綾崎ハヤテはその中性的な顔立ちやその他の能力で沢山女の子にフラグを立てているのだ。その数は上条さんと同じ位と言っても過言ではないな。

「ぶえつくしゅん!!」

「どうしたのとうま?」

「いや…なんか俺のこと変な感じで例えられているような…」

そんな学園都市の一角の出来事であった。

「違いますよ。彼女は新しく入居して来る人の友人のラウラ・ボーデヴィツヒさんですよ」

「えっ…新しい入居者来るんだ」

「はい、今上にいますから会ってみてはどうですか?」

「そうね…今挨拶してくるね」

ヒナギクと呼ばれた女性は二階に上がり、ハヤテは台所に行った。

「サモンカードに入っているのはこれ位か」

宗介はカードに入っていた物をAS以外全て出して畳の上に置いていた。置いてあるのは教科書と陣高の制服とミスリルの隊服、それと写真のネガとランカ&シェリルのサイン入りCDにファイヤーボナーのCDがあった。

「本は後で買いに行くでしょう」

ここでドアからコンコンとノック音が聞こえ。宗介はドアを開ける。そこにいたのは美少女ながら胸の膨らみが残念な…

「それ以上言つと…分かってるわよね？」

それ以上言つと本当に危ないのでここでは言わないようにしよう。

「ごめんなさい。あなたが新しい入居者？」

「ああ、そつだ。相良宗介だ」

「私は隣の部屋の桂ヒナギクよ。よろしくね」

二人はその場で握手をする。

「ねえ、少しお話ししない？」

「俺は構わないが」

「じゃあお邪魔するね」

ヒナギクはサッと宗介の部屋に入り、宗介は少し困りながらもふうとため息をついた。

「これって何かしら？」

「俺の持ち物だ。丁度持ち物の確認をしていた」

「それにしても随分少ないわね」

「その理由なのだが…」

宗介はハヤテにした話と同じようにヒナギクにも話した。

「…やっぱりあなたも主人公クラスなのね？」

「ん？何なのだそれは？」

「やれやれと言ったため息を吐くヒナギクに理由は分らない宗介は？
状態になる。」

「うっん、こっちの話し。でも相良君って私と同年なんだね。何
処の高校に通ってるの？」

「少し前までは都立陣代高校に通っていたが、今はIS学園に期間
限定で通っている」

「えっ！あなたIS学園に通ってるの？」

「今はな、お前は何処の高校に通っているのだ？」

「私は私立白皇学園に通ってるわ」

「白皇…あのエリート校か。君は優秀なのだな」

「えっ…いきなりそんな事言われても…」

「宗介は真顔、いつも通りの顔で言うが。ヒナギクは何故か顔を急に
真っ赤にして慌てる。」

「白皇か…丁度いいかもしれん」

「どう言う意味？」

「いや、最近何かと世の中物騒だろ。こないだうちの生徒会に白皇から護衛の要請が来ていたのにな」

「確かに、職員会議でそんな事話してたって聞いたわねって相良君、あなた生徒会に入っているの？」

「ああ。陣高、IS学園では執行部にいる」

「じゃあ、あなたがあの陣代高校の暴走守護人なのね」

「暴走はしていないが恐らくそうだろう」

「いやいや、下駄箱を爆破したり、花壇に地雷仕掛けたり、校内を服だけ解ける細菌をばら撒いたりしてるでしょうがあなたは。」

「確かに守護人よ呼ばれてりもするが…君も生徒会に所属しているのか？」

「私は白皇の生徒会長よ」

「成程、名前を聞いた時から薄々思っていたがやはりそうだったか」

「それってどう言う意味よ？」

「白皇の生徒会長は完璧超人だと林水会長が仰られていた」

「いつの間に私、他校で有名人になってた訳…」

ヒナギクがガツクリ頂垂れている。宗介はそんな彼女を目の前にしながら何もしていないでいた。

「こう言う時、普通男の子は何か声を掛けるべきなんじゃないの？」

「すまない、こう言う時どう声を掛けたらいいのか分からなくてな」

「ま、まあいいわ。要請については今度ちゃんと話をしましょう」

ここで一息をついて何かなつかしむようにした表情をするヒナギク。

「ISかあ…」

「君はISに何か思い入れがあるのか？」

「私、もしかしたらIS学園に入ってたかも知れないのよ。まあ、最後まで悩んで白皇に来ただけだね」

「そうだったのか」

「ねえ相良君。あなた、ISは持ってる…訳はないか」

「ISは無いがASはあるぞ」

「！！じゃあ…今から私と闘って見ない？」

何を言っているのだ白皇の生徒会長はと思った宗介だった。

「さて、君はISを持っているのか？」

「持つてるわよ。試験の時何故か私、専用機貰っちゃってね。白皇に進路決めた時に返そうと織斑先生に言っただけけど」それはお前にやる』と言われちゃったのよね。それで今も暇なときは学園で練習しているわけ」

「そう言う事なら構わない。だが、俺は勝負事なら負ける訳にはいかない」

「それは私もよ」

二人の間に火花が飛び散っていた。二人は負けず嫌いだった。

「僕、お邪魔の様なので下に戻りますか」

今の話をドアの外で聞いていたハヤテはそのまま一階に降りて行った。ドアは木製だが中々声は通さないが宗介はしつかりドアを閉めずに少し空いていたため外に声が漏れてハヤテはそれを立聞きをしていたのだ。

「だが、今すぐは無理だ。闘うとならばな今度だな」

「そうね…流石に今日は無理よね。ごめん、興奮しちゃって」

その後、宗介とヒナギクは他愛も無い話しをして時間を過ごしていた。一方、ラウラとナギは…

「ホワイトドールのご加護を…！」

「そっちが兄さ…じゃなくて白ひげなら私は…死んじゃえばいいのに…」

色々と危ない事を口走りながらゲームをしていた。

「ハヤテ君。ナギの隣にいる子は？」

「マリアさん、お帰りなさい。あの子は…」

「入居者ですか…それはまた賑やかになりますね」

「あはは…そうですね」

メイド服を着ているマリアと呼ばれる女性とハヤテは騒いでる二人

を見てそんな事を話していた。

第44話・現る！！三人目の完璧生徒会長（後書き）

完璧超人のヒナギク登場の回でした。設定としては彼女もISを持つてる事にしました、だって完璧超人ですからね。これで宗介とのフラグも立ちましたしね…決闘フラグが。

生徒会関連ではやはり宗介も生徒会に入っているので絡めて見ました。これはもう白皇にボン太君を…シユールですね。

次回はまたまたこの話の続きの予定です。

第45話・勉強は大切だね。(前書き)

まず先に、エターナルさん、前後書きに宗介とかなめを出していた
だきありがとございます。

ISの原作8巻っていつ出るんだろう。まあ、俺妹とまよチキとは
がないとフルメタアナザーが読めたのでいっかなと思っ自分です。

第45話・勉強は大切だね。

宗介がムラサキノヤカタに入居初日の夜。他の入居者である春風千桜や天王州アテネと出会った宗介とラウラ。

「あんたが新しい入居者か…それにしても物好きだな」

千桜にそんな事を言われた宗助であった。そしてもう一人には…

「あなたが”あの”相良宗介…」

「俺を知っているのか？」

「あら。あなたは色んな所で有名人よ」

何か意味深い事を言うアテネ。彼女はナギやハヤテ達が通っている白皇学院の五人いる理事長の内の一りで色んな意味で凄なお嬢様である。

「それって、どう意味なんだ？」

「あなたは…ラウラ・ボーデヴィッツね。そのまんまの意味、彼は

今では世界中やこの周囲ではとても知名度は高いわ。もっとも、それは知るぞと知るって言うレベルですけど」

「それってどういう意味アーたん？」

アテネの事をアーたんと呼ぶのはハヤテ。彼とアテネの関係は色々あり、昔からの知り合い。簡単に言えば幼馴染である。

「彼はこの周囲では”陣代の守護人””陣代の核爆弾”等と言われるは」

「そ、そうなんだ。彼って一体どんな人なんだろう…」

ハヤテが未だに信じられないような表情をしながら宗介の方を見ていると後ろからヒナギクが声を掛ける。

「天王州さんが言ってるのは本当よ」

ヒナギクが真剣な表情で言う事でハヤテはようやく信じたようだった。ここまで会話についてこられてなナギはポカン状態。

「それでも天王州さんも知っていたなんて」

「元々、あの高校の生徒会長とは面識があっただけで、その時に聞

いたのよ。それにしてもあの男、侮れないわね」

「私は至って普通のイメージだったわよ」

「いいえ。あの男、後にとんでも無い事をするにわ」

白皇の理事長にここまで言わせる陣代高校の生徒会長ってどんな奴だろうと宗介とラウラ以外は思った。

「相良って言ったよな…あまり厄介事を持つてるくなよ」

「俺は厄介事などした事は無いがな…」

ヒナギクとアテネとハヤテが話してる少し離れた所で宗介とラウラは話していた。宗介。お前は…お前は過去に色々やりすぎたと思う作者であった。

「みなさん。夕食の準備ができましたよ」

いままでいなかったメイド服のマリアが現れ。その場にいた全員は夕食を食べるのであった。

食べ終わると、執事とメイドの二人であるハヤテとマリアは後片付け、ナギとラウラ、千桜は先ほどの続きと言いガンダムEXVSをやり始める。

宗介、ヒナギク、アテネはそんな三人を眺めながらのんびりしている。

「それよりヒナ。いい加減私の事をアテネと呼ばんか。名字は長くて言いにくかるう」

「でもいいの？理事長に対して…」

「いいわ。私はそんなの気にしないし。宗介、あなたもよ」

「了解した。ではアテネ、君の格好は趣味なのか？」

宗介が言うアテネの格好は黒を基調としたゴスロリ見たいな格好をしている。それにアテネ自身、とても美しいのでその格好でも似合っ
てしまっている。

「いえ、これが私の私服よ。そうよねヒナ？」

「そうね、あなた何時もそんな格好してるわよね」

「宗介、この質問に何か意味でもあるのかしら？」

「いや、只気になったただけだ…すまん、少し部屋に行ってくる」

宗介は椅子から腰を上げると階段を上がり、自分の部屋に戻る。少しして何かを持って二人の所に戻る宗介。

「相良君。それは？」

「教科書だ。少しでも勉強をしなければ次のテストでも苦戦するからな。今からでもやっておこうと思っただけな」

「成績、そんなに悪いのかしら？」

「ああ…余り芳しくは無いな」

相良宗介。何度も言うが彼は高校が初めての学校生活だ。それ以前は戦場を駆け抜けていたため、勉強など一切したことが無かった。それが今に来て思いつきり重荷になっていて、一学期の期末試験は一夏とラウラと共に大いに苦しんだのだった。

「なら、私が教えてあげましょうか？」

「私も教えてあげるわよ」

「そうか、それは助かる」

ちなみに、アテネは白皇のOBで飛び級で卒業してるし、ヒナギクも学年トップの実力。と言うより白皇の偏差値は高く、ナギも頭が良い。マリアもアテネと同じく飛び級で卒業をしてるため頭が良い。と言うより天才だろう。

千桜はそう言った意味では中の中で、ハヤテは結構ギリギリである。

それでもラウラや一夏よりは勉強が出来るだろう。その後、後片付けを終えたハヤテも勉強に参加し、マリアも教える側に加わった。正直、教えている側の方は化け物しかないんじゃないかね？と思ったX1を使用している春風千桜だった。

「じゃあ今日はこれ位にしましょう」

「ハヤテは今日の所を忘れないように。宗介もなるべく忘れないように、分んなかったら聞きに来なさい」

「では、私はお茶を入れて来ます」

本日のスペシャルな方達の勉強会を終えた宗介とハヤテはふうと一息を入れる。

「彼女達は凄いな。とても分かりやすい」

「はい。僕も色々と教わって何とか白皇につついて行くてますからね。あつ、僕はこれから皆さんの就寝の準備をしてきますので」

一息を入れたハヤテも席を立った。宗介はハヤテを見て執事の仕事は大変だと何となく思った。ちなみに三人は相変わらずゲームをしている。だが、この中でも常識を持っている千桜は時計を見て二人にもうやめるように言う。本来なら「まだまだあぁ」と言うだろう。ラウラもおとなしく従い。ナギも「一人ではつまらん」と言いゲームの電源を落とす。何だかんだで疲れているラウラさんであった。

そこからはアツと言うまで、各々お風呂に入り、眠りに付いたりとする。ちなみにラウラはナギと一緒に仲良く眠ってる。

「あらあら、ナギったらラウラさんと仲良くなったみたいですね。まあ、これはいい傾向なのかもしれないですね」

「そうですね。お嬢様が会って間もない方とここまで仲が良くなるなんてありませんでしたからね。それじゃあマリアさん、おやすみなさい」

「おやすみ、ハヤテ君」

時間は既に一時を過ぎる、執事とメイドはようやく一日を終えるようである。

次の日の朝、宗介は朝早く目を覚まし一階に降りると既に執事のハヤテとメイドのマリアがいたので挨拶すると玄関を出て軽く体をほぐす。

「あら、相良君おはよう。起きるの早いのね」

「ああ、訓練は日課だからな。桂、お前は？」

「私も訓練じゃないけどランニングよ」

「そうか、なら一緒にやらないか？」

「いいわよ」

「そうか、なら少し待ってくれ…アル」

『ラージャ』

宗介はアルに命令してすぐにボン太君をその場に出す。いきなりボン太君が現れた事にびっくりするヒナギクであったが宗介は構わずボン太君に乗り込み…

「ふもっふー」（行くぞ）

「えっ、ええ〜〜」

元気よくふもっふ〜と叫びながら走りだし、ヒナギクはその後を追うように走る。

「お帰りなさいヒナギクさんと…ボン太君？」

ランニングを終えたボン太君（宗介）とヒナギク。そこに玄関を掃除していたハヤテに出くわす。

「俺だ」

「うおおお。相良さんがボン太君から現れたあああ」

「落ち着きなさいハヤテ君」

いきなりボン太君から現れた宗介に驚くハヤテだった。

くおまけ

そんなハヤテと挨拶をして中に入るとナギが廊下の真ん中で…

パン！！

と、手を合唱していた。

「ナギ、あなたが朝早く起きてる事には驚いているけど何をやって
いるのかしら？」

「何って？見て分かるだろう？」

「いや…分からないから聞いているのよ…」

そこに、ナギの後ろからパジャマ姿のラウラが現れた。パジャマはナギと同じ絵柄のうさぎの絵柄が入っているものだった。

「なんだお前、朝から錬金術の練習でもしてるのか？」

「おおラウラ。お前ハガレン知っているのか？」

「当たり前だろうに。私は家に原作全巻そろえているぞ。所でお前は何でそんな事をしているのだ？」

「いや〜何かいつか出来そうな感じがしてな」

「ねえナギ、ハガレンって何かしら？」

ハガレンと言う単語を知らない宗介とヒナギクは会話に付いていれていなかった。

「ハガレンと言うのは鋼の錬金術師と言う漫画の事だ。知らんのか？」

「「ええ（ああ）」」

アニメ、漫画の事はあまり詳しくない宗介と全く知識のないヒナギ

クだった。

「なあ、朝っぱら何をしているのかって言うのには突っ込まないがお前、錬成陣なしでやりたいなら真理の扉でも見なきゃ出来ないだろう」

「そ、そうだった…」

「ハル子、あなたも知ってるのハガレンって…」

「え、ええまあ一応…」

「そう言えばクルツの奴も『俺は水がでも無能じゃないぜ』とか言いながら指パッチンをしていたな…」

「それはまさに大佐の真似だな!!」

ナギと千桜が同時に同じ台詞を言った。

「なあナギ、お前原作は持ってないのか？」

「原作は屋敷に置いて来てしまったから無いな」

「仕方ない、朝ごはんを食べたら寮に取りに行くとするか。久しぶりに読みたくなってきたしな」

「おっ、私にも貸してくれ」

「私もその後でいいので…」

三人はワイワイと話しながら奥に行ってしまった、残された宗介とヒナギクは結局何も分からずじまいだった。

この話しがここで終わればよかったのだが、まさかあんな非現実的な事が起こるなんてこの時はまだ誰もおもってもいなかったのである。

第45話・勉強は大切だね。（後書き）

アテネの姿はちびっこの姿ではなく普通の姿で記憶が戻っています。それより林水会長の存在がどんどん大きくなってきちやった気がする。今日この頃…

おまけのハガレンネタは作者は劇場を見て今ハガレンにハマっているのでやっちゃいました。

次は…

- 1・フラッグファイターの後編
- 2・アルトの後継機の登場
- 3・マクスウエル様が登場
- 4・もう一人の白皇の理事長の登場

のどれかになると思います。

第46話・オーバーフラッグス現る 後編（前書き）

インデックス「ねえねえとうま？」

上条「なんだインデックス」

インデックス「この小説だと、とうまの右手意味ないよね？」

上条「言われてみりゃそうだな…」

インデックス「そうなるとうま、無能なんだね。まるで雨や水だと無能になる大佐のように」

マスタング「私は無能ではないぞシスター」

ホークアイ「はいはい、大佐は寄り道しないで仕事して下さい。でないと本当に無能になってしまいますよ」

マスタング「ぐっ…」

インデックス「ちなみに今回のお話は38話の後半なんだよ」

第46話・オーバーフラッグス現る 後編

ハワード以下四名はフラッグを格納庫に収納している。自衛隊は元々ASを所持していた事もあり、MSもすっぽり入る位大きかった。

「ねえ宗介、随分久しぶりだよな」

「アレー又以来だな。元気にしていたか？」

「この通りよ。それより宗介、その可愛い子は？」

ナミは宗介の隣にいるラウラを見て尋ねる。

「私はラウラ・ボーデヴィツヒだ」

ラウラは名乗り、ナミと握手をする。

「ナミ、収納終えたぞ」

「ありがとう。じゃあ宗介、ラウラ。またね」

フラッグファイタープラス風間が戻ってきたのと入れ替えにナミは格納庫に向って走って行った。

改めて説明しよう。ここ習志野自衛隊千葉県船橋市にある陸上自衛隊、実際にも存在する場所でもある。フルメタの世界で他にも実在している場所では有名なのは、夏と冬にオタクの祭典が行われる有明の東京ビックサイトである。

話しを戻そう、習志野自衛隊ではASを取り扱っている。だからと言って戦争や紛争には参加をせず、主に救助活動などの行動している。最近になり、小型化の技術が上がってきた事もあり更に技術が進歩して言っている。

この世界にはAS以外にISがある。だが、ISはコアを開発した篠ノ之束のミスにより女性しか扱えないと言った悲劇を起こしてしまっていた。

しかし、先にも言った通り。ASの小型化の技術が上がり、宗介やクルツが使用しているように小回りを効くようになったのだ。

ここでISとASの違いについても話しておこう。ISは体を鎧の様に着る感じで自分の手足の様に動かすように出来る。ASはその点、色々と問題がある。それはASはいくら小型化と言っても操縦桿を握って動かす事である。

これは自分の体の様に動かすと言うようには中々行かない。それこそ自分の体の様に動かせるような奴らは宗介やクルーゾの様にベテランクラスまで行かないと中々難しい所である。

更に、ISを学ぶのはIS学園と言うISを学ぶ所があるが、ASはそう言った所が無い。ASは自衛隊が重機免許を持たないと学べないのが現状だった。

こう言った現状で、世界で普及されているのは数こそASが多いが、数が少ないISとどっこいなのがこの世界の現状である。

もつとも、最近はMSやそれ以外にもちらほら現れてきたので何とも言えないのだが…

「長い説明だったな」

「何を言ってるんだラウラ？」

「あつ、いや何でもないさ」

ここで、長い説明の間。フラッグチームがなにやら話しあっていたようだった。

「隊長。この世界でも隊長になってください」

「そうです。我々オーバーフラッグスがこうそろっているんです」

「けっ…俺は別に…」

「ジョシユアは照れてるんですよ」

「なっ、俺は別に…」

「ふむ…その申しは嬉しいのだが。今の私は教師をしていて生憎、不可能なのだが」

再び改めて説明しておこう。グラハム・エーカーは今現在、I S 学園で英語教師をしているのだ。

「隊長。その事なら既に風間所長に話しをしてきました。隊長の技量はここにとつて重要な人物になると所長もすぐに理解しました。そこで所長は隊長に臨時自衛隊員として雇いたい」

「臨時隊員？」

「はい、隊長は普段は学園で教師の仕事を務め。有事の時に呼び出してをすつ物です」

「だがダリルよ。それだとこの士気にも支障が出るのではないか」

グラハムは常にここにいない自分が有事の時だけ来ても他の隊員との連携や気を使ってしまい、動きが鈍くなるのではないかと思つていたが…

「それなら大丈夫じゃねえの？」

「ジョシユア、どう言つ事だ？」

「この連中、殆どアンタのファンらしいぞ」

ファンと言っても自衛隊員の皆さんがガンダムのファンと言つ訳ではなく、ジョシユアやハワード、ダリルが持っていたグラハムのデ

「夕を自衛隊員の皆さんに見せて。その技術が凄い事でグラハムのファンが増えて行っていたのだ。それが功をなしたのか、この世界版フラッグも開発中との事らしい。」

「そうなのか二人共」

「そうですよ隊長」

「皆は隊長が居てくれるだけで士気が上がりますよ」

「そうか…ならその申し、受けよう」

「ありがとうございます」

「所で私の階級はどうなるのだ？」

「」「それは隊長と言ったら上級大尉です（だろ）」「」

長い説明の間にこう言っやり取りがありましたとさ。

「これはまた長い台詞だったな？」

「ラウラ？」

「いや、何でもないわ」

ここで奥からナミと一緒に格納庫に言っていた風間が何かの紙を持って走ってきた。

「どつした風間？」

「さ、相良君。これ」

風間は肩で息を切らしながら皆に見えるように紙を見せる。

「年に一度のAS対抗戦。挑戦者を待つ…これは？」

「ほら、去年相良君が出た奴覚えてる？」

「ああ、あの練馬なんとかという所とした奴だろ」

「そう、それが今年は挑戦者って書いてあるけどこれ…ISの事なんだ」

風間が指差す先に書いてあるのは「挑戦者はなるべくISが望ましい」と。これは小型化の技術が上がった今なら出来る事であるのは宗介の今までの戦いでも分かるだろう（この小説内限定）

「自衛隊側は我々だがIS側はどうするんだ？」

「ふむ…そうだ、私が相手を何とかしておこう。それに、この機会

にガンダムに勝っておくのも良いだろう」

「ガンダム…そうですね。今度こそガンダムに勝ちましょう」

「そうです。フラッグでガンダムに勝つことが隊長の夢!」

「俺はどうでもいいが、ガンダムにやられた恨みは忘れてねえしな」

なんか、一瞬でISからガンダムにシフトチェンジしてしまうグラハムであった。

「こうしてはいらねん。少年にこの事を伝えねば…」

「少しは落ち着けエエエエ」

「ぐはあ!」

勢いよく走りだそうとしたグラハムをラウラが蹴り飛ばした。グラハムが蹴り飛ばされた事で宗介以外の皆は大声を上げて驚いた。

「落ち着け、刹那には学園に帰って私が言うておくから慌てるな」

「そ、そうだな。我を忘れていた」

「何か凄い人だねグラハムさんって」

一緒に帰らなかったグラハムは格納庫に収納されているフラッグを眺めながら高笑いしていた。

「うるさい！！静かにしろ！！！」

フラッグの整備をしていたナミにスパナを投げられた。

第46話・オーバーフラッグス現る 後編（後書き）

ヒナギク「何かこのグラハムって言う人凄いインパクトがあるわね」

千桜「なに人ごとのように言っているのだヒナ。私達もいずれか出会う人物なんだぞ」

ヒナギク「それマジなの？」

千桜「マジだ。まあ、ナギを大喜びしそうだな。ちなみに私も会いたいぞ」

ヒナギク「そ、そう。あ、所でハル子。この小説ってあの迷惑理事長出るって本当？」

千桜「ああ、本当だ。作者がハヤテのごとく！一期を見て出したくなっただろうだ」

ヒナギク「それはまたはた迷惑な……」

アテネ「安心なさい。私が好きにさせないわ」

千桜「本当か？お姫様、本当にあれを止められるのか？」

アテネ「…少し自信が無くなってきたわ」

三人「……」

ラウラ「三人が硬直した所で次回を話をしたいが、あいにくまだ何

も決まっていない。だから次回は未定だ」

鳳凰院「それでは次回のインフィニットストラトス・ふもっふに。
エル・プサイ・コングルウ!!!」

四人「何んか知らない人がでた!!!」

第47話・生徒会長のISのイメージは光武ですよ（前書き）

上条「お前が噂の借金執事か」

ハヤテ「あなたこそ有名な幻想殺しの持ち主ですね」

二人「……」

上条「お互い、いろいろと不幸だな」

ハヤテ「そうですね。でも、お互いいろいろと頑張りましょう」

上条「そうだな、ここに不幸同盟の結成だな」

ラウラ「それよりお前達は誰かに刺されないように気をつけるよ」

第47話・生徒会長のISのイメージは光武ですよ

朝の五時、私は目覚ましの音で目を覚まし同居人のアテネを起こさずに顔を洗い部屋を出る。私の日課はこの時間帯に起きてトレーニングをする事だ。

前までは私一人でランニングをしていたけど、最近引越してきた相良宗介君と言う男の子と一緒にランニングをするようになった(でも、彼はボン太君を着ているから正確にはボン太君ね)

初対面での相良君の印象は真面目そうだったけど実際話してみるとやはり真面目だったが話しやすかった。彼はハヤテ君とはまた違ったタイプで普通なのかと思っただけどラウラに話しを聞いたら結構色々としてかしていた事を知り私はやっぱり主役級だなって思った。そんな私が何故、相良君の話しをしているのか言っと…

「よし、相良君に勝って見せる!!」

出会った日に私は相良君と戦う約束をしていたのだ。戦うと言っても生身じゃないからね? ISで戦うのよISで。

「相良君をびつくりさせてやるんだから…」

私は一枚のカードを見る。これは高校入試の時、IS学園の試験で試験官の織斑先生に貰った奴で容量以内なら何でも入るサモンカー

ドと言っ見たい。今もカードの中に私のISはデータになって入ってる。これってどう言っ原理なんだろう？

「俺をびっくりさせるとは？」

「ひゃいいー!」

私は後ろかいきなり声を掛けられて後ろを振り返ると、無造作な黒はつに左頬に十字の傷跡がある男の子、相良君が立っていた。

「お、驚かさないでよ」

「すまない。所で今日の予定なのだが…」

相良君がIS学園のアリーナの使用時間の事など説明してくれる。

「わかったわ。じゃあ朝ごはんを食べに行きましょう」

「そっだな」

朝ごはんは相良君と寝ているアテネを無理やり起こして一緒に食べる。アテネや寮の皆に挨拶して私は相良君とIS学園に向っ。

IS学園は電車一本で行ける所にある。約一年ぶりにIS学園に来る私、相良君は私の前を歩き中に入って行く。建物はどうやら寮の様で今私達がいるのは食堂のようね。それにしても随分広いわね…

「あれ、相良じゃねか」

「おはようございます宗介さん。家が爆発したと聞いて驚きましたけど無事で何よりです」

「すまない、心配かけた」

「宗介さん。所で後ろにいる方はどなたですか？」

アテネ見たいな金髪の女の子が私を見相良君に聞く。それにしてもこの人や後ろの人綺麗よね…

「俺は男だ!!」

「えっ…」

「桂、早乙女は男だ」

「っ、ごめんなさい。綺麗だからつい…」

心の中読まれたのかしら？

「オルコット、こっちは俺が今世話になってる寮の…」

「桂ヒナギクです」

「私はセシリア・オルコットです」

「俺は早乙女アルトだ。所で相良、休みの学校に何の用なんだ？」

「ああ、それはな…」

相良君は早乙女君とセシリアさんに私と戦う事を説明する。

「と言う事はヒナギクさんもISを持っていらっしゃるのですか？」

「ええ、一応は…」

「それじゃあ桂、早速アリーナに向うぞ」

「うん」

私は早乙女君とセシリアさんと別れて相良君の後を歩く。食堂から少し歩くと三つあるアリーナの第二アリーナと言う所に向う。そこはまさしく戦うための所と言ってもおかしくは無い場所だった。

「なあセシリア。あのヒナギクって奴のIS、気にならねえか？」

「そうですね…気になりますわね」

「俺の機体もまだこねえし。暇だから見に行くか？」

「なら、私も付いて行こう」

アルトとセシリアもアリーナに向おうとした時。黒のスーツを着た織斑千冬がそこにいた。

「織斑先生。どうしたのですか？」

「相良と桂の戦いの監督だ」

「なるほど」

「ではお前達、さっさと行くぞ」

アルト、セシリア、千冬の三人も第二アリーナに向かって行く。

アリーナの端にあるピットに今私と相良君はいる。ここはISの整

備とかする所の様ね…

「俺が先に出る。アル、アーバレストだ」

『ラージャ』

すると、相良君の姿が見る見ると銀色がメインカラーのロボットに包まれて。行きよいよ飛び出して行った。

「よし、私も…桜花」

私もカードを取り出して私のIS…桜花を体に纏う。桜花のメインカラーは私の髪の色と同じ色のピンク色、装備されているのは”雪片”と言う刀。私向けのISよね。

そして、私も行きよいよピットから飛び出して相良君と対峙する。

「それがお前のISか」

「そうよ」

私は左腰にある雪片を抜き構える。

「成程、近接で剣術か。アル、ディムロス以外の武装をパージだ」

『ラージャ』

すると、相良君のロボットからいきなりガシャガシャと色んな物が地面に落ちて行く、よく見ると銃やナイフの類の様ね。そして、後ろの腰にある剣を抜いて私に構える。

「剣で勝負ってこと？」

「ああ。お前とこれで戦ってみたいと思ってな」

「あら、随分余裕ね？」

「ふっ、どうだろうな……」

少しの沈黙、そして私と相良君は同時に駆け出した。

「ハアアア」

私は上段から思いっきり雪片を振りおろすと相良君は剣で受け止め、私は更に左右から斬撃を浴びせるがそれも全て捌かれる。

「今度はこっちの番だ」

相良君は一旦後ろに下がると素早く走りこんで剣を横なぎに振るう。

「くっ…」

私は雪片で弾くが少し後ろにのけぞり、その隙を逃す相良君でもなく素早い逆横なぎが私に襲う。

今の攻撃で後方に吹き飛び、私はシールドエネルギーの減りを確認する。

「いったああ。よくもやったわわよね」

ここで私の悪いスキルの負けず嫌いが発動した…

「お、織斑先生。あのISは何なんですか？」

「あれは”桜花”と言ってな。一夏が使ってる”白式”プロトタイプと言ってもおかしくは無いだろう」

「なるほど、それで武器が一夏さんの”白式”の武装の雪片と同じ名前なのですね」

「そっだ」

ピット内で二人の戦いを観戦している三人、セシリアと千冬が話しているの中アルトはじつと戦闘を見ている。

「なあ織斑先生。あの”桜花”ってIS。空飛べないのか？さっきから陸での戦いしかしてないからさ」

アルトが言うのはもつとのな事だ。ASは飛行出来るのはいないが、ISは基本全てが飛行が可能なのだ。だがアルトはヒナギクが乗るISが未だに飛行しない事に疑問を抱いたのだ。

「飛行能力はある。だが飛べない訳がある」

「訳？」

「ああ、桂ヒナギクは高所恐怖症だ。高い所が苦手なんだとき。白皇の生徒会長を務めている割には可愛い所もあるじゃないか」

「高所恐怖症……」

その単語を聞いて空を掛ける事に誇りを持つ二人は何て言ったらいいかわからなくなった。

「てやあああああ」

「ふん」

あれから十五分位たったのかしら、私が攻撃をすると相良君は静かに捌き、私の隙について攻撃してくる。正直、剣の腕はそれなり自信を持ってたわ。ううん、剣の腕は恐らく私の方が上。

でも、相良君は恐らく相当場数を踏んでると思う。強さから見ても分ハヤテ君と同じかそれ以上か。予想よりキツイわね…

「でも、負けられないわね。じゃあ、とっておき使いますか。桜花乱舞」

私はこの桜花にある単一使用を発動させる。この桜花乱舞は一定時間、能力を底上げにしてくれる。これは木刀正宗と似たような能力ね。そして、更に私は雪片をしまつと元から持っていた”白桜”を握る。

「行くわよ相良君」

私は次の瞬間、先ほどより更に早く動き切りかかる。

「チィ…エクシアのトランザムと似たような能力か」

『軍曹、左からです』

何とか防ぐ相良君だけど私はすかさずに剣を再び振るう振りをして相良君をさっきのお返しと言わんばかりに蹴り飛ばす。

相良君はすぐに体勢を整え、私に斬りかかってくるが私はそれを今度は剣で受け止めずに避ける。

「ってやば。エネルギー半分も無い」

攻撃を避けながらシールドエネルギーのゲージをチラ見すると半分切っていた事に気づいた私は相良君の剣を払い、後ろに下がると上段構えを取り全身に神経を研ぎ澄ませ。

「これで…桜花放心!!」

「何!!」

桜花乱舞のエネルギーを白桜集中させ、それを私に向ってくる相良君に目がけて振るう。相良君はこの事を予想出来ずにピンクの閃光に包まれた。

「織斑先生、あれって…」

「そつだオルコット。能力は違うが零落白夜と同系統だ」

「おい、何だあの剣は？」

「さあ…あれは私も知らんぞ」

ピットの三人は静かに二人の戦いを見守っていた。

「か、勝ったの…かしら？」

私は砂埃の方をじつと見る。一応白桜を構えていつでも動けるように構えていた。砂埃が散るとそこには左手を前に突き出す相良君のロボットの姿がそこにあった。

「今の攻撃は予想外だった、後少し発動が遅れていたらやばかった。今度はこちらの番だ」

『秘奥義』

相良君はその場で剣を下段の構えを取り…

「緋王絶炎衝」

相良君の叫びと共に私は暑さを感じ、次の瞬間。私の足元が爆発して私は吹き飛ばされる、吹き飛ばされる瞬間私は後ろが見え、そこには相良君が剣を振り終えている姿があつたと同時に私のシールドエネルギーが0になった。

「あゝあ。負けちゃったか、悔しいな」

「俺はお前では実践経験の差は大きいから当然だ」

「むう〜そう言われるとね」

そう言いながらピットに戻る私と相良君。そこにいたのはさつき会った早乙女君とセシリアさん、それと試験官をしてくれた織斑先生がいた。

「久しぶりだな桂、あいつは元気か？」

「お久しぶりです、おねえちゃんは相変わらずです」

「そうか。それよりお前の動き、まあまあだったぞ」

「ありがとうございます」

「それよりヒナギクさん。あなた高い所が苦手なんですわね？」

あれ、私高い所苦手って言うの言ったかしら？あつ、織斑先生ね、先生が話したのね。

「え、ええそうよ」

「これはいけません！アルトさん！..」

「おう、お前に空の良さを教えてやるぜ」

「あ..私は結構ですので..高いの本当に..」

「大丈夫、飛んでいればすぐに高い所なんて屁でも無くなるさ」

「そうですわ」

ヤバい。このままじゃ私、この二人に飲み込まれちゃう。只でさえ私ったら流されやすいのにこの状況はよろしくない。私はすぐに織斑先生を見るが良い笑顔で私を見ていた。すぐに諦めて相良君を見ると..

「桂、苦手な部分を克服するのは己の戦いだ」

そんな事を私に言って来た。

「よしセシリア、まずは1000メートル位から飛んでみよう」

「それはいい考えですわね」

せ、千メートルうううう。私死んじゃ…

「大丈夫ですわ。ISには絶対防御がありますわ」

そう言う意味じゃなくて私の精神が死んじゃいますよ!!

そんな空しい事を思いながら私はあれよあれよと空高く飛んで行っていた。そして、そこで私は…

「あれ？宗介は何処に行った？」

「さっきヒナとどっかに出かけていたぞ」

「ふうん。まっ、私には関係ないがな」

「次は私の視点のお話ですわ」

「アーン。誰に話しているの？」

第47話・生徒会長のISのイメージは光武ですよ（後書き）

刹那「今回登場したオリジナルIS”桜花”は一夏の白式の兄弟機と言っ設定だな」

ニール「みたいだぜ。さっき東にデータ見せてもらったぜ。こりゃ能力はともかく、機体イメージがサクラ大戦っ言うゲームに出てくる光武っ奴をイメージしているみたいだな」

作者「そうです。ヒナはなんとなく色からしてさくら機のイメージついたのでなんとなくやっちやいました」

刹那「それで、次回は天王洲アテネと言っ人物視点の話のようだ」

作者「自分、ハヤテのキャラで一番好きなキャラがアテネなのでどっいう話にしようか考えている所です。次にルカですね。ルカもいつか登場する予定です。」

ニール「あのナイスバディのお嬢様とアイドルちゃんか、一度会ってみたいな。んじゃそろそろ締めるか、刹那」

刹那「次回のインフィニット・ストラトスふもっふに。エル・プサイ・コングルウ」

第48話・なんか最近AIさん達が空気です(前書き)

ラウラ「今日はエターナルさんの小説。 Tales of Vesperia 魔を断つ刀を持つ少年 から、シンク、リタ、ユーリの三人が来てくれたぞ。

シンク「シンクだ。それにしてもこの小説はいろんな奴らが出てて
凄いな」

リタ「そうね。でも、それって単にうるさいだけじゃないの?」

ユーリ『そうか?俺は賑やかのも好きだぜ』

シンク「ユーリ。お前なんか少し透けてるぞ?」

ユーリ『ああ、これはな。俺、この小説じゃAIで出てるんだ。
だからここにいるときは体は出るが少し透けちまうんだ。ちなみに
エステルもいるからな』

リタ「ここって本当に何でもありね」

ラウラ「まあな。だが、殺伐しているよりはましだろ?」

シンク「そうだな。俺達もこんな感じでやってみるか?」

ユーリ『いやいや、俺達の話も中盤からシリアス目になるから無理
だろうが』

リタ「そっぴやそっぴや」

ラウラ「ところでリタ。お前はシンクの事が好きなのか？」

リタ「ちょ／＼／＼アンタ何言ってるの急に!？」

ラウラ「だって、読んでみてこれ完全にデレっちの出来上がりだし」

リタ「デレっち言うな／＼」

シンク「あのラウラって子。いろんな意味で凄いね」

ユーリ『そうだな』

シンク「では、そろそろ本編に行ってみよう」

第48話・なんか最近AIさん達が空気です

七月二十一日、晴れ。

「うし、行くぞ刹那」

「ああ。いつでも良いぞ一夏」

学園の第二アリーナに居るのは一夏と刹那。二人はアリーナで模擬戦を行おうとしていた。

「エクシア起動」

刹那の姿は一瞬でエクシアに変わり、今度は一夏が…

「俺も、来い黒式」

一夏も白式…ではなく、GNフラッグに似た感じの違う機体出して乗りこむ。

黒式、見た感じ。白式は少し色々と装飾品が多いのに対して。黒式こくしき

はスマートになり、全身装甲タイプになっていた。

「エクシア、刹那・F・セイエイ。模擬戦に移る」

「こい刹那」

エクシアと黒式はお互い獲物を手にすると同時に飛び出す。エクシアの装備はGNソード？二本にGNソード、ダガーの二本ずつ。黒式は雪片二式に後ろ腰にフラッグと同じリニアライフルを装備している。

エクシアのソードと黒式の剣が空中でキンと言う音がアリーナ内を響かせている。両者、射撃武器を装備しているがそれを使うとはしない。まあ、お互い近接格闘の練習と言う意味もあるため敢えて使わないのだろう。

「やっぱり強いな刹那は」

「それでもない。今度はこちらの番だ、ユーリ」

『何か久しぶりの登場の様な気がするが何時でもいけるぜ』

「よし…NEXTシステム起動」

エクシアは姿を変え、ネクストの姿に変えている。刹那は学園都市の一件からこのネクストを使って訓練をしている。

だが、このネクスト。原作にまったく登場していないガンダムのため、どのような性能があるのか知りようがない。故に刹那は実践で性能を体感して調べているのだ。

『格センサーには異常はねえ 見てえだな。いけるぞ』

「ああ」

ネクストはすぐさまに黒式目がけてソードを振るう。これは簡単に言うが、ネクストのスピードはエクシアを超えている。だが黒式はギリギリの所で受け止め、上空に飛び出した。

「あぶねーあぶねー」

『一夏、油断しすぎね』

「そつだなオードリー」

オードリー。このネタはわかる人ならわかると思うが、一夏のAIである。

「こっつしてる間もってうわあと」

一夏は高速で迫るネクストの攻撃を回避して後ろ腰のライフルを撃

つ。ライフルはフラッグと同じ物のため連射が余り聞かず、ネクストに一発も当らず…

「そこだ！！」

「うそ！！」

GNソード？に斬られてしまう。刹那は一夏の声を気にせずに。

『いけー！！』

「トランザム！！」

ネクストが青く光り出し、一瞬で黒式のシールドエネルギーをゼロにする。

第二アリーナ

ここにもう一組訓練を始めようとしている物がある。一人は篠ノ之箒、もう一人はシャルロット・デュノアである。

「シャル、いつでもいいぞ」

「うん」

二人は既にISを展開していた、筈はいつも通りの紅椿聖天八極式。そしてシャルロットはのISは…

「シャル。やはりそれは色々と…」

ラファール…だったものがそこに居た。まずは見た目、カラーリングはオレンジから白と黒に。次に、胸の所に骸骨で骨をクロスさせるようなマークがあった。そして、次の瞬間。何かのマントがそれを覆っていた。

「えっ…カッコいいと思うんだけどな？」ラファール・フルクロス
”は”

フルクロス。これもお分かりの方もいるだろうが、これはクロスボーンガンダム・フルクロスをモチーフにしている。それにしてもやはりラファールの面影が何処にも無かった。

「じゃあ行くよ」

「うむ、いざ尋常に勝負…！」

ラファールは腰にある物を手にしてビームを発生させる。これはビームザンバーと言うビーム兵器でクロスボーンのマイン武装の一つでもある。

紅椿もすぐに雲縫・不知火を抜き、ラファールに斬りかかる。紅椿の売りは短距離スピード、まさしくラファールに迫るのも一瞬だったがシャルは冷静にザンバーで受け止め受け流す。

「こんどはこっちから行くよ」

シャルはザンバーを横なぎに払うが、紅椿はエナジーウイングを展開して素早く上空に逃れる。だが、シャルはマントの中をザンバーをしまい。あるものを取りだす。

「まだまだ行くよ!!」

それはボウガンに似た形をした武器。その名もビーボックスマッシャー。先端に八連のビーム砲があり、それを同時に撃ちだす。

「なっ!!だが!!」

筈は一瞬驚くが、右手に持っている雲縫を鞘にしまい、右腕を素早く換装させて前に突き出す。次の瞬間、右腕の前から輻射波動を発生させてビームを防ぐが。

「まだまだ、アスベル」

『ああ。いつでも行けるぞ』

シャルはA.Iのアスベルに指示をだすとビーコック・スマツシヤを投げ、右腕にあるものを高速換装させ、紅椿目がけて突っ込んで行く。

「どんな物でも。ただ、打ち貫くのみだよ!!」

シャルはそう叫ぶと、紅椿が放つ放射波動のシールドに対してあるものを打ちだす。それは”リボルビング・バンガー”と言うもので、元は”シールドスピア”と言う武装だったが。色んな人物に突破力が欲しいと言われ、改良したのである。

リボルビング・バンカーと放射波動は激しくぶつかると、シャルは右腕に装備されているシリンダーを回し、放射波動のシールドに打ちこんで行く。一発二発では何ともならなかったが。四発目位から押され始め、六発目で放射波動のシールドが砕かれ紅椿は後ろにのけぞった。

「まだまだ!!」

シャルは得意の高速換装でシリンダーに弾を装填させると再び右腕

を突き出す。

『まずいぞ箒！！』

「くっ！！吹っ飛べ！！」

箒も右腕を突き出し、今度は攻撃のための輻射波動を発射させ、空中で激しくぶつかるのである…

結局、同時にお互いのエネルギーがゼロになり、模擬戦を終えた二人は隣のアリーナに向う。二人が見た光景は丁度ネクストがトドメの一撃を与えた所だった。

「今日はこれ位だな」

「ああ、そうだな。箒、そっちはどうだった？」

「シャルが滅茶苦茶だったが中々だった。一夏、お前はとうだった？」

「刹那のネクスト相変わらず半端ないな。俺の方はまだ全然だ。シャルはどんな感じだった？」

「うん。見た目はもう原型が無い所が驚きだったけど、動きや反応は良かったよ。武装も中々いい感じだったよ」

「一夏。お前はもう少し近接戦闘の訓練をするといい」

今日の模擬戦の反省をする四人。その後、一夏と篤、刹那とシャルは別れた。

「ふう、やっぱりいきなり使いこなすのは無理だったな」

「仕方が無い、あれはISとMSを融合させたようなものだ。勝手が違う所はどうしようもない」

「まあそうなんだけどな。それよりこれからどうする？」

「丁度昼過ぎだ。どっかで昼食を食べよう」

本来、学園は寮生なので寮に戻るのが普通なのだが。二人は今織斑の家で生活しているので学園の外を歩いている。二人が昼食を取る所を選んだのは一夏の中学の時の親友の五反田弾の両親が経営している定食屋だったが。そこで一夏が別の意味で驚愕の事実をしるのはまた別の話し…

「刹那。これからどうする？」

「そうだな。俺は他のガンダムの事を調べたいからDVDを借りに行く」

「じゃあ僕も付いて行っていいかな？」

「ああ。構わない」

「ありがとう。それで何を借りる予定なの？」

「昨日、0080を見終えたから次は0083の予定だ」

この二人も学生らしく、休みを満喫するのである。

「ここからはAエコーナー」

ユーリ『ふう、なんか久しぶりに登場したんだが』

チアキ『まあそうだな。この小説、ロボアニメ系が多く出ているのに最近戦闘が余りなかったからな』

エステル『もう二人とも。そう言う事を言っではいけませんよ』

リツ『でもよ、やっぱり出たいじゃん』

エステル『そ、それはそうですね…』

キリノ『うおら、この作者。他の奴は良いけどあたしを出さないってどう言う意味よ!! さっさと出さなさいってか何なのあの男、一にガンダムニフラッグ三に千冬って。頭どうかしてるわよ』

ハロ『ドウカシテル、ドウカシテル』

リツ『それなら箒も、最近一夏一夏っついていちゃついて!!』

アーチャー『まあ落ち着きたまえ。それも含めて作者に要望を出してみたかどうか? もしかしては登場が増えるかも知れんぞ?』

リツ『作者!! 早くあたしをだせ!!』

キリノ『あの変態を爆発させる』

チアキ『ラウラのバカ加減をどうにかしてくれ』

ユーリ『俺は特に何もねえな』

エステル『私もです』

ハロ『ハロ、トツゲキスル』

アスベル『俺は皆の守る!!』

オードリー『何か途中から愚痴も混じってるわね』

アーチャー『ああ、そうだな。全く…』

アル『ミナ。スコシハオチツキタマエ。ソレデハデバンハフエマセ
ンヨ（笑）』

続く…かな？

第48話・なんか最近AIさん達が空気です(後書き)

一夏「うおお…本物のリタがいるよ!!俺生きててよかった!!」

リタ「あんた誰?つてかテンション高すぎ」

シンク「ほら、IS原作の主人公の織斑一夏だよ」

リタ「それは分ったけど。その一夏が何であたしを見て興奮してるわけ?」

ユーリ『こいつは俺らのもとになってるTOVの大ファンなんだよ』

シンク「なんかメタな発言のような気もするけど嬉しいぜ」

一夏「いや〜それにしてもシンク。お前も中々にかっこいいよな」

シンク「そうか?そう言われると恥ずかしいんだが」

一夏「だから、これからもお前の活躍楽しみにしてるぜ」

シンク「お、おう。ありがとな」

一夏「あとリタ。これにサインしてくれないか?隣にシンクも」

リタ「あたしが何でサインを…しょうがないわね…はい。シンク」

シンク「…はい一夏」

「一夏」「うおおお。俺一生の宝ものにするよ。ありがとう」

シンク「一夏、凄い喜んでたね」

ユーリ『だな。んじゃ俺らも旅にもどるか。エステルとカロルとラピードがまつてるしな』

シンク「そうだな。ではお邪魔しました」

リタ「またね」

作者「エターナルさん、どうでしたか。私自身、コラボが初めてなのでこれで良いのか不安です。あと、ユーリだけ』』にしてみました。申し訳ありません。それとキャラを提供していただきありがとうございます」

第49話・一夏と尊がデートをします(前書き)

ラウラ「何と!!この二人がデートの話か」

鈴「原作あたしらが見たら間違いなく発狂もんよね」

レナード「じゃあ鈴。僕たちもデートしないかい？」

鈴「んゝ考えておくわ」

ラウラ「この二人も満更じゃないようだな」

第49話・一夏と篤がデートをします

七月二十二日

織斑家は相変わらず普通の一日が始まるうとしていた。

「おはよう千冬姉」

「おはようございます千冬さん」

「ああ、おはよう。朝ご飯できたから座っていてくれ。私はこれから学校に行かねばならないからな」

一夏と篤が二階から降りてくると、既に起きていた千冬が朝ごはんを作り終えていた所だった。

「そうか、じゃあ今日は帰りは遅いの？」

「わからん」

「盛、おはよう」

そこに、いつものスーツを着ているグラハムも現れた。

「ああ、グラハム。今日急な職員会議が入ったのだが…」

「すまない千冬。私はこれから習志野に向わなくては行けないのだ」

「そうか。なら私はお前の代わりも務めて来よう」

「済まない千冬」

「構わん。私達は既に夫婦だろ、気にするな。では私はそろそろ行く」

「私も駅まで一緒に行こう」

二人の空気に入り込めない一夏と箒は二人を玄関で見送り、二人だけの朝ごはんの時間が訪れる。

「なあ箒。今日はどうする？」

「そうだな…そうだ、デートに行かないか？」

「デートか…そうだな。それがいいな」

「うむ、では一夏。何処に行きたい？」

「そうだな。俺が行きたい所は…」

千冬とグラハムの空気に感化された二人はデートに行く事になった…

「なあ一夏。私達はデートに来ているのだろうか？」

「そうだけど」

「じゃあ…何故デートに秋葉原に来ているのだ？」

そう、二人がデートに来た場所は日本でも有名な電気街&アニメ街の秋葉原に来ていたのだ。

「いや〜最近、ラウラのプラモ見せて俺も作ってみたくなっとな」

「はあ…お前と言う奴は。仕方ない奴なんだから…」

「?…それより行くこつぜ」

「あ、ああ」

そう言っつて箒は一夏の腕を掴み自分の腕と絡ませて体を密着させる。

「ほ、箒さん？」

「むう。いいだろうこれ位は」

何だかんだでデートを満喫しようとする篤であった。

「おっ…これ、グラハムさんのフラッグにスサオノにマストラオだ」

「これはセイエイのエクシア…」

二人は大型電気店のガンプラコーナーで色々物色していた。

「ん〜俺的はデスティニーもいいが、ウイングゼロEW版もいいな」

一夏は1/100デスティニーかウイングゼロかで箱を持ちながら悩んでいた。

「篤、お前ならどっちがいい？」

「私はそう言ったものはあまり詳しくないが…」

篤はデスティニーとウイングゼロのパッケージの絵をじっと見つめ。

「私はどっちもカツコイイと思うが」

「そうか… 筈ありがとうな」

「そ、そうか。じゃあレジに行くぞ」

一夏が決めたのはデステイニーとウイングゼロの両方だった。おまけにグラハムのお土産にとフラッグを買って行った。

二人は買い物済ませると、大型電気店から出て秋葉原の街を散策する。

「それにしてもこの街は凄いな… アニメの絵が沢山あるな…」

「俺も初めて来たけど凄いよな」

二人は今日初めて秋葉原に来たので色々な事に驚いている。大きく構えているアニメショップ、それに関係する店、大型の電気店の数々と二人にしては全て初めての体験だった。そして、今二人はラジ才会館の前にいる。

ラジ才会館は駅前にある事かや色々な店があるため、多くの人が入りしているが。一夏はふっとある人物に目がいく。その人物は夏なのに長袖の白衣を着ている長身の男が、ラジ才会館の屋上を見つめていた。

（なんだろうあの人？）

一夏はその白衣の男性が気になったが男性は視線を下ろすと二人の方を見てそのまま何処かに歩いて行った。まだこの三人が出会うのはもうちょっと先の事である。

「さて一夏。これからどうする？」

「あ…ああ。そろそろ昼にするか」

「そうだな…」

「じゃあ俺、少し行ってみたい所があるんだ」

二人はまた大通りから小路に入ると入り組んだビルとビルの間を通り、ある店の前にたどり着く。その店の看板には「アーネンエルベ」と書かれていた。

「ここがそうなのか一夏？」

「ああ、ここは知っている人のみぞ知るって言われる店なんだぜ」

二人は扉を押して中に入る。店内は西欧アンティークをイメージさせる古風な作りをしていた。そして、店員と思われる青髪をした長身の男がやってくる。

「いらつしゃい、二人だな？」

「あ、はい」

「んじゃ適当な所に座ってくれ」

「おいランサー。それは適当過ぎんだらう？」

奥から更に男の人が現れる。その男は赤い髪をした一夏を同じ位の歳の青年だった。

「いいじゃねえかよ坊主。暇なんだからよお」

「しょうがないな…お二人さんこちらにどうぞ」

赤髪の青年に案内される二人は席について、青年からメニューを受けとる。

「決まったらそこのお兄さんに注文を言ってください」

赤髪の青年はそう言う中に入って行った。二人は渡されたメニューに目を通す。

「凄いな、いろいろとあるぜ」

メニューには和食、洋食、中華、色々がある。

「お二人さん、今日はデートか？」

「え、ええ。そうですけど」

「羨ましいね、俺も彼女欲しいぜ」

何を頼もうかと考えながらウェイターと会話をする二人。すると、店の扉が開きお客さんが入ってきた。

客は二人、一人は黒髪を宗介と同じような切り方をしているだろう女性。その女性の服装は着物で、それを見事に着こなしていた。二人目は金髪で傍から見ればモデルのような女性だった。

「やつほ」

「ってかお前らかよ。はあ…それより珍しい組み合わせだな。メガネの坊主ズはどうしたんだよ？」

「幹也はそっちの連れの遠野とどこかに行っちまいやがったよ」

「そうそう。だから暇を式と一緒に潰そうって思ったの…」

そんな会話を何となく聞いていた二人だが、あまり聞くと失礼だと思ひ二人はメニューに目を移す。

「…俺この激辛マーボーカレー（天使バージョン）に決めた」

「では私は焼き魚定食にしよう」

二人は食べるものが決まり、ランサーと呼ばれるウェイターの男性に注文する。

「……」

ここで、筧が着物をきた女性に目が止まる。これは筧自身、何処か彼女と同じような物を持っているような感じをしたからである。筧の視線に気づいた着物の女性は筧の方を見て…

「オレに何か用でもあるのか？」

「いえ…ただ、着物が良く似合っているなと思ひまして…」

「そうか？オレからすればオマエの方が似合うと思ひませ」

「私は式もあなたも両方似合うと思ひわ？そうでしょ彼氏君？」

「ああ。俺も筧は和服が似合うと思ひな」

「／／／」

会ってばっかの二人と一夏に似合うと言われて何故か恥ずかしくなる筈だった。

「あつ、これも何かの縁よね。私はアルクエイドよ」

「オレは両儀式、呼ぶんなら式で呼んでくれ」

「私は篠ノ之箒です」

「俺は織斑一夏です」

その後、アルクエイドと式は二人の席に来て椅子に腰かける。

「ねえねえ、あなた達ついてるわよ」

「どうしてですか？」

「さっきの赤い髪の男の子いたでしょ？あの子の作る料理滅茶苦茶旨いのよ。私一口食べて彼のファンになっちゃった」

「確かに、アイツが作る料理は旨いよな」

「まあ、坊主の腕は俺も認めているけどな」

四人の席にウェイターの男が近付いて会話に加わる。本来なら仕事
中であるが、今は生憎四人しか客がいないのだ。

「俺はランサーって言うんだ、よろしくな」

「なあランサー。最近、この店では何も起きていないのか？」

「まあな。あんな事が毎日起こってたこっちの身が持たねえよ」

「えー私は楽しいと思うけどな」

「あの…それってどう言う話なんですか？」

一夏が気になってランサーに聞くと、ランサーが今までにこの店で
あつた出来事を式もちよいちよい足しながら説明をして。聞いた二
人は「あはは…」と苦笑した。

「何か、俺らとあんまり変わんねえな」

「そつだな」

「なになに、そつちじゃあ面白い事があるの!？」

アルクエイドが興味津々と二人に聞いてくるものだから、一夏は話

す。宗介が来た時からの話を…

「あはは、私そのソースケって人とラウラって子に会ってみたい、あつははは」

アルクは二人の暴走の話を聞いて腹を抱えて大爆笑している。

「オマエは笑いすぎ、にしても居るもんだな。そう言う奴」

「へえ、中々面白そうな奴らだな」

宗介とラウラに対しての三人の感想であった。

「おいライダー、出来たから取りに来てくれ」

中から料理をしていた青年の声が聞こえ、ライダーは一旦厨房に入り、料理を持ってきた。

「ほら、激辛マーボーカレー（天使バージョン）と焼き魚定食だ」

ランサーは二人の目の前に料理を置く。

「にしてもお前、よくこんな頼んだよな？」

ランサーが一夏に聞きながら一夏の目の前の置かれている料理を指さす。そこにあるのはマーボーカレーなのだが…色が尋常ではない、そう、真っ赤なのだ。

「一夏、大丈夫なのか？」

「いや…なんか予想外なんだけど…」

この色を見て前に座っているアルクと式も若干引いている。

「これ本当に食えるのか？何で（天使バージョン）って書いてあるんだ？俺てつきり天使見たいな柔らかいイメージで頼んだけど、実際は天使どころか閻魔様降臨しちゃいそうなんだけど」

「オレも同感だ」

「私も、流石にこれはね〜」

「それには訳があるんだ」

五人が居る所に、さっきまで厨房で料理をしていた赤髪の青年が現れた。

「俺は衛宮士郎って言うんだ。で、それがそうだった理由があるんだ」

「理由？」

「ああ、一月前位なんだ。ある白髪の女の子が来てさ、マーボーカレーを頼んだんだ。俺は味を普通にしてその子に出したら『辛くないわ、マーボーは辛く無ければ…』ってツ表情が沈んでさ。俺はその子の専用にカレン専用マーボーをその場で改良してその子に出したのがそれなんだ」

「じゃあ坊主。この（天使バージョン）って何だ？」

「いや、それは俺が勝手につけたんだ。何かその子の第一印象が何か天使っぽかったからな」

「へ〜、でも、これ頼む人っているのかしら？」

「ああ、その子がそれ以来週二で来てくれるようになったんだ。後はカレンと言峰位だな」

話を聞いた一夏は蓮華を手に取り、真っ赤なマーボーカレーを救いの口の前まで運び、そこで一旦止めて生唾を飲み、覚悟を決めたかのように口に含む。

「むぐ…むぐ…むぐ…ふ…！」

やはり辛かったらしくて、芸能人のリアクションを取りそうな感じを何とかこらえていた。そして、落ち着いて水を口に含み一呼吸を入れる。

「辛い…でも旨いな。病みつきになりそう」

「ほづ。一夏、一口貰うぞ」

筈は一夏の蓮華を取り、マーボーカレーを食べる。やはり一夏と同じ感じになった。

「確かにこれは辛いが…美味しいな」

「だろ？二人もどうです？」

「いや、オレはいい」

「私もパス」

「結構おいしいと思うんだがな」

「なあ坊主、その只者じゃねえ嬢ちゃんの名前って知ってるか？」

「立華奏って子だよ」

その後、箒も自分が頼んだ焼き魚定食を食べる。そこでも箒は定食の一品一品のレベルの高さに驚いていた。

「それじゃあ俺達、そろそろ行きます」

「ああ。また来てくれよな」

「ええ、衛宮さんの料理とてもおいしかったです」

「あはっ、またシロウのファンが一人増えた」

「一夏、こんどはさっき言ってた二人も連れてこいよな」

「ふっ…」

一夏は会計を済ませて四人に挨拶して店を出た。

「さてと箒。これからどうする？」

「ふふ。無論、デートの続きをするぞ」

二人は手をつなぎ、デートの続きを始めるのであった。

「ここが日本ね。それにしても暑いわねこの国」

成田空港、そこにいるのはラウラそっくりの顔に瞳も同じオッドアイ、髪色は同じ銀髪、長さはラウラよりちょっと短い感じ、身長も一七〇センチ、ラウラを大きくした感じの女性。違いと言えば残念なラウラの胸板と違い、服の上からも分かる位膨らんだバストがある。

「さてと、いい子にしてるかなラウラちゃんは？」

はたして、このラウラに似ている美人の正体は如何に!!

第49話・一夏と暮がデートをします（後書き）

ラウラ「実はこの小説、次で50話になるんだ」

宗介「かなり続いたな」

かなめ「そうね。作者、最初は一発ネタ感覚で執筆したみたいなのに、今じゃ50話か、何か頑張ったって感じよね」

ラウラ「そうだな、そこで50話の後に記念小説を書くことにした。まあ、10割がネタな小説なのだがな」

宗介「あと、その場で引き延ばしにしていた人気投票の結果発表をするようだ」

かなめ「すっかり忘れてたわよ…」

ラウラ「それと報告だ。私達の番外小説の魔法少女で、ヴィヴィオが出てきたのだが。このヴィヴィオを次回に本編に登場させる予定だ」

かなめ「またカオス要因が一人増えるのね。それにしても、今回のアーネンエルベって」

ラウラ「ああ、いままでアーチャのみだったが、遂に他のキャラも登場してきたな」

かなめ「それにしても式とあのお月のお姫様出もてきてるし…」

宗介「俺は最後の女性がとても気になる」

かなめ「私も、凄い美人よね？ラウラ、アンの…もしかして家族？」

ラウラ「……」汗

かなめ「ま、次回で分るわよね。それじゃ次回もよろしくね！」

第50話・ラウラの姉現る！！（前書き）

ラウラ「いや、遂に50話まで来ちゃったな」

宗介「ああ、そうだな」

ヴィヴィオ「ふえ？ここはどこなの？」

ラウラ「そう言えば、今回の話からヴィヴィオが登場するんだよな」

宗介「そう言えば、今回はお前の姉も出てくるみたいだな」

ラウラ「な、なんだって！！！」

ヴィヴィオ「わーい。お姉ちゃんのお姉ちゃんだ」

宗介「では始まるぞ」

第50話・ラウラの姉現る！！

「……あれ、誰だろうこの子」

ハヤテが宗介を呼ぼうとドアをノックするが、何故か女の子の声が聞こえてきたので悪いと思いながら部屋に入る。

すると、ハヤテの視界に入ってきたのはなんと、金髪オッドアイの幼女だった。

(ま、まさか相良さん。ゆ、誘拐して来たんじゃ)

とてつもなく嫌な想像をするハヤテは慌てて幼女を抱きかかえて一階に降りた。

「ま、マリアさん、ど、どうしまししょうこの子」

「は、ハヤテ君少し落ち着いてください。まず主語が無いと何が何だがわかりませんよ」

「す、すみません」

ハヤテは宗介の部屋にいたハヤテの腕に抱きかかえられている幼女について説明する。すると、ナギとラウラが二人の所に現れた。

「どうしたのだハヤテ？」

「いや、相良君の部屋に女の子が…」

「何だ、ヴィヴィオではないか」

「『ヴィヴィオ？』」

ラウラはハヤテからヴィヴィオを預かると、そのまま頭をナデナデする。

「そつだな、お前達に紹介しておこう。ヴィヴィオ、自分で言うんだぞ」

「うん。ヴィヴィオ・S・ボーデヴィツヒ、六歳です」

「うむ、よく出来たぞ」

自己紹介をしたヴィヴィオの頭をなでるラウラ。

「…あの子は？」

「ああ、コイツはな…」

ラウラはヴィヴィオとの関係を三人に説明をする。

「ラウラお前、それって単に押しつけられただけじゃないか？」

「わ、私では無いぞ。宗介の奴がだな…」

「ラウラさん。もしかしてヴィヴィオちゃんの名前の真ん中のSって…」

「ああ、相良のSだ」

どひゃーと三人は大声で驚き、間近にいた二人は思いっきりびっくりしていた。

「さてさて、ラウラちゃんはいるかな？」

場所は変わりIS学園正門前、いまそこに一人の銀髪の女性が立つ

ていた。

「まずは、千冬さんに挨拶しに行きますか・

女性は学園内に入り職員室に向う。学内は夏休みのお蔭であまり生徒が居ない。

「おっ、ここかな」

「ん…なっ、アンタは!!」

職員室に居る教師の一人が銀髪の女性に気づいて驚く。

「あれ、何でマオさんがここに居るんですか？」

「それは「うちの台詞よ」

「そう言えばマオさん、ラウラいないですか？」

「ラウラはいないと思うよ…あれ、今確かソースケと一緒に居るって言ってたな…ちょっとまってて」

マオは職員机の上をがさこそと探し。一枚の紙を見つけて戻って来る。

「たぶん、ここに居ると思うから」

「わかりました。後でまた来ますよ」

銀髪の女性が職員室を出て、入れ代わりにクルツが入ってきた。

「マオ、今の美人誰なんだ、何かラウラに似てただけだ」

「ああ、あいつはラウラの…」

女性はマオから貰った紙を見てムラサキノヤカタの前に立っていた。

「ここに居るのかな、まあとりあえず入ってみよう」

そして、女性はムラサキノヤカタの扉を開けて声を出す

「こんにちは、ちょっと聞きたい事があるんですけど」

軽いヴィヴィオ事変が終わった後、宗介（ボン太君）とヒナギクはランニング終え、千桜は普通に居間に集まり、ヒナギクと千春は三人と同じような反応をした。ちなみにアテネはまだ熟睡中。

「まあ…もういまさら何も驚かないけど…お前らで大丈夫なのかよ？」

千春はラウラと宗介を見て心配そうに言う。

「問題ない」

「いや…私は問題あるような気がするんだけど…」

キリツとした表情で言う宗介を隣に座っているヒナギクは心配そうな顔をする。

すると、玄関の方から女性の声が聞こえてきたのでマリアが玄関に向う。だが、何故じゃラウラのは一瞬にして体を硬直させていた。

「ま、まさか今の声って…」

そのままラウラも玄関に行く。そこにいたのはマリアと何かを話している…

「お、お姉ちゃん!!」

「あ、久しぶりラウラ」

どうやら銀髪の女性はラウラのお姉さんのだった。そして、後ろから見ていたその他の人物は（宗介以外）は更に声を上げて驚く。

「おっと、凄いわね。さて、自己紹介でもしておきましょう。私はアイリス・ボーデヴィツヒよ」

ラウラの姉、アイリス・ボーデヴィツヒはエツヘンと豊かな胸を張って言っていた。

「それにしても、ラウラさんにお姉さんが居るとは」

あれからハヤテはすぐさまアイリスを居間に案内、そしてお茶をだしてもてなす。流石は執事と言えよう。

「ラウラ、あんた言って無かったの？」

「言わなくても良いじゃないか」

「それにしてもアイリスさんってスタイル良いんですね？」

ヒナギクはアイリスのスタイルを見て、次に自分の体を見る。そしてヒナギクはある一部分を見て溜息を吐く。

そんなアイリスはナギの隣でアイリスを見つめているヴィヴィオと目が合った。

「ねえラウラちゃん。そのちっちゃい子は？」

「ああ、ヴィヴィオだ。ヴィヴィオ、挨拶をしてみる」

「うん。ヴィヴィオ・S・ボーデヴィツヒです」

「……はい？」

ヴィヴィオの事についてラウラは先ほどハヤテ達と同じような説明をする。

「……マリア、少し二人借りるわね」

「はい、どござ」

アイリスは宗介とラウラの腕を引っ張ってムラサキノヤカタを出て近くの公園に行く。

「君は何者なんだい？」

「何者と言われても。俺は相良宗介としか言いようがない」

相変わらず仏頂面の宗介は簡素に答える。

「ふうん…」

そんな宗介を見定めるように見るアイリス、ラウラは姉が何かしてかさないかとハラハラとしていた。

「君、中々いい体格ね」

「そついう貴方こそ」

宗介もアイリスに持った第一印象は只者ではない事、ラウラの姉と

言う事あつて宗介は今までずっとアイリスを観察していたのだ。

「いや、それほどでも」

そしてアイリスはうへへと頭を掻きながら照れていた。

「そういえばお姉ちゃん、どうして日本に来たんだ？」

「ん」と。私も夏休みだから、可愛い妹の顔と、懐かしい人に会いに来たのよ」

「さいですか…」

「もおつれないねラウラちゃんは。それにしても何時来ても良い国ね日本は」

急に真剣な表情をして空を見上げるアイリス。

「おつと、ちょっとしんみりしちゃったかな。あつと、そろそろ千冬さんにも挨拶してこないと」

アイリスは腕時計を見てそう言い。二人の方を見て…

「じゃあね二人とも、まだ日本に居るから会いに行くわね」

それは、一般人が見たら一発で惚れそうな位可愛い表情で二人に別れを言っただけに走り去っていた。

「まるで嵐のような人だな」

「お姉ちゃんは昔からあんなんだ。私達も戻ろう」

その後、二人が帰ると皆はアイリスが持ってきたドイツのお土産を食べていた。

第50話・ラウラの姉現る！！（後書き）

アイリス「はろ〜みんなのアイドル。アイリスちゃんですよ〜」

ラウラ「もういい歳なんだから…」

アイリス「もう、ラウラちゃんったら。お姉さんまだピチピチの20歳よ」

ラウラ「はいはい。次回は特別集合小説の予定だ。それじゃあ次回も」

アイリス「エル・プサイ・コンガリイ」

ラウラ「いろいろと突っ込みたいけど、コングルウな」

特別話・五十話記念(前書き)

ふう、ようやく投稿できました。今回は特別回なので申し訳ありませんがエターナルさん、次回にレイヴン達を登場させます。

特別話・五十話記念

鳳凰院凶真

「ふ、ふふふ。ふっははは。今日からこのマッドサイエンティスト、鳳凰院凶真がこの小説の主人公に…」

紅莉栖

「そんな事あるかボケー」

鳳凰院凶真

「ぐはっ…何をする助手の分際で」

紅莉栖

「もう、このさい助手でもいいけど。アンタがここの小説を乗っ取るうとしたのを阻止したんだろうが」

鳳凰院凶真

「ふっ、この真の主人公であるこの俺以外、誰が主人公と言っただ…さてはお前、主人公の座を狙っているのか!!!?」

紅莉栖

「狙らったらんわ!!」

鳳凰院凶真

「それはどうかな…お前だってそういう願望はあるのではないかねラーよ」

紅莉栖

「ちよっ!!!人前で言うなこのDT!!!」

鳳凰院凶真

「う、うるさいぞこの天才HENTAI少女!!」

ダル

「ふう、いつもの夫婦喧嘩ですねわかります」

まゆり

「オカリンもクリスちゃんも本当に仲がいいね」

ダル

「それで、僕達は一体ここで何をするん？」

まゆり

「え〜とね…あ、来たみたいだよ」

シャル

「着いたみたいだね刹那」

刹那

「ああ、それにしてもここは？」

アルト

「さあ？つてか何なんだこれ、昨日こんなの届いてよ」

セシリア

「そうですね『明日、これを受け取った方はここまで来るように』」

しか書かれていませんでしたわね」

アルト

「ところで、一夏や鈴達は来てないみたいだな」

シャル

「どうやら来たみたいだよ」

一夏

「よっ、それにしても広い所だよな」

篤

「本当にそうだな。それにしてもこれは一体誰が送って来たのだ？」

刹那

「それはわからない」

一夏

「あつ、鈴とレナードじゃないか」

鈴音

「やっぱり皆も来てたのね」

レナード

「どうやらそう見たいだな。それよりあそこで言い合っているのは誰なんだ？」

ここで一同は鳳凰院さんと助手の夫婦喧嘩を見る。

鈴音

「まっ、後で分かるでしょう。それよりあのバカ二人とかなめが居ないわね」

アルト

「あいつらの事だから後で来るだろう」

ヒナギク

「ここで合ってるのよね」

ナギ

「地図の通りならここで間違いないだろう」

西沢

「それにしても良いのかな、私まだ本編に出てきてないのに……」

ナギ

「ならハムスター、出口はあそこだぞ」

ハムスター

「もーナギちゃんの意地悪ってかハムスターになってるよ」

マリア

「相変わらずナギはテンション高いですわね」

千桜

「まったくだ。それにしてもこれって、もしかしてお姫様の仕業か？」

アテネ

「いいえ。私はこのような物には覚えが無いわね。それにしても八ヤテは何処に行ったのかしら」

楯無

「あれ、ここで良いのよね」

簪

「そうだよおねえちゃん。そして今の体勢で冷静で話しているのに私は突っ込まないから」

静雄

「ちっ、何で俺まで…」

ちなみに、楯無の体勢静雄に片手で抱えられている。

静雄

「それにしてもガキがやたら多い…何で岡部達までいやがるんだ？」

上条

「まさか、すんなり学園都市の外に出れたもんだな」

インデックス

「とうま、さっそくお腹空いたんだよ」

佐天

「もう、シスターちゃんは食いしん坊なんだから」

初春

「それにしても御坂さんと白井さんついてないですよ」

佐天

「そつだよ。今日に限ってあの二人、風邪で倒れるなんて」

インデックス

「短髪とへんたいの分までたくさん食べるんだよ」

上条

「インデックスサン。そろそろ食欲を抑えてください」

佐天

「あはは…」

テッサ

「はあはあ、ここが目的地なのですわね」

かなめ

「そうねってかこれ何なのよまったく。ソースケに聞こうとしても昨日からいないし」

テッサ

「でも、これ私の予想通りなら…」

かなめ

「そうね…大体考えが付くから…」

人が集まってきた会場。そこに皆の前にまゆりが現れた。

まゆり

「トウトウル〜皆さん初めまして、まゆしいです。え〜と、皆さんお集まりいただきましてありがとうございます。え〜と、この後、イベントを行いますのでよろしく…です」

ダル

「なあまゆ氏。それどうしたん？」

まゆり

「昨日、宗介君からもらったんだよ」

この瞬間、会場内は「やっぱりあいつか…」と思っただ。そして、会場の証明が一旦消え、前の所にスポットライトが当たり、そこに二人の人物が居た。

ラウラ

「よつこそ皆、集まってくれて感謝するぞ」

宗介

「今日ここに集まっていたのはこの小説内で登場した学生の殆どを招集した」

ラウラ

「その前に、我々は皆に料理を用意した」

すると、後ろから二人の男が料理を運んできた。

衛宮

「俺と綾崎が皆のために沢山作ったぞ」

ハヤテ

「皆さん、どうぞ召し上がってください」

静雄

「……配るの手伝っぞ」

ハヤテ

「ありがとうございます」

料理、各テーブルに配置。夫婦喧嘩をしていた二人も喧嘩を止める。

かなめ

「ねえソースケ。これって一体何なのよ？」

宗介

「いやな。この小説も50話まで行っただろう。だが、その中で出会っていない奴らが多いだろう？だからこの際一気に集めてみようかなと」

かなめ

「はあ…そう言う事をやるなら先に行って欲しいわね。それにしても…」

佐天

「うお…これ綾崎さんが作ったんですか。滅茶苦茶美味しいですよ」

ハヤテ

「ありがとうございます。そう言っていただけで嬉しいですよ」

初春

「はうわ…ここに本物のお嬢様が、しかも二人…素敵ですわ」

アテネ

「ふふ、あなたの花飾りも綺麗よ」

マリア

「そして私はお嬢様ではありませんけど…」

インデックス

「この料理とっても美味しいんだよ」

まゆり

「だね、これならまゆしい幾らでも食べられちゃうよ」

鳳凰院凶真

「まゆりの奴がよく食べるのは知っていたが、あのシスターは何者なのだ!？」

ダル

「ふっオカリン。彼女は禁書目録で有名なインなんとかさんなんだぜ」

紅莉栖

「でも、たしかにおいしいわね。女性の私より料理が上手いのが男の子って言うのが少しシヨックかも」

衛宮

「そう言ってくれると作ったかいがあったよ」

紅莉栖

「まっ、岡部には百年かかって無理ね」

鳳凰院凶真

「それは貴様もだろうが!」

ダル

「あゝまたはじまったお。そして一人は相変わらず食べてるし」

衛宮

「あはは…」

ヒナギク

「久しぶりね二人とも」

箒

「そうですね」

一夏

「俺は去年ぶりですね」

シャル

「一夏、知り合い？」

一夏

「ああ。昔からの知り合いで、言うなると俺と箒の二つ年上のお姉さんって感じだな」

アルト

「へ〜お前ら知り合いだったのか、意外だな」

一夏

「あれ？アルト何で知ってるんだ？」

アルト

「ああ、それはちょい前の話しを見てくればわかるぞ」

セシリア

「アルトさん、そう言う事はこの場では言っではいけませんわ…」

ヒナギク

「あはは…それにしても凄いわね。こつ何か…見知らない人もいるけど何か楽しいわね」

簪

「こつちは運び終わりました」

静雄

「こつちもだ」

ハヤテ

「あ、はい。ありがとうございます。それにしても平和島さんって何をなさってる方なんですか？」

静雄

「…いまは借金の取り立てだ」

ハヤテ

「す、凄い職業ですね」

簪

「それでも、優しい所もあるんだよ」

楯無

「そうそう、静雄君は優しいのだ!!」

静雄

「お前ら、余計な事言つな」

ラウラ

「はいはい。皆の共前にちゅっもく。これからある映像を流すぞ」

「初めまして。私は今から二十五年先の未来から来ました」

「えっ…え〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

未来ガジェット研究所に現れた少女はなんと二十五年前から来たと言つ二人目の未来人。

「私がイオリア・シュヘンベルグ。ここでは初めましてと言つておこつ」

「なっ…それじゃあ俺達は…」

ソレスタル・ビーイング創立者である人物と会合。そしてまさかの真実に刹那、ニール、グラハムは衝撃を受ける。

「よしルカ。今度こそ負けないからな」

「良い意気込み、でも勝つのは私よ」

一人の少女が一度は折れた心を再び燃やし、アイドルに再び同人対決をすべく、決戦の地、有明で合いまみれる。

「私、お母さんの若いころを見に来たんだ」

「僕のお嫁さんってどう言う人なのかお？」

かつて、悲劇の未来を変えようとした少女が同じく有明の地にて母親を探すべく奮闘を始める。

「やっぱり…空って気持ちいよな」

「だろ？おつし、いっちょ勝負してみっか」

空を愛する青年の前に現れたのは同じ世界の人間でバルキリー乗りだった。

「いくよ、シスターちゃん」

「いつでもいいんだよ」

科学が発展している都市、そこである二人の少女達が頂点を賭けて激しく闘う。

「だからお前は弱いのだ、この未熟者め!!」

「くっ、だが今度こそ!!」

遂に本気の決闘となる宗介とマスターボン太君。しかし、圧倒的過ぎるマスターボン太君の前に手も足も出ない宗介…

「僕は…どんなことがあるつともお嬢様をお守りします」

「ありがとうな、ハヤテ」

執事の少年にもやって来る夏休み最後の試練、それは彼にとってどう言う結果を生み出すか…

「さあ、たった今始めようではないか。世界一を決め戦いを!!」

そして、遂に始まる世界規模の戦い。それが意味するのは…

「これが、私の本当の力だ!!」

そして、遂に明かされるラウラの真の力…

かなめ

「…突っ込み所が多くて何処を突っ込んだら良いのかわかんないわ…」

テッサ

「そ、そうですね」

鈴音

「ふう、ってなんであたしらが映像を流すかかりなわけ？」

レナード

「まったくだ。これじゃあ何のためにここに来たのか分からないじゃないか」

かなめ

「はいはいお疲れ様。鈴、後で何か奢ってあげるわよ」

レナード

「あれ？僕は？僕の扱いは？」

テッサ

「何ですかそれ、美味しいのですか兄さん？」

宗介

「ちなみに、この映像の内容はまだプロット段階であるからそれ以外の話しもやる予定だ」

かなめ

「それじゃ、夏休みの話し更に多くなるんじゃないの」

宗介

「ああ、今年中には終わらないな」

かなめ

「駄目じゃないそれ!!」

千桜

「はぁ…本来なら私らは話しに入らない予定だったのにどうしてこうなったのだろうな？」

ナギ

「でも、おもしろいから良いではないか」

千桜

「あのな、お前も一応フラグ建ててんだぞ？」

ナギ

「そうなのか？」

千春

「はぁ…それにしてもあつちはいい加減喧嘩止めたらいいのにな」

ダル

「それは無理な話なんだぜ千春氏、あの二人の夫婦喧嘩はもう恒例何だぜ」

アルト

「にしても、本当にグダグダだなもう」

刹那

「ああ…」

アルト

「うおお…珍しく刹那のテンションが低い」

シャル

「多分疲れたんだよ、このハイテンションな空気に」

刹那

「俺は別に疲れていない…」

佐天

「あつ、刹那さんもこっちでお話ししましょうよ」

アルト

「あつ…刹那が連れて行かれた」

千桜

「中学生パワーすげーな」

静雄

「俺、もう帰っていいか、仕事があるんだが」

まゆり

「静雄君、こっちで話そうよ」

静雄

「俺、今帰ろうと…」

アルト

「池袋最強も連れて行かれたよ」

シャル

「まゆしいパワー恐るべしだね」

ダル

「まゆ氏恐ろしい子」

上条

「そう言えば二人って何処か雰囲気似てるよな？」

セシリア

「そうですね？」

アテネ

「でも、言われてみれば私とセシリアは似ていますことね」

上条

「お嬢様って感じが凄く似てるし似合ってるよ」

アテネ

「ふふ、流石は一流フラグ建築士、ハヤテと同じで女の子を口説く台詞をポンポン出てきますのね」

セシリア

「そうですね、一夏さんも原作ですと同じような感じでしたわよね」

上条

「一流フラグ建築士、それって上条さんことを言ってるからするので
すか…それはない。はあ…俺にも春がほしいぜ…」

アテネ・セシリア

(この人、主人公の中では一番自覚が無いのでは…?)

篤

「衛宮さんの料理は何時食べてもおいしいです」

士郎

「いやいや、実際に織斑先生やハヤテの方がレベルが上だし、俺はまだまだ修行中だ」

一夏

「えらいなお前は、前に進もうって努力してるし。俺なんかどうすればいいんだろって思ってるし…」

士郎

「お前だつてやってるだろう。人間それぞれ生き方があるんだ、一夏には一夏の、篠ノ之には篠ノ之の人生はある。勿論ここに居る皆やそれ以外、俺も含めてな」

ヒナギク

「ふふ、あなた随分達観してるわね」

士郎

「色々経験したからな」

インデックス

「お〜これもおいしいんだよ」

牧瀬

「あの映像はどう言う事だ岡部!」

鳳凰院凶真

「俺は知らん!〜ってそれはこっちが聞きたいわ!」

宗介

「なんだかもうフリーダムだな」

ラウラ

「ああ、ヴィヴィオも眠ってしまったしな」

宗介

「ああ、では一旦ここで切らせてもらおう」

ラウラ

「だな、というわけで”インフィニット・ストラトスふもっふ!!”を読んでくれてありがとう。話しはまだまだ続くからこれからも読んでくれ。これは私からのお願いだぞ」

宗介

「そう言う事だが、次回から少し話しの視点がずれるみたいだ」

ラウラ

「それは一体どう言う事なのだ?」

宗介

「どうやら、世界は同じなのだが、俺達以外の人物たちの話しになるようだ」

ラウラ

「それって、要はキャラが増えるってこと？」

宗介

「ああ、今の所作者が考えている登場作品は俺妹、はがない、とらドラ、けいおん、マクロス7、鋼の錬金術師、ガンダムSEED DESTINYの予定だそうだ」

ラウラ

「なんともカオスな…」

宗介

「だから、次回から少し俺達の出番が減ると言う事になるのだ」

ラウラ

「まあ、完全に私らと関係は…DESTINY以外はなさそうだな」

宗介

「いや、どうやら完全に関係は無いわけではないらしい」

ラウラ

「どう言う事だ？」

宗介

「ああ、これらの番外の話は一見俺達は関係ないように思えて後々絡んでくるみたいだ」

ラウラ

「なるほど…まあ。それはそれで楽しみだな」

宗介

「そういうことだ。あと、これから大分前にやった人気投票の結果発表をやる」

一票

セシリア・オルコット

織斑一夏

織斑千冬

鳳凰院凶真

平和島静雄

鳳凰院

「フーハハハハ。やはりこの狂気のマッドサイエンティスト、サブながら票を取るとは」

静雄

「ってか俺。全然出てないけど良いのか？」

二票

篠ノ之箒

シャルロット・デュノア

ラウラ・ボーデヴィツヒ

刹那・F・セイエイ

刹那

「俺が二票も」

箒

「わ、私に票が入ってる」

一夏

「やったな箒。これでもうモツピーとか言われないですむな」

三票

相良宗介

ラウラ

「やはり主人公だな」

かなめ

「そうね、逆にアンタに入ってたらなかったらそれはそれで驚きよ」

テッサ

「でも、そこは流石相良さんです。おめでとうございます」

宗介

「ありがとうございます大佐殿」

ラウラ

「だが、この人気投票って確か八月にやってたよな。それが何で今やってるんだ？」

宗介

「そこは、作者の怠慢のせいだ。ここで作者の代わりに俺が謝っておこう。報告遅れてすみませんでした」

ラウラ

「まあ、切のいい五十話だったんだし。よかったんじゃないのか？」

宗介

「そうだな。では長くグダグダな文章を最後まで読んでくださって本当にすまない」

ラウラ

「そしてありがとう」

かなめ

「でも、話しはまだ続くからまだまだ楽しみにしてなさいよ」

鈴音

「以上、これで全ての話しを終了します」

レナード

「結局、俺達の立ち回りってこんなもんなのね」

特別話・五十話記念（後書き）

初めてたくさんキャラを出したから大変でした…

話の中で宗介が話していましたが、次回から少し宗介達から視点が外れます。あつ、でもちゃんとそれでも出てきますのでご安心を。

そして、いままで読んで下さってありがとうございます。これからも駄文ですが読んでやってください。

アイリスの設定(前書き)

アイリス・ボーデヴィツヒの設定です

アイリスの設定

アイリス・ボーデヴィツヒ

CV・川澄綾子

ラウラの姉で原作に居ない本編オリジナルキャラ。性格は嵐のような騒がしい人物であるが妹思いのお姉ちゃん、外見はラウラが成長した感じでラウラと同じくオツドアイ。

身長は女性として高めの170センチ、スリーサイズはバストが95以上はあるがその他は謎に包まれている。だが見た目は出る所は出て引っこむ所は引っこんでいるからそれなりのナイスボディ。

歳は二十、大学はドイツの大学に通っている。ラウラと違って代表候補にはならないが、父であるクライド・ボーデヴィツヒの娘であるからゼミ内の人物とは皆顔なじみ、その際に一夏、篝なども出会っている。

得意な事は体を動かす事、スポーツ全般は出来ると言う完璧超人だが勉強は全くのダメダメ。見た目はまさにそれだが、それ以外にも料理が出来ないなど割と妹のラウラと似ている。そこは流石姉妹と言ったおじう。

イメージキャラはFate/zeroのアイリスフィール・フォン・アインツベルン。

第51話・鋼の錬金術師(弟)がまさかの!!(前書き)

レイヴン「うほ〜ここに俺様の天使のアイリスちゃんがいるところかぁ」

カロル「ねえレイヴン。やっぱりまずいんじゃないの?」

レイヴン「いやいや少年、あの美女がいるんだよ。それは行かないや男じゃないつしょ!!」

カロル「僕分ないや…」

アイリス「あら、素敵なおじさまに可愛い少年ね。えいつ!!」

カロル「えっ…ちょ、なにになに?」

レイヴン「ぬほっ、カロル君抱きかかえられてるよ。うらやましい!!」

アイリス「おじさまも抱いて欲しい?」

レイヴン「もちろんとも!!」

アイリス「うふふ…ダ・メ」

レイヴン「うはぁ…アイリスちゃんのその表情かわゆす!!」

アイリス「あら、ありがとう」

カロル「僕…いつまで抱きかかえられてるんだろ…」

アイリス「あら、何だか素敵なおじさま」

第51話・鋼の錬金術師(弟)がまさかの!!

「ここが…ここです。ここか…ここです。よし、できた」

八月四日、ナギはお世辞にも広いとは言えない庭である漫画を片手に、もう片方に白チョークを握っていた。そして、地面には白チョークで描かれたと思われる何かの魔法陣見たいな物が書かれてあった。

「ふふん…やはりこう言うのは気分から入るのが一番だな」

「おまえ、朝から何やってるんだ？」

そこに、呆れた感じで千桜がナギのやろつとしてる事を理解した。

「おまえな、そんなの本当に出来る訳ないだろう？」

「むう…そんな事はやってみなければ解らないではないか」

「あゝはいはい」

ナギは漫画とチョークと千桜に渡し、自分で描いた魔法陣らしきも

のの中心に立ち、一呼吸置き、両手を勢いよくパンっ！と合わせる。すると次の瞬間、魔法陣らしきものからバチバチッとプラズマと光を発してナギを包んでしまった。

「おいおいおいおい、これは何の冗談だよオイ！！」

千桜は目の前の光景に眩しいのを避ける位しかできずにいた、次第にプラズマと光が収まり千桜はナギを見る。ナギの体には特に異常があるようには見えず千桜はホッとする。

「ナギ、大丈夫かよ？」

「あれ、”僕”今さっきまでブリッグズに居た筈なのに。それに何か視界が低くなってる気も…」

「はぁ？ナギお前何言っているんだ？」

「ナギ…誰なのかな？」

千桜は今一頭が回らない頭を無理やりに起こしながら何とかその場にいた。

「だからお前だよ」

「…僕はそのナギって子じゃないよ、僕は…」

その時、私春風千桜はナギが次に話す内容を聞いて本当に世界とは何だろうなと思った…

「アルフォンス・エルリック…」

「おいおい…」

「アルフォンス・エルリックねえ…それじゃ”鋼の錬金術師”もいるんじゃない…」

「あつ、それって兄さんの事だよね」

千桜はここに来てようやく普通の思考を取り戻し、目の前に居る奴が言った事を思い出しある事に気づき、今の質問をした。

「それじゃあお前はやっぱり”エドワード・エルリック”の弟何だな」

「うん。そつだよ」

そして、ナギの姿をした…アルフォンスは直ぐに肯定をした。ここ

ここでアルフォンスは自分の体を見始めて…

「えっ ええええ僕、女の子になってる」

当然、体はナギのママなのだから当然と言えば当然である。

「えっ、えっ、どうして？」

「あゝそれはだな…」

千桜は経緯をアルフォンスに説明すると、アルフォンスは自分の足元にナギが書いてある魔法陣らしきものを見た。

「これは…錬成陣じゃないか。それも……人体錬成の…」

「何！！それは本当か？」

「うん、でもこれ微妙違ってよ」

千桜はナギが持っていた漫画を見ると、その漫画のタイトルは”鋼の錬金術師”と書かれてあり。ナギが見ていただろうページの場面は丁度エルリック兄弟が禁忌を犯そうとしていた場面であった。

「あのバカはっ！」

千桜は咄嗟に悪態を突く。

「ふう…これからどうしよう…僕、女の子になんてなった事ないのに…」

「普通はならねえよ。はあ、綾崎君でも呼んで来るか、アルフォンスも中に入ってるよ」

千桜はハヤテを呼びに行き、ナギの格好をしたアルフォンスは恐れ屋敷の中に入るが、アルフォンスはキョロキョロ辺りを見渡す。

「何だか見た事のない物ばかりだな…あつ、凄い。テレビがこんなに薄いよ…」

アルフォンスが興味津々と部屋の辺りを見ていると奥から千桜とハヤテが現れた。

「千桜さんから聞きましたけど…本当にお嬢様ではないのですね」

「はい…多分ナギって子は向こうの僕の体にいると思います」

「…そうか。それにお前、ブリッグスにいるって言ってたな…ならまだ問題では無いな」

「それってどう言う意味ですか？」

ハヤテが千桜の言っている意味が分からず千桜に聞くと千桜は”鋼の錬金術師”の漫画を見せる。

「これはなんですか？」

「そうだな…これはお前達エルリック兄弟の話しが描かれている奴だ」

ここで千桜は漫画と言おうしたが、アルフォンスの世界に漫画があるかどうかわからなかった為ばかりして説明をする。

「え…えええ!!そ、それじゃあ兄さんがどうなったとか、僕がどうなったとか君は知ってるの？」

「ああ、私は一応全部読んだしな。”結果”は知ってるよ……聞きたいか？」

千桜はアルフォンスに問うが、アルフォンスは少し考え。

「…ううん。それは僕たち自身が見つけ出さなきゃ意味は無いからね」

「だろうな。お前達二人はそれを糧に頑張ってたんだからな。綾崎君、これからどうする？」

「そうですね。とりあえずお嬢様がお戻りになるまでこのままにいるしかなさそうですね」

「すみません、何だか迷惑をかけちゃって…」

「いえ、元々はお嬢様が原因なので仕方がないですよ。失礼しました、僕はナギお嬢様の執事をしていきます綾崎ハヤテです」

「私は春風千桜」

「ハヤテに千桜だね。僕はアルフォンス・エルリックです」

こうして、ナギの姿をしたアルフォンス・エルリックは妙な形で肉体を持つ事になった。

「うええ…私アルフォンスになってる」

「何言ってるんだよアル、にしても吹雪で何も見えねえぜ」

「雪……もしかしてここって……ブリッグズ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

第51話・鋼の錬金術師（弟）がまさかの！！（後書き）

エド「よっ、鋼の錬金術師からのエドワード・エルリックだ」

アル「同じく、鋼の錬金術師からアルフォンス・エルリックです」

エド「それにしても何で俺らがこの小説に出演することになったんだ？俺達全く関係ないんじゃないか？」

アル「それはね、作者が僕達の作品にハマっているから見たいなんだ」

エド「ふん。まっ、いつか。それに俺は当分出てこねえしな」

アル「あっ、でも僕達は旅が終わったら出てくるみたいだよ」

エド「まじかよ…まあいいや。そんじゃそろそろ…」

アル「あっ、まって兄さん。今回の話からこの小説にOPとENDの曲が入るんだって」

エド「ああ、それってたしかOPはLinkで、EDは鐘を鳴らしてっだっけ」

アル「そうそう。それじゃ僕達はそろそろ行くね」

エド「それにしてもよエド、この金髪の奴お前に声がやたら似てるよな」

アル「そう言う兄さんこそ、いつも不機嫌そうなところが似てるよ
う」

ナギ「お前達…好き放題いうな!!」

OP「Link」鋼の錬金術師・シャンバラに行くものOP

ED「鐘を鳴らして」テイルズオブヴェスペリア主題歌

第52話・ま、まさか俺の娘…だと…（前書き）

ラウラ「今回は久々のシユタゲメンバーの登場だ」

宗介「ああ、それと今回もオリジナルキャラが出るそつだ」

ラウラ「それにしてもナギの奴大丈夫かな？」

第52話・ま、まさか俺の娘…だと…

「ふう…今日の俺もまた狂気のマッドサイエンティストそのものだな」

フ…諸君、久しぶり。俺が誰だか分からないだと？それは愚問だぞ、この天才にして狂気のマッド…

「はいはい、毎度毎度飽きないわね岡部」

くっ…助手の分際で…

「私はアンタの助手じゃないと何度も行っておろっ」

そう言いながら助手は再び小難しい英書を読み始める。今、この我がラボには俺と紅莉栖の二人しかない。
まゆりはメイクインにバイト、ダルはフェイリスに会いに同じ所に行っている。

さて、俺はどうするかなと何となくパソコンの前に座るとパソコンの電源を入れると…

「うわあ!!！」

急に電源辺からバチツと静電気にしては大きめのが俺を襲うと次の瞬間、俺の背後の辺りが何故かぐにやりと歪み始め、異変に気付いた紅莉栖も英書を置いて歪んだ所を見ている。

「お、岡部。お前何かやったのか？」

「い、いや俺はなにも…」

俺は紅莉栖の横に行き、相変わらず歪んでる空間を見ると次第に光を発し、次第に強くなり俺達は目を開けていられなくなり手で光をさえぎる。

光の発しがピークを過ぎ、だんだん弱くなるにつれ俺と紅莉栖は腕を退かして光を発していた中心点を見おるとそこには一人の女性が立っていた。

その女性は紅莉栖そっくりなスタイルや顔立ち、をしていたがやや違う所がある、それに紅莉栖の髪は赤見かかっているが目の前の女性は真っ黒サラサラヘアで紅莉栖より少し短めだった。

って俺は頭の中で冷静に女性を観察するが声が出ない。頭は違う方向に回っていると他の言葉が出てこない、だがそれは隣にいる紅莉栖も同じく、未だに声が出ないでいた。

すると、目の前の女性は何故か少し呆れた表情をしながら俺達に話

しかけてくる。

「もう…折角若いお父さんとお母さんに会えたのに…二人して呆けちやって…」

まてよ…いまコイツは何て言った？お父さん？お母さん？誰がこの女性の両親何だ？

俺と同じ考えにいたっただろ？紅莉栖と全く同じタイミングでラボ内を見渡してしまうが、ここにいるのは謎の女性を除けば俺と紅莉栖しかない…

「ふーそう言う所は相変わらずなんだから…仕方が無い。自己紹介します」

そして、次の瞬間。俺と紅莉栖今だかつてないほどの衝撃を受ける事だった…

「私の名前は岡部利奈。そして私のお父さんは岡部倫太郎でお母さんは岡部紅莉栖…あゝ今の時代だと牧瀬紅莉栖です」

「は…ははははははははははははあ…あああああああああああ
あああああああ？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？

俺と紅莉栖滅茶苦茶大声で驚いた…

「うお…びっくりさせないでよお父さんお母さん」

「いやいやあなた何言ってるのいきなり、わ、私と岡部の娘って…」

「そ、そうだぞ。だ、第一証拠でもあるのか？」

「うん、あるよ」

そう言うと俺の娘と言う利奈は右ポケットから何かを取り出し俺達に見せる。

「お父さんが言ってたんだ『まず、俺は直ぐには信じないだろう、だから過去の俺達にこれを見せる』って言ってたよ」

利奈が見せてきたのは一枚の写真だった。そこに写っているのは利奈に老けてはいるが俺と紅莉栖の姿が会った。

「は、本当…じゃあ私は岡部と…」

とそこで紅莉栖が急に顔を真っ赤にした。まあ、この天才HENT AI少女の考えている事なんて丸わかりだ。

「確かにこれは俺と紅莉栖だが…お前は何故この時代に来た？」

「うん。若いお父さんとお母さんに会いに来たのが一つ目の理由で、もう一つは鈴羽を探しに来たの」

「鈴羽を!？」

鈴羽…阿万音鈴羽。かつてここに一階にあるブラウン管工房にバイトしていた少女、その正体は未来のデイストピアを変える為に25年後からやってきた未来人でダルの娘。

目的は幻のPC”IBN5100”を俺達が入るようにするためと言う使命、そして俺達はさらに35年前に跳ぶ鈴羽を見送った。次の出会いは 世界線。そこでの彼女は前にあった彼女とは少し違い、女の事は思えない程の格好、明らかに何かと戦っていると言う格好をしていた。

そこでの未来は紅莉栖の父、ドクター中鉢こと牧瀬彰一が娘の紅莉栖の論文を奪い、その論文を巡って第三次世界大戦が起こった未来だった。

世界線での鈴羽との別れは正直、あまりの痛みで余り覚えていないのはここだけの話し…

「ああ、鈴羽。見かけなかった？」

「い、いいや。見てない」

未来の俺が言うにはこのシュタインズゲート世界線では他のラボメンにはあったが今だ鈴羽だけ会ってない。まあ、物理的に不可能だと思っただけだ…

「ま、恐らくこの時代にいるのは間違いなし」

「それは、何で言い切れるのだ？」

「だって、本当は最初に過去に来るの私だったのに鈴羽ったら勝手にタイムマシン使っちゃって…私は急いで追いかけて来たのよ」

何ともしようもない理由で…っているのかよこの時代に！！

「お前、鈴羽と知り合いなのか？」

「え？当たり前じゃない」

まあ、ダル娘何だし。仲がいいのは大体想像できるな。

「へ〜ここがお父さん達がいた未来ガジェット研究所か」

利奈はラボ内をじっくり観察するかのようにつき回りを。一通り見終えた利奈は再び俺の方を向き。

「うん、決めた。お父さんお母さん私、しばらくここにいる事に決めた。よろしくね」

「え、あ、うん……」

「はあ……まあ仕方がないか」

……まさか、俺と紅莉栖の娘が来るとは思いもよらなかつたぞ……

それにしても利奈の事を両親に説明するか？ いやいや……だが俺はいずれ家に帰らねばならぬ……まずは、どう両親に説明するかをだな……

第52話・ま、まさか俺の娘…だと…（後書き）

ラウラ「そう言えば作者、けいおんの映画を見に行ったそうだ。そこで作者が勢い余ってけいおんの話を先に書いてしまうかもしれないと言っていた」

ナギ「なぬ！！それは楽しみだぞ」

ラウラ「うおお前、ブリッグズに行っていたのではないか？」

ナギ「今だけ戻ってきたのだ」

ラウラ「ま、まあいい。それで書くにつれ、おそらく視点は梓になるだろう」

ナギ「いったいあいつらがどう絡むのか楽しみだな」

ラウラ「まあ…作者のテンションしだいからどうなるかはわからないが次回も楽しみにしてみてください」

ナギ「だぞ！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9777q/>

インフィニット・ストラトスふもっふ！！

2011年12月14日23時53分発行